

MEXT International Cooperation

平成 21 年度「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業(文部科学省)

【青年海外協力隊等派遣教員の支援】

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」

活動支援のための教育協力システムの形成

活 動 報 告 書

課題実施機関
課題代表者

愛知県立大学
東 弘子

報告書刊行にあたって

活動を振り返って

平成 21 年度は、愛知県立大学に新設された国際関係学科に私が所属した初めての年である。その年にこのような「国際協力イニシアティブ事業」の活動をするようになるうとは、少し前には想像もできないことであった。

これまで、愛知県立大学の副専攻課程である日本語教員課程を担当する中で、愛知県内のブラジル人集住地区における地域日本語教室や、小学校での学習支援を通じて学生の育成に携わってきた。もちろんそれは、現代日本社会の中で重要な課題であるし、ましてや国際社会において人の移動の増加が大きく取り上げられるトピックであることから、地域連携活動であるだけではなく、「国際協力」の一端の活動をしていたと言えるのかもしれない。が、あくまでもフィールドは愛知県であり、日本国内であった。今回この事業に携わることになり、私個人の中で、扱う課題が一足飛びに地球規模にまで拡大したという感がある。

実際、9月のサンパウロ出張は初めてのブラジルであった。こんなに遠くまで、船にのって移民したのか、こんなに遠くから日本へとデカセギに行ったり来たりを繰り返すのか、こんなに遠い地から来て子どもを産み、育てるのか・・・日本の日系ブラジル人やブラジルの日系人のひとりひとりとの出会いに、こうした思いが重なる。

8か月間の活動ではあったが、このテーマで活動したことにより、多くの人々との出会いがありたくさんの意見や情報を交わすことができた。何よりの宝物である。

活動の終盤に開催した研究会で、ある参加者から「ここに集う人だけが、ブラジル人の子どもの教育の重要性を語り合っているもしかたない。それを広く知らせることこそがこの事業の意義ではないか。」との激励を受けた。

私たちの活動の成果を、今後どのように広める可能性があるのか、まだまだこれからの課題は大きいですが、平成 21 年度の活動報告書として、本書をここに刊行する。多方面からご意見をいただければ幸甚である。

2010 年 3 月 3 日

活動実施代表者 東 弘子

地域連携の立場から

愛知県立大学地域連携センター長 加藤 史朗

「国際協力イニシアティブ」が始まったのは、愛知県立大学に地域連携センターが発足して三年目を迎えた 2009 年の春である。当初からこの事業に対する学内の期待には大きなものがあった。県立大学のステップアップにつながるチャンスだと思われたからだ。県立大学は 1998 年のキャンパス移転以来、日本語教員課程を設け、日本語の学生ボランティア活動などを通して近隣自治体や地域の外国人たちと様々に連携してきた。2009 年度に愛知県立看護大学と統合して誕生した新愛知県立大学は、この事業のなかで鍛えられ、新大学の目標として掲げる「共生社会の実現」に邁進すべき使命を帯びているのである。

だが事業の船出は世界的な経済危機という嵐の下においてであった。トヨタショックとともに、豊田市などの日系ブラジル人社会もこの荒波に翻弄され、今なお新たなトヨタショックの下で不安は深まるばかりである。とりわけこの事業が対象とする若者たちと、この事業を担う若者たちにとって危機は深刻である。しかしあえて逆境こそ好機であると言うべきであろう。今まさに「日本語」の切実なニーズが生まれているからである。危機の中で人々が手をつなぎ、心を通わせる「よすが」として改めて「ことば」の意味が問われている。

我々は今まで以上に地域と連携して事業の継続を図り、着実な成果を挙げていく努力をしなければならない。この事業を支えてくださっているアドバイザーボードの皆さんは言うまでもなく、日本やブラジルで日本語を教えたり教えられたりしている皆さんと、どうしたらもっと具体的に「手つなぎ」が出来るのか、「国際協力イニシアティブ」事業を通してこの可能性を追求することが地域連携センターの大きな課題だと考えている。

本活動の意義 外国人の子どもの支援に関わる立場から

愛知県教育委員会「外国人児童生徒講座」講師 松本 一子

愛知県の特徴は、外国人登録者数が東京都の次に多く、ブラジル人の登録者数が全国一多いことである。ブラジル人の子どものだけをとっても、その背景は実に多様である。日本人との国際結婚や帰化によって日本国籍を取得した子ども、日本生まれでもブラジル人学校に通い 15 年たっても日本語がほとんど話せず、帰国希望の子ども、ブラジル人学校の中学校を卒業してから日本の高校を目指そうと進路変更した子ども、日本国内の移動やブラジルと日本の移動を繰り返す子ども、母語も日本語も不十分な子ども、保護者の離婚・再婚で多言語環境になったり、親子の関係が複雑になったりした子どもなどである。こうした子どもたちを支援する際に直面する課題は、保護者、保育園、日本の学校、ブラジル人学校、地域、関係機関などの連携が解決の前提になってきている。

本事業が、派遣教員への直接支援を考えると同時に、ブラジル人の子どもたちを支援するために多分野の関係者が一堂に会し、必要な情報を共有し、忌憚のない意見交換ができる支援ネットワークをつくる場となることを願っている。

平成 21 年度「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業(文部科学省)

【青年海外協力隊等派遣教員の支援】

(MEXT International Cooperation)

【活動テーマ】

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」

活動支援のための教育協力システムの形成

【実施機関名】

愛知県立大学

【委託期間】

平成 21 年 7 月 3 日～平成 22 年 3 月 10 日

【活動実施者】

あずま ひろこ
東 弘子 (愛知県立大学外国語学部国際関係学科准教授)

かとう しろう
加藤 史朗 (愛知県立大学外国語学部国際関係学科教授・地域連携センター長)

みやたに あつみ
宮谷 敦美 (愛知県立大学外国語学部国際関係学科准教授)

こうさか かつみ
高阪 香津美 (愛知県立大学外国語学部国際関係学科講師)

まつみや あした
松宮 朝 (愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授)

こじま よしみ
小島 祥美 (愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター講師)

まつもと かずこ
松本 一子 (愛知淑徳大学・愛知教育大学(非常勤講師)、愛知県教育委員会
「外国人児童生徒講座」講師)

目 次

1	活動の概要（担当：東弘子）	7
1.1	活動概要	8
1.2	活動実施体制	10
1.3	活動スケジュール	11
	資料 1	13
	資料 2	25
	資料 3	35
2	報告	
2.1	現職教員派遣制度における隊員の意識分析と本事業が取り組むべき課題の整理 （担当：松宮朝）	41
2.2	研究会報告（担当：東弘子）	45
2.2.1	第 1 回研究会	45
	「ブラジル人児童生徒の教育活動ーブラジル本国での活動経験をもとにー」	
2.2.2	第 2 回研究会（公開）	97
	「学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育ー岐阜県可児市の取り組みー」	
2.2.3	第 3 回研究会	113
	「ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点」	
2.2.4	共催の公開講演会	139
	「豊田市立東保見小学校 における 外国籍児童への学習支援」 主催：愛知県立大学日本語教員課程（平成 21 年度教育・研究活性化推進費）	
2.3	個別聞き取り調査（担当：東弘子）	169
2.4	ブラジルの学校教育の概要（担当：高阪香津美）	171
2.5	地図素材データを用いた教材の提案（担当：高阪香津美）	175
3	成果物一覧	179
No. 1	日本・ブラジル教育文化比較一覧表（日本語版・ポルトガル語版）	180
No. 2	地図教材電子データ	185
No. 3	現地活動中の隊員への支援ー活動中と帰国後に役立つ情報提供ー	218
No. 4	研究会小冊子 → 本報告書 2.2.1	
No. 5	活動報告書 → 本報告書	
	おわりにー今後の課題ー	245

1. 活 動 の 概 要

1. 活動の概要

東 弘子

1.1 活動概要

本年度の活動概要は以下の通りである。下線部は具体的な成果物である。

1. 事業の目的・方法

- (1) JICA 日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度による隊員の活動の質の向上、および、帰国後の外国人児童・生徒に対する教員としての指導力の向上を目的とする。
 - ① 派遣に際してのニーズ（日本側・ブラジル側・参加隊員本人）を調査する。
 - ② 日本国内での教育支援活動の実践・検証を通して、具体的な教具、教室活動案を提案する。
- (2) 日本、ブラジル間の移動をくりかえす児童・生徒に対する教育支援のための情報ネットワークの形成。
 - ① 日本国内で日系ブラジル人児童・生徒への教育支援を行っている教育実践者（公立学校、NPO 団体、ブラジル人学校等）や JICA 日系社会青年ボランティア OB から意見聴取をし、教育現場の課題を集約する。
 - ② 日本とブラジルの教育制度や学校文化の違いを整理した資料を作成する。

2. 今年度の活動・成果

(1) アドバイザリーボードの開催(2回)

本事業が JICA、教育委員会、義務教育課程の学校現場、学校外の外国人児童生徒支援団体、ブラジル人学校、文部科学省など多方面の組織が関わる内容であるところから、各方面において活動する方々に参集いただき、本事業の進む方向性や現段階での問題点などについて議論をかわした。

→ 会議で得られた情報を、成果物すべての内容に反映させた。

(2) 国内での現状の把握:研究会の開催

日本国内で現在どのような外国人児童生徒への学習支援がなされているのか、その現状を把握するために、第2回研究会および愛知県立大学日本語教員課程との共催の講演会で、外国人児童生徒の教育に携わる講師から情報を得た。

→ 研究会、講演会で国内の現状を把握するとともに会議で得られた情報を、成果物作成の方向性に反映させた。

(3) ブラジル現地調査

現地での活動の実態と、現地受け入れ校のニーズや、隊員の活動や意識を調査。隊員たちが直面する課題などを聴取した。また、ブラジルに帰国した日系人児童・生徒の生活実態などについても聴取した。

→ 調査で得られた情報を、成果物(4)③, (5), (6), (7)の内容に反映させた。

(4) ニーズ調査(日本国内の教育実践者および JICA 現職教員隊員)

- ① JICA 日系社会青年ボランティア OB かつ現在日本での教育実践者である活動協力者から意見聴取。現職教員隊員に学んでほしいことをテーマに第 1 回研究会を実施。

→ 座談会記録(小冊子および本報告書 2.2.1)

- ② ブラジル人学校からみた日本の教育者に対するニーズを意見聴取。「日本の学校とブラジル人学校をつなぐ視点」というタイトルで第 3 回研究会を実施。

→ 上記①②から得られたニーズをまとめた報告(本報告書 2.2.3)

- ③ JICA 現職教員隊員に対する意識調査

→ アンケート等に基づく分析(本報告書 2.1)

(5) 日本・ブラジル間の教育体制・文化の違いに関する、既存の情報の整理

外国人児童・生徒への指導の質の向上を目的に各地の教育委員会などが作成した成果を整理・精査

→ 移動する子供が持ち運べる、日本・ブラジルの教育体制・文化の違いについて現場の先生や当事者が見てすぐにわかる、情報一覧シートの作成(本報告書3 No.1)

(6) 両文化を理解し、また相互に尊重しあう感情を育成するための教具と活用方法の提案

日本の教育現場、ブラジル人学校、ブラジルの隊員受け入れ学校において、様々なシーンで活用できる地図教具の作成と活用方法の提案。

→ 日本とブラジルの地図(県や州、行政区分などの各種分類)の電子画像と、わかりやすい地域に関する説明文の電子ファイルの提供、および使用方法の提案(本報告書3 No.2)

(7) 現地活動中の隊員への支援(Web ページ利用)

→ 現地で求められている「日本語指導」活動サポートのための絵カードを提供

→ 帰国後に必要となる日本国内の外国籍児童・生徒指導のための「お役立ちリンク」を提供(本報告書 3 No. 3)

3. 事業の特徴と意義

本事業において、活動実施者、活動協力者、アドバイザーが集い、それぞれの立場から意見や情報を交換したことに非常に大きな特徴と意義がある。

日本社会が日系人の外国人労働者を受け入れたことで社会構造が大きく転換し、そのなかで子どもの教育に大きな問題が生じたことに対し、JICA の「現職教員特別参加制度」を通じて教育力の向上をめざすといった方法の提案は、意義深いものであると考える。ただし一方で、それは一朝一夕に教育現場に還元されるわけではないことも理解している。

しかし、この問題に関わる多くの団体や支援者が直接意見を交換し、情報を提供し合うことで、最終的に外国人児童生徒の教育環境の整備に寄与できることを、活動を通じて確信したことである。行政上の立場の違いや、それぞれの部署が持ち合わせている「大人の都合」はあるであろうが、それを越えて子どもたちにとってよりよい学習環境が整備できるよう、発信し続けていきたいと思う。

1. 2 活動実施体制

本活動は、活動実施者 7 名によるものだけでなく、以下の活動協力者、アドバイザーの方々の支援を得て行われた。また、ブラジルサンパウロにおいては現地の JICA 職員の方のみならず、任地校の方々にも多くのご協力を得た。ここに感謝の意を述べさせていただきます。

活動協力者 (敬称略)

豊田市立西保見小学校

豊田市立東保見小学

豊田市教育委員会初期指導教室「ことばの教室」

NPO 法人子どもの国（放課後学習支援事業「ゆめの木」教室）

日本語学習支援教室 Vizinho

NPO 法人可児市国際交流協会

小川裕美（可児市教育委員会学校教育課・外国人児童生徒コーディネータ）

渡邊あづさ（愛知県西三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員）

菊池寛子（西尾市教育委員会・早期適応教室指導員）

勅使千鶴（日本福祉大学子ども発達学部・教授）

JICA 日系社会青年ボランティア OG

久保真希子（愛知県東三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員）

川上貴美恵（せんねん村中野郷保育園・外国人児童コーディネータ）

今井さや香（知立市教育委員会・早期適応指導員）

青木由香（富山県高岡市・外国人児童生徒指導講師）

三澤由佳子（（財）海外日系人協会・非常勤講師）

アドバイザー

独立行政法人 国際協力機構（JICA）

財団法人 海外日系人協会

愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室

愛知県教育委員会

豊田市教育委員会

1. 3 活動スケジュール

7 月 3 日(金) 本事業採択決定 活動開始

8 月 5 日(水) 第 1 回アドバイザーボード(事業の主旨確認および事業の方向性の議論)
→ 資料 1 (p. 13)

8 月 11 日(火) 聞き取り調査(活動協力者菊池寛子氏) : 宮谷, 高阪, 東 → 2. 3

8 月 26 日(水) 第 1 回研究会「ブラジル人児童生徒の教育活動
ーブラジル本国での活動経験をもとにー」 → 2. 2. 1

9 月 8 日(火)ー14 日(月) ブラジル現地調査 : 宮谷, 東

9 月 23 日(水) 第 2 回研究会(公開)「学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育-岐阜県可児市の取り組み-」講師: 小川裕美氏 → 2. 2. 2

10 月 29 日(木) 第 2 回アドバイザーボード(帰国報告および方向性の議論)
→ 資料 2 (p. 25)

11 月 5 日(木) 〈共催〉公開講演会「豊田市立東保見小学校における外国籍児童への学習支援」 講師: 小山幾子教諭 → 2. 2. 4

12 月 23 日(水) 第 3 回研究会「ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点」
→ 2. 2. 3

1 月 10 日(土) 青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会
ー国際協力と帰国後の社会貢献ー : 東 → 資料 3 (p. 35)

1 月 20 日(水) 聞き取り調査(篠田カルロス氏) : 東, 松本 → 2. 3

3 月 10 日(水) 活動終了

資 料 1

出典： 朝日新聞 2009年9月10日 朝刊 27ページ 名古屋

ブラジル派遣教員支援

日系児童らの日本語教材開発

中南米諸国の日系社会の発展に協力している国際協力機構（JICA）の「日系社会青年ボランティア」事業で、愛知県立大（長久手町）の研究者らが、ブラジルの日本語学校に派遣された教員を支援する仕組みづくりに着手した。ブラジル人学校やNPO団体など、県内で日系人の子どもの指導に携わる関係者の協力も得て、現地での教育に役立つ教材開発などを旨とする。

（黄徹）

愛知県立大研究者ら



8月5日に関係者約30人が出席して開かれた会議。ブラジルの日本語学校の現状などが報告された＝長久手町の愛知県立大

支援への取り組みを始めたのは、同大外国語学部国際関係学科の研究者ら。開発途上国の教育向上に役立つ研究を支援する文部科学省の「国際協力イニシアティブ」事業に採択され、来年3月までの期間で、予算500万円を確保した。

JICAの「青年海外協力隊」には、国公立学校で教える教員が手を挙げやすいよう、教職を維持したまま参加できる「現職教員特別参加制度」が以前からあった。同制度は、昨年度の募集から「日系社会青年ボランティア」にも適用された。初年度は県内や静岡県など日系人が多く住む地域の教員11人が選ばれ、今年7月に全員がブラジルに派遣された。

現職教員のブラジル派遣が本格化したことを受け、同大では、教員の現地の教育活動を支援する仕組みが必要になると考え、研究に取り組むことにした。

目標の一つに、日系ブラジル人の児童・生徒を対象とした教材や教員と、それを使いこなすための教師用マニュアルの作成を掲げている。

8月5日に同大で開かれた関係者による会議では、国内外の日系人の支援活動にあたる「海外日系人協会」（横浜市）の担当者ら、ブラジルの日系団体が運営する日本語学校の現状について報告し、「若い世代には日本語を解さない人が多い。新たに日本語を学ぶ人向けの指導方法が必要だ」などと指摘した。同大では、こうした教育活動に役立つ教材づくりに取り組むたい考えた。

また、日系人の子どもたちがどのような状況に置かれているかを互いに知ること、を目的に、現地に派遣された教員らと、日本国内の学者、日系人を多く受け入れている学校の教員、NPO関係者らが情報交換できる会員制プログラムの開設なども予定している。

同大の東弘子准教授（社会言語学）は、「最近是不況の影響で帰国する日系ブラジル人も増えている。子どもの教育について、課題を解決するための知恵を共有できる仕組みをつくりたい」と話している。

平成 21(2009)年 8 月 5 日 第 1 回アドバイザーボード 13:30～16:00
於:愛知県立大学 学術文化交流センター 文化交流室A

	氏名	職階
1	小路 克雄	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 参事役
2	早瀬 竜也	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 参加促進・進路支援課
3	近藤 貴之	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 中南米課
4	前納 加奈子	独)国際協力機構 JICA 中部 市民参加協力課
5	中元 司郎	(財)海外日系人協会継承日本語教育センターセンター長
6	高木 秀近	愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室主幹
7	星 有子	愛知県教育委員会義務教育課指導主事
8	藪崎 昭彦	豊田市教育委員会学校教育課指導主事
9	中村 裕	NPO 法人可児市国際交流協会 事務局長
10	各務 眞弓	NPO 法人可児市国際交流協会 事務局次長
11	井村 美穂	NPO法人子どもの国 理事長、豊田市日本語指導員
12	中根 秀博	豊田市立西保見小学校 校長
13	小山 幾子	豊田市立東保見小学校 国際教室主任
14	佐藤 てるみ	豊田市教育委員会 初期指導教室「ことばの教室」学校日本語指導員
15	村松 めぐみ	豊田市教育委員会 初期指導教室「ことばの教室」学校日本語指導員
16	渡邊 あづさ	愛知県教育委員会 西三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員
17	久保 真希子	愛知県教育委員会 東三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員
18	菊池 寛子	西尾市教育委員会 早期適応教室指導員
19	小島 祥美	愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーションセンター 講師
20	松本 一子	愛知淑徳大学・愛知教育大学 非常勤講師
21	岩井 淳武	大臣官房国際課国際協力政策室国際協力調査官
22	佐々木 雄太	愛知県立大学 学長
23	春日井 隆司	愛知県立大学 学術情報部 部長
24	東 弘子	愛知県立大学 外国語学部 准教授
25	加藤 史朗	愛知県立大学 外国語学部 教授
26	宮谷 敦美	愛知県立大学 外国語学部 准教授
27	松宮 朝	愛知県立大学 教育福祉学部 准教授
28	高阪 香津美	愛知県立大学 外国語学部 専任講師
29	内山 久子	愛知県公立大学法人 契約職員
30	黄 澈	朝日新聞社 豊田支局 記者
計 30 名		

第1回アドバイザーボード 議事録

1. 挨拶（本学学長・佐々木雄太）
2. 趣旨説明および活動実施者・活動協力者の紹介
活動実施代表者・東より活動概要と趣旨説明がおこなわれた後、国内で外国籍児童生徒を支援する活動協力者（10名）・活動実施者（7名）の紹介がおこなわれた。
3. 「現職教員派遣」の観点から
青年海外協力隊事務局（小路克雄氏）
4. 日本人社会との関係の観点から
（財）海外日系人協会継承日本語教育センター・中元司郎氏より、ブラジルでの現職教員特別参加の位置づけを、ブラジルでの教育の観点から説明があった。

（休憩）

後半は、愛知県における、外国籍児童・生徒（特にブラジル人）の現状について、豊田市教育委員会、愛知県教育委員会、愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室それぞれの立場から報告をいただいた。

5. 豊田市における外国籍児童・生徒の現状（集住地区と分散地区）
豊田市教育委員会 指導主事・藪崎昭彦氏
6. 愛知県における外国籍児童・生徒の現状
愛知県教育委員会 指導主事・星有子氏
7. 愛知県におけるブラジル人学校・不就学児童・生徒の現状
愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室 主幹・高木秀近氏
8. 以上をふまえ、本事業における活動の要点と意義について討論
方向性を見出す。総括。
9. 終了

文責・内山久子

平成21年度
「国際協カインシアティブ」教育協力拠点形成事業
日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成

第1回 アドバイザリーボード

2009年8月5日(水) 13:30～16:30
愛知県立大学学術文化交流センター 2階 文化交流室A

参加者 (敬称略)

アドバイザー <JICA> 青年海外協力隊事務局 参事役 小路 克雄
参加促進・道路支援課 早瀬 竜也
同上 中南米課 近藤 貴之
<JICA中部> 市民参加協力課 前納 加奈子
<海外日系人協会日本語継承センター> センター長 中元 司郎
<愛知県地域振興部国際課多文化推進共生室> 多文化共生推進グループ 主幹 高木秀近
<愛知県教育委員会> 義務教育課 指導主事 星 有子
<豊田市教育委員会> 学校教育課 指導主事 藪崎昭彦

活動協力者 <NPO法人可児市国際交流協会> 事務局長 中村裕、事務局次長 各務眞弓
<NPO法人子どもの国> 理事長 井村美穂
<豊田市立西保見小学校> 校長 中根秀博
<豊田市立東保見小学校> 国際教室主任 小山幾子
<豊田市教育委員会 初期指導教室(こたの教室)> 学校日本語指導員 佐藤てるみ、村松めぐみ
<愛知県西三河教育事務所> 外国人児童生徒語学相談員 渡邊あづさ
<愛知県東三河教育事務所> 外国人児童生徒語学相談員 久保真希子
<西尾市教育委員会> 早期適応教室指導員 菊池寛子

本日欠席のメンバー: <日本語学習支援教室Vizinho> 代表 大島之弘
<日本福祉大学子ども発達学部> 教授 勸使千鶴

活動実施者 <愛知県立大学> 東弘子、加藤史朗、宮谷敦美、松宮朝、高阪香津美
<愛知淑徳大学> 小島祥美、松本一

文部科学省 大臣官房省国際課国際協力政策室国際協力調査官 岩井 淳武

次 第

- 趣旨説明 および 活動実施者・協力者紹介
活動実施者・活動協力者
- 「現職教員派遣」の観点から
青年海外協力隊事務局(参事役 小路 克雄氏)
- 日系人社会との関係の観点から
(財)海外日系人協会継承日本語教育センター(センター長 中元 司郎氏)
- 豊田市における外国籍児童・生徒の現状(集住地区と分散地区)
豊田市教育委員会(指導主事 藪崎 昭彦氏)
- 愛知県における外国籍児童・生徒の現状
愛知県教育委員会(指導主事 星 有子氏)
- 愛知県におけるブラジル人学校・不就学児童・生徒の現状
愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室(主幹 高木秀近氏)
- 討論・総括

1. 趣旨説明 および 活動実施者・協力者紹介

・ 趣旨

JICA日系社会青年ボランティアとして、平成21年度から派遣
が開始された**現職教員の活動の質の向上と、**
その教員が日本に帰国した後、**外国籍児童生徒に対する**
指導力をより発揮できるよう、経験知の共有・問題解決支援を
するシステムを構築することをめざす。

日本、ブラジル両国間の移動をくりかえす子どもたちが増加
する中、継続的な教育支援が必要。
国際協力の立場から日系社会の子どもたちを支援する。

活動内容

- 日系ブラジル人の児童生徒を対象とした教材・教具と教員・
教材に関する教師用マニュアル集の作成。
- 「JICA日系青年ボランティア(OB・OG、派遣中隊員)や、日
本におけるブラジル人児童・生徒受け入れ教育機関(公立学
校、NPO団体、ブラジル人学校等)における教育指導をめぐ
るニーズ・課題の調査。
- 日本、ブラジル両国における日系ブラジル人児童生徒の学
習支援の事例調査と、両国の学校社会に関するリテラシー
を高めるための資料集の作成。
- 意見交換・議論の場、また教員・教本の共有の場としてプロ
グを運用。日本、ブラジル両国における課題解決および経験
知を共有するためのネットワークシステムの構築。

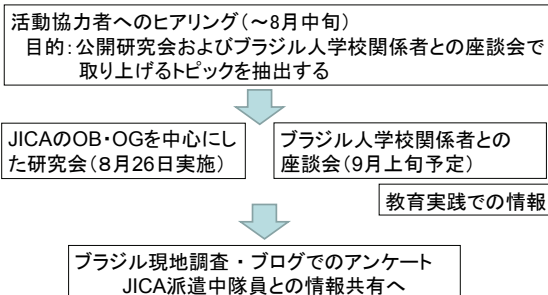
本事業2009年度スケジュール

月	① 教材、マニュアル作成	② 教育指導をめぐるニーズ・課題調査 ③ 学校社会リテラシー資料集作成	④ 情報交換ネットワークシ ステム構築	全体
7月	●教材・教具の試作 ●協力団体における調査開 催(試用)		●ブログ構築	
8月	●協力団体における調査開 催(試用)	●公開研究会・JOCBのOB・OG による教育経験 8月28日	●ML構築・配信	●アドバイザリーボード
9月	●協力団体における調査開 催(試用)	●ブラジル人学校関係者 座談会 ●ブラジル現地調査 (9月7日～18日)	●②③の進捗会で得 た情報をアップ	①の教 材・ 教 具 の 試 作 の 進 捗 と そ の 支 援 の 実 情 を ア ッ プ
10月		●アンケート調査:協力者 協力者、JOCB(現職教員お よびOB・OG)	●ブラジル出張報告、 現地の情報、教材な どアップ	
11月	●アンケート調査:協力者	●アンケートに基づきフォロー アップ調査	●アンケート調査 結果を アッ プ	
12月	●④の現職教員からの フィードバック改善			
1月	●教材・マニュアルの精査			●公開研究会開催
2月				●アドバイザリーボード
3月				

1. 教材・教具と教師用マニュアル集



2. 教育指導をめぐるニーズ・課題調査 3. 学習支援の事例調査・学校社会に関するリテラシー



4. 意見交換・議論の場・教具などの共有の場:ブログ

- ・ ブログ参加 パスワード (閲覧制限)
- ・ ブログへの情報アップ (実施者、協力者、派遣教員がアクセス可能)
 - ① 制限付き管理者として直接書き込み
 - ② 管理者(愛知県大)に書き込みを依頼
- ・ トラックバック
ブログ閲覧者は全員書き込み可能
- ☆その他 オープンな情報伝達の場としてML
アンケート調査(クローズド)

活動協力者紹介

＜NPO法人可児市国際交流協会＞ 事務局長 中村裕、
事務局次長 各務真弓

＜NPO法人子どもの国＞ 理事長 井村美穂

＜豊田市立西保見小学校＞ 校長 中根秀博

＜豊田市立東保見小学校＞ 国際教室主任 小山幾子

＜豊田市教育委員会 初期指導教室「ことばの教室」＞
学校日本語指導員 佐藤てるみ、村松めぐみ

＜愛知県西三河教育事務所＞ 外国人児童生徒語学相談員 渡邊あづさ

＜愛知県東三河教育事務所＞ 外国人児童生徒語学相談員 久保真希子

＜西尾市教育委員会＞ 早期適応教室指導員 菊池寛子

＜日本語学習支援教室Vizinho＞ 代表 大島之弘

＜日本福祉大学子ども発達学部＞ 教授 勅使千鶴

7. 討論・総括

- ・ コメント
- ・ 現状の認識(課題、リソースなど)
- ・ 事業の方向性

現職教員特別参加による日系社会青年ボランティア活動支援

継承日本語教育センター

中元 司郎

1) ブラジルにおける日本語教育の課題

継承と普及

日系人としての人格形成と日本語習得

2) 国語教育的指導法から日本語教育的指導法へ

「継承日本語教育から外国語としての日本語教育へ」ではない

3) 文化的活動と文化の学習

行事としての体験学習

現代文化・生活様式への関心

4) 移住学習

移住の歴史

日系人の国づくりへの貢献

ブラジルと日本の関係

平成21年度「国際協カイニシアティブ」教育協力拠点形成事業
ー日本国内の現状とボランティア派遣教員への期待ー

1 愛知県の現状

(1) 日本語指導が必要な外国人児童生徒数（平成20年9月1日現在）

- ・小学校 4,372人 中学校 1,366人 計 5,738人（全国1位）
- ・小学校数 447校 中学校数 203校 計 650校
- ・ポルトガル語 3,688人 スペイン語 733人 フィリピン語 555人

(2) 平成19年9月1日現在と比較すると

- ・小学校 3,853人 中学校 1,083人 計 4,936人（全国1位）
- ・県の増加率は小学校が13.4%、中学校が26.1%
- ・全国の増加率は、小学校が7.5%、中学校が26.7%

2 愛知県教育委員会が推進する外国人児童生徒教育

(1) 日本語教育適応学級担当教員の配置（名古屋市を含む）

平成20年度 295人 平成21年度 302人

- ・外国人児童生徒への日本語指導及び適応指導、担任と教科指導教員のパイプ役
- ・「国際教室」、「日本語指導教室」等の名称をつけ、外国人児童生徒への指導を推進

(2) 語学相談員派遣事業

- ・尾張、知多、西三河、東三河の4教育事務所に5人（ポルトガル語対応）、尾張、西三河教育事務所に2人（スペイン語対応）を配置
- ・外国人児童生徒に対する日本語指導、母語指導、教育相談、保護者会等での通訳、連絡文書の翻訳等を担当
- ・平成20年4月から平成21年3月までの訪問指導実施状況
延べ学校数の年間合計は小学校が888校、中学校が439校、計1,327校

(3) 愛知県教員採用選考試験に外国語が堪能な教員選考枠を入れる

- ・平成20年度は、22人採用 平成21年度は7人採用

(4) 外国人児童生徒教育講座（県総合教育センター）

- ・全体研修2日、地域別研修1日で実施
- ・内容は国が実施する日本語指導者養成研修の伝達、初期日本語指導の方法、JSLカリキュラム等を含む教科指導法、その他実践研究等情報交換

(5) 外国人児童生徒教育連絡協議会（年1回）

- ・目的は外国人児童生徒教育に関する情報交換等
- ・出席者は外国人児童生徒が20人以上在籍する市町村教育委員会の指導主事、関係教育事務所指導主事、県総合教育センター担当指導主事、県教育委員会職員

・平成21年1月23日（金）に実施

「外国人児童生徒を支援する学校体制の在り方と指導者の力量を向上させるために」をテーマに前半はグループ討議、後半は6人の代表指導主事によるパネルディスカッション方式で進めた。

＜課題＞

- ・学校教育以外のさまざまな相談が寄せられるが、教員が多忙であり、対応しきれない時がある。
- ・小学校では就学前、中学校では進路に関する指導が難しい。
- ・児童生徒数が多い学校では、使用教材や指導方法の研究、実践が進んできたが、少ない学校では、何から手をつけてよいかわからないでいる地域もある。
- ・発達障害や不登校等、個々への対応が必要になってきている。

＜実践報告＞

- ・マニュアルを作成し、年2回地域に適応指導教室を公開、不就学の児童生徒には「学校へ来ない？」と話しかけ、日本一愛のある適応指導教室を目指している。
- ・研修体制をつくり、指導者の力量向上につとめている。校内現職教育の中に日本語指導に関する授業研究をとりあげ、計画的に実施している。最終的には自己研修につなげていきたい。
- ・学校の職員の意識向上を図るために、保護者も参加する交流会を実施し、歌やダンス、料理教室等を開催し、お互いに習慣や文化を体験的に理解し、楽しみながらコミュニケーションを深めている。
- ・市のWebページにダウンロードできる教材や翻訳した家庭への連絡文書を掲載している。

(6) 愛知県教育委員会 義務教育課のWebページ

- ・外国人児童生徒教育資料を掲載（初期日本語指導教材、家庭連絡文書ポルトガル語版）
※関西大学から「多言語・学校プロジェクト」にリンクをはりたいとの要望があった。

(7) 愛知県帰国・外国人児童生徒受入促進事業運営協議会を開催予定

- ・平成21年8月28日（金）に開催予定
- ・大学関係者、関係市町村教育委員会、研究校実務担当者、ボランティア団体、国際交流協会、教育委員会事務局（多文化共生推進室）
- ・文部科学省の事業を研究実践している、岡崎市、豊田市、西尾市の取組の概要説明と意見交換等
- ・研究内容は、就学促進員の活用、就学支援、指導補助者・支援員の活用、初期指導教室、受入体制の整備、外国人の子どもの就学状況調査

愛知県における ブラジル人学校不就学児童・生徒の現状

愛知県

(愛知県地域振興部 高木 秀近)

愛知県内のブラジル人

	平成21年5月末	平成20年12月末	増減数・増減率
ブラジル人	73,706人	78,652人	△4,946人 △6.3%
全外国人登録者数	222,244人	227,581人	△5,337人 △2.3%
構成比 (ブラジル人/全外国人)	33.2%	34.6%	

(愛知県多文化共生推進室調べ)

1

ブラジル人学校生徒数

	平成21年1月	平成20年5月	増減数・増減率
生徒数	1,469人	2,624人	△1,155人 △44.0%
うち 義務教育年齢	1,131人	1,932人	△801人 △41.5%

(回答のあった15校)

2

不就学児童・生徒数

全就学年齢者数 約15,700人 (推計値)	公立小中学校への就学者数 約8,900人 (うち日本語指導が必要な児童生徒数 約5,800人)	このうち 日本語指導が 必要な 児童生徒数は 約7,000人
	私立小中学校への就学者数 約100人 外国人学校への就学者数 約1,800人 (うちブラジル系学校約1,200人)	
	就学状況不明 約4,900人 (不就学、居住していない者と考えられる)	日本語指導が 必要な子供も 含まれる

(愛知県多文化共生推進室推計)

3

施策①

アフタースクール事業

(愛知県事業)

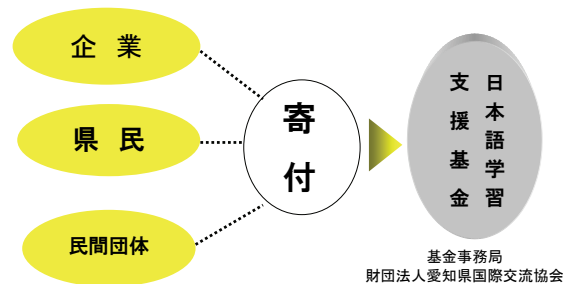
- 公立学校に通う外国人児童生徒に対し、公立学校の空き施設等を活用して教育や生活を支援する事業
- 委託団体数等: 1事業あたり100万円を上限に5団体を選考

(平成20年度終了)

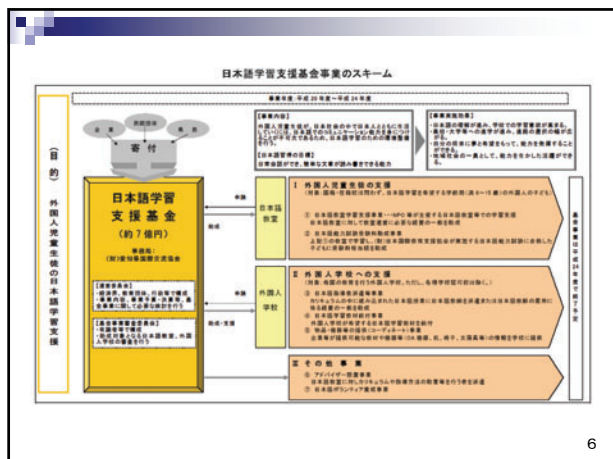
4

施策②

日本語学習支援基金事業



5



6

I 外国人児童生徒の支援

① 日本語教室学習支援事業

(NPO等が主催する日本語教室等での学習支援)

日本語教室に対して教室運営に必要な経費の一部及び子どもの人数に応じた金額を助成

② 日本語能力試験受験料助成事業

上記①の教室で学習し、(財)日本国際教育支援協会が実施する日本語能力試験に合格した子どもに受験料相当額を助成

7

II 外国人学校への支援

① 日本語指導者派遣等事業

カリキュラムの中に組み込まれた日本語授業に日本語教師を派遣または日本語教師の雇用に係る経費の一部を助成

② 日本語学習教材給付事業

外国人学校が希望する日本語学習教材を給付

③ 物品・機器等の提供(コーディネート)事業

企業等が提供可能な教材や機器等(OA機器、机、椅子、文房具等)の情報を学校に提供

8

III その他事業

① アドバイザー設置事業

日本語教室に対しカリキュラムや指導方法の助言等を行う者を派遣

② 日本語ボランティア養成事業

9

施策③

プレスクール事業

(愛知県事業)

■ 目的

入学直前の外国人児童を公立小学校へ早期に適応させるため

■ 事業の内容

バイリンガルのプレスクール講師による初期の日本語指導・生活適応指導を中心とした事業

10



11

プレスクール実施マニュアル作成・普及

■ 目的

プレスクールの実施に際して必要となるノウハウをマニュアル化し、市町村へ提供することにより、市町村によるプレスクールの普及を図る

■ 実施マニュアルの活用者

- (1)プレスクールでの指導者
- (2)プレスクールの実施主体：市町村

12

施策④

「虹の架け橋教室」事業

(文部科学省事業)

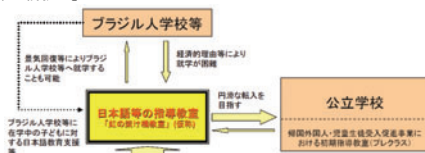
ブラジル人学校等に通っていた子どもで行き場を失った者などを対象

以下の機能を有する「場」を「教室」として提供

- ①日本語・日本事情の指導
- ②最低限の学習支援
- ③親子両方を対象とする就学相談
- ④ブラジル人等コミュニティと地域の交流
- ⑤その他ブラジル人等の子どもたちが日本社会で生活するための支援

13

「虹の架け橋教室」のイメージ



- 役割：ブラジル人学校等・公立学校にも通っていない子どもを対象に日本語指導等を実施。（ブラジル人学校等に在籍する子どもも受入れ可能）また、ブラジル人学校等に通っている子どもを中心とした地域社会との交流事業を実施
 - 対象：最寄教育庁の子ども等
 - 期間：原則６ヶ月程度
 - 場所：外国人集住都市等において実施
 - 内容：
 - ・日本語指導等を行う教員等
 - ・日本語指導や教科指導
 - ・バイリンガル指導員（ブラジル人教員等も含む）
 - ・ポルトガル語等の母語指導と教科指導の補助
 - ・コーディネーター等
- ブラジル人等の子どもの公立学校への受入促進、地域社会との交流の促進 等

14

資 料 2

平成 21(2009)年 10 月 29 日 第 2 回アドバイザーボード出席予定者リスト

於:愛知県立大学 学術文化交流センター 文化交流室A 16:30~18:00

	氏名	職階
1	小路 克雄	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 参事役
2	早瀬 竜也	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 参加促進・進路支援課
3	近藤 貴之	独)国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局 中南米課
4	前納 加奈子	独)国際協力機構 JICA 中部 市民参加協力課
5	中元 司郎	(財)海外日系人協会継承日本語教育センターセンター長
6	甲村 洋子	愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室 室長
7	藪崎 昭彦	豊田市教育委員会学校教育課指導主事
8	井村 美穂	NPO法人子どもの国 理事長、豊田市日本語指導員
9	中根 秀博	豊田市立西保見小学校 校長
10	小山 幾子	豊田市立東保見小学校 国際教室主任
11	佐藤 てるみ	豊田市教育委員会 初期指導教室「ことばの教室」 学校日本語指導員
12	村松 めぐみ	豊田市教育委員会 初期指導教室「ことばの教室」 学校日本語指導員
13	渡邊 あづさ	愛知県教育委員会 西三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員
14	川上 貴美恵	せんねん村 中野郷保育園 外国人児童コーディネーター
15	菊池 寛子	西尾市教育委員会 早期適応教室指導員
16	小川裕美	可児市教育委員会 学校教育課 外国人児童生徒コーディネーター
17	松本 一子	愛知淑徳大学・愛知教育大学 非常勤講師
18	岩井 淳武	文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室国際協力調査官
19	渡辺明	文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室 係員
20	東 弘子	愛知県立大学 外国語学部 准教授
21	加藤 史朗	愛知県立大学 外国語学部 教授
22	宮谷 敦美	愛知県立大学 外国語学部 准教授
23	高阪 香津美	愛知県立大学 外国語学部 専任講師
24	内山 久子	愛知県公立大学法人 契約職員
25	佐々木 雄太	愛知県立大学 学長
計25名		

第2回アドバイザーボード 議事録

1. 出張報告

東教員より時系列に沿ってサンパウロでの出張報告が行われた。

2. 活動実施者打ち合わせ会議

まず、10月8日の会議では、これまでのボランティア派遣とは異なり、現職教員を派遣することの意義を明確にした上で、この事業の最終目標が子どもたちへの教育の向上を目指した教員の質の向上であることを確認したことが東教員より報告された。

次に、宮谷教員より、本年度、および、来年度以降の本事業の具体的な成果物のイメージについて詳細な説明がなされた。(資料1、2、3参照のこと)

3. アドバイザーからのコメント

以下にアドバイザーからのおもなコメントをテーマ別にまとめる。このほか、事実確認の質問についてもいくつかなされた。

◆ 現職教員派遣制度、現職派遣隊員の位置づけや意識に関わる点

- ・ 教育委員会が現職派遣制度の位置付けを明確化し、派遣隊員に対する意識づけの役割を果たす必要があるのではないか。
- ・ 日系社会青年ボランティアと現職派遣隊員の役割は区別されている。日系社会青年ボランティアは日本語教育能力を有する者であるため、純粋な日本語教師として派遣されている。一方、現職派遣隊員は青年ボランティアのような日本語の授業を担当することは難しく、情操教育がメインであるとされている。あらかじめ、現職教員に対して、日本語教育を行うことは無理であることが伝えられているが、当事者はこの点を理解していない。
- ・ 現職派遣隊員自体が何を求めているのだろうか。
- ・ 現職派遣隊員の帰国後、彼らの経験や能力が活かせる場所を提供して欲しい。
- ・ 現職教員派遣制度に応募する人は、派遣前にすでにブラジル人を指導していた人が良いのではないだろうか。

◆ 本事業における具体的な成果物、大学としてのサポートに関わる点

- ・ ビデオ教材はないわけではないが、それを使用するにはカスタマイズすることが必要である。どこをどのようにカスタマイズすればよいかを考えることで何が必要であるかが見えてくるのではないだろうか。
- ・ 日本から現職派遣隊員をブラジルへ送り出す際の最初の意識づけ、ならびに、最終目標、ゴール地点を明確にしておくことは重要であり、これによりブラジル派遣が効果的なものになるだろう。最初と最後だけでなく、中間段階においてもなんらかの仕掛けがあれ

ばさらに良いのではないだろうか。

- ・ すでにある様々なツールをブラジルに派遣された教員に提供されるのはとても良いことである。ビデオ教材として提供できれば良いと思う。
- ・ 現職派遣隊員の派遣元機関に対するニーズ調査のアンケート項目について、選択肢を入れる、あるいは、派遣の目的を尋ねるため直接的な質問項目を盛り込む、などの意見が寄せられた。
- ・ 送り出す側は、現職派遣隊員がどのようなニーズに支えられるべきかを把握すべきである。そのためには、現地の学校側からの要望が明らかになる必要があるが、現在のところ、現地の学校側からの要望が明確なものではないため、現職派遣隊員自身が自分に何を求められているのかわかっていない。
- ・ 派遣前、滞在途中、帰国後の各段階で現職派遣隊員へのサポートが必要であろう。
- ・ ブログに関して、入口は広く、必要があれば、パスワードを導入し限られた人だけがみられるようにするというのはいかがでしょうか。
- ・ 既存のものを現地のニーズにあうような形へカスタマイズすることも成果のひとつとして考えられるのではないだろうか。
- ・ 現職派遣隊員の現地でのサポートに焦点があたっているのではないだろうか。
- ・ 派遣先の学校によって違いはあるものの、現職派遣隊員は派遣先の学校でアシスタントという明確な位置づけのもと、国際理解教育において助言する役割が期待されているように思う。県大は隊員が担うであろう国際理解教育をカリキュラム面、また、教材面でサポートすることができないだろうか。
- ・ 記録（活動）報告、教育実践にかかわるレポートを書いた方がよいのでは。実践の整理のためにこの報告書が現地でも役に立つだろう。県大は報告書の書き方をいう点で隊員をサポートすることができるのではないだろうか。

◆ 受け入れ先（現地校）に関わる点

- ・ 日本人教員の派遣は受け入れ先で学ぶ現地の子どもたちにどのような影響を与えているのだろうか。どのような意義があるのだろうか。
- ・ 受け入れ先の現地の学校も日本からの教員の活用の仕方がわからない状態である。

4. スケジュール確認

東教員より、今後のスケジュール確認が行われた。

文責・高阪香津美

平成 21 年度 「国際協カイニシアティブ」教育協力拠点形成事業

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協カシステムの形成

第 2 回アドバイザーボード（2009 年出張報告および成果物へ向けて）（提案：東 弘子）

2009/10/29 16:30～18:00 愛知県立大学学術文化交流センター2 階 文化交流室 A

1. 出張報告（9 月 7 日～16 日）

● 出張スケジュールと概要 ●

◎9 月 8 日（火） JICA サンパウロ支所

- ・派遣先学校、現職派遣教員の役割について → さまざまな現状
- ・ブラジル文化・制度について

（個人登録の身分証明書、住民票なし、日本生まれ：領事館登録可能に、日系社会(マジョリティ)がとらえるデカセギ者へのイメージ）

- ・派遣教員への期待 来年度は日系社会ボラの実績のない新たな学校も

1 年半後のイメージをどう持ってもらうか

◎9 月 9 日（水） アルモニア学園

派遣教員（中学校教諭、体育）：日本語教育担当 教材作成、工夫中

- ・全日制 幼～高 （修学旅行先「日本」）
- ・日系(継承日本語的イメージ+もう一つの外国語) しかし学習意欲派の継続は難しい

◎USP 日本文化研究所 織田順子所長との面会

- ・大学教育の中での日本語教育
- ・大学の教育制度への政府の援助と初等・中等教育との関係

◎9 月 10 日（木） スザノ日伯学園

派遣教員(小学校教諭)：日本語教育担当 教材の工夫中

- ・半日制+午後(ほとんどの生徒が参加)(実質全日) 小～中
- ・日系社会の援助(体育協会)から設立 4 年目
- ・婦人会の協力による給食
- ・ブラジル文化の一端を見る（子供の誕生日に親がケーキを持ってきて一緒にクラスで祝う）

◎平成学院

派遣教員（中学校教諭、数学）：幼児日本語担当

- ・全日制 乳幼児から 4 年生
- ・国際理解教育としての日本語+継承(おばあちゃんと話す)

◎9 月 11 日（金） カリタス学園

派遣教員（中学校教諭、英語）：英語担当(現在はポ語学習)

- ・まずしい地区に設立+奨学金(授業料免除のこと)
- ・多くの寄付により運営
- ・修道会経営が信頼を得ている(あまり「日系」は関係ない)

◎資料収集

◎JICA ボランティア(5 名)+JICA 職員 との食事会

◎9 月 12 日（土） 日本移民資料館にて資料収集

◎ 松原玲子 USP 准教授との面会（+JICA 職員）（ホテル）

- ・公立学校の調査が困難
- ・ヒトの育成よりモノを作る目標
- ・デカセギ文化について(自助組織ができていない)

◎9 月 14 日（月）「かえるの学校」

- ・吉本黎明氏との面会
- ・教室見学

◎ブラジル日本語センター 書籍購入

◎総領事館訪問（JICA 現地調整員同伴）

● 出張からわかった問題点 ●

- ・現職教員派遣制度の滑り出しにおいて今までの日青ボとの差別化がまだできていない
- ・「派遣中のニーズ」そのものが当事者にとって曖昧。この制度そのものの「ニーズ」を探るべき
- ・デカセギ帰国者へのフォローまでは難しいか？

2. 活動実施者打ち合わせ会議（10月8日）より

● この事業全体で目指すこと ●

- ・最終目標：現職教員派遣制度をとおして継続的に教員の質を向上させること
（→こどもたちへの教育の向上）これまでの青年派遣と異なるこの派遣の意義はこの点にある。

● 本年度の成果物 ●（資料1）

A. 「現職教員派遣隊員への期待」のニーズ調査：現場に戻るまでに現地で何を得てきてほしいか

①小中学校の教育現場で必要とされること（宮谷・松宮）

- 小中学校の外国籍児童生徒指導者（語学相談員など）/ブラジル人学校関係者への聞き取り
- ・第1回研究会データ（8月26日）の文字おこしデータの整理
 - ・活動協力者へのフォローアップインタビュー
 - ・ブラジル人学校関係者を招いた研究会（12月23日予定）のデータ
- これらをまとめる

②派遣側が期待していること（宮谷・松宮）（資料2）

教育委員会、在籍校が期待していることをアンケート調査する

本年度は、上のニーズを整理し、報告にまとめる。この報告は、次年度以降、派遣教員がブラジルでの活動を意識化し、ブラジルの教育制度やブラジル人児童生徒の支援に必要な知識や技能を、学びとる過程をサポートする「活動記録ノート」の作成のための第1次資料となる。

B. 既存の日本とブラジルの「文化差」を示す教員研修向け資料および、子供向けの教材の整理

- ・すでに扱われている情報とない情報を整理する（小島・松本）
- ・教育委員会で実施されている外国人児童生徒指導のための研修内容の整理（松宮）

①既存の情報を整理・評価し、報告書を作成する。

②派遣教員向け「一目でわかる！ブラジルと日本の学校文化の違いを理解するリーフレット」作成

※既存のモノがありながらあまり有効に広く行き渡っていない現状

→コンパクトな情報にまとめる。

次年度以降へ：「ないもの」の確認から、次年度以降の具体的成果物への方向性を見いだす。

C. ブラジル公立学校の現状の報告（高阪）

現職教員が派遣されるのは、日系私立学校であるが、日本で暮らすブラジル籍児童生徒の多数派は公立学校出身→派遣されている学校との違いや相対化も含めて、理解を深める必要がある。

報告の作成、および、次年度以降の「活動記録ノート」作成に反映させる

D. 第1回研究会（座談会・経験談）を、コンパクトな読み物にまとめる（東）→報告書

E. ブラジルと日本のつながりを意識できる社会科教材 (宮谷・高阪) (資料3)

両国の小学校の社会科で取り上げる、産業、自然、歴史について、とくに日系社会とのつながりの深いものを取り上げ、簡単な日本語とポルトガル語で学べる教材を作成する。

(2009 年度：日本語版作成、2010 年度ポルトガル語版作成)

本教材は、両国での日系人の活躍を知ること、日本とブラジルの関係性を意識させることを企図したものである。ブラジル籍児童生徒にとっては、自尊感情の形成を図ること、また日本人児童生徒には、異なる国や文化に対して興味を促し、自他の違いを認め多様性を受け入れる態度を育てることに効果を発揮することが期待される。

● ブログの運用について ●

広報をメインに考えるのか現職派遣ボランティアの支援を中心に考えるのか

3. アドバイザーからのコメント・意見交換

4. スケジュール確認 (参考資料 前回アドバイザリーボード資料のスケジュール ↓)

これまでの活動 アンケートやブログの体制作り

8 月 26 日の座談会

今後の予定 12 月 23 日 研究会 (ブラジル人学校関係者への聞き取りの会)

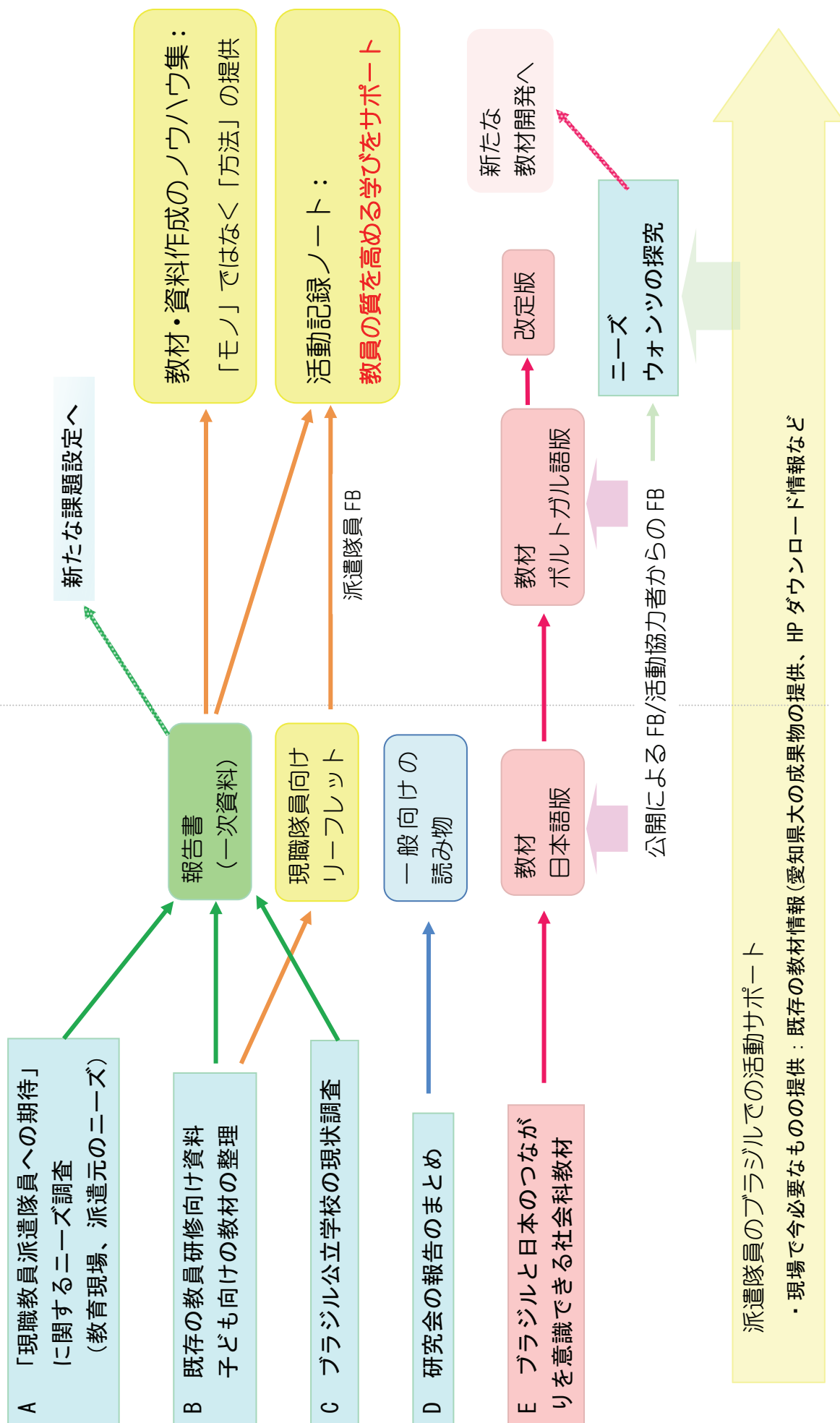
本事業 2009 年度スケジュール

活動内容 月	① 教材、マニュアル作成	② 教育指導をめぐるニーズ・課題調査 ③ 学校社会リテラシー資料集作成	④ 情報交換ネットワークシステム構築	全体
7 月	●教材・教具の試作 ●協力団体における講座開催(試用)		●ブログ構築	
8 月	●協力団体における講座開催(試用)	●公開研究会:JOCB の OB・OG による教育経験:8 月 26 日	●ブログ配信開始 ●ML 構築・配信	●アドバイザリーボード
9 月	●協力団体における講座開催(試用)	●ブラジル人学校関係者 座談会	●②③の座談会で得た情報をアップ	
10 月		●ブラジル現地調査 (9 月 7 日～16 日)	●ブラジル出張報告、現地の情報、教材などアップ	
11 月	●アンケート調査:協力者	●アンケート調査 協力者、JOCB(現派遣教員および OB・OG)		
12 月	●④の現派遣教員からのフィードバック・改善	●アンケートに基づくフォローアップ調査		●公開研究会開催
1 月	●教材・マニュアルの精査			●アドバイザリーボード
2 月	● 報 告 書 作 成			
3 月	● 本 年 度 活 動 終 了			

資料 1 成果物のイメージ（本年度の目標と最終目標との関係）

平成 21(2009)年度

平成 22(2010)年度以降



資料2 派遣元に対するニーズ調査項目（原案）

対象：現職派遣隊員の派遣元機関（市教育委員会、小中学校の校長、または担当者）

（県教育委員会はどうするか？）

目的：①各地域・教育機関での外国籍児童生徒への教育の現状

②各地域・教育機関で、外国籍児童生徒教育に関してどのような課題があると認識しているか

③現職派遣隊員が帰国後にどのような役割を担うと考えているか

④現職派遣隊員への期待（身につけてきてほしいことなど）

手法：アンケート調査、または面接調査（面接調査の場合は、事前に質問内容を送る）

依頼協力の方法は？

質問項目案

質問	目的
1) 現在、自治体（または小学校、中学校）で、日本語指導などの特別支援が必要なブラジル人児童生徒は何人いますか。	1
→外国籍児童生徒に対する教育体制をについて教えてください。	1
→加配教員や日本語指導員はどのような資格を有していますか。	1
→現在の外国籍児童生徒の教育体制について、課題と考えていることは何ですか。 （項目を細分化する？）	2
2) 現在派遣している教諭が帰国してから、どのような部署（役割）に配置するか方針がありますか。	3
→ある：どのような部署（役割）ですか。	3
→ある：どうして、その部署（役割）に配置する予定ですか。	3
→ある：ブラジルでの活動経験の評価（位置づけ）について、派遣した教諭に伝えましたか（話し合いましたか）。	3
→ある：帰国後の予定について、派遣した教諭に伝えましたか（話し合いましたか）。	3
→ない：いつ配置を決める予定ですか。	3
→ない：ブラジルでの活動経験は、今後の教諭としてのキャリアの方向性に影響を与えますか（組織の人事として）。	3
→ない：ブラジルでの活動経験の評価（位置づけ）について、派遣した教諭に伝えましたか（話し合いましたか）。	3
3) 現在派遣している教諭を推薦した理由は何ですか。	3
4) 現在ブラジルに派遣されている教諭との連絡は定期的に行なっていますか。	4
→はい：連絡の際に、本務校の情報や派遣先の状況等について情報共有をしていますか。	4
→はい：それはどんな情報ですか。	4
5) ブラジルでの活動期間に、派遣教諭に体験してほしいこと、能力として身につけてほしいと考えていることがありますか。それは何ですか。	4

資料3 ブラジルと日本のつながりを意識できる社会科教材

A 都道府県カード



裏側：簡単な日本語で、都道府県に関する情報を書く。(日本語は2種類準備する予定)

易しい日本語例：名古屋城があります。名古屋城は、金のしゃちほこで有名な名古屋城があります。自動車作りが盛んです。日本では毎日外国人が多いです。そして、外国人の中でブラジル人が一番多いです。ブラジル人は学校やブラジル人の家がたくさんあります。

両面印刷にして切り取れば、都道府県(ブラジルは州)の形のピースになる。切り取らなくても都道府県別のシート教材として使用可能



表側：都道府県名(漢字とひらがな) 地方の名前

あいち けん
愛知県
ちゅうぶちほう
中部地方

2010年度はポルトガル語整備をめざす

B 地図パズル



裏に「愛知県」

Aとあわせて、形をヒントに、都道府県名を当てるなどの教室活動にも利用可能

C 情報カード



Aの都道府県カードを読み、適切な写真を選ぶ等の活動が可能
ブラジルとの比較やグループ活動などもできる




じん
ブラジル人



じどうしゃこうじょう
自動車工場

資 料 3

平成21年度
「国際協カインシアティブ」教育協力拠点形成事業

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成

課題実施機関 愛知県立大学
活動実施者 東弘子、加藤史朗、宮谷敦美、松宮朝、高阪香津美
松本一子(愛知教育大学)、小島祥美(愛知淑徳大学)

2010年1月10日(日) 14:30～15:00
筑波大学東京キャンパス大塚地区 G201

目的

- (1) JICA日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度による隊員の活動の質の向上および、帰国後の外国人児童・生徒に対する教員としての指導力の向上
- (2) 日本、ブラジル間の移動をくりかえす児童・生徒に対する教育支援のための情報ネットワークの形成

活動実施体制

- 活動協力者(敬称略)
豊田市立西保見小学校、豊田市立東保見小学校、豊田市教育委員会初期指導教室「ことばの教室」、NPO法人子どもの国(放課後学習支援事業「ゆめの木」教室)、日本語学習支援教室Vizinho、NPO法人可児市国際交流協会、小川裕美(可児市教育委員会学校教育課・外国人児童生徒コーディネータ)、渡邊あづさ(愛知県西三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員)、菊池寛子(西尾市教育委員会・早期適応教室指導員)、勅使千鶴(日本福祉大学子ども発達学部・教授)
JICA日系社会青年ボランティアOG:久保真希子(愛知県東三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員)、川上貴美恵(せんねん村中野郷保育園・外国人児童コーディネータ)、今井さや香(知立市教育委員会・早期適応指導員)、青木由香(富山県高岡市・外国人児童生徒指導講師)、三澤由佳子((財)海外日系人協会・非常勤講師)
- アドバイザー
JICA、海外日系人協会、愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室、愛知県教育委員会、豊田市教育委員会

活動スケジュール(2009年度)

- 7月3日(金) 本事業採択決定 活動開始
- 8月5日(水) 第1回アドバイザーボード
- 8月26日(水) 第1回研究会「ブラジル人児童生徒の教育活動
ーブラジル本国での活動経験をもとにー」
- 9月8日(火)ー14日(月) ブラジル現地調査 (2名)
- 9月23日(水) 第2回研究会(公開)「学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育・岐阜県可児市の取り組み」講師:小川裕美氏
- 10月29日(木) 第2回アドバイザーボード
- 11月5日(木) 〈共催〉公開講演会「豊田市立東保見小学校における外国籍児童への学習支援」講師:小山幾子教諭
- 12月23日(水) 第3回研究会「ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点」
- 3月10日(水) 活動終了(予定)

活動と成果 1

日本国内の教育実践者・JICA現職教員隊員へのニーズ調査

1. JICA日系社会青年ボランティアOGかつ現在日本での教育実践者である活動協力者から意見聴取。現職教員隊員に学んでほしいことをテーマに研究会を実施。 → **座談会記録(読み物)**
2. ブラジル人学校からみた日本の教育者に対するニーズを意見聴取。「日本の学校とブラジル人学校をつなぐ視点」というタイトルで研究会を実施。
 1. 2. → **ニーズをまとめた報告書**
3. JICA現職教員隊員に対する意識調査
→ **アンケート集計、報告**

活動と成果 2

日本・ブラジル間の教育体制・文化の違いに関する、既存の情報の整理

外国人児童・生徒への指導の質の向上を目的に各地の教育委員会などが作成した成果を整理・精査

→ **移動する子供が持ち運べる、日本・ブラジルの教育体制・文化の違いについて現場の先生や当事者が見てすぐにわかる、情報一覧シート**

活動と成果 3

両文化を理解し、また相互に尊重しあう感情を育成するための教具と活用方法の提案

日本の教育現場、ブラジル人学校、ブラジルの隊員受け入れ学校において、様々なシーンで活用できる地図教具の作成と活用方法の提案。

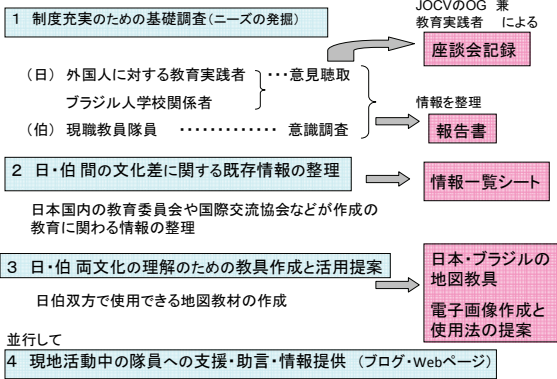
- **日本とブラジルの地図(県や州、行政区分などの各種分類)の電子画像と、わかりやすい地域に関する説明文の電子ファイルの提供、および使用方法の提案**

活動と成果 4

現地活動中の隊員への支援(Webページ利用)

- ・ 現地で求められている「日本語指導」活動サポートのための絵カードを提供
- ・ 帰国後に必要となる日本国内の外国籍児童・生徒指導のための「お役立ちリンク」を提供

平成21年度 **活動** と **成果**



日本とブラジルの教育制度 & 学校文化一覧表 (作成中+ポルトガル語版)

	日本	ブラジル
1 教育制度	小学校6年、中学校3年、高校3年、大学2～6年	基礎教育(日本の小・中学校にあたる)9年、中等教育(日本の高校にあたる)3年、高等教育2～6年
2 義務教育年数	9年(小6年+中3年)	9年(小5年+中4年)
3 学年暦	4月スタートで3月に終了	2月スタートで12月に終了
4 授業時間	全日制	2部制(午前又は午後)、3部制(午前又は午後又は夜)
5 学校選択	学区区制	親が学校を選択
6 入学年齢	満6歳	満6歳
7 学期	2学期制又は3学期制	4学期制
8 入試制度	高校進学・大学進学に際して、必ず入学試験がある	高校進学・大学進学に際して、入学試験があるが、公立高校については入学試験がない場合もある
9 海軍・飛び級制度	ない	私学ではあるが、公立学校では原則としてない(かつては基礎教育の1年から卒業があった)
10 通学方法	小学校は通学団学校	親による送迎、スクールバス利用
11 授業料	義務教育は無料	公立の場合、大学まで無料
12 公立と私立のレベル差	公立と私立で教育水準を比較することができない	基礎教育と中等教育は、私立の教育水準が高いが、高等教育は公立の方が教育水準が高い。公立大学合格者はほとんどが私立高校卒業生
13 入学式など式典	入学式・卒業式始業式・終業式がある	卒業式はあるが、入学式・始業式・終業式はない
14 授業科目	国語・算数(数学)・社会・理科・英語・音楽・美術・技術・家庭・体育(学校にプールがあるため夏は水泳の時間がある)	技術・家庭科・音楽がない プールはない
15 教科書	無料で支給される	貸与されて使用し、返却する

16 行事	遠足・学芸会・作品展・運動会・修学旅行・宿泊を伴う野外学習など	修学旅行など宿泊を伴うものはない。母の日・クリスマス・イースターなどはある
17 クラブ活動	野球・サッカー・テニス・バスケットボール・バレーボール・陸上・水泳などの運動部や美術・プラスバンド・英会話など多様な部活動がある	ない。個人的にスポーツクラブに通ったりする
18 給食・食文化	小学校とほとんどの中学校は給食がある ブラジルは味付けの基本が塩コショウのため、日本の給食が食べられず、慣れるのに時間がかかる	給食はあっても簡単なもの。校内の売店で買うこともできる。
19 時間割	1日の授業が給食をはさんで5～6限あり。授業と授業の間には5～10分の休憩がある	半日で5限くらいあるが、授業と授業の間の休憩は、2限と3限の間の1限のみで15分くらい
20 掃除	教室もトイレも運動場も児童生徒が掃除をする	清掃係の職員の仕事
21 制服	夏用・冬用の制服があり、お金がかかる	Tシャツのような簡単な制服が多い。
22 保護者会・授業参観	ある	授業参観はない
23 校則・アクセサリ	髪型、持ち物など校則で決められていることが多い。 アクセサリ禁止	アクセサリは個人の自由
24 欠席・遅刻の届け出・連絡帳	欠席や遅刻の場合は、当日の朝、学校に連絡帳からの連絡は電話で直接話すか、連絡帳に書く	出席は75%で連絡できるため、届けなくてもいい。2～3日休んだときは、後日医師の診断書と共に報告すればよい
25 長期休暇	夏休み(7/20～8/31)、冬休み(12/26～1/7)、春休み(3/23～4/3)	夏休み(12/末～2/初)、冬休み(7月中旬の1週間のみ)
26 算数の引き算や割り算の仕方	13-8の計算は、10-8=2、2+3=5と計算する 12÷3= 3) 12 のように書いて計算	8にいくつ足すと13になるかを計算 12÷3= 12) 3 のように書いて計算
27 教師の勤務時間	フルタイムで勤務	午前の授業が終了後、午後は別の学校ではたらき教員がいる
28 経費	学年費・給食費・PTA会費・ワークブックやドリル代・通信費・修学旅行費(6年生のみ)などの集金がある	公立学校は給食費も含めて原則無料
29 成績表	相対評価と絶対評価の組み合わせ?	絶対評価
30		

地図教材(日本・ブラジル)

- ・ 全国図 → 地方図 (反転図も作成)
- 地方毎に色分け

- ・ ランドマーク
中国地方
：原爆ドーム(広島県)
南部
：イグアスの滝(パラナ州Estado do Paraná)

地方のランドマーク

	名所	都道府県
北海道地方	雪祭り	北海道
東北地方	青田トンネル	青森県
関東地方	東京タワー	東京都
信越・北陸地方	黒部ダム	富山県
東海地方	富士山	静岡県
近畿地方	大仏	奈良県
中国地方	原爆ドーム	広島県
四国地方	阿波踊り	徳島県
九州地方	阿蘇山	鹿児島県
沖縄地方	首里城	沖縄県

／ 県の情報

都道府県名	情報(簡単な表現)
北海道	日本の一番北にあります。 土地が広いです。米や野菜がたくさんとれます。 夏はすずしいです。冬は雪がたくさん降ります。 雪祭りがあります。
青森県	トンネルで北海道に行けます。 日本で一番りんごがとれます。 ねぶた祭りが有名です。
岩手県	日本で二番目に広い県です。 サンマやわかめがたくさんとれます。 わんこそばが有名です。
宮城県	東北で一番人の多い県です。 七夕祭りが有名です。

『日本がわかるちずのえほん』(学研)よりリライト

今後の課題

- JICA 隊員とのコミュニケーション
blogの活用
縦の関係をつなぐ役割
- 国内でのニーズの発掘
教育委員会における本制度の位置づけ
活動終了後の人材活用イメージの形成
- 日伯双方の制度理解の促進
隊員の活動内容の向上

2. 報 告

2. 1 現職教員派遣制度における隊員の意識分析と本事業が取り組

むべき課題の整理

松宮 朝

ここでは本事業が取り組むべき課題について、2009年11月27日から12月4日まで現職教員特別参加制度（日系）制度強化調査団（調査団員構成：JICA、静岡県教育委員会、海外日系人協会）によって実施された、ブラジルでの「現職教員特別参加制度（日系）制度強化調査」の分析から考えてみたい。ここで用いるデータは『現職教員特別参加制度（日系）制度強化調査 報告』（以下、報告書と記載）に依っている。

この調査の目的は、「現職教員特別参加制度（日系）による教員（第一号）がブラジルに派遣されてから5ヶ月程度経過したところ、彼らが現在置かれている状況を把握し、それぞれの今後の活動を充実したものとするべく調整するとともに、来年度以降派遣される現職教員のための制度整備を行う。」（報告書 p.1）というものであり、本事業も、こうした問題に対して一定の貢献を果たすことが期待されていると考えられる。そこで、調査報告書から明らかにされた隊員の意識分析結果から、本事業で取り組むべき課題を整理してみたい。

2.1.1 配属先から求められる活動への対応（日本語授業）

「ほとんどの配属校において日本語授業(外国語教育)の実践が求められる状況にあるが、授業運営・展開に（自分が十分と思えるほど）対応できていない」という。これは、多くの場合「日本語能力検定試験等日本語教師としての資格を有する者はおらず、また外国語としての日本語教育を実践した経験がない」ことに起因する。「日本語教育ばかりが求められるのであれば、自分が対応することが適切なのか（日系日本語学校教師が派遣された方が良いのではないか）と考える傾向がある。」（報告書 pp. 2-3）

このように、隊員の意識調査では、日本語授業への対応の困難が明らかにされている。確かに、日本語教育が専門ではない隊員においては、派遣先の要求に対してどのようにこたえるかが、最大の課題となっていると考えられる。調査結果を受けて、「日本語教育は今後も活動内容に導入していく方が良い。ただしそのために、現職教員青年派遣前の学習を充足させる。」（報告書 p.3）とされるが、本事業で取り組むべき課題は何か。

<本事業の課題①>

事前の日本語教育に関する研修等はもちろんであるが、本事業で取り組むべく課題としては、日本語授業の教授法や教材に関する利用しやすい情報の提供がある。日本語授業の教授法としては、専門的な内容のテキストというよりも、実際に使うことができる日本語教材のマニュアル作成が有用と思われる。その意味で、教材についても、対象、レベルに合わせた基本教材のデータベース化や、新たな教材の開発とともに、教材を有効に利用するためのマ

マニュアル作成が喫緊の課題といえる。

2.1.2 日本語教育の多面性

調査結果からは、以下のような日本語教育に対する派遣先からの要望が明らかにされた。本事業に関連する項目を簡潔に記しておきたい。

- ・情操教育の一環としての、外国語としての日本語指導（日本語をとおした他文化との接触）（報告書 p. 15）
- ・学内の日系人・非日系人分け隔てなく、豊かな文化である日本文化をボランティアから伝えてもらうことを求めている（報告書 p. 16）
- ・日本語指導において、幼稚園児に対しては、知識・言葉を体で身につけることを重要視し、小学校以降では文法を取り入れた体系的な日本語指導をするようにしている（※日本の言語・文化の習得をとおして日本人の気持ちを理解できるようにすることを目的としている）（報告書 p. 17）
- ・日本での体育授業の企画・運営・実施の経験に基づく青年からのアドバイスを必要としている（報告書 p. 18）
- ・運動会や文化祭等の各種学校行事の企画・運営についても日本の教育の経験を取り入れることができるよう、これらの分野の協力についても期待している（報告書 p. 21）

以上の隊員の声から見えてくるのは、配属先の日本語教育へのニーズの多様性といえよう。こうした多様なニーズにどのようにこたえることができるのか、本事業の課題を3点にまとめて述べておきたい。

<本事業の課題②>

第1に、日本語教育は、日本語という言語習得の面ももちろんであるが、日本文化等の理解も要請されている点である。そのためには、日本語授業に際して、日本地図・歴史や、日本文化等が同時に理解できる教材の作成が求められている。

第2に、体育授業など、日本のカリキュラムの情報提供と、簡易な体験教授法の開発である。基本的な指導方法のポルトガル語訳作成だけでなく、日本語教育と連動させた指導マニュアル作成が求められる。

第3に、日本の学校行事に関する情報提供と、配属先での簡易に実施可能な教授法の開発である。これも、日本の学校行事のポルトガル語訳作成とともに、配属先で実施可能な指導マニュアル作成が求められている。

次に、2010年2月に本イニシアチブ事業で実施した、隊員への本事業に対するニーズ調査の結果から、本事業の課題をまとめておくことにしよう。

表1は、調査結果をまとめたものである。教材に対するニーズと、本事業に対するニーズに対する回答に分けてはいるが、実質的に重複している部分もある。

表1：調査結果の概要

教材に対するニーズ	本事業に対するニーズ
幼稚園児に対して日本語教育を行っています。その中で、絵本を読み聞かせていますが、ほとんど読み終えてしまいました。紙芝居や絵本のダウンロードができたらとてもうれしいです。	「これは必要！ひらがな、カタカナの語彙一覧表」があったら嬉しいです。最近テキストを作ったから思うのかもしれませんが……。それに今のテキストの語彙は古いような気がします。
私の学校では、日本語教育として「歌・折り紙」を行っているため、教材はほとんどありません。ですが、活動内容が上記のようなものなので今現在必要な教材というものは特にありません。	学校のニーズによるので一概に言えませんが、必要なところと密に連絡を取っていけるとよいかと思います。
日本の英語活動集に載っているような活動例	日本の英語活動のように、体を動かしながら楽しく外国語に慣れ親しめるアイディアがほしいです。
日本語教材としての絵カード	品詞別絵カード
絵教材の確保 年少者向け教室活動	絵教材の確保 年少者向け教室活動
日本語教育情報 国内の日系ブラジル人の教育情報などを定期的にメールなどで情報発信してほしい。	どんな情報でも構わないので、定期的に情報を提供してほしい。

① 教材に対するニーズ

教材に関しては、「報告書」の分析からも明らかな通り、日本語教育に活用できるものを求める声が多いことが明らかである。

その中でも注目したいのは、「紙芝居や絵本」、「日本語教材としての絵カード」、「絵教材」など、視覚的に訴えかけることのできる教材が必要とされている点だ。この点に関しては、本事業でも一部取り組んできたが、今後は、年少者対象の教材の充実を視野に入れて取り組む必要がある。

また、「日本の英語活動のように、体を動かしながら楽しく外国語に慣れ親しめるアイディア」に対する要望がある。この点に関連して、「報告書」の分析でも、体育教育と日本語教育の関連性を高める課題が指摘されていた。こうした広い意味での教材に関するニーズにこたえる必要があるといえよう。

② 本事業に対するニーズ

「国内の日系ブラジル人の教育情報」などの発信については、本活動で獲得できた情報を早急にホームページ上で公開していく取り組みが必要とされる。これは、本年度事業の反省点であるとともに、来年度からしっかりと対応していきたい。

2. 2 研究会報告

東 弘子

2.2.1 第1回 研究会

開催日時：2009年8月26日（水）13:00～17:00

開催場所：愛知県立大学長久手キャンパス 外国語学部国際関係学科共同研究室(E302)
(愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3)

タイトル：ブラジル人児童生徒の教育活動ーブラジル本国での活動経験をもとにー

参加者（敬称略）：

【活動協力者】

川上貴美恵，渡邊あづさ，久保真希子，今井さや香，青木由香，三澤由佳子

【活動実施者】

松本一子，加藤史朗，東弘子

【事務担当】 内山久子

詳細は、次ページからの、研究会に基づく小冊子を参照。

本研究会で得られた知見のポイントは以下の通りである。

1 現地活動の心得

自分がやりたいことを、相手に押しつけない。ゆっくりと人間関係を作って信頼を得てから。しかし黙っていては認められないので、自分の意見を述べることは必要なこと。また現地の人間関係を取り持つような「来訪者」だからこそできる役割もあるはず。

2 現地活動における工夫のヒント

教員ならではの現地にはないスキルがある。自分に一芸があればなおよい。教材や内容は自分の用意したものにこだわらず、実状に合わせてさぐる流動的に工夫する。日本人とは異なる子どもの性質や価値観を知って工夫することも重要。

3 現地から発信してほしいこと

日本からブラジルに帰国した子どもたちや、デカセギから帰ったブラジル人社会の様子を教えてほしい。

4 現地でまなんできてほしいこと

派遣された学校や日系社会だけでなくブラジルの多様性やポルトガル語や、役に立たないと思うようなものでもすべて学んできてほしい。細かいことであっても文化の違いを体験してきてほしい。また、学校の一日の過ごし方や学習内容についての情報を得ると帰国後に役立つと思われる。

5 子どもたちのおかれた状況

ブラジルで日本語を学ぶ子どもや日系の子どもたちの状況はさまざま。デカセギによって、継続的に学習できない子どもたちが、日本にもブラジルにも多くいることが問題。子どもの学習や言語能力の発達上、移動の繰り返しは大きな問題であることを当事者や支援者に広く知らせる必要がある。

以 上

平成 21 年度「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業（文部科学省）
【青年海外協力隊等派遣教員の支援】
日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成
(MEXT International Cooperation)

ブラジル人児童生徒の教育活動 — ブラジル本国での活動経験をもとに —

第 1 回研究会 2009. 08. 26 記録
愛知県立大学 長久手キャンパス

平成 21 年度「国際協カイニシアティブ」教育協力拠点形成事業（文部科学省）

【青年海外協力隊等派遣教員の支援】

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成

第 1 回研究会 2009. 08. 26 記録

ブラジル人児童生徒の教育活動 ーブラジル本国での活動経験をもとにー

ごあいさつ

愛知県立大学では「日系社会青年ボランティア『現職教員特別参加制度』活動支援のための教育協力システムの形成」というテーマで、平成21年度に事業活動をおこないました。日系ブラジル人児童・生徒に対する教育支援・教材開発と、日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成を目指すもので、この小冊子は、その活動の一環としての研究会の記録です。

この会の講師は、2004-2007年の間に日系の日本語学校または日系移住地にある学校の日本語クラスの教員として、ブラジル、パラグアイ、ボリビアで活動された経験をお持ちの方々です。また、現在は、それぞれが日本国内で地方自治体や教育委員会での語学相談員など外国籍の子供たちの支援に関わる仕事についていらっしゃいます。

さまざまな経験談・体験談・失敗談や学び、いまだに理解できない納得できないこと、また、現職派遣教員ボランティアの先生方に期待すること、子どもたちの支援のこれからなどについて、座談会形式で4時間にわたり熱い議論が交わされました。

この記録を、日本で外国人の子どもたちの教育支援に関わる方々や、これから現職教員派遣制度でボランティア隊員として出発しようとしている方々、また現職教員を派遣する教育委員会やそれを受け入れるブラジルの学校関係者など、多くのみなさんに読んでいただき、移動せざるを得ない子どもたちの現状を共有し、新しく始まった「日系社会青年ボランティア現職派遣制度」の持つ意味について考えていただければ幸いです。

2010年 3 月 3 日

活動実施代表者 東 弘子
(愛知県立大学外国語学部)

なお、本小冊子は、平成 21 年度「国際協カイニシアティブ」教育協力拠点形成事業（文部科学省）（MEXT International Cooperation）の経費により作成された成果です。

開催日時： 2009年8月26日（水）13:00～17:00

開催場所： 愛知県立大学長久手キャンパス 外国語学部国際関係学科共同研究室(E302)
(愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3)

タイトル： ブラジル人児童生徒の教育活動 ―ブラジル本国での活動経験をもとに―

講師：

川上 貴美恵 [西尾市中野郷保育園 外国人児童コーディネーター]
渡邊 あづさ [愛知県教育委員会 西三河教育事務所 語学相談員]
久保 真希子 [愛知県教育委員会 東三河教育事務所 語学相談員]
今井 さや香 [知立市教育委員会 早期適応教室指導員]
青木 由香 [富山県高岡市外国人児童生徒指導講師]
三澤 由佳子 [(財)海外日系人協会、非常勤講師]

参加者（活動実施者）：

松本 一子 [愛知教育大学・愛知淑徳大学非常勤講師 愛知県教育委員会「外国人児童生徒講座」講師]
加藤 史朗 [愛知県立大学外国語学部教授・地域連携センター長]
東 弘子 [愛知県立大学外国語学部准教授]

※講師の日本語教師派遣経験は下記の通り

川上：日系社会青年ボランティア（以下「日青ボ」）21回生（2005～2007年）
ブラジル サンパウロ州マリリア市
渡邊：単身ボランティア（1998～2000年）ボリビア
久保：日青ボ21回生（2005～2007年）パラグアイ
今井：日青ボ21回生（2005～2007年）ブラジルサンパウロ州コロニアピニャール移住地
青木：日青ボ21回生（2005～2007年）ブラジル パラナ州マウアダセーハ市
三澤：日青ボ19回生（2004～2006年）ブラジル南マットグロッソ州

※この研究会は、派遣ボランティアの活動の参考になる情報を得る、または今後の活動に生かせる話題提供を目的としており、あらかじめ講師の方々に次のような話題のポイントを示しておきました。

- a) ブラジルでの教育活動で役に立ったネタ(授業、リソース)
- b) ブラジルでの教育活動で困ったこととその解決方法
- c) ブラジルでの生活で困ったこととその解決方法
- d) 職場での人間関係等で戸惑った、困った、びっくりした具体的経験
- e) 日本で指導をするために、ブラジルにいる間に入手しておくべき情報、モノなど
- f) 今日本にいる人たちに伝える情報として、現職派遣教員から聞きたいこと

研 究 会 記 録

東：今回の研究会には、日系の日本語学校または日系移住地にある学校の日本語クラスの教員として、ブラジル、パラグアイ、ボリビアで活動された経験をお持ちの方々に集まっていただきました。

今、現職派遣でブラジルに行っている先生方は、現地や仕事に慣れることはもちろん、どこに問題があるのかを見つけるまでにも時間がかかると思います。この事業では最初のステップとして、問題解決が少しでもスムーズにできるように、また悩みなどを共有できるよう情報提供していくことを目指しています。

まずは自己紹介を兼ねてお一人ずつ、皆様のご経験をお聞かせいただければと思います。では最初に川上さん、よろしくお願いします。

日本には日本の、ブラジルにはブラジルの「やり方」がある

川上：西尾市から参りました川上と申します。私は日系社会青年ボランティアの21回生として、2005年から2007年までの間、ブラジルのサンパウロ州マリリア市で活動していました。

現地での生活は今振り返ってみると、良かった、楽しかったという思いばかりですが、一つ現地で困った事で印象に残った出来事があります。

ブラジルの場合、アパートの床はブロックの上に塗装のようなコンクリートが敷いてあり、その上にタイルが置いてあるような形です。ある朝、原因は不明なのですが、それが突然ポルターガイストみたいにポコッ、ポコポコポコッと割れたんです。すごく怖くて（笑）取りあえず現地で頼っている人に連絡したら、「その部屋の持ち主が行くからその人に状況を話さない」と言われました。私の部屋の大家さんはおじいちゃんとおばあちゃんが多分兄弟だと思うのですが3、4人でやってきました。

頼っている人が仕事で来られなかったため、彼らの話に全然ついていけないまま、分かる範囲で答えていたら、いつの間にか「あなたが変なことをしたから割れたのだろう」ということになってしまったんです。結局後々、その大家さん方と頼れる人とで話し合っていて、日系人協会が弁償してくださることになったんですが…。日本では通常アパートの持ち主は保険に入っていると思うんですが、そこは全然なくて本当に口約束だったんです。

でも社会のシステム、ルールや話し方、交渉の仕方は国によって全然違うから、それが彼らにとっては当たり前なんですよね。非を認めたら私が100%悪いと。余計な事、分からない事に口を挟むとろくなことにならないなと思いました。日本には日本の、ブラジルにはブラジルのやり方があるということを理解して、何かあったといきに相談できる人、頼れる人をきちんと確保することがすごく大切だと感じました。

東：相談できる人というのは？

川上：基本的には、受け入れ団体です。その中で生活全般について相談できる人を確保することですね。

古き良き「日本人らしさ」を求められて…

川上：もう1つ戸惑ったことは、日系人のイメージする「日本人らしさ」を求められると

ということです。ブラジルで暮らしているおじいちゃん、おばあちゃんの抱いている日本のイメージは、今の日本の実態とは懸け離れていますから、「日本人なのに、そんなことするの？ 日本って変わったんだね」と言われたりします。髪形や服装も含めて。「先生、日本人なのにフォーク使えるんだ」と言われたこともあります。

私が派遣されていたのは日系人協会付きの学校だったので、おじいちゃん、おばあちゃんたちの影響力が強いんですね。ですから、**学校の中では、今まで自分でも感じたことがないぐらい日本人らしさを出して、学校から一步出たら、ブラジル社会にある程度適応することも大切なので、ブラジル式の生活を送って**というように、2つの顔を使い分けて生活していました。

ボランティアとしての学校・協会での立場

川上：教育現場で最後まで難しく感じたのは、私の立場の問題です。学校の中での立場、協会での立場。私と一緒に活動する地元の先生にいろいろアイデアを提案しても、2年で帰る私の意見はなかなか聞いてくれません。

私たちはやはり張り切って行くわけですから、いろいろやりたいんですよ。でも、それをぶつけるだけでは駄目なので、授業の中に1つだけ何か違うことを入れて、「試させていただけませんか」というような感じで続けていきました。最終的には「あれ、よかったよね」と言われたこともあったんですが。一緒に動く現場の先生に、ビジネスパートナーとしてちゃんと信頼してもらうまでの道のりが大変でした。

もちろん、受け入れ側として慣れている方もいると思うのですが、そうではない方は戸惑われるようです。新しいことを言うと、「今まで何十年もこれでやってきたんだから、そんなのは無理だよ」と。どこに行っても同じだと思いますが、その辺りが大変だったように思います。

現地派遣ボランティアから生の声を届けてほしい

川上：今、日本にいる人に伝える情報として現職派遣教員から聞きたいことは、教育とお金について、学校のルールの違い、家庭での子どもの過ごし方についてです。

今はたくさんの情報がありますし、本やインターネットでも調べられますが、一人一人の現職教員の方が、**それぞれ直接「足を運んで聞くこと」が大切だ**と思います。そのほうがその人の今後の活動、戻ってきてからの仕事にも生きるだろうし、直接肌で感じたことや、自分の頭で考えたことはすごく印象に残ります。そうやって得た現地の生の声をこちらにも届けていただきたいと思います。

東：川上さんは、西尾市中野郷保育園の外国人児童コーディネーターですので、その立場が最後の話につながっていると思います。今回集まっていた皆さんは、JOCVのOB・OGということだけではなく、現在、子どもたちとかかわってる人たちですので、そういった視点からの発言も出てくると思います。

では引き続き渡邊あづささん。現在、西三河教育事務所の語学相談員をなさっています。

学習意欲の低さが授業運営の難しさに

渡邊：私はブラジルではなく、ボリビアの日本人移住地にある小中学校一貫の学校で2年間働いていました。派遣元は JICA ではなく、全くの単身です。

私が対象としていたのは非日系の子、または日本語を母語としないボリビアの子です。日本語の授業が他教科と同じように時間割に組み込まれていますので、学びたくて学びにきている訳ではなく、そういう意味ではどうしてもモチベーションが低くなります。授業時間は 90 分間あるので、私は低学年クラスを1つ、高学年クラスを1つ、計2クラスを受け持っていました。特に低学年の子たちの授業運営が難しく感じました。

周りには JICA の方、シニアの方、青年ボランティアの方もいらしたのですが、その人たちは日系人を対象にしていたので、日本語を母語としない子ども対象の教授法については相談しにくかったわけです。また教師の指導方針や方法にもばらつきがあり、個々で自分がいいと思うことをやっているの、学校としての共通性、一貫性もあまりなかったと思います。

東：クラスサイズはどれぐらいですか。

渡邊：1年生から5年生までが低学年クラス、6年生から8年生までが高学年クラスの複式で、それぞれ15人以上20人未満です。小中学校は1年生から8年生まであり、その8年間で日本の小学校6年間分を学びます。

川上：低学年も90分授業ですか。間に休憩もなく？

渡邊：そうです。低学年は90分も集中力がもたないので、私が授業の中で休憩をつくるしかないですね。教育活動のネタも、どちらかというと、遊び中心のものが多かったんです。日系人の子たちが日本語の授業を受けている間、それに出不来な子たちを集めてという感じです。日本語学習に多少興味のある子も中にはいましたが…。もともと移住地の子のために作った学校に、ボリビア人の子もたくさん通うようになったため、ボリビア人の子と日系人の子の関係、家庭環境なども教室運営にも大きく影響していました。

松本：成績をつけなくてもよかったんですか？日本にあるブラジル人学校でも、日本語以外は進級対象のテストがあって成績がつくんですが、日本語の授業だけは、テストがあったとしても、それは進級の対象とならないし、成績がつかないところが多いんです。テストで何点とらないと進級できないというところから外されているので、子どもたちの学習意欲に差が出ます。

それでは動機づけが弱いし、よくないんじゃないかと、私も校長先生に言ったことがあります。進級の評価に結び付けたテストをするようになってきているところもありますが、担当教員がよく変わったりするので、なかなか子どもの力を伸ばすところまで行かないというのが実情です。ボリビアの場合、日本語の授業はどうだったんですか。

渡邊：一応通知簿は出します。

松本：それは進級の対象になっていますか？

渡邊：分かりません。今、気がついたんですが、ブラジルは留年がありますよね？ その学校だけかもしれませんが、日系人の子もボリビアの子も留年したという話を聞いたことがありませんでした。日本語うんぬんというより、その学校は留年がなかったようです。もちろん日本語の成績が悪くて留年ということもありますでした。

松本：ひょっとしたら、子どもたちもその辺のことを知っていて、別に評価につながらないから、楽しみましょうというような。日本語の授業が、渡邊さんが行く前から、どちらかというと、お楽しみの時間と位置づけられていたので、先生がかかわったからといって、子どもたちの意識がパッと変わるわけもなく、そういうものを要求していたのかもしれないね。

日本への出稼ぎ予備軍？

渡邊：日系人の子たちの授業は、日本の国語の教科書を使って、日本語で行われます。家庭では日本語で話している子が圧倒的に多いですが、日系人だから日本語を覚えなければならないと考えるか、これからボリビアで生活していくのだからスペイン語をメインにと考えるかは家庭によります。結果、ダブルリミテッドの子もいたのではないかと思います。学校では国語の教科書を使って勉強しても、この日本語はどこで役に立つんだろう？と考えると、出稼ぎに行くためかと。この「日本への出稼ぎ予備軍をつくっているだけか」「日本に行くのか、ボリビアで生きていくのか」というのは実際にあった会話です。あと、親のニーズと子のニーズが違う。恐らく皆さんがいらしたところも同じだと思います。

青木：ボリビアの別の移住地に行ったことがありますが、ブラジル以上に日系のコミュニティを大切にしているようです。一緒に行ったブラジル在住の人は「ブラジルの日系人社会も今はブラジル化が進んでしまったが、何十年か前はこんな感じだった」とおっしゃっていました。

渡邊：移住地に住んでいる人は、自分たちは日本人だという意識が強いと思います。移住地は「陸の孤島」というか、やはり濃いですよね。恐らく、ボリビア社会に入っていくと考える方は移住地を出ていったと思うんです。私が行った時点でも、村にはボリビア人と結婚した夫婦はそこに住めないみたいな雰囲気があったぐらいです。

日系人同士の結婚で守ってきた村に、今ではボリビア人家庭もたくさん入ってくるようになったわけです。ですから、日系人とボリビア人が互いにもつ民族の自負というか、そういうことを感じる場面が多くありました。

そこで見たもの、感じたものが絶対に後で生きてくる

渡邊：最近、受け入れ側で「日本から来る人たちは頭でっかちで使えない」という印象を

持たれる方もいるそうです。先ほど川上さんもおっしゃっていましたが、**使命感を持って行った方が、そこでぶつかってしまって、リタイアされることも実際にあります。**シニアの先生は「村の中のことを変えようとしてはいけないよ。自分が学びに来たと思わないといけない。この村は遅れているとか、やり方が悪いとか言って、変えようと思っ

ては駄目ですから」とおっしゃっていました。
現地にいる間に学んでほしいものは、指導法うんぬんというより、**そこで見たもの、感じたもの。目の前にいる児童生徒にどう向き合っていくかという姿勢や、困難をどう乗り越えていくかという戦略的なもの、そういうものすべてが絶対に後々生きてくると思います。**

東：具体的に渡邊さん自身が現地で感じたことは何かありますか？

渡邊：実は、教室の中でもかなりつらかったんです。それまで子どもを相手にしたことがありませんでしたし、特に低学年は私には扱いきれなかったというか。私がボリビアに行ってよかったと思ったことは、教授法を学んだことでも、日本語の教え方を学んだことでもなく、**失敗してどろどろに落ち込んだときにどう乗り越えるか**というような。(笑)それが今も生きています。

日本でブラジル人保護者やその子弟を通してブラジルという国に対して抱いていたイメージはあるかもしれませんが、**実際にブラジルに行かれて、日本にいたときには感じられなかったことを感じていただけたらいいな**と思います。日系人の中にも多様性があることや、なぜ日本に来ることになったかとか、そういう生々しいものをいっぱい見て感じてきてくださるといいと思います。そしてその生の声を私たちにフィードバックしてくれたらと思います。

あと、民族、越え難い壁というんですか、一度、ボリビア人の子を叱ったとき、「どうして私があなたを叱ってるかわかる？」と聞いたら、「ぼくがボリビア人で先生は日本人だからだ」という答えが返ってきました。ショッキングでした。私はそんなことを考えたことはありませんが、彼は完全にボリビア人と日本人でラインを引いている。大切なのは、そういう意識が存在することを受け止めることだと思います。もちろん人は皆同じですが、文化の違いや、どこか引っ掛かるものがあることを受け入れて、その上で認めることが大切かなと思います。**違いがあること、分かり合えない部分があることは決して悪いことではないことを、私は学校の子たちにきちんと伝えることができませんでしたが、受け入れ合う意識と姿勢の大切さを目の当たりにして学んだような感じがします。**

東：ボリビアで、かつ、日系人ではない子どもを相手にしたときの話だったので、皆さんの経験と違うところがあったかもしれませんが、とても興味深いお話でした。次は久保さん、お願いします。

久保：私は 21 回生で、2005 年から 2007 年までパラグアイの日本語学校にいました。本当にすぐそこがブラジルで、こっちがパラグアイという国境のまちです。日系ブラジル社会なんですけど、パラグアイの日系社会にも歩調を合わせないといけない日系ブラジル社会という難しさがあります。パラグアイとブラジルでは、移住の歴史も背景も

日本語力も違いますし、その課題も違うからです。

その学校は、ブラジルの中では普通だと思いますが、日本語力がすごく低くて、先生もいない。いても、すぐ辞める。子どもたちも別に日本語が必要でない。なぜ勉強するのが分からない。とにかく、先生たちの日本語力と日本文化力が全然ない地域です。授業は日本語、日本語、日本語文化という3コマ編成です。

教育観・価値観の違いに戸惑い

久保：日本文化の授業の中で季節の行事をやっていて、2月は節分、豆まきをします。農家なので大豆はすごくたくさんあります。日系のおじいさん、おばあさんに大豆を用意してもらえば、いい関係づくりにもなるからと思ってお願いしたんですが、いろいろ事情があって間に合わず、結局小さいあめを大量に用意して、年の数だけ食べることになったんです。でも、学校の経済状態も決して豊かではないのに、子どもたちにあめをあげてしまうのはどうかと思い、私1人が納得いかない状態でした。

もう1つ、スピーチコンテストが校内であったんですが、1位の賞品が携帯電話だったんです。「文房具ぐらいなら、まだ分かりますが、携帯電話は教育的ではないんじゃないですか」と言ったんですが、とにかく子どもたちのモチベーションを上げられるというだけで決まってしまいました。毎週フェーラという市をやって、みんなで料理を作って売った資金で学校を運営しているぐらいなのに、簡単に携帯電話を買ってしまうんです。教育的な価値観というか、物の価値観が違うなと思いました。

あと、物をもらい慣れをしているというか、寄付ももらい慣れているような感じがしました。パラグアイはブラジル以上に日本政府の援助を受けています。「世界の笑顔のために」プログラムだったかを申請してもらっていました。パラグアイは戦後の移住がほとんどなので、1世の方もまだまだ元気で、結構日本のものがあります。でも私のいた学校はブラジルの日系社会で、物が乏しいので、たくさん要求を出して、鍵盤ハーモニカとか、茶道のセットとか、習字道具とか、申し訳ないぐらいどっさりいただけです。でも、もらうことに慣れすぎているからか、お礼を書く前になくしてしまうというふうに、物を大事にするという意識がすごく薄いです。現地の先生も、なぜこれが欲しいかをよく考えていないところがあったように思います。それには引っかけました。

東：先生も子どももみんながもらい慣れているわけですね。

久保：道にキラキラペンが落ちていたら、「誰が落としたのかな？」ではなく、「やった！もらおう」と。(笑)落ちていたらもらっていい、もらえるものはどんどんくださいという感じです。

今井：一回落とした物は人の物というところがありますよね。「落とした物は誰のものでもない」みたいな。そんな言い回しがあったと思います。

川上：日本なら、結構大きな問題になりますよね。教室の中なら特に。学級会になりますよね。

今井：ブラジルでもそういうことがありました。日本語学校に来ている子が「色鉛筆を教室に広げて置いていたらなくなった」「どんどん本数が減ってく」と言っていたことがあります。「名前をちゃんと書いて、自分で管理しておかないと駄目だよ。机の上に広げたまま席を立ったら、なくなっちゃうよ。ちゃんと自分で管理しなきゃ」といわれているのを聞いて驚きました。

東：それは持っていったほうは悪くなくて、管理しなかったほうが悪いことになる？

久保：逆に、日本の教室で物がなくなったとき、先生が「名前、書いてた？」と問いただした後、「誰々ちゃんの何々がなくなりました」と学級会をやっているのを見て、日本ではこんなふうに物の管理を大事に教えていたなとびっくりしました。

青木：日本では、算数セットの数え棒など、小さな物にも名前をシールで付けますが、ブラジルでは絶対にあり得ません。日本は管理もきっちりしていますね。しているからこそ、なくなったときにもワーストと問題になる。ブラジルは管理が甘いし、大ざっぱですね。

松本：それは学校の中だけの問題ではありません。ある日系人の先生が、ブラジルから日本に来て話をしてくださったときに、「ブラジルでは、スーパーでバナナ1本ぐらいとっても、別に泥棒ではないというのがあるから、日本の広々としたスーパーだったら、1個ぐらいいいと思ってとってしまう」とおっしゃっていました。

久保：中国の方も言っていました。中国の子と一緒に歩いているときに、お店のキムチを勝手に食べたんですよ。「中国ではいいんだよ」と言っていました。

渡邊：現職の方に個人的に期待するのは、さっきも言ったように指導法うんぬんではなく、そういうことを知ってもらうことですね。日本でそういう行動をとると、教育がないとか、しつけがなっていないとか、マイナスのイメージがつきますが、ブラジルではそうではないんです。でも、それは日本にいたら分からないですよ。恐らくブラジルに行ったときに実感できることだと思うんです。そういうことを感じてくだされば、すごくいいなと思います。

東：社会全体の価値観や大事にする順番、優先順位が違うんだという。

渡邊：日本のスタンダードがスタンダードではないですね。日本の学校文化も独特なところがありますし。久保さんが学校の様子を見て驚いたように、学校の中でびっくりすることがたくさんあると思うんです。日本の学校の中で生きてこられた先生方に、いろいろな現状を見てきていただくと、それだけでも全然違うと思います。

教材は「文明の利器」に頼らない方がいい

久保：日本語学校には日本語教育だけではなく、小学校的な機能や、日本文化の継承という部分もあります。私に足りなかったのは、その部分です。国境のまちなので、ブラ

ジル人はスペイン語を習いたいし、パラグアイ人はポルトガル語のほうが勉強したい。はっきり言って、日本語を勉強して、どんな得があるの？というような土壌です。英語やサッカー、ピアノ、そういうのを習いたいけど、田舎で何もないので、日本語学校でも行っておこうかといったノリです。

そんな感じでモチベーションは低いものの、文化活動は結構頑張ってやっていこうという流れがありましたので、原爆展とか、いろいろやりました。ただ、私は小学生を対象にした催しをするのに全然慣れていませんでしたが…。

原爆展をやったときは、DVD を上映したり、壁に張ったパネルを見てもらったり、折り鶴のワークショップをやったりしました。**現地の人は、原爆展のスタイル、やり方自体にびっくりされていました。もちろん中身もびっくりされたんですが。こういうのは地元では全然やらないようなので、そういうスキルもあったらいいと思います。**

あと、**文明の利器に頼らないほうがいい**ですね。停電や断水が多いので、コピーがとれなくなったり、絵の具を使おうと思っていても、水が出ないといったことが結構ありますから。昔の遊び、あるものだけでできる活動がいいと思います。

現地にある日本文化は、やはり折り紙、紙工作、ゲーム、鬼ごっこぐらいなので、そこにいかに新しい風を送り込むかが課題になると思います。小学校の先生はすごく得意だと思うんですが、そういうスキルがあったらいいと思います。

何にでも対応できるよう、柔軟な気持ちで

久保：日系社会のシニアの先生が現地の教師の養成をされます。そこに私たちも関わります。現地ですごく頑張っている先生とか、日本に研修にいらっしゃった先生が還元というか、日本でこういうことをやってきましたという形で講習会をされます。そういう場面で私たちがどう関わるか、どういう日本語力が必要なのか、どういうことが入っていて、どういうことが入っていないか、やはり行かないと分からないと思いますので、「これをやろう！」と思って行くのではなく、何にでも対応できるようにしたほうがいいと思います。

それから川上さんもおっしゃってましたが、日系人のおじいさん、おばあさんの集まりには顔を出したほうがいいと思います。さっきも言いましたが、私の学校では毎週1回、市があったので、お手伝いに行き、おしゃべりしたりしていました。顔を出しておかないと、学校での意見も通りにくいようですので、できるだけ出席したほうがいいと思います。

東：地理的にはパラグアイでも、日系ブラジル社会というところが難しいですね。パラグアイのほうが日本語のニーズがより高いんですか。

久保：残っているんです。パラグアイの日本語学校では、光村の国語教科書を使って授業をしています。ただ最近、世代が進んで日本語力が落ちてきたので、『みんなの日本語』¹や『ひろこさんのたのしいにほんご』²を導入しようかといった状態です。

¹ 日本の出版教材（スリーエーネットワーク）

² 日本の出版教材（凡人社）

東：世代交代で少しずつ実情が変わってきているようですね。どうもありがとうございます。では引き続き今井さん、お願いします。

今井：私はブラジルのサンパウロ州のコロニアピニャール移住地で、日系日本語学校教師として活動しました。活動期間は、2005年7月から2007年6月で、青木さんや川上さん、久保さんと同じです。ピニャールは戦後の移住地なので、比較的歴史が浅く45周年ぐらいです。農業は少しずつ2世、3世が中心となってきていますが、文教の会長さんも1世の方ですし、日本語がまだ生きている村です。村の中には、組合、日本語学校、公立のブラジル学校が点在しています。私はその日本語学校で働いていました。

日本語学校の先生は、現地の方が3人、私を入れて4人です。生徒は約35人です。通学している子どもは3世から4世、ほとんどが3世です。祖父母とは日本語を使う家庭もありますが、テレビも友達も、ブラジル学校でもポルトガル語、親御さんもポルトガル語が分かりますので、生活の中心はポルトガル語です。25歳～30歳の世代は、子どものころ、国語の教科書を使って漢字を覚えるという国語教育を受けていましたが、現在は家庭での言語がポルトガル語に変わってきたこともあり、外国語としての日本語教育になっています。学校では、日本語指導や、特別活動的な体育、音楽などの情操教育、学校行事があります。

また**日本文化の継承も重要な部分**で、例えば、ちゃんと挨拶をさせたり、ご飯を食べる前の「いただきます」や、子どもたち全員に週1回掃除をさせたり、上級生の子にはトイレ掃除をさせたりして、**日本的要素も取り入れました。ただ、全く日本と同じではありません**。整列や体操座りはしませんし、先生が全体に話をしているときに、子どもたちが口をはさんでも、「そうね、そうね」と対応しているのを見て、日本と違うと感じました。

目の前にいる子どもたちに合わせて教材を作っていく

今井：教材に関しては、私の任地では『こどものにほんご』³を使っていました。幼稚園、1年生、2年生、3年生、4年生、5年生、それから、8年生、その上が中級クラスというふうに、レベルに分けて単式の授業をしていたので、この教材を使うことが可能でした。現地の先生方は教材選択について結構迷っていますし、数年前までは先生によって指導の内容も違っていました。そのため同じ年数日本語学校に通っても、指導者によってレベルも、内容も全く違っていました。

そこで、今ではある程度一貫性を持たせたほうが良いということで、『こどものにほんご』を使って、卒業時に能力試験2級合格ぐらいのレベル到達を目標にすることになりました。『こどものにほんご』の教案も作り、あと問題数がすごく少なかったのも、先生方と協力して練習問題も作りました。

文字教材は、ひらがなは『きそにほんご』⁴の1を使っています。ひらがなの学習にあわせて、いくつか語彙も出てくるのですが、スプーンが「さじ」となっていたりと、

³ 日本の出版教材『こどものにほんご』子どもの日本語研究会（スリーエーネットワーク）

⁴ ブラジルの出版教材（ラボ日本語）「きそにほんご」は1～7がある。1はひらがな学習用、2から7までは、文字の学習と文型の積み上げが並行した教材となっている。

1 世の方が移住されたときの日本語が残っていることを感じる教材です。カタカナは日本の子ども向けの教材や『ひろこさんのたのしいにほんご1』⁵の「ひらがなカタカナかんじれんしゅうちょう」などを使っていました。漢字はAJALTの『かんじだいすき』⁶を使っていました。これらをコピーして子どもに使わせます。

日本の教材をそのまま持っていても、出てくる語彙が違ったりして使いにくいので、例えば豊橋の教育委員会が作られているような、外国籍の子ども向けに作られた教材なら、活用できるのではないかと思います。出てくる語彙も外国籍の子のために考えられていますし、文字探しとか、楽しさも含まれていていいですね。

現職教員の方がどこに行かれるかが分からないので、「これを持っていけば絶対にいいよ」という押し教材を挙げることはできません。学校のニーズや保護者のニーズによって変わってくるからです。私の行ったところは移住社会だったので、**まだ継承日本語的な要素があって、親御さんは日本のしつけや日本の文化を子どもに伝えることを求めています**が、中には塾的な要素、習い事の1つみたいな感じのところもあります。そういうところでは同じ教材が使えません。また、授業が単式か、複式かでも違ってきます。目の前にいる子どもの実態、ポケモンが好きならポケモン、ナルトが流行していれば、そのイラストを入れたりというふうに、**目の前にいる子どもたちが興味を持つように、その場その場で教材を作っていくことが大切です。**子どもたちは楽しくなければついてきません。

また学校の環境によって、例えば、黒板があるかどうか、黒板に磁石がつくかどうかによっても授業の様子が変わってくると思います。

もう1つ大切なことは、現地で引き続き発展させられる教材であることです。どれだけこちらからいいものを持っていても、いつときのもので終わってしまいますから。そういうことを考慮する必要があるかと思います。

それから、CD。横浜 JICA の研修のときに、効果音を集めたり、J-POP を集めたりして持っていきました。ワンワン、ニャーニャーといった擬音語を教えるときに「これ、何て聞こえる？」と使うのに効果的でした。音楽に興味がある子が多いし、授業にも行事にも使えて、すごく便利でした。

踊り、出し物などのアイデア、活動集も持っていったのですがこれも役に立ちました。運動会やお話発表会、学習発表会など、行事がたくさんあります。林間学校や地域のスポーツ的な活動も結構ありましたので、そういった行事で使える簡単なフォークダンス、盆踊りの振り、ソーラン節といった踊りや、**あまり道具がなくても楽しめるレクリエーション活動の参考になりました。**

私が行ったところは、コロニアピニャール地区のモデル校だったので、教材がそろっていて、逆に、その教材をいかに活用するかというほうが課題だったように思います。

現地の先生から学ぶことも多い

今井：日本語指導法に関してですが、現地の先生方は子どもたちに楽しんでもらおうと試

⁵ 日本の出版教材『ひろこさんのたのしいにほんご1』別冊の「ひろこさんのたのしいにほんご1 ひらがな・かたかな・かんじ れんしゅうちょう」根本牧ら（凡人社）

⁶ 日本の出版教材『かんじだいすき』1—6（国際日本語普及協会）

行錯誤しながら指導していらっしゃいますので、先生方から学ぶこともたくさんあります。私が行ったコロニアピニャールは聖南西地区と言われている、聖南西の「聖」はサンパウロのことなのですが、その南西地区の日本語学校 11 校が参加している「聖南西教育研究会」というのがあり、2 カ月に 1 回集まって勉強会をしたり、行事をやったり、年に 1 回泊まり込みの勉強会もしています。

その研究会では、JICA シニアのボランティアの先生がアイデア集を作っています。参加 11 校の先生たちの日ごろの指導の上での成功例をまとめたものです。例えば幼稚園でのレクリエーションや、上級生向けに役立つ教材、自動詞と他動詞のわかりやすい教え方などいろいろなアイデアが入っています。こういうアイデアは日本に帰ってきてからも使っていますので、そういう情報をもらってくるのもいいかと思います。

現地で入手できる日本語教材としては、ブラジル日本語センター⁷の『ひらがなひょう』⁸や『アソシエーションカード』、日本語能力試験の級に対応した漢字が練習できる『おぼえよう漢字』⁹。『おぼえよう漢字』は、語彙にポルトガル語の訳が付いて、漢字が練習できるスペースがあって、下に例文も入っています。こういう教材は日本でも使えるかなと思います。あと、アリアンサ・クルトゥーラもいろいろな教材を開発しています。例えば出稼ぎに行く成人向けに、簡単に基礎的な日本語をまとめたものがあります。全部アルファベット表記で平仮名が分からなくても、簡単な会話ができるようになることを目的とした教材です。

センターの勉強会が開かれるのは 1 月だったと思うんですが、いろいろなところにアンテナを張っておいて、実際に足を運び、使えそうな教材を持って帰ってきてほしいと思います。

東：ブラジル日本語センターとか、アリアンサ・クルトゥーラというのは、サンパウロ市内にあるんですか。

今井：はい。ブラジル日本語センターは、ブラジルでの日本語の普及を支援する非営利の日系団体で、日本語教育に関わる様々な支援活動をしています。日本語能力試験を受けたいとか。あと、子ども日本語テストというのもあって、レベル分けされています。ABC テストも行っています。

東：テストだけではなく、いろいろ教材をだしているようですので、今度のサンパウロ出張で買ってこうと考えています。¹⁰テストや教材は本屋さんに置いてあるんでしょうか？

⁷ ブラジル日本語センターの Web ページは <http://www.cblj.com.br/>

⁸ ブラジル日本語センター教材部編。「カタカナひょう」もある。

⁹ いずれもブラジル日本語センターにて入手可能。『おぼえようかんじ』は
Edição Original : Escola de Língua Japonesa de Castanhal (1998)

Edição Revista e Ampliada: Centro de Difusão da Língua Japonesa do Norte do Brasil (1999)
カスタンヤール日本語学校 (Escola de Língua Japonesa de Castanhal) という日本語学校が
作った教材を北伯日本語普及センターが出したもの。

¹⁰ 出張で購入した教材や書籍は巻末のリストの通りである。

今井：センターでなら、買うこともできます。JICA の一番最初の研修のときに回ってもらえますね。青年ボランティアは、現地での研修で紹介されます。

学校での一日の流れを把握すると、子どもの現状が見えてくる

今井：次にブラジルの学校に関する情報についてですが、学校での一日の流れ、子どもたちが一日をどのように過ごしているのかをつかんでおくと、子どもたちの現状が見えてきます。私も向こうに行ったらばかりのときに、文教の方に「日本に帰ってから役立てたいので、近くのブラジル学校の 1 年生に入れてください」とお願いして、1 年生・3 年生と一緒に授業を受けました。90 分間座って授業を受け、子どもや先生の様子を見せてもらえたことは、すごくいい経験だったと思っています。途中から自分の授業や活動が忙しくなったので、できなくなってしまいました。

ブラジルの学校は朝 7 時から授業が始まるので、遠くに住んでいる子は朝 5 時に起きて、7 時ぐらいにバスで学校に着きます。朝ご飯はコーヒーか牛乳だけの子どもが多いです。10 時ぐらいに簡単な給食が出ます。日本に来た子どもたちが朝ご飯を食べてこないのは、そういうことも関係があるのかなと私は思っています。おなかがいっぱいなら、持ってきたお菓子を食べてもいいんです。軽いものも売っていますし。

授業中も、トイレは自分が行きたいときに行きますし、何も言わないで立って、鉛筆を削りに行ったりします。ちょっと日本では考えられないんですが、授業を見てみると、それが当たり前なんだと分かってきます。むしろ、そうでないと 90 分間授業にずっと座っていられないのかもしれないかもしれません。

ご自分の活動やブラジルの公立学校が近くにあるかとかいうことも関係しますが、一日の流れ、授業の様子をできる限り見ておくと、日本に帰ってきたときに、子どもたちがどうしてこうなのかということが分かると思います。

また、それぞれの学年でどれくらいのことを勉強しているかというカリキュラム的なことも分かれば、来日した子たちの学習進度の目安になると思います。未修分野だから分からないのか、学んでいても分からないのか、指導のいい目安になりますので、そういう情報が欲しいなと思います。

東：ただ、ブラジルの場合、学校によって教材も違いますから、自分の経験がすべてではなく、いろいろあるということも含めて理解する必要もありますね。

今井：そうですね。ブラジルの学校形態と学習内容についての情報も欲しいです。朝 7 時から 12 時までの半日制で、その後日本語学校に行く子もいれば、帰宅する子もいるという形だったのが全日制になるという噂を聞いたので、そういうところの正確な情報も知りたいと思います。

日本とブラジルの情報交換を活発に

今井：それから何人かの方がおっしゃってましたが、ブラジルに帰国した子たちの日本語教育の現状、ブラジルでどう過ごしているか、実態はどうかを知りたいですね。あと、継承日本語がどんどん減っていき、塾化している日本語学校も多いですが、ブ

ラジルで「日本語を学ぶこと」の位置づけはどうなっているのかということ。北部はまだ日本企業がたくさんあるため、モチベーションが高いかもしれませんが、ほかの地域はどうか。個人的な興味もありますが、そういう現状も知りたいと思います。

そして日本とブラジルの教育現場でいろいろな情報交換ができればいいと思います。現職派遣教員の様々な声を聞くことで、相互理解を進めたいですね。

それから先ほど渡邊さんがおっしゃっていた「出稼ぎ予備軍」のお話、私も同じことを感じています。私たちは日本人として、日本語の先生として、日本を好きになってほしい、日本の文化を分かかってほしいと一生懸命です。子どもたちもそれに応えて日本を好きになってくれて、おじいちゃん、おばあちゃんから聞いた日本に自分たちも、と出稼ぎに行っても結局、碎けて帰ってくる人が多いですね。精神的に参って、うつ状態で帰ってくる子もいます。ですから、出稼ぎという方向だけではなく、JICAの日系人研修や日本語学校生徒研修など、ほかの方法で日本に行くルートをもっと充実させていけるといいと思います。日本語をきちんと勉強したから、これができるんだという意欲につながってくれるといいですね。

東：盛りだくさんなお話でしたが、いかがでしょうか。

川上：最後に言われた日本語研修の話ですが、インタビュー、面接、作文などで地方から選抜された子が集まって、サンパウロで最終選考があるんですが、今井さんの行っていたピニャールの子に、地方の子は絶対に勝てないんです。ブラジル人学校でもすごく優秀、日本語学校でもすごく優秀、家庭の教育も充実している子でも、選考に残るのは難しいですね。日本語の面接や何かで。

今井：ピニャールの子が1人、今、サンパウロに残ってますが、家庭で完璧に日本語を使っている唯一の家の子どもです。おじいちゃん、おばあちゃんから「家では日本語を使いなさい」とすごく厳しく言われているそうです。

川上：もう少し門戸が広がるといいと思います。地区で1人だけというふうでなく、もう少し広がると、子どもたちも希望が持てますので、モチベーションも上がりますよね。

三澤：すそ野をもう少し広げて欲しいですね。

東：その生徒研修の期間はどのくらいですか？

川上：約1カ月でしたか。日本語学校で3年以上日本語を学んでいる生徒対象だそうです。

今井：日本語学校で3年以上日本語を学んでいる生徒対象だそうです。日本語を一生懸命勉強してきたご褒美みたいな感じです。年齢制限があります。13歳～15歳の3年間しか受けられないんですが、毎年受け続けて、15歳ぐらいのときに通るか通らないか。13歳だと、地方の選抜で先生方に「まだ来年があるから」と15歳の生徒のほうが優先されやすいです。

川上：しかも日本語学校に何年以上かの学習歴があつて。

東：条件が厳しいんですね。

川上：条件が結構あって、出稼ぎ帰りで途中から日本語学校に入ってきたような子は外されます。そういう研修制度がもっと充実すると、子どもたちもすごくうれしいだろうなと思います。

日本から帰国した子どもたちにも配慮が必要

今井：ブラジルにいたときに、お父さんと一緒に 15 年ぐらい日本にいて日本の小学校を卒業して戻ってきた子どもが、私たちの学校に入れてほしいと来たんです。でも、私たちの学校ではまだ 3 年生の漢字をやっているような段階だったから、勉強が進んでいる隣の学校を勧めて、そっちに行ってもらったんです。ほかの先生方は、「日本から来たからすごくレベルが高いに違いない」と思っていたんですが、作文を書かせると助詞が抜けていたり、実はそんなでもなく、逆にブラジルの公立学校で苦労していると。

日本から戻ってきた子は飛び抜けて発音がいいので、お話発表会でも評価が高いんですが、現地の先生にしてみたら、ブラジルでずっと地道に積み上げてきた子を評価したいという気持ちが強いです。でも今、私が外国籍の子に関わるようになって分かったことですが、その子たちが日本にいたときに活躍していたかといったら、必ずしもそうではなかったはずです。それなのに、母国でも認められないのはとても気の毒なことです。日本から帰ってきた子たちが活躍できる場も作らないといけなかったんだと今、すごく反省しています。

久保：私が行っていたときも、御殿場からお父さん、お母さんと一緒に帰国した兄弟が来て、何とか日本語で会話ができたので、取りあえず日本語学校の一番上のクラスに入れたんです。周りの子は、「日本にいたから、全然違うんだろうな」と思っていたんですが、母語はポルトガル語だし、書くことも話すこともそれほどできないわけですね。子どもたちは「日本にいたのに、なぜそんなにできないの？」とモロに言うから、そういう時のケアもしてあげたほうが良かったのかなと思っています。

今井：そういう情報は、ブラジル日本語センターの研修会などの機会を使って、現地の先生たちにもっと流していかないといけないと思います。そうしないと、今、どんどん帰国している子たちが苦しむことになります。

東：日本語学校で体系的に積み上げてやっている子たちのほうが、作文するときに気をつけることが分かっているし、文字もちゃんと入っているのかもしれませんが。集住地区の国際教室で学習していた子たちはいいかもしれませんが、教室で座っていただけの子では無理でしょうね。

久保：日本語学校では、私たちのような日本語教師もいるので、文法も意識して教えます。一方で日本の学校で日本語を学んできた子たちは、文法から習っているわけではないから、ブラジルで文法を積み上げて勉強してきた子たちにはかなわないところがあると思うんです。

今井：ブラジルでは、漢字を使った熟語も時間をかけて、ゆっくり学びますよね。分からなかったら、辞書で調べてポルトガル語にしながら、無理のないスピードで学習します。でも日本の公立学校に突然4年生から転入すると、取りあえず1年生の漢字だけは初級のクラスで教えてもらえても、2年生・3年生の漢字がボンと抜けていることもあります。突然難しいところに入り、モチベーションが急に下がる子も多いです。

渡邊：すべてにおいて学習が継続的でないことが致命的ですね。日本から帰った子はポルトガル語は足りないし、日本から来たという割に日本語もできないし、思考力というんですか、概念をつかんだり、思考する訓練がされていない。いろいろなことが細切れで来てしまっていることは本当に問題だと思います。

東：日本の帰国子女でも同じですね。英語圏に行っていた子は「英語ができるから、いいね」と言われますが、学習が継続的でないことや、行き来を繰り返すことによる精神面での問題を抱えている場合もありますね。帰国子女の教育に携わる方が「日系ブラジル人の子たちと状況は同じだ」と言っていましたね。経済的には彼らより恵まれているかもしれませんが、そういう点は一緒だそうです。さて、では次は青木さん、お願いします。

文化継承やマナー教育も求められる中で、一芸あれば、なお良し

青木：集住地区ではなく、分散地区の富山から参りました青木と申します。私も2005年から2007年までブラジルのパラナ州の日本語学校におりました。

日系日本語学校では、日本語教育だけではなく、文化の継承やしつけの部分もすごく求められます。日系のイベントに向けて準備したり、日本語の授業の中で日本文化に関する活動をしたりといったことがとても多いので、そういうネタを持っていくといいかなと思います。小学校の先生は、既にいろんな知識や技術を身につけていらっしゃると思いますので、そんなに準備していく必要はないかもしれませんが、一芸があればなお良しといえますか。

私の場合は全く芸がなかったもので、例えばよさこいソーランなんかをボランティア仲間に教えてもらいました。ただ、すぐに身につけられるものでもないもので、ビデオに撮って共有して、ブラジルに行ってからそれを見ながら練習して、「日本ではこういうのが流行っていますから」と言って教えると。これという芸のない方は、現地で流行しているものや受けそうなもの、もしくは、いま日本で流行っているものをいろいろ集めていて、付け焼き刃かもしれませんが、それを披露する形がいいかと思います。

超複式クラスで役立った「きそにほんご」とアクティビティー・タスク集

青木：日本語教育に関してですが、私の行った学校はすごく小さい学校でしたから、そんなに教材が揃ってないのですが、日本から持っていった教材をそのまま使えるシチュエーションはほとんどありませんでした。先ほど今井さんが見せてくださった『きそにほんご』をずっと使っていて、これから離れられませんでした。子どもたちにとってもステータスというか、「僕は5まで来た」とか、それがうれしいみたいにな

っていました。現地の先生にとっても、日本から持っていった教材は使いづらかったみたいです。

というのは、複式の中でも、超複式といってもいいぐらい、一人一人が全然バラバラのことをやっているクラスだったからだと思います。日本で作られた日本語の教材は、一斉授業を前提にしているのが多いようです。でも超複式クラスだと、とにかく書かせて、丸つけをしてあげて、アドバイスをするという形式にならざるを得ないので、『きそにほんご』はそんなブラジルの実情に大変フィットします。最初は魅力がないように思ったんですが、結局、私がいた間もこれを使って、日本から持っていった教材はトピック的に使う程度でした。

日本から持っていったよかったのは、日本語のアクティビティー、タスク集です。例えば、日本語を使ったゲームや、この文型を定着させるためには、こんなアクティビティーがあるよというような活動集がたくさんあると思います。そういうのは結構役に立ちました。あと、絵カード。前任者が用意していた公文の絵カードをかなり使いました。

先ほど今井さんからお話のあったブラジル日本語センターの『アソシエーションカード』、ポルトガル語の単語の絵と日本のひらがな・カタカナの音を結びつけたカードですが、これをよく使っていました。子どもたちはポルトガル語の語彙は豊富ですから、その力を利用してイメージで記憶するので、ずっと頭に入りやすいようです。これは今、日本に戻ってからも、ブラジル人の日本語指導に利用しています。とても役に立っています。

大人の、大体会話ができる生徒さんに対しては、漢字がやりたいとか、敬語がやりたいとか、能力試験を受けてみたいという人が多かったので、それに対応した漢字のテキストや能力試験対策問題集を使っていました。「こういう場面ではどう言いますか」みたいなロールプレイのたくさん入った教科書がありますよね？ああいうのも割と役に立ちます。子どもには全然使いませんでした。

頭でっかちにならず、「人間関係」づくりから～地域と地域を結ぶ役割

青木：私のいたところはいわゆる日系人会の日本語学校なので、現職教員の方が行かれるような私立の小学校、中学校とは少し違うかもしれませんが、いくつか現地で感じた問題点をお話したいと思います。

1つ目は、先ほど久保さんもおっしゃったことですが、教師のなり手がいないこと。原因は現地に教師として教えられる程度の日本語力を持っている人がいないこと。それと資金ですね。経営的に苦しく、先生にお給料がたくさん出せないんです。それから人間関係です。日系人会がやっている日本語学校は田舎にあることが多く、小さな村社会で、人間関係がドロドロなんです。「あの人が目を光らせているから、私は無理」とか、「あそこの家の子どもが反抗してくるから、私はやりたくない」とか、人間関係が原因で教師になりたくない、なれないと言う人が多いです。辞めていく人が多いのに、次の人がいないので、すごく頭を悩ませました。

2つ目、学校の運営システム自体に問題があると思います。これも人間関係と切り離せません。保護者からの月謝がそのままお給料になる運営システムですので、教師が父兄の使用人、下僕みたいになってしまいます。だからこそ、教師をやりたいがらない人が続出するんです。教師と保護者がいい関係のときはすごくいいんですが、それ

がいったんこじれると、どうしようもないんです。

3つ目、クラス編成の問題。先ほど申しましたように超複式のクラスですので、せめて普通の複式ぐらいにできないものかと画策したこともありましたが、それぞれのご家族の事情をのみ込まざるを得ないので、難しかったですね。日系日本語学校は塾的な扱いで、優先順位が2番目・3番目ですから、どうしようもないんです。例えば、私のいた学校の場合はとても田舎で、子どもが歩いて通えなかったもので、迎えに来たり、送ったりする親御さんの都合を優先せざるを得ません。結果、超複式ということなんです。

4つ目、カリキュラムの問題。カリキュラムははっきり言って、ないんです。ただひたすら『きそにほんご』を進めていくというような、目標がどこにあるのかも分からないような状態です。先生も続かないので、先生の教育も含めて、カリキュラムが立たないのです。非常に難しい問題です。

結局、すべての問題は人間関係に集約されるかなと私は思っています。例えば、一斉授業にしなければとか、こういうカリキュラムを立てなければとか、いろいろ思っていました。でも、**頭でっかちになっても駄目で、その地域の実情に合ったやり方を探っていくしかありません。**私も会議で正論を言ったこともありましたが。みんなも聞いてはくれますが、何も動くわけではなく、それで終了です。

結局、日系のイベントに地道に出て、「最近の日本語学校はどうか？」みたいな感じで、おじさんやおばさんたちと時にはお酒を酌み交わしながら話していくことから始まると思います。地道に話していくうちに、「そうなのよね、こうしなきゃ駄目だよ」と周りが言ってくれたりして少しずつ動く。駄目押しで「近隣地域の日本語学校を見に行きましょうよ」と誘うと、それに触発されて動いてくれる。私の地域ではこういう経緯をたどりました。正論を押し付けたり、上からポンと言うのではなく、周りの人たちの意識を高めるような活動を地道にしていくのが一番かなと思います。

今、近隣の学校を見学しに行った話をしましたが、近隣地域との連携はすごく重要なファクターだったと思います。今井さんが行かれた聖南西地区のように、既にかちりと地域の連携がとれているところもありますが、私の地区の場合は、あまり地域の連携がなかったんです。かつてはあったようですが、それがすたれてしまっていました。でも身近な隣町のお兄さん、お姉さんが上手に日本語を話したり、和太鼓が上手だったりする姿を見ると、子どもたちのモチベーションが上がります。また、保護者や地域の上の人たち、役員の人たちも、ほかの学校を見ることで、自分たちの日本語学校を何とかしようと意識が上がります。やはり地域との関係を密接に結ぶことが大切なんです。**私たちは人間関係に縛られず自由に動けますから、その辺を取り持てあげるといいですか、それが日本から来たお客様(?)、私たちにできることだったのかなと振り返っています。**

ブラジルにいる間におきたいこと～非日系の文化も体験するとい

青木：私も今井さんと同じでブラジルの公立学校に体験入学しました。日系社会だけにいると分からないことがたくさんあるからです。これからブラジルへ行かれる先生方にも日系ではない公立学校のようなところにも足を運んで、いろんな体験をしてきてほしいと思います。ブラジルの日系社会は、ボリビアほどではないかもしれませんが特殊な空間なので、

そこだけにいると、今、日本に来ているブラジル人の子どもたちのありようは分からないと思います。日系のコミュニティ以外で育った日系人の人たちも今、日本にすごく多いからです。日系のコミュニティで育った子は少し独特なので、それを想定して日本でブラジル人の子どもたちの受け入れを考えると、ギャップがあると思います。日系のコミュニティの外に出て、公立学校などの体験授業や、文化や子どもたちの様子を見たりしてもらえると、すごくいいと思います。

また、ぜひポルトガル語を習得してほしいと思います。日系社会の中なら、ポルトガル語を使わなくても、ある程度の生活ができますし、私たち日系日本語学校教師にはポルトガル語を話すことを求められません。むしろ、ポルトガル語ができないほうがいい。例えば「由香先生にはポルトガル語が通じないから、日本語でしゃべらなければいけない。だから、日本語を頑張って勉強しよう」といった動機づけに使われたりして、日本語でしか会話できないことを求められます。でも、それに甘んじて生活していると、本当にポルトガル語を覚えなくても済んでしまいます。日常の買い物で使う程度はできますが、大した会話ができないままです。でも、日本に来ているブラジル人の子どもたちに対応するには、やはりポルトガル語がある程度できたほうがいいんですよ。公立学校に行くことも1つの手ですが、**日系社会の中だけにいるのではなく、どんどん外に出て、ポルトガル語を習得したり、非日系の文化も体験したりしてほしい**のです。日本に帰ってきてから、すごく役立つと思います。

もう1つ、ブラジルの公立学校や日本語学校で使っているテキストや教材を持ち帰るといいと思います。これは私がいただいてきた教科書です。先ほど話に出てきました、使い回しの汚いのをもらってきました。よく割り算の仕方がどうか話題になっていますが、この中に具体的に載っていますから、今でもときどき見ます。割と役に立つと思います。あと、ブラジルのほうで開発されている日本語の教材や教具も。中には日本でも役立つものがあるはずですよ。私が帰ってきた後でもいろいろ開発されていると思いますので、新しい教材を見てきてほしいと思います。

それから今、日本からブラジルに帰る人がたくさんいます。よく日本の学校の先生方から「どんどん帰っていくけど、向こうはどうなの？ブラジルには仕事があるの？子どもたちはどうなっているの？」と聞かれますが、「こうらしいですよ」みたいな、出どころの**不確かなうわさ話しか分からないので、ぜひリアルタイムの情報が欲しい**です。

東：今回のプロジェクトでは情報共有の一環として、ブログも立ち上げていますが、現職の先生たちにも参加してもらおう予定です。例えば「出稼ぎ帰りの人々について」のようなカテゴリを作って、そこに投稿してもらえば、その時点での状況が分かりますよね。そういうのを上手にやるといいかもしれません。日本でも使えるような新しい教材の情報も含めて、今日出た話の中からカテゴリを考えたいと思います。では最後になりましたが、三澤さん。お願いします。

三澤：私は、皆さんより1年半早く行っていて、サンパウロ州の隣、南マットグロッソ州の州都にいました。ボリビアとパラグアイと国境を接している州です。もともと沖縄からの移住の方が90%、現在でも70%ぐらいが沖縄の方なので、日本語よりもウチナーグチ、沖縄の方言とポルトガル語ができる人が多かった環境です。州都の周辺に移住地が幾つかあって、現在、その移住地の1つにモデル校があります。

私が行った時点で、船の中で生まれた人をもし2世と数えるのなら、6世の子が生まれたぐらいなので、日本語はほとんど残っていません。2世代、3世は「日本語なんて」とばかにするようなシーンもあったようですが、自分たちが大人になって、日本文化や日本語の良さを改めて認識して、子どもたちを日本語学校に送り込んでいるようです。当然、子どもたちのモチベーションは低いので、渡邊さんのところに近い状況です。日系人といっても、ほとんどブラジル化している子どもたちが多い状況です。中には非日系の子たちもいましたが、むしろその子たちのほうがモチベーションが高く、能力も伸びていくことが多かったようです。

小さな字を書くブラジルの子どもたち

三澤：教材に関しては出尽くしたと思いますので、活動中での問題点についてお話ししたいと思います。先程、**私たちが間に入って連携のためのパイプ役になる**と青木さんがおっしゃいましたが、まさにそういう状況で、若い先生から年配の先生にはなかなか意見がいろいろなどということがありました。若い先生たちが日本に研修に来て学んだことをなかなか実践に取り入れにくい状況でもありました。地域の研修会はありましたが、若い先生たち個々の連携はなかなかありませんでした。

そこで私たちは**若い人たちの横のつながりをつくれば、また変わっていくかな**と考え、そのように取り組みました。実際に今も連絡をとり合ってくれているようで、情報交換も可能になっています。派遣される場所によって違うと思いますが、年配の先生と若い先生の板挟みになる可能性もありますので、そこはニュートラルに。「これをしなければ」と思って行くと、気持ち的に苦しくなることがあるかもしれません。

子どもたちに関しては、多分どこでもそうだと思いますが、練習が嫌いで、ダラダラです。例えばよさこいソーランでも、勉強でも、**練習のときは「嫌だなあ」とダラダラですが、本番は「かっこつけマン」というか、見栄っ張りでもあるので、ピンッとやります。そういうところを分かってあげて、うまく乗せてあげる**といいと思います。

あと、ブラジルでは字を小さく書くように教えられているらしく、日本語を練習するとき、大きなスペースがあっても、字をすごく小さく書きます。それを大きく書けるように教えてあげてほしいと思います。

絵もそうです。「夏休みにあったことを描いてごらん」とA4の大きな紙を渡しても、チョコチョコと。美術の時間もないので、描き方が分からないようです。

東：絵を描くことも日本語学校でやるんですか。

三澤：そうです。もしかしたら、そういうクラスを持つ可能性もありますよね。日本語クラスを手伝う中でも、そういうのがあるかもしれません。本当に簡単な絵の描き方でいいので、例えば、「紙に大きく丸を描いてごらん」。それをきっかけに、「じゃ、ここに付けたら、何になる？」とか。そういうのを覚えていかれると、次のステップに進みやすいかなと思います。

加藤：小さく字を書くのはなぜでしょうね。

三澤：学校でそうやって教わるらしいんです。行間があまり大きくないから、小さく書か

せるのかなと最初は思ったんですが、その行の中でも割と小さく書いていますね。

加藤：倏約ですかね。僕らも小さいころ、紙にあまり乱暴に書くと、怒られたものです。小さく書いて、何回も練習できるように。1枚の紙でできるでしょう？漢字の練習も、僕らは1枚の紙に真っ黒になるように書かされました。向こうではそういうのが残っているのかな。

三澤：でも、日系人に限らず、非日系の子もそうですから、どうでしょうか。

東：日本の小学校では、「大きく元気よく、はっきり書きましょう」から始まって、学年が上がっていくと、「もう少し大人らしく、小さいところにはまるように」という指導法ですよ。大人になってからも、取り立てて大きな字を書くわけではありませんが、ブラジル人の字と比べると大きいですか。例えば、サインをするスペースであるとか。大人としての達成目標が違うんですかね。字の大きさはどのくらいをよしとするのか、そういう価値観がどこから生まれるのか。

三澤：ブラジル日本語センターが年に1回やっている「全伯作品コンクール」などがあるのですが、書道、硬筆、絵画、作文もあったかな？ そういうのには出したがるんですよ。当然賞も取りたいんです。そういうのはマスが大きいですね。個人的に、子どもには大きい字を書いてほしい、伸び伸びと書いてほしいと思っていますので、日ごろから「大きく書こうよ」と言っています。大きい字を書いて、後から小さくするのは簡単だけど、最初ちまちま書いていて、いきなり大きく書くのはちょっと難しいですよ。現地の先生たちもそういうコンクールに出したがるので、指導を頼まれるんですが。

東：日本語ではなくて、普段使っているポルトガル語のアルファベットの書き方はどうですか。

三澤：小さいです。日本では、中学校に入って最初にアルファベットを習うとき、かなり大きく書かされますよね。そこでも意識が違うんだな、面白いなと思いました。

日系人とブラジル人のいいところ、悪いところ～2つの文化の狭間で

三澤：あと問題点として、一番関わってくるのは人間関係だと思うんです。親の出稼ぎについて行った子どもが、ブラジルに帰ってきたときにどういう生活を送るのか、すごく興味を持っていました。

私が行った学校に、小学校6年生まで日本にいて、ブラジルに戻って3年経った女の子が来ていて、よく話をしていたんですが、彼女は「日系人のいいところも悪いところも見える。ブラジル人のいいところも悪いところも見える。日系人のこんなところが嫌い。でも、ブラジル人のこんなところが嫌い。私はどうしたらいいの？」と言っていました。

今、その子が日本語教師の研修に来ているので久々に会ったら、「やっぱり日系人は嫌。最近つきあう子は非日系。」と言っていました。その子だけでなく、日本から戻っ

てきた子に割と多い傾向かなと思います。人間関係の面倒くささというか。

東：日本にいるときは、日系人社会の外に日本人社会があって、帰ると、ブラジルの社会の中に日系人社会がありますね。それは日本から帰ったときの日系人社会が大変ということですか。ブラジルの日系人社会と日本の日系人社会はまた違いますよね。

三澤：日本にいたのは6年生までだから、日本での日系人社会はそこまで意識していなかったと思うんですね。ブラジルに帰ってから、どんどん広く、深くつきあうようになって、日系人の日本語学校に通うようになってからいろいろあってという状況です。

勉強もそうです。私がいた間に、小学校4、5年生で帰ってきた女の子が、帰国後の日本語のケアをしたいと訪ねてきたのですが、私がいた学校は授業料が高くて、他の日本語学校の倍ぐらいでしたので、結局通うことができませんでした。連絡先を知らなかったのも、コンタクトがとれなかったんですが、その子のことが気になっていました。

その子みたいな子が今、すごく増えています。そういう情報は、それこそブログなどでどんどんいただきたいと思います。

東：ブラジルの日系人社会で育っていれば見えなかったことが、一度日本に住んだことで見えてくるということなんですか。

三澤：かもしれません。彼女は公立の幼稚園、小学校に通って、日本人の中で生活して戻ったんですね。

今は変わってしまったかもしれませんが、日本人は子どものいる前で人の悪口を言いませんでしたよね。この間プレスクールで保育園の先生と話していたら、「最近の親はそうでもないわよ」と言われましたが。でも、日系人の方がその頻度が高いんじゃないかと思うんです。一緒にテーブルで、10時、11時や3時のお茶の場で、世間話が広がっていく。でも、その場で話されるようなことを聞きたくないなと思う子もいます。そんな経験をして育ち、大学で非日系の子たちともつきあうようになると、「日系人ってこうだね」と、そういうところをつつかれてしまうんです。自分も何となく思っていたところを周りからツンツンと押されるので、「ああ、やっぱり日系人はそうだったんだ」というように、マイナスの面が出てしまう場合がままあるのかなと思います。

東：そういうときの比較の対象が「ブラジル人社会」なんですか。難しいテーマですよ。

三澤：すごく考えさせられます。私と同じように、こういった悩みを抱えた子に出会う状況にぶつかる先生方もいらっしゃると思います。

東：少なくとも1つの文化だけで育ってきた人は感じないようなところですね。いい面もありますが、特に青年期は、マイナス方向に引っ張るような感じ方になりがちなので、それをどうするか。これは心理学ですか？ケアが欲しいですよ。

三澤：「ちょっと話を聞いてよ」という場面に出くわすと思います。その子たちのケアというか、私たちがどういうふうに接していったら、異文化のはざまで感じる嫌な思いをプラスの方向に考えることができるようになるか。

東：そういう事例がままあるという知識だけでも持っているといいと思いますね。

三澤：もし可能であれば、そういう子たちにどう接していच्छやるか、お話を伺えたら、日本の子どもの支援者とも連携ができるかなと思いますね。

東：移動を繰り返す子どもがどんどん増えていますからね。いったん帰っても、ブラジルで仕事がなく、また日本に来ることもあるでしょう？ 日伯両方の問題として認識する必要があると思いますね。特に先生はキーとなるから。

何でも受け入れ、吸収してきてほしい

三澤：そういう意味でも、先生たちには、取りあえず何でも受け入れてきてほしい、吸収してきてほしいという気持ちです。子どもたちと接するテクニックは私たち以上に持っていると思うんですね。例えばアクティビティーとか、いろいろ出てきましたが、そういうネタも引き出しもたくさん持っていると思うので、あれしたい、これをした我也想いますが、最初の数カ月はちょっと様子を見て、人間関係を構築して、どんどんいろんなところに顔を出して行ってほしいなと思います。

ブラジルの日系人の方たちは「日本とブラジル、場所も反対だけど、いろんなことが本当に反対だね」とおっしゃいます。そういう文化の違いも感じてきてほしいと思います。例えば、ブラジル人は音に寛容だなと思います。最初に日系人の方たちが移住されてきたころ、群馬かどこかの団地で、騒音のトラブルで住民同士の争いになったことがありましたね。でも、ブラジルでは、11時、12時に音をガンガンかけていたとしても、周りは何も文句を言いません。そういう文化の違いを知っていて対処するのと、知らないでいきなり怒りを先に出してしまうのとでは全然違うと思います。

文化の違いを肌で感じて、帰ってきてから、それを周りにいる先生方に伝えて行ってほしいと思います。出稼ぎで来ている人たちに対する偏見を少しでも減らしていくキーパーソンになってほしいので。

東：ありがとうございました。

具体的な教材やカリキュラムの話に始まり、子どもたちの心の内面の話まで深まっています。ここからは、これまでに話した話を思い出しつつ、話し合いをしていきたいと思っています。

現職教員参加制度について

川上：確認ですが、私がホームページを見たら、現職教員特別参加制度の募集職種が小学校教諭で、ブラジル以外のアフリカの募集職種は、小学校理数科教諭・養護教諭となっていたんですね。小学校教諭なんです。日本語学校の先生ではないですね。小学校教諭ということは、公立学校や私立学校の日本語を担当するということですか？

東：向こうへ行って何を担当するかは分かりません。

久保：私立に行くと言っていましたよね。

東：私立の日系人関係の学校に行きますが、何を要求されるかは学校ごとに違います。派遣先には日本語の先生がいるところもありますから、その人とは違う役割になると思います。今回、彼らは JICA 研修の中で日本語教育についての研修も一部受けているようですが、そもそも専門が違いますし。

川上：先生たちもそのつもりではないですね。

東：日本語教育がメインではありませんが、それこそネイティブですから、日本語教師としての役割を求められる可能性もありますし、そうではない可能性もあります。

この制度が発案されたときには想定していなかったことですが、今、帰国する子どもたちが急に増えていますので、JICA の人は「ブラジルに戻ったばかりの子たちのケアという役割も担えるのではないか」とおっしゃっていました。でも、それは先生にもよりますよね。日本で、ブラジル人の子どもたちとどんなふうに向き合ってきたかとか。実は全然向き合っていなかったかもしれないので、「ブラジルに適応できなくて困っている子の世話してくれ」と言われても困るだろうなとは思っています。

もともとは、国内に日系ブラジル人が増えてくる中で、日系ボランティアと現職教員の派遣を合わせれば、研修を終えて帰ってきた後、還元できることがあるのではないかという考えだったんですね。それから社会状況も変化しているので、制度のあり方と合わせて筋道をつけるのは難しいですね。でも、ある程度の筋道をつけることを求められているのかなと私は考えていますが、日本国内のニーズもありますし、今回行っている先生たちのニーズもありますので。

今日の会の一番大きな趣旨は、派遣されている先生たちの今と将来を考えたときに、先生たちは向こうでショックを受けることもあるでしょうが、それを個人の問題にしてしまわないための情報共有をすることだと考えています。

川上：小学校教諭というのがアバウトだなと思って。

東：ブラジルでの職種ということですね。今回行っている現職教員は小中学校の先生ですが、現地では主に小学校教諭としての活動となるようです。

今井：日系日本語学校教師ではなくて、小学校教諭。

東：まだ、派遣された先生たちの声が聞こえてきていないというか、こちらからアクセスもしていません。JICA とのやりとりの中で分かったことですが、インフルエンザの影響で冬休みが1週間延びたので、本当に今、始まったばかりのようです。私たち活動実施者の2名が9月7日からサンパウロに行きますが、そのときにはまだ派遣されて2週間ぐらいですから、その時点でまだ話は聞けないので、どんな状況かということと、むしろ学校の様子を見てこようと思っています。

三澤：政府公認になっている学校ですか。

東：政府公認です。

教科書の「スタンダード」がない状態

東：現地でどんな教科教材・教科書を使っているか、何年生でどういうレベルのことをやっているか、どんな順番でやっているかを知りたかったので、事前に JICA のサンパウロ支局に「スタンダードな、例えば初級の 1 年生段階の教科書ワンセットと、真ん中の 4、5 年生ぐらいのワンセットを用意しておいてほしい」とお願いしたら、「**スタンダードはありませんので、用意できません**」と言われてしまいました。今度訪問したときに、そこでのカリキュラムについての説明を聞きながら「このセットをください」とお願いしようと思っています。

松本：私立の大手は、自分のところで作った教科書を使っているところがあります。愛知県のブラジル人学校は、パラナ州の私立の学校が作ったポジチーボを取り寄せて使っているところが比較的多いですね。でも、多くの種類の教科書が出回っているので、別の学校に行くことになると、全部教科書を買わなければいけないので、とても大変です。

今井：日本のブラジル人学校の子どもたちは、教科書を購入しているんですか。

松本：そうです。ほとんどのブラジル人学校が私塾であったり、有限会社であったりという形です。授業料にも消費税がかかります。

東：日本で学校法人格を取ろうと思うと、手続きがすごく大変なんですよ。

松本：教科書をブラジルから取り寄せると、送料もかかるので、とても高くなってしまいます。ですから、それぞれの学校ごとに取り寄せるのではなく、例えばポジチーボを多くの学校で使っているのであれば、まとめて取り寄せたほうが効率がいいという声も挙がっていますが、そこもなかなかね。

東：日本のブラジル学校で同じような教科書が使われているのは、取り寄せやすいからでしょうか。使いやすいからでしょうか。

松本：使いやすいようです。

東：だからといって、それがブラジルの本国のほうでもたくさん使われているわけではないんですね。

松本：パラナ州では使われてます。日本のブラジル人学校のできた経緯に、パラナの方がかわっていたということも関係しています。でも、それが使いやすかったんでしょ

うね。

東：でも、なかなか標準にはなっていない。ブラジルでは何年生でどこまで進むと教育省とかで決まっているわけではないんですね。¹¹

今井：そこら辺が不思議ですよ。この日を休みにすれば連休になるから、ここも休もうとか、ブラジルのサッカーの試合があるから休みとか。日本だったら、休んだコマの分をどこで埋めるか、調整をかけないといけないんですけどね。

久保：先生のストライキも結構ありました。だから、休みとか。

今井：私のところは田舎だったので、雨でバスが出ないから休みとか。学習課程は一体どうなっているんだろう？と不思議でした。不思議で終わらせず、ちゃんと聞けばよかったんですが。

川上：学校の連絡網もないのに、休みが延びても、きちんと皆、把握できているんです。スーパーでお母さん同士が「明日も休みらしいよ」「休みらしいよ」「休みだって」「休みだって」というふうに、何となくうわさでとか。急に休みになっても、本当に誰も学校に来ないから不思議です。

今井：「本当に休みですか」と学校に問い合わせることもないんです。朝バスが来なかったから、休みなんだとか。

川上：それでも成り立っているんですよ。

今井：子どもが帰ったと同時に、先生もいない。いつ授業準備をしているんだろうと思います。私が行った所はすごく田舎で、ブラジル学校もすごくお金がなかったんです。コピー機もこうやって回す青いインクみたいな。子どもたちに人数分配することもありません。

松本：雨でバスが出ないというのは、ぬかるんで動けないということですね。水がわたってしまって。

久保：足がとられてしまって、みんなで押して。

東：地震で壊れた高速道路を3日でなおしてしまう日本と、どっちが「普通」なのかは分かりませんよね。

今井：不便でもアスファルトになってほしくないような、赤土を守ってほしいという気持ちがありますけどね。

¹¹ これは誤り。ブラジルの教育省によって各学年の学習内容が配当され定められている。
ブラジル教育省 <http://portal.mec.gov.br/index.php>

私立と公立で雰囲気が全く違う

川上：私立の学校と公立の学校の両方ともビデオを持って見学をさせていただきましたが、全く世界が違います。日本でも私立と公立、多少特色はありますが、ブラジルはもう全く違います。子どもを一人ずつ呼んで座らせたら、私立学校の生徒か、公立学校の生徒か、100%分かるぐらい。服から、持ち物から。

人種も多少違います。地域差もあるでしょうけれど。サンパウロ州は、比較的日系の人も多くて、イタリア系の人もいたり、インディオ系というか、原住民系の人もいたり、結構混ざっている地域ですが、公立学校に通っている子はやはり肌の色が濃いめです。金髪の子だとか、目の青い子は私立。何となく分かります。

教科書も、公立の学校で使っているものとは全然違いますし、先生の数も違います。

松本：公立は原則として1年生から4年生までは、35人で、5年生からは40人までだそうです。私が見学したのは45人ぐらいでした。

川上：ぎゅうぎゅうですね。

松本：本も私物ではないんです。教科書もまた次の年の子たちが使うようになっています。学校が確保して、3年間ぐらいは譲られていきます。辞書も教室の一番後ろに山積みになっています。最初、なぜあんなところに本が？と思ったんですが、そういう仕組みになっているようです。

日本の中にあるブラジル人学校の場合、自分で買わなければいけないので、教科書代だけで年間3万円とか、4万円かかるんですよ。授業料はまた別に2万5,000円とか、3万円とか。授業そのものは半日制ですが、長くそこに居残れば、その分のお金もかかります。さらに、送迎代で、近いと5,000円、遠いと1万円とか。で、ユニフォーム代があつてというふうに、どんどん高くなります。ブラジルなら、すごくレベルの高い私立に通わせられるぐらいの金額です。

そういう子たちが今、ブラジルに帰っています。ブラジル人学校を辞めて帰国する子たちのほうが、日本の公立の学校を辞めて帰国する子たちよりも圧倒的に多いんです。

東：日本のブラジル人学校にいた子が、ブラジルに帰ってから入る学校はさまざまですね。日系人学校の私立に入る場合もあるでしょうし、公立学校に入る場合もありますよね。

松本：ほとんど公立でしょうね。

東：今の話で、現地の公立学校は全然違うでしょうし、教科書も違う可能性が高いですね。

川上：ブラジルの公立学校に行っている子のほとんどが、そこから先の中等教育、高等教育、高校以上には進学しません。私が見に行った公立学校では、本当に生きていくための最低限のことができれば、最低限の智恵がつけばオッケーというふうだったんですね。

「高校以上に進学する子はどれくらいいるんですか」と聞いたら、「去年はゼロ、おとしもゼロです。ときどきいるんですけど、最近は何もゼロです」というお話でした。先生も何も隠さず、それが当たり前とっていらっしゃいます。想像以上に差があるなと思います。

今井：大学に行くには予備校に通わないと無理というのが当たり前になっていて、高校を卒業したら、はい、大学というケースはほとんどありません。

松本：連邦大学と州立大学は無料ですが、そこに合格するには、私立のレベルの高い高校に通いつつ、塾にも行かないと難しいんです。ですから、公立の学校に行っていた子たちは、無料の大学に行けないという矛盾があります。

今井：教育熱心な方は、中学校から親元から離して、まちの中学校、高校に通わせたりします。それでも、物理など、今まで習っていない科目があって、すごく苦勞するとか。中学校からまちの学校に行っても、そういうふうなんです。

松本：7年ぐらい前、サンパウロの私立の学校で説明を聞いたとき、日本の学校よりもずっと進んでいると思ったのは、親が自分の子どもがどういう状況なのかをパソコンを見れば分かるようになっていたことです。親がわざわざ学校に行かなくても、学校のホームページを通して、自分の子どもの出席率などの情報が入手できるようなシステムができています。すごいと思いました。日本にはありませんよね。また、校長室みたいなところにモニターテレビがバーッとあって、教室の様子が分かるようになっています。

実は愛知県のあるブラジル人学校の校長室にモニターテレビがあります。例えば「あそこの教室で今、子どもたちが騒いでいるから、行って注意していらっしゃい」とか。そういうのが見えるんです。「うちの学校では、教室の様子をチェックして、ちゃんとした授業をやるように管理しています」と親に PR しています。ブラジル本国でやっているシステムを導入しているのかなと思います。

東：そういうことに対する心理的抵抗はないわけですね。

松本：そうです。むしろ堂々と自信を持ってやっています。見られても別に構わないという。先生によっては嫌という人もいるかもしれませんが。

東：先生もそうですが、子どもたちも。日本なら、安心というより、そんなふうに監視されることに抵抗を持つ親もいますよね。

松本：その学校では何年か前から取り入れているようです。

川上：日本の場合、見られていると、管理されているとか、束縛されているとか、注意されているというマイナスの印象を持ちますが、ブラジルの親御さんは、学校で学ぶことも大切ですが、けがをしないで安全に帰ってくることを大切にされていますので、ちゃんとアドバイスしてくださる先生や校長先生が見ていてくれるなら、かえって安心と思

うのかもしれませんが。けんかがひどくなって殴り合いみたいなことになる前に、誰かが止めてくれるとか。保育園でも、親御さんは子どもがけがして帰ってくることをすごく嫌がります。そういうのもあるのかなと思います。

東：日本の場合、学校に監視カメラがつくことには抵抗があっても、例えばスーパーなどの監視カメラに、もちろんそれは万引き防止のためでしょうが、そういうところで自分が写されることにはそんなに抵抗がありません。身の安全を守るという点では一緒なのに。学校という場に対する意識が、日本人のほうが特殊というか、もしかしたら聖域意識があるのかなと思います。かなり長い時間、子どもが親の手を離れているのに、そう思えないのは何か違いがあるんですかね。

状況を受け入れると同時に、意思表示をしっかりとすることも大切

東：これからブログを使って、私たちが知りたいリアルタイムの情報を共有していきたいと思います。1つはみなさんがポイントとして挙げていた日本から帰国した子の様子。また学校のあり方や教材について、それぞれの学校で違いがありながらも、事例を集積していきたいと思います。派遣されている現職の先生たちにも、ブログなどで派遣先の様子を上げてもらいたいと思っています。¹²

今回派遣される先生たちは、特に第1期生ですので、ここで失敗してはいけない、私たちが最初だから頑張りたいと、やる気を持って行かれると思います。でも、今日のお話を聞いていますと、それがかえってぶつかる原因になってしまうかもしれないということですね。まず、その空間になじむように溶け込ませていくことが必要だと。そうでないと、結局はぶつかってしまう。皆さんもそういう経験をされたということですね。

うまくいかなかったことを次にどうつなげるかということをみんなが語ることもまた情報共有の1つですね。むしろ失敗して、それを報告してという感じが強いんですかね。

渡邊：失敗から学ぶことは大切ですが、それによって人間関係に支障を来すと、後々活動しにくくなります。また、今回こういうことを見てきてと言うことも含めていろいろお話が出ましたが、それがプレッシャーになってもいけないので、しばらく時間をかけて様子を見てきてほしいと思います。

東：逆に言うと、様子を知るには時間がかかるということですね。

三澤：勢い込まず、2、3カ月は、まあまあみたいな感じで、余裕を持って行ったほうがいいのかと思います。取りあえず受け入れて、そこから少しずつ放出していくような。

東：受け入れてといっても、具体的に何も要求されない現場もあるかもしれませんが、逆にものすごくいろいろなことを要求される現場もあるかもしれません。要求が多すぎたとき、できないならできないで、しょうがないですね。

¹² 今年度の事業としてはこうした役割は果たせなかった。

三澤：それは最初に言ったほうがいいですね。

東：できないことはちゃんとできないと言ったほうがいいということですね。要求があまりにも少ないときには、落ち込むのではなく、そういう様子を受け入れること。なかなか難しいですね。渡邊さんが言ったみたいに、張り切りすぎて、致命的な失敗をしてはいけませんし。知らないことは結構怖いことですから。

川上：ブラジルの日本語学校でイベントがあったときに、ブラジル人の教授の方が子どもの絵や作文の講評をしてくださったんです。高等教育の先生ですので、いろいろな知識をお持ちですが、やはりブラジルで育ったブラジル人の方なので、「表現をしないのは、いないと一緒だ。自分の言いたいことを言わないとか、発言がないとか、そういうのは、いないと一緒だ」とおっしゃったんです。

日本だと、逆ですね。黙って話を聞いて、「はいはい、そうですか。分かりました」と。入ったばかりだったら、何も分からずに、「はい、分かりました。やります」と言ってしまうかもしれませんが、慣れるまでも、ただじっと見ているだけではなく、会話を多くしたほうがいいですね。何でもいいので、とにかく話すことです。「私はここにいるよ」「私はこういうことをやりたいんだけど、どうかな」と。

話をしないと、存在しない人、意見がない人と思われてしまいます。それではまずいですよ。溶け込み方も、日本で日本の組織の中に溶け込むやり方とは違います。

東：様子見といっても、黙って座って見ているだけではまずいということですね。それは様子見ではなく、いないのと同じだということになってしまう。

渡邊：おっしゃるとおりです。話をして、この人はこんなことを考えているのかとか、観察することが大切だと思います。

日本人とブラジル人、日系社会の二面性の中で

三澤：青木さんがおっしゃった「日系人の中だけではなく、外にもどんどん出てください」という意見には大賛成です。日系人の中でも話ができる人はできてきますが、もしかしたら日系人社会の中では自分を出せないかもしれません。でも、そこを出れば、本当の自分を出せる友達ができるかもしれません。ですから、いろんなことに自分の場をつくるチャンスを持ってほしいと思います。

久保：ブラジルだとかで、日本だとかいうのが一般的ですが、日系社会は、ブラジルもあり、日本もあり。「出る杭は打たれる」社会もありますが、「泣かないとおっぱいをもらえない」ということわざがあるように、ブラジルでは、自分から言わないと、最悪死ぬよということです。日系社会は、そういう文化のどちらも持っているんです。

三澤：顔は日系でも、完全にブラジル人化している社会だったら、バンバン言ったほうが楽です。でも、そこまで至っていない日系社会も残っています。

東：先生と生徒の関係とか、PTA というか、親との関係とか、教室活動の考え方とか、文化の継承とか、しつけとか。そういうのを残している古い日系社会もあるということですね。

渡邊：日系人であることをどうとらえていくかということは、日本にいる彼らにもすごく通じると思いますね。現地で感じられることは、ブラジルの中だけのことでなく、今、日本にいる子たちにとっても、すごくリアルな、とても深刻なものなんだということに思い至っていただけるといいですね。環境の影響もあるじゃないですか。親がどう子どもに語っているかとか、伝えていくかとか。

存在意義につながるルーツや背景知識の情報提供が必要

東：日系人の人たちが大量に帰国しているという報道に触れたり、周りのお友達が帰ったりすること自体、すごく彼らを不安にさせていると思います。「帰る」という言葉の使い方も今、迷っていますが、日本で生まれた子たちは、日本に友達もいるし、ずっと日本で暮らすんだろうなと思っていたのに、突然周りがバラバラと帰り始めたので、余計に将来が見えなくて、今まで以上に不安になっているはずですよ。明日自分はどんなの？ 自分は^{なにじん}何人なの？も含めて、大人になっていく自分は一体どこの社会で生きていくんだろう？と、日本にいる子たちもすごく不安だと思うんです。

川上：行ったり来たりする子たちが生徒の中にもいましたが、中学年から高学年ぐらいになって、自分の言葉で語り出したり、考えたりする年齢になってくると、いろいろなことが分かってきます。要するに、ブラジルでも日本でも勉強で勝てないし、おまけに日本では外国人扱いです。自信を持てるところが何もないんですよ。自分の存在自体にも自信が持てない。ですから、ルーツの話だとか、自信を持たせてあげられるようなお話、情報が必要ですよ。

東：それと、知識ですよ。歴史上、自分たちは今、なぜ移動を繰り返す状況にあるのか。この前、日系人協会の先生は「日本とブラジルの歴史や、ブラジル社会に日系人が果たしてきた大きな役割を伝えていくことで誇りを持てるようにしたい。後の日本の産業を支える力としての出稼ぎも含めて、プラスのことを教えるための教材化ができればいいね」というお話をされていました。

例えば、日本とブラジルをつなぐ地図教材。ブラジルの州の地図の中に、日本企業とのかかわりや、昔、沖縄の人がたくさんここに来ましたという情報を書き込んでもいいと思います。カード教材も、歴史版とか、日本との関係版とかというようなのを作れば、日本でも使えると思うんです。

そういう教育をしていくことで、自分の居場所やよりどこを少しでも見つけられるのではないかと、自分の存在の意味が少しでも理解できるのではないかと思います。それが全部ではありませんが、孤独ではない感じというか。自分は大きな歴史の中のこういう位置づけで、ちゃんといるんだという自信みたいなものですね。周りの先生や大人もそれを知っていることが大事ですよ。

子どもたちの人生を考えて、「出稼ぎ」の意味を問い直してほしい

今井：ものすごく簡単に稼ぎに来られる方が多いように思います。私がいたところでも、ずっと日本語を勉強してきて、日本がすごく身近なので、若い子たちがどんどん日本に出稼ぎに行くんです。日系人新聞にも、条件のいい求人が出ていますし。日本でどんな苦労しているのかという情報は全く入ってきません。

派遣会社の中には「週に1回、ただで日本語を指導してくれるところがあるので、子どもの教育も大丈夫ですよ」という紹介の仕方をしているところもあるようです。市の国際交流協会がボランティアさんを使って日本語を教えていますよね。そのことだと思うんですが。日本で苦労している子たちがたくさんいるのに、そこを言わないで、いいところだけを宣伝しています。

行き来している人は別として、**出稼ぎ先の日本でということが待ち受けているのかという情報がないまま、「あの人でも行っているんだから、自分でも」**ぐらいな感覚です。出稼ぎの現状についての情報をもう少し発信していくと、雰囲気が変わってくるのかなと思います。**子どもたちの苦労を考えると、ブラジルで生活できるのなら、そのほうが良い**と思うので。

渡邊：彼らのネットワークを考えたときに、情報が入らない。

東：さっき「かっこつけマン」という話が出ましたが、プライドがあるでしょう？ 日本人は「こんなに苦労して大変で」と苦労自慢をしたがるんですが、ブラジルにはむしろそういうのを隠したがる文化じゃないですか。本当に苦労して泣きたい気分だったのに、「これだけ高い給料をもらっていたんだよ」と言ってしまうとか。

今井：本当にそのとおりで、子どもの教育を真剣に考えている方は、お父さんが単身で稼ぎに行って、2年ぐらいで帰ってくるケースが多いようですね。単身で行かれていたお父さんが帰ってきても、泥棒が入るといけないから、周りには帰ってきたことを言わないで、しばらく外に出て日焼けして日系人ぽくなったころに外に出てくるんです。

そういう方にお話を聞くと、「日本はこんな楽しいところがある」とか、「こんな有名なものがあつたよね」といったお話が中心です。**すごく苦労したらしいという情報が流れていようが、そのお父さんは絶対にそれを口にしません**。本当に苦労話を聞こうと思ったら、よほど親密になって聞き出そうとしなければ無理です。帰ってきてまで、そんなことを考えたくないようです。

渡邊：でも、今、ブラジルに帰国する人が多いですよ。みんな分かってはいるけど、それをあえて言わない。だから、大変だということをみんなが知らないわけではない。

今井：容姿を見れば分かるそうです。こんなにやせて帰ってきたとか、すごくげっそりしているとか、うつになって精神科に行っているとか。

渡邊：当初にあったジャパニーズドリームみたいなものが本当に信じられているとは私は思えないんですが、どうですか。一獲千金みたいな。

久保：学力がたいしたことなくて、進学には全然及ばない成績だし、やることもないし、夢もないから、日本に行ってみようかみたいな感じで行く子はいます。20代前後くらいの子たち。

東：単身なら、本人だけの問題ですが、家族で日本に来ると、子どもの大事な3年間とか5年間を左右してしまいますよね。この前、西尾市の指導員の菊池寛子さんと「大きく移動して生活することで、言語が違う、継続して学習できない環境に置かれた子どもがどうになってしまうのか」という知識を周囲の大人たちに絶対に普及させたいですね」という話をしました。今、それが明らかに足りないだろうと思います。

渡邊：「バイリンガルになれるから、いいわよね」とか、「日本語もポルトガル語もできるから、通訳になれるちゃうわ」とか、ポジティブな意識のほうが強い感じがします。

今井：^{ふたこと}二言目には「子どもは覚えるのが早いからね」と。

加藤：自分は不安だけど、人を集める業者に納得させられているんでしょう？でないと、踏み切れないからじゃないかな。

渡邊：本当にそう信じている感じがします。すごくポジティブです。

松本：日本人でもそうでしょうか？親の仕事で海外に行く話を聞くと、「ああ、いいわね。アメリカ？じゃ、英語ができるようになるわね。すごいね」と言いますよね。

渡邊：親御さんはどう思っているのでしょうか。

松本：親は英語が話せないから、子どもがペラペラ英語を話していると、それは学習言語ではなく日常会話だけなのにすごいと思うんです。読み書きのところまでちゃんと分かっているかどうか、親はチェックしませんから。一方、なまじ母親も英語ができる場合は、英語を一生懸命勉強させるあまり、帰国後、子どもがものすごく苦労して日本語を再獲得しなければいけないような失敗をすることもあります。

最近は、経費があまりかからないということで、子どもが小さい若い親に海外勤務をさせるケースが増えてきています。帰国後、英語がペラペラしゃべれるのに、英語のテストで点数が取れなかったりすると、親は「日本の英語教育は駄目ね」みたいな。
(笑) そういう誤解も現実にあります。

渡邊：本当にポジティブに、安易に考えているパターンもあると思いますし、移動することがいいとは思っていないのに、ほかの選択肢がなくて、切羽詰まって来るパターンもあると思います。

東：簡単にバイリンガルになれるわけではないし、ペラペラしゃべれることだけが必要な能力ではないことを私たちが発信していかなければいけませんね。学校の先生の中にも、彼らが背負っている状況を理解しないで、しゃべれるくせに、英語のテストで点数が取れない、ばかじゃないかというふうに見ている人がいます。言語発達のことを全然知らない先

生もいますから、発信していかないといけません。

今井：正しい情報を知った上で、選択して来るのか、やめるのか。私が行っていたときも、子どもはおばあちゃんに預けて、ご両親だけが出稼ぎに行っている家庭がありました。お母さんは、子どもに会いたいけれども、ブラジルにお金を送らないといけないから、経済的なことを考えて帰れない。それなら、子どもを日本に呼ぼうという話に何回もなったんです。そのたびに、周りが「子どもが苦勞するから絶対にやめたほうがいい」と止めました。特に下の男の子は、小さいころからご両親と一緒にいなかったからか、多動といわれるような子で、勉強で苦勞するのが目に見えていたんです。ブラジルにいれば、元気で活発、生き生きと学校に行けると思いますが、日本なら、絶対に問題児になってしまいます。「それが果たしてその子にとっていいのか」「それでも本当に行くのか」と周りが止めたんです。

結局、お母さんはブラジルに帰ってきて、お父さんだけ単身で日本に残ることになりました。今は、お母さんがそれまでの貯金でお店を出して、3人で暮らしています。その子たちにとってよかったと思います。お父さんが、お母さんのさみしい気持ちを理解しながらも一生懸命説得されたようです。

周りに知識がなければ、今ごろ、その子は日本の学校の特別支援の教室にいたかもしれません。そういうことを考えると、知識があって、その知識を持っていなくても行くのか、そういう選択肢があるほうがいいと思います。

加藤：説得した周りは、どのぐらいの広がりですか。

今井：家族と日本語学校にいる先生、周りの親たちです。

日本語学校にいる先生も、自分のおいっ子が日本に出稼ぎに行って苦勞して帰ってきたとか、そういう出稼ぎの情報をある程度持っていらっしゃったので、そういうアドバイスができたんだと思います。

加藤：結構親身ですよ。大人たちがそんなに一生懸命議論してくれるのは、子どもにとってすごいことですね。全然違うと思います。

久保：そういう方が周りにいらっしゃるのとそうでないのとでは全然違いますね。

今井：子どもも日本に行ってしまったら、さらにブラジルに戻れなくなると思います。

東：この問題は、この事業の1つの大きなポイントになってくると思います。本当に日本に行かなければいけないのかというところを問い直すことが大切ですね。子どもが幸せになればいいんですが。

そろそろ予定の時間が来ています。話題が盛りだくさんでした。これからもいろいろ考えていかなければいけません、少し焦点を絞って、共有できるところから方法を考えて始めたいと思います。

本日は皆さんお忙しい中、どうもありがとうございました。（了）

資 料

- 研究会配付資料
- 書籍リスト

研究会

8月26日 午後1時～ 愛知県立大学

日系社会青年ボランティア21回生
ブラジル サンパウロ州 マリリア市派遣
川上 貴美恵

ブラジルでの生活で困ったこととその解決方法

*アパートの床が全部浮き上がって割れた。

アパートには、それぞれの部屋の持ち主がいる。借りる際、保険に入らないのが普通だ
そうで、壊れたら持ち主と借り手が話し合っただけで折れたほうが弁償する。
裁判に持ち込む予定だったが、私の任期終了が迫っていたので派遣受け入れ先である日
系人協会が床を張りなおすことで合意。

✂ 社会のシステムやそのルールなど、わからないことに口をはさむと知らない間に不
利な状況になってしまうことがある。相談できる人、頼れる人を探す。

*日系人のイメージする日本人らしさを求められる

60代～80代のおじいちゃん、おばあちゃんには移民一世の場合がある。移民当時の日
本のイメージを持っているので、西洋的なことや現代的なこと（フォーク・ナイフが使
える/朝パンを食べる/服装・髪型など）をすると「日本人なのに、そんなことするの。へ
え、すごいね。日本は変わった。」などと言われ、なんとなく居心地の悪い思いをしたこ
とがある。

✂ お年寄りの気がすむまで話を聞く。
服装や食習慣が少し変わっても日本人だということには変わりがないし、移民を
していった方々への尊敬の念を語る。

ブラジルでの教育活動で困ったこととその解決方法

*派遣先での立場

ボランティアは派遣要請によって派遣されるわけだが、派遣要請を出す人とボランティアが現場でともに働く人は違う人である。日本語学校で長年務めてきた地元の先生は、まったく問題意識もなく経験値に基づいて毎年同じスケジュールで働いている。そこへ、外部から飛び込んできて2年であつという間に帰っていくボランティアが口をはさむことが我慢ならないこともあったらしい。



派遣先のことは、行ってみないとわからないことばかり。

現場の先生とよいビジネスパートナーになれるように、信頼を得られるように行動する。着任直後からガツガツしない。焦っても結果はついてこない。

今、日本にいる人（外国籍児童生徒にかかわる教員・講師など）に伝える情報として
現職派遣教員から聞きたいこと

*教育とお金について

*学校のルールの違い

社会的背景、宗教的な側面など「なぜか」がわかるように。

*家庭での子どもの過ごし方

国際協カイニシアティブ事業
「日系社会青年ボランティア」「現職教員特別参加制度」活動支援のための
教育協力システムの形成 座談会 09.08.26

西三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員 渡邊あづさ

<はじめに…>

1998年～2000年までボリビアサンタクルスの小中学校において教育活動に携わる。

対象：6歳～14歳までの非日系人と、日本語を母語としない日系人

a)ボリビアでの教育活動で役に立ったネタ（授業 リソース）

- 童謡、おりがみ、フラッシュカード、日本語教育の活動集、文化紹介など

b)ボリビアでの教育活動で困ったこととその解決方法

- 日本語学習に対するモチベーション（必要性）の低さ
- 授業運営
- 教材、教具（入手、実態との適合性）
- 相談できる人の不在
- 教師の指導方針や方法のばらつき
- 日系人、ボリビア人の間にある心的溝
- その他
- 親と子どものスペイン語力

c)ボリビアでの生活で困ったこととその解決方法

d)職場での人間関係等で戸惑った、困った、びっくりした具体的経験

- 古き良き日本の美德（閉鎖性からくるもの）
- 村民の間にある価値観の違い（対人、対国）
- 日本から来た者とのつきあい方

その他

- 「日本への出稼ぎ予備軍をつくっているだけか」
- 「日本に行くのか、ボリビアで生きていくのか」
- 親のニーズと子のニーズ

e)日本で指導をするために、ブラジルにいる間に入手しておくべき情報、モノなど

- 日系人の価値観の多様性（個／家族／世代／生育歴／地域など）
- 渡日の背景
- ブラジルにある、自慢したくなるもの／こと

f)今日本にいる人たちに伝える情報として、現職派遣教員から聞きたいこと

- 日本から戻った子どもたちのその後

a) 日本語学校での教育活動に役に立ったネタ**展覧会など催しものを実行する能力**

現地の日本語学校では、展示の仕方や発表会を企画することにあまり慣れていない教員も少なくない。日本語学校で原爆展を行ったところ、原爆展の内容と同じぐらい、展示のスタイルに対して関心を持つ教員がほとんどであった。日本語学校では学習発表会や運動会、スピーチコンテスト、作文コンテストなど、一年を通して様々な行事があるため、それらを現地教員と共に工夫して実行できる力は非常に役に立つと思う。

文化活動のアイデア

季節の行事を紹介する絵本や遊び活動集、盆踊りやよさこいの映像などは役に立った。しかし停電もあるので、突然CDやDVDが使えなくなるということもある。文化活動は折り紙遊びなど、ある程度は現地で定着しているが、現地では新しい活動のアイデアを常に望んでいる。しかし、現地で調達できないものや、現地の教員が続けられないものを紹介しても意味がない。現地で簡単に手に入るものを使って、現地の土壌や風土の特色を生かした活動をいかにアレンジできるかという能力が必要であると思う。

日本語教育

文字カードやごほうびのアニメシールなど。よく使われている「きそにほんご」、「ひろこさんのたのしいにほんご」、「にほんごドレミ」などの教材は現地でもある。現地教師に教授法を指導するための指導書なども役に立った。絵を描くのが苦手な現地教師にはパソコンで加工できるイラスト集の紹介も役に立った。

b) 教育活動で困ったことと解決方法**色々な価値観の違い**

スピーチコンテストの賞品がやたら高価なものであったり、学校の物を大事にしない、落ちているものはすぐ自分のものにしてしまう、テストでカンニングをするなど。現地の学校では、試験の際、子どもらは先生に自分の解答が正しいか聞く習慣があるようで、先生も間違っている場合は間違っているとなんとなく教えてくれるなど。

解決方法

普段から学校内外問わず色々な方とよく話をする。地域や日本人会の集まりや行事などにはできるだけ参加し、一緒に活動して仲良くなると、おのずと現地の理想や現地に合った方法が見えてくる。

e, f) 日本で指導するためにブラジルにいる間に入手しておくべき情報、今日本にいる人たちに伝える情報として現職派遣教員から聞きたいこと

日本からブラジルに帰った児童生徒らのブラジル社会への適応状況

日本からブラジルに帰ってきた児童は、ブラジルの日系日本語学校でもブラジルの現地校でも、色々な場面に適応できず、劣等感を抱くことが多いのではないかと。日本に滞在していたときは、ポルトガル語での教育を受けていないため、ブラジルに帰国してからは、現地のブラジル学校で下の学年に入学することもある。さらに日本語学校での彼らは、日本では小中学校や生活の中でしか日本語を習得しておらず、外国語としての日本語教育をほとんど受けていないため、日本語の会話力は非常に高いが書く能力が意外に高くない場合がある。助詞が抜けている、下の学年の漢字しか知らないなどである。

日本語学校には、外国語として日本語をゼロから学習してきた児童もあり、彼らの中には日本から帰ってきた日系の児童に対して、「日本に住んでいたのにどうして漢字をそれだけしか知らないの？ どうして作文でたくさん間違えるの？」と言う子どももいた。

ブラジル本国に帰ってから学習や精神面でのサポートが必要なのは当然であるが、彼らが実際どのような点で問題を抱えているかを検討し、日本でできる指導の可能性を探りたい。



～はじめに～

H21 年 8 月 26 日
日系社会青年ボランティアOG
今井 さや香

日系ブラジル人児童生徒教育研究会

わたしの…活動期間 2005 年 7 月～2007 年 6 月
活動地 ブラジル サンパウロ州 コロニアピニャール移住地
職種 日系日本語学校教師

まだ日系 1 世も活躍している村にある日本語学校(現地職員 3 名 生徒約 35 名)に配属。通学している子どもは 3 世、4 世。祖父母と日本語を使う家庭もあるが、生活の中心はポルトガル語。

日本語指導、情操教育、学校行事を中心に活動した。

① ブラジルでの教育活動で役立ったもの

●授業では・・・文字教材等の教材、CD (効果音・音楽)

●行事では・・・踊り・出し物などのアイディア・活動集

※ 求められることは、日本語指導だけではない。

② 日本で指導をするためにブラジルにいる間に入手しておくべき情報・モノ (今、現職派遣教員から聞きたいこと)

●日本語指導・・・指導のアイディア(聖南西教育研究会 アイディア集紹介)
日本語教材

● ブラジルの学校に関する情報
学校の 1 日の流れ・授業の様子
ブラジルの学校形態と学習内容

● ブラジルの日本語教育の現状
ブラジルで日本語を学ぶ理由とは
日本から帰国した児童の現状は



～最後に～

今後期待したいこと

☆ ブラジルと日本の教育現場の情報交換

☆ JICA日系人研修制度・JICA生徒日本研修の充実

a) ブラジルでの教育活動で役に立ったネタ（リソース）

- 文化活動** : よさこいソーラン・手話のDVD、J-POPのCD、獅子舞のビデオ
季節の行事の絵本・紙芝居、アイドル雑誌、折り紙の本など
- 日本語** : 各種絵カード、日本語アクティビティ・タスク集、漢字のテキスト
能力試験対策問題集など
(大人にはマナー・敬語、ロールプレイなど)

b) ブラジルでの教育活動で困ったこととその解決方法

困ったこと :

- ・教師のなり手がいない
- ・学校の運営システムの問題
- ・クラス編成、カリキュラムの問題

解決方法 :

- ・ブラジルやその地域の実情に合ったやり方を模索
日本のやり方や自分の理想を押し付けない
- ・ただ会議などで正論を言ってもダメ。日系の行事などに積極的に参加し、周囲の人々との世間話の中で学校のあり方について地道に話を重ね、意識を高めてもらう
- ・近隣の地域との連携

e) 日本で指導をするためにブラジルにいる間に入手しておくべき情報、モノなど

- ・ブラジルの公立学校や非日系の人々の生活や文化についての知識
- ・ポルトガル語の習得
- ・ブラジルの公立学校や日本語学校で使っているテキスト・教材

f) 今日本にいる人たちに伝える情報として現職派遣教員から聞きたいこと

- ・デカセギ帰りの人々の現状
- ・デカセギ子弟の現状

b) ブラジルでの教育活動で困った（おもしろかった）こととその解決方法

○練習嫌いな子どもたち

練習段階ではちっとも身を入れないが、本番になると異常に頑張る

↓

性質だと思って、カリカリせずに上手くコントロールしていく

○絵をかき慣れていない

休みの日にあったことを、「絵に描いてみよう」としても、日本の様に学校で図工などの教科がないため大きい紙を渡しても、隅に小さくかいてしまう

↓

書き方のヒントなどを与え、徐々に慣れさせていく

○教材、教具など揃わない

↓

なければならないなりに工夫する。現地の先生がいれば、その知恵は抱負なので伝授してもらおう

e) 日本で指導するために、ブラジルにいる間に入手しておくべき情報、モノなど

○ブラジルそのものを見て、肌で感じてきて欲しい

○日系、非日系を問わずブラジルの習慣、価値観など

○何か起きても、許容できる柔軟さ

f) 今、日本にいる人たちに伝える情報として、現職派遣教員から聞きたいこと

○帰国した子ども達のその後

○帰国した家族の生活状況

● 書籍リスト ●

本事業で購入した書籍および寄贈された書籍のリスト（寄贈場所空欄のものは購入書籍）

（また、荷造りの際の混乱で寄贈場所が曖昧になってしまったものがあることをお詫びします）

国際協カイニシアティブの予算でブラジル関連の書籍・DVD・CDを購入しました。愛知県立大学長久手キャンパス・F210に所蔵してありますのでご活用下さい。

ブラジル関連書籍リスト(購入場所:ブラジル)

通し 番号	書 籍 名 称	寄贈場所
1	XX Encontro Nacional dos Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa: VII Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil	サンパウロ大学
2	同上	サンパウロ大学
3	CURSO DE LÍNGUA JAPONESA I	サンパウロ大学
4	同上	サンパウロ大学
5	INTRODUÇÃO À GRAMÁTICA DA LÍNGUA JAPONESA	サンパウロ大学
6	同上	サンパウロ大学
7	CASA DE ESTUDANTES HARMONIA 40º ANIVERSÁRIO	アルモニア学園
8	同上	アルモニア学園
9	Ensino Fundamental História	アルモニア学園
10	Ensino Fundamental Língua Portuguesa	アルモニア学園
11	4º Volume Livro da Coordenação Ensino Fundamental	アルモニア学園
12	Ensino Fundamental 5ª Série L. Portuguesa	アルモニア学園
13	ブラジル日本移民100周年に向けて新アルモニア学園建設	アルモニア学園
14	A ESCOLA É NOSSA Matemática 1º ano	スザノ日伯学園
15	A ESCOLA É NOSSA Matemática 2º ano	スザノ日伯学園
16	A ESCOLA É NOSSA Matemática 3º ano	スザノ日伯学園
17	A ESCOLA É NOSSA Matemática 3º ano	スザノ日伯学園
18	A ESCOLA É NOSSA Português 1º ano	スザノ日伯学園
19	A ESCOLA É NOSSA Português 2º ano	スザノ日伯学園
20	A ESCOLA É NOSSA Português 3º ano	スザノ日伯学園
21	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 2º ano	スザノ日伯学園
22	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 3º ano	スザノ日伯学園
23	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 3º ano	スザノ日伯学園
24	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 4º ano	スザノ日伯学園
25	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 5º ano	スザノ日伯学園
26	A ESCOLA É NOSSA Ciências 2º ano	スザノ日伯学園
27	A ESCOLA É NOSSA Ciências 3º ano	スザノ日伯学園
28	A ESCOLA É NOSSA Ciências 3º ano	スザノ日伯学園
29	A ESCOLA É NOSSA Ciências 5º ano	スザノ日伯学園
30	Jogos e material complementar 1º ano	スザノ日伯学園

通し 番号	書 籍 名 称	寄贈場所
31	Jogos e material compleme tar 3・0 ano	スザノ日伯学園
32	Matemática 1・0 ano	スザノ日伯学園
33	Matemática 2・0 ano	スザノ日伯学園
34	Matemática 2・0 ano	スザノ日伯学園
35	MATEMÁTICA Pode Contar COMIGO 10・ ano	スザノ日伯学園
36	MATEMÁTICA Pode Contar COMIGO 20・ ano	スザノ日伯学園
37	MATEMÁTICA Pode Contar COMIGO 30・ ano	スザノ日伯学園
38	MATEMÁTICA Pode Contar COMIGO 40・ ano	スザノ日伯学園
39	CARTAZES DOS NÚMEROS	スザノ日伯学園
40	CIRCO integrado テキスト	スザノ日伯学園
41	CIRCO integrado CARTAZES	スザノ日伯学園
42	PORTA ABERTA 40・ ano	スザノ日伯学園
43	PORTA ABERTA 50・ ano	スザノ日伯学園
44	NOVO Diálogo 60・ ano	スザノ日伯学園
45	NOVO Diálogo 70・ ano	スザノ日伯学園
46	十年の歩み	スザノ日伯学園
47	十年の歩み	スザノ日伯学園
48	二十五年の歩み	スザノ日伯学園
49	二十五年の歩み	スザノ日伯学園
50	A ESCOLA É NOSSA Matemática 1・0 ano	スザノ or カリタス
51	A ESCOLA É NOSSA Matemática 1・0 ano	スザノ or カリタス
52	A ESCOLA É NOSSA Matemática 20・ ano	スザノ or カリタス
53	A ESCOLA É NOSSA Português 1・0 ano	スザノ or カリタス
54	A ESCOLA É NOSSA Português 1・0 ano	スザノ or カリタス
55	A ESCOLA É NOSSA Português 4・0 ano	スザノ or カリタス
56	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 1・0 ano	スザノ or カリタス
57	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 1・0 ano	スザノ or カリタス
58	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 1・0 ano	スザノ or カリタス
59	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 2・0 ano	スザノ or カリタス
60	A ESCOLA É NOSSA Ciências 1・0 ano	スザノ or カリタス
61	A ESCOLA É NOSSA Ciências 1・0 ano	スザノ or カリタス
62	A ESCOLA É NOSSA Ciências 1・0 ano	スザノ or カリタス
63	A ESCOLA É NOSSA Ciências 2・0 ano	スザノ or カリタス
64	PORTA ABERTA 20・ ano	スザノ or カリタス
65	PORTA ABERTA 2 SÉRIE	スザノ or カリタス
66	VENDA PROIBIDA Para entender a HISTÓRIA 60・ ano	スザノ or カリタス
67	VENDA PROIBIDA Para entender a HISTÓRIA 70・ ano	スザノ or カリタス
68	VENDA PROIBIDA Para entender a HISTÓRIA 80・ ano	スザノ or カリタス
69	VENDA PROIBIDA Para entender a HISTÓRIA 90・ ano	スザノ or カリタス
70	NOVO Dáilogo 80・ ano	スザノ or カリタス
71	NOVO Dáilogo 90・ ano	スザノ or カリタス

通し 番号	書 籍 名 称	寄贈場所
72	VENDA PROIBIDA Ciências 60º ano	スザノ or カリタス
73	VENDA PROIBIDA Ciências 70º ano	スザノ or カリタス
74	VENDA PROIBIDA Ciências 80º ano	スザノ or カリタス
75	VENDA PROIBIDA Ciências 90º ano	スザノ or カリタス
76	A Conguista da Matemática 60º ano	スザノ or カリタス
77	A Conguista da Matemática 70º ano	スザノ or カリタス
78	A Conguista da Matemática 80º ano	スザノ or カリタス
79	A Conguista da Matemática 90º ano	スザノ or カリタス
80	A ESCOLA É NOSSA Matemática 30º ano	カリタス学園
81	A ESCOLA É NOSSA Português 3º ano	カリタス学園
82	A ESCOLA É NOSSA História e Geografia 3º ano	カリタス学園
83	A ESCOLA É NOSSA Ciências 3º ano	カリタス学園
84	A ESCOLA É NOSSA Ciências 5º ano	カリタス学園
85	VENDA PROIBIDA GEOGRAFIA 60º ano	カリタス学園
86	VENDA PROIBIDA GEOGRAFIA 70º ano	カリタス学園
87	VENDA PROIBIDA GEOGRAFIA 80º ano	カリタス学園
88	VENDA PROIBIDA GEOGRAFIA 90º ano	カリタス学園
89	O mundo da gente Educação Infantil 1	カリタス学園
90	O mundo da gente Educação Infantil 2	カリタス学園
91	O mundo da gente Educação Infantil 3	カリタス学園
92	O mundo da gente Educação Infantil 3	カリタス学園
93	ブラジル日系コロニアガイドブック	田中規子さん
94	meu primeiro livro de palavras	
95	ATLAS DO MUNDO	
96	ATLAS DO BRASIL COM ANIMAIS	
97	ATLAS de ANIMAIS em EXTINÇÃO	
98	Um dia na AMAZONIA	
99	ATLAS GEOGRAFICO ILUSTRADO	
100	Na minha escola todo mundo é igual	
101	Palavrinhas Divertidas	
102	Palavrinhas Divertidas da Fazenda	
103	Meu Primeiro Atlas geografico	
104	DICIONÁRIO	
105	VOLTA AO MUNDO 52 HISTÓRIAS	
106	JAPOPOP O Poder da Cultura Pop Japonesa	
107	HISTÓRIA DO JAPÃO EM MANGÁ	
108	Anais do Simpósio “15 Anos do Movimento Dekassegui – Desafios e Perspectivas”	
109	Novo Dicionário Romanizado Japonês-Português 日葡辞典	
110	日・ポ対照 ブラジル国歌独習書	
111	ブラジル日本移民史料館	

通し 番号	書 籍 名 称	寄贈場所
112	Museu Histórico da Imigração Japonesa no Brasil	
113	ブラジル 日本移民・日系社会史年表	
114	MICHAELLIS DICIONÁRIO PRÁTICO JAPONÊS-PORTUGUÊS 和 葡辞典	
115	MICHAELLIS DICIONÁRIO PRÁTICO PORTUGUÊS-JAPONÊS 葡 和辞典	
116	As Histórias Preferidas das Crianças Japonesas 日本の子供の大好きなお話 第一集	
117	As Histórias Preferidas das Crianças Japonesas 日本の子供の大好きなお話 第二集	
118	ブラジルの輸出用養鶏業界における日系人の存在 1908－2008	
119	CURSO BÁSICO DE JAPONÊS 1 プログレッシブ 日本語 初級	
120	CURSO BÁSICO DE JAPONÊS 2 プログレッシブ 日本語 初級	
121	CURSO BÁSICO DE JAPONÊS 3 プログレッシブ 日本語 初級	
122	CURSO BÁSICO DE JAPONÊS 4 プログレッシブ 日本語 初級	
123	きそ にほんご 1	
124	きそ にほんご 2	
125	きそ にほんご 3	
126	きそ にほんご 4	
127	CONVERSAÇÃO EM JAPONÊS ETAPA 1 日本語 KAIWA BOOK	
128	CONVERSAÇÃO EM JAPONÊS ETAPA 2 日本語 KAIWA BOOK	
129	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 1	
130	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 2	
131	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 3	
132	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 1 れんしゅうちょう	
133	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 2上 れんしゅうちょう	
134	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 2下 れんしゅうちょう	
135	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 3上 れんしゅうちょう	
136	改訂 一、二、三、にほんごで話しましょう 3下 れんしゅうちょう	
137	Arigato ありがとう	
138	DICIONÁRIO ILUSTRADO ENTENDENDO JAPONÊS	
139	HISTÓRIA DO ENSINO DA LÍNGUA JAPONESA NO BRASIL	
140	BANZAI! HISTÓRIA DA IMIGRAÇÃO JAPONESA NO BRASIL EM MANGÁ 日本移民の歴史	
141	ANOS DA IMIGRAÇÃO JAPONESA	

ブラジル 関 連 書 籍 リ ス ト(購入場所:日本)

通し 番号	書 籍 名 称	出版社
142	DVD教材 実写映像で学ぶ日本の学校生活とことば ようこそ！さくら小学校へ ～みんな なかまだ ～	社)国際日本語普及 協会(AJALT)
143	初級前半 日本語教科書「にほんごドレミ」A4判 158 頁	(財)海外日系人協 会
144	「にほんごドレミ」教師用指導マニュアルA4判 32 頁	(財)海外日系人協 会
145	「にほんごドレミ」聴解教材CD 74 分・2 枚組	(財)海外日系人協 会
146	「にほんごドレミ」聴解教材スクリプト A4判 62 頁	(財)海外日系人協 会
147	「にほんごドレミ」聴解教材タスクシート A4判 30 頁	(財)海外日系人協 会
148	「にほんごドレミ」文型練習帳 A4判 65 頁	(財)海外日系人協 会
149	初級前半 日本語教科書「にほんごジャンプ」A4判 174 頁	(財)海外日系人協 会
150	「にほんごジャンプ」教師用指導マニュアルA4判 60 頁	(財)海外日系人協 会
151	「にほんごジャンプ」聴解教材CD 74 分・2 枚組	(財)海外日系人協 会
152	「にほんごジャンプ」聴解教材スクリプト A4判 61 頁	(財)海外日系人協 会
153	「にほんごジャンプ」聴解教材タスクシート A4判 20 頁	(財)海外日系人協 会
154	「にほんごジャンプ」文型練習帳	(財)海外日系人協 会
155	中級 日本語教科書「にほんごチャレンジ」A4判 193 頁	(財)海外日系人協 会
156	「にほんごチャレンジ」教師用指導マニュアルA4判 61 頁	(財)海外日系人協 会
157	「にほんごチャレンジ」聴解教材CD 74 分・2 枚組	(財)海外日系人協 会
158	「にほんごチャレンジ」聴解教材スクリプト A4判 61 頁	(財)海外日系人協 会
159	「にほんごチャレンジ」教室活動教材 A4判 41 頁	(財)海外日系人協 会
160	「日本語文法解説書」 A4判 166 頁	(財)海外日系人協 会
161	百年史別巻 写真集『目で見ると感じる ブラジル日本移民の百年』B5 判	風響社
162	Kids' Map 日本のわかるちずのえほん	学習研究社
163	Kids' Map 世界のわかるちずのえほん	学習研究社

以 上

2.2.2 第2回 研究会（公開）

開催日時： 2009年9月23 日（水） 10:30 ～ 12:00

開催場所： 愛知県立大学長久手キャンパス 学術文化交流センター 文化交流室A

（愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3）

タイトル： 学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育一岐阜県可児市の取り組みー

参加者（敬称略）：

【発表者】 小川 裕美〔可児市教育委員会学校教育課 外国人児童生徒コーディネーター 〕

【活動協力者】 小山幾子, 高木秀近, 藪崎昭彦, 中村裕, 勅使千鶴

【一般】

深見麻衣〔NPO法人子どもの国〕, 黒田芳嗣〔ユネスコ協会豊橋支部〕, 横田愛美〔愛知県立大学学生〕,

倉地洋子〔愛知県立大学学生〕, 森本久美子〔愛知県立大卒業生〕

【活動実施者】 松本一子, 宮谷敦美, 高阪香津美, 東弘子（司会）

【事務担当】 内山久子

本研究会の要点を以下に示す。

1 小川裕美氏による講演

- ・ 日本での外国人児童生徒への教育のとりくみの事例（「ばら教室KANI」）の紹介
- ・ リーマンショック後の動き
- ・ 外国人児童生徒と日本語教育

2 質疑応答

- ・ 可児での就学前指導について
- ・ 不就学への対応
- ・ 豊田の事例
- ・ コーディネーターの役割
- ・ 運営委員会による連携, 運営会議, 現場実習, 研修会など

以 上

研 究 会 記 録

【 司会者挨拶 】

愛知県立大学の東です。現在県立大学では、「日系社会青年ボランティア『現職教員特別参加制度』活動支援のための教育協力システムの形成」というタイトルの文部科学省の事業で、日系社会ボランティアとしてブラジルに派遣されている現職の先生たちの支援を通して、日本やブラジルにいる日系の子どもたちの学習支援をどう考えるかというプロジェクトに取り組んでいます。ブラジルの日系人社会のことも、日本の日系人社会のことも双方に重要だと考えています。

本日は、可児市の取り組みについて、可児市教育委員会学校教育課外国人児童生徒コーディネーターの小川裕美先生にお話をいただきます。可児市の「ばら教室」の概略と、今、社会情勢が動いている中で、子どもたちがどんな様子であるかということについてご紹介いただいた後、フリートークとしたいと思います。

この事業で、先週1週間、私と宮谷の2人がサンパウロに出張に行ってきました。今回の出張では、現職教員が派遣されている主に日系の小学校や、出稼ぎ帰りの子どもたちの支援を始めている「かえるプロジェクト」が企画した教室を見学したり、サンパウロ大学の方に話を伺ったりしながら、初めてブラジルを見てきました。ブラジルの子どもたちに限ったことではありませんが、親の就労が不安定であるために振り回される子どもたちの状況は、想像以上に不安定です。精神的な安定のためには、周りのサポートが必要だなと強く感じました。

今日は、そのサポートの1つともいえる可児市での取り組みについてお話しいたします。小川先生、よろしくお願いいたします。

【 小川氏の講演 】

皆さん、こんにちは。可児市教育委員会外国人児童生徒コーディネーターの小川裕美と申します。今日はお越しくださいます、ありがとうございます。お招きくださいます、ありがとうございます。

今日は「学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育～岐阜県可児市の取り組み～」というタイトルでお話しさせていただきます。宮谷先生から、特にリーマンショック後の動きについてお話をというご依頼がありましたので、そちらの話も少し絡めたいなと思っています。

まず初めに、DVD をご覧になっていただきたいと思います。2007 年から 2008 年にかけて撮影された約1年前の映像です。可児市の概略を知っていただくとともに、リーマンショックの後の様子と比べていただけるかと思ひまして持ってきました。

< DVD 上映 >

このDVDは2007年度に撮られたものですから、現在、教育委員会の職員はほぼ変わってしまいましたが、学校の先生の中には、今年度も担当しておられる方がいらっしゃいます。

ここからはパワーポイント(資料参照)に従ってお話いたします。今日のお話は、可児市の外国人児童生徒教育についての概要、それから、特にリーマンシヨ



ック後の動きも含めた外国人児童生徒を取り巻く状況、最後に、外国人児童生徒と日本語教育についてお話しいたします。【→シート1】

可児市の外国人児童生徒教育について

まず初めに、可児市の外国人児童生徒教育についてです。

可児市の概要です。愛知県から近いので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、愛知県犬山市の隣、岐阜県の南のほうにありますが人口約10万人の都市です。合併をして、飛び地で旧兼山町と一緒にっていますが、外国人の方が多く住んでいらっしゃるの、美濃加茂市と接している部分、可児市の北のほうです。【→シート2】

外国人登録者数は、2008年まではほぼ階段状に増えていきましたが、今年2009年になって、やはり減っています。現在は人口の6.8%が外国人の方です。【→シート3】それに伴いまして、外国人児童生徒の数も2009年になって減っています。中学校の子は微増です。学校の中で外国人の子どもの占める割合が、9年前、2000年には0.7%でしたが、今年度は4.3%になっています。【→シート4】

1990年に入管法が変わってから、可児市でも外国の方が多く住まわれるようになり、外国の子どもたちが増えました。それに伴って、授業が分からない子、学校生活への不適応を起こす子、自暴自棄になってしまう子、生徒指導上の問題を起こす子、日本の学校のことを知らない子をどうするかということが課題となり、その対応策として、①通訳サポーターの配置、②教育相談体制の整備、③「ばら教室」の開設、④教科指導としての国際教室の充実が行われてきました。【→シート5】

可児市では1990年、入管法が変わった当時から通訳指導員を配置しています。以後、今年度、2009年まで19年間のあゆみがあります。2000年には、可児市国際化施策大綱が策定され、2003年から2004年にかけて、外国人の子どもの教育環境に関する実態調査を行っています。この調査は、行政、民間団体、国際交流協会、それから研究者が協働で行ったものです。その結果、7%の不就学があることが分かりました。その調査結果を踏まえ、これまでの施策を改善し、総合的にまとめて、2005年から外国人児童・生徒の学習保障事業をスタートしています。それと同時に設置されたのが「ばら教室 KANI」です。【→シート6、7】

こちらは現在の外国人児童・生徒の学習保障事業のチャート図です。外国人の方が可児市に転入してくると、まず、市民課で外国人登録を行います。子どもがいる場合は、外国人登録係のほうで「どこの学校に行きますか」と尋ね、「日本の学校へ」という場合、4階の学校教育課に案内して入学手続きをしてもらいます。日本の子と同じように各地域の学校に在籍することが基本ですので、まずは在籍校へ行ってもらいます。その上で、日本の学校が初めてで、日本語が分からない子には、「ばら教室」を紹介します。各学校に在籍という形で「ばら教室」に通ってもらうこととなります。自分の在籍校を意識できるように、必ず一番初めに在籍校に行ってもらいます。これがとても大事です。【→シート8】

ステップ1は「ばら教室 KANI」です。「ばら教室 KANI」へは、今、お話ししましたように、自分の学校に在籍の状態です。そこを修了しますと、学校に戻ります。全部の学校ではありませんが、国際教室が設置されていますので、自分の教室と国際教室の両方に通いながら、教科と日本語をつなぐようにします。国際教室での学習(ステップ2)がさらに深まったところで、自分のクラス(ステップ3)でやっていけるように、こういう3つのステップで考えています。保護者の方にも、子どもにも「3つのステップがあるんだよ」と説明しています。【→シート9】

ばら教室 KANI

では、「ばら教室 KANI」のことをご説明します。可児市の外国人児童・生徒の学習保障事業の大きな柱の1つに「ばら教室」の設置があります。正式名称は「ばら教室 KANI」です。外国の方は「ばら」と呼んだりもします。対象は、初めて日本の公立小中学校への就学を希望する外国人児童生徒です。二重国籍の子や日本国籍の子も来ています。目的は、学校教育で必要な生活指導や初期日本語指導を集中的に行い、在籍校での指導が円滑に行えるよう支援することです。指導だけではなく、きちんと学校で生活できるように、楽しく学校に戻れるようにと考えて行っています。【→シート10】

「ばら教室」の時間割はこうなっています。午前3時間、午後1時間です。午前中の2時間目には算数を入れています。

まず、朝の会は9時半に始まります。毎日必ず日直を2人決めて、朝の挨拶をします。「おはようございます」から始まります。出欠も日直がとります。毎朝、『あいうえおの歌』と『九九の歌』を歌います。CDをかけて歌っています。子どもの下手うまな、下手でも、うまいような、よく分からない感じの難しい歌ですが、毎日聴いているうちに覚えるようです。初めはボーっとしていますが、1週間、2週間ぐらいたつと、少しずつ歌い始めます。九九を知らない子でも、日本語で口ずさんだりします。そして、新しいお友達が来たときには、全員が自己紹介をします。在籍校に戻ったときに必ず自己紹介をする場面がありますので、その練習も兼ねてということです。

1時間目と3時間目は日本語の勉強をします。習熟度と年齢にあわせて、毎週、グループ分けをします。週の最後の金曜日に、職員で子どもたちの様子を話し合いながら、かえるべきかどうかを決めていきます。平仮名、片仮名の読み書き、文章を読むこと、漢字の練習などを行います。自分の気持ちを伝える言葉の獲得を狙っています。

2時間目は算数、数学を行っています。算数、数学といっても、文章題まではなかなかいきませんので、基本的には計算をしています。「ばら教室」を修了しても、日本語が完璧にできるわけではありませんので、自分の学校に戻ったときに、また壁を感じることもあるかもしれません。そういう中で、何か1つでも自信を持てるものがあればということで指導しています。

これも学年ではなく、習熟度別に分けています。中学生でも、九九が分からない子もいますし、小学校1年生でも、簡単な割り算ができる子もいます。本当にばらばらなので、習熟度に分けています。小学校1年生ぐらいですと、まだ余裕がありますので、文章題を中心にやっています。日本語と一緒に算数を教えています。

算数は、数字が一緒なので、やりやすいように思いますが、考え方や計算の仕方は国によって違います。例えば、 $8+6$ 。日本では10の固まりで計算するようにしますから、8を10にするために、6から2もらって10にして、10と4を足して14という計算の仕方をする。ただ、全員に日本のやり方を教えるわけではありません。国のやり方で習得している子はそのままで、これから覚える子には日本のやり方で教えます。特に割り算の筆算の仕方などは混乱しがちですので、ネイティブの職員が説明します。

「ばら教室」には今、4名の職員がいます。室長、ブラジル人の職員、フィリピン人の職員、私の4名です。室長は日本の学校の校長を経た退職校長です。基本的に日本語で指導していますが、困ったとき、詳しい説明が必要なとき、保護者の方に日本の学校を知ってもらおうときなど、

母語で話すこともあります。

3時間目まで勉強を終わりますと、給食と昼休みです。歩いて5分のところにある小学校に行きます。途中で信号が1つあります。可見市では朝、子どもたちが分団旗といわれる黄色い旗を持って分団で登校しますので、その登校のスタイルを取り入れて、日直の子がその旗を持って、みんなで渡ります。その間は、自由に好きなように、何語でも話していいことになっています。新しいことを勉強した子についていって、「ニンガ幾つ？」とか、そういうようなことをやったりもします。

給食は、給食の時間に空き教室となっている国際教室をお借りして食べます。配膳、掃除はグループで分担します。学校に戻ったときにスムーズにできるように、なるべく同じようにとの考えから、配膳も給食エプロンを使って行っています。

給食で初めて日本食を口にする子も多いので、無理強いはいしません。私たちが「もうちょっと食べてみて」と言うよりも先に、周りの子たちが「ちょっと、ちょっと、ちょっとだけ」というふうに応援する姿をよく見かけます。初めは、かたくなに食べない子もいます。そういう場合には、保護者の方に「うんとおなかがすいているので、おうちへ帰ったら食べさせてあげてください」とお伝えします。でも、やはりおなかがすきますので、徐々に食べ始めます。修了するころまでに、全部は無理でも、少しずつ食べられるようになります。

昼休みは、引き続き、小学校の校庭で遊びます。外国籍の子が、今ですと、15%ぐらいいる小学校ですが、日本の子も外国籍の子も新しく来た子にとっても優しい気持ちの持てる子たちですので、『ばら教室』に新しい子が入ったの？」とよく聞きに来てくれます。そして、一緒に遊んでいます。

「ばら教室」の子にとっては、学校という施設とつかず離れずのいい関係ができています。初めから完全に学校のスタイルに入ってしまうのではないし、学校から全く離れているわけでもありません。毎日少しですが、学校の中にいられます。「こんな大きな学校なんだ」「こんな大きなグラウンドで遊べるんだ」という気持ちが、「早く学校へ行きたい」という学びのモチベーションになっています。

昼休みが終わりますと、「ばら教室」に戻って、掃除を行います。掃除もグループで行っています。毎週分担をかえるので、掃除の仕方を覚えられます。

4時間目も日本語ですが、勉強というよりは、日本語での活動が中心です。今ですと、ちょうど平仮名、片仮名を覚えた子が多く、その定着を図りたいので、平仮名を書いたビンゴを行っています。数字のビンゴをやることもあります。折り紙を折りながら、言葉を覚えていたり、豆つかみをしながら、箸の持ち方を覚えたり、そういったことをやっています。【→シート11】

さまざまな体験活動を4時間目やほかの時間で行っています。この体験はすべて地域の方の協力によって成り立っています。こちらの麦わら帽子のおじさまは、「ばら教室」のすぐ前に住んでいらっしゃる方ですが、本当にいろいろ協力していただきます。春はイチゴ狩り、秋はサツマイモ掘りというような感じで、国でも体験したことがないようなことを子どもたちにさせてください。地域の方と「ああ、このイモ、大きいね」とか、「イチゴ、おいしいね、甘いね」と言いながら、地域の方に見守られているという安心感の中で学習しています。

社会見学は、年に2回行っています。「ばら教室」に通室する期間は、子どもによって違いますが、2カ月から4カ月ぐらいですので、半年に1回社会見学をしても、2回行けるお得な子はいません。今、定番のコースとして犬山城へ行っています。見て分かりやすい日本文化ですし、「ばら教室」から20分ぐらいと割と近いので。春の社会見学で行きますと、こいのぼりが飾っ

てありますので、「これは何？」というふうな話が出たり、お城に入りますと、武将の名字が書いてありますので、自分の名字はないかと探す子がいたり、日本全国のお城の写真を見ては、「いつかお金持ちになったら、これのどれかを建てるんだ」と言う子がいたり。毎回違う子と行きますので、そういう発見がまた楽しいなと思っています。

市の「花いっぱい運動」など、行事にも積極的に参加しています。

「ばら教室」では、学びを終えた子のために、修了式を行います。保護者の方、在籍校の先生、地域の方々にも参加していただきます。本人たちの満面の笑みを見てもお分かりかと思いますが、「これで1つステップアップした」「これで次にステップに行ける」という喜びを感じていますし、残る子どもたちは「あの子たちみたいに、もっと日本語ができるようになりたい」「あの子たちみたいに、早く学校に行けるようになりたい」と思うようです。大抵1人か2人は「次は誰？」と聞いてきます。「次はあなたよ」と聞きたいんだろうと思いますが、「誰だろうね」という話をしています。修了式は、学校へ行きたいというモチベーションを高める機会にもなっているということです。

「ばら教室」の指導内容です。日本語指導だけではなく、学校生活に適応できるように総合的な指導を行っています。やはり子どもによって背景はそれぞれですので、個に応じた指導を心がけています。【→シート12】

「ばら教室」を修了しますと、各在籍校に戻りまして、国際教室へ行きます。これは市内で一番外国籍の子が多い中学校の国際教室の様子です。会話のクラス、読み書き、特に漢字ですが、その学習、それから、教科学習も国際教室で行っています。

中学生になると、進路がとても大事になってきます。ただ日本語を覚えるだけではなく、教科も、そして、受験に結び付いていかないと、なかなか進路が開けないという現実の中で、本年度からは国際教室で社会を勉強するという取り組みを始めています。【→シート13、14、15】

これは可児市外国人児童・生徒の学習保障事業の構成図です。大事なものを、ハード、ソフト、ネットワークに分けて考えています。今日こちらに来てくださっています可児市の国際交流協会の方々からいろいろなご支援をいただいています。建物を造ったら終わりではなく、そこで働く人の指導力の向上、保護者の方との相談体制の充実、もちろん子どもたちへの支援のより一層の充実、そういったことを目指しています。【→シート16】

リーマンショック後のこどもたちは

こちらは2009年1月の写真です。25名いました。本当にぎゅうぎゅうです。まっすぐ歩けないので、いつもカニさん歩きでした。そして、これが9月17日、一番最近の写真です。同じ教室です。このときは1名欠席でしたが、7名です。たった半年で状況がこれだけ変わりました。

「ばら教室 KANI」の通室児童生徒の推移です。初めに見ていただいた写真のとき、平成20年度1月から3月にかけて、飛び抜けて多くなっています。ブラジル人学校より19名の編入があったからです。リーマンショックで外国人の子どもたちは減るだろうと予想していましたが、実際にはブラジル人学校から来た子たちで「ばら教室」はいっぱいになったということです。ただ、「ばら教室」で勉強した子は在籍校に戻っていきますので、3月に一斉に修了し、今年度はうんと減っています。【→シート17】

4月からは、フィリピン、ブラジル、中国から入国がありました。ブラジルの子はブラジルから直接入国しましたが、お母さんが日本の方で、日本語がよくできると。フィリピンからは、3

年前から、4月から6月にかけての入国が多くなっています。フィリピンの学校は3月に終わりますので、それから新年度が始まる6月までの間に、日系のフィリピンの方が子どもを連れて来るという傾向が3年前からあります。今年度は少なくはなっていますが、同じような傾向が見られます。9月17日現在、フィリピンの子が7名通室しています。【→シート18】

転出に関しては、やはり日本の学校にあわせて、3月と7月の帰国、それから、市外への転出が増加しています。若干ですが、ブラジル人学校への編入もあります。やはり帰国を見据えてということです。【→シート19】

もう1つ、子どもたちを取り巻く状況として、不就学があります。可児市では、リーマンショック前からですが、**不就学ゼロを目指して、市役所の外国人登録係と連携して、登録時に就学の案内をしています。**それから、毎月、外国人登録を調査しまして、学齢期の子どもをピックアップします。その中で日本の学校に行っていない子、ブラジル人学校に行っている可能性もありますが、その子たちに対して、こちらの写真のような就学案内を送付しています。連絡をください、学校教育課に来てくださいという案内ですが、それだけではあまり反応がないので、家庭訪問をして実際にお話をするようにしています。【→シート20】

そういう中で見えてくる就学していない理由です。一番多いのは、転居です。ノックしても誰もいない。メーターも動いていない。隣の方に聞くと、「越されたよ」とか。お会いできた方に不就学の理由を聞くと、「近い将来、国に帰るから」「経済的に難しい」とおっしゃいます。

ただ、**近い将来、国に帰るからといっても、いつ帰るかは決まっていないんです。**国に帰るからと言いながら、3カ月も日本にいた子もいます。いつかが決まらないまま、6カ月、9カ月、1年とたってしまうので、「**まずは学校に来ませんか**」という話をします。

経済的に難しいという理由についても、いくらかかるかがはっきり分からないことが不安の原因だと思いますので、学校に通うのに必要な金額を明確に説明するようにしています。毎月変わりますし、学校によっても違いますが、「準要保護などの制度を利用すれば、経済的な負担は軽くなりますよ」という話もしています。

家庭訪問でお話を聞く中で思うことは、顔を合わせることで、詳しい情報を伝えることの大切さです。それによって、あっさり就学につながることもあります。実際にお会いしてみると、「いやいや、絶対に学校は行きません」「学校は怖いから」「日本の学校はいじめがあるから」、そういうふうにおっしゃる方はいません。「こうこうこういう理由で日本の学校へ行ったほうがいいですよ」「こういうルートで日本の学校、就学できますよ」という話をすると、「じゃ、行きます」ということが結構多く、拍子抜けしてしまうほどですが、とてもうれしいことです。**ちょっとした情報を伝えることで、就学につながるんだなと毎回思います。**【→シート21】

外国人児童生徒と日本語教育

日本語教育の話は外国人児童生徒を語る中でよく出てきますが、やはりそれはその一部に過ぎないと思っています。この図が完璧だとは思いませんが、1つの例として見てください。今までお話してきたことでいうと、まず、環境が大事な要因であると思います。その子がここで勉強したいと思っても、かなわないときもあります。子どもにはどうしようもできない環境があります。だからこそ、周りが環境を整えていくことが大事です。では、環境が整った上で何を勉強するかというと、もちろん言葉もそうですが、やはり人格形成が重要になってきます。**生活を通して、**

よりよい人間に育てていく、そういう中での言葉であり、学習であると私は思っています。ですので、言葉だけではなく、生活指導だけではなく、日本文化を教えるだけではなく、やはり総合的なアプローチが必要だと思います。【→シート 22】

現在の可児市の取り組みは、今までお話ししたとおりですが、さらなる外国人児童生徒教育への理解と幅広い支援体制、指導力の向上、将来へ夢や希望が持てる指導が求められています。進学も若干増えていますが、まだまだ難しい状況です。進学をする子が増えるにつれ、進学希望者がとても増えてきています。進学したいという希望を持つ子が増えることはとても素晴らしいことです。希望する子がちゃんと進学できるように、そのための支援体制をつくっていききたいと思っています。それから、保護者や企業、地域との連携をさらに深めていききたいと思っています。【→シート 23】

以上で終わります。ありがとうございます。

【質疑応答】

●学校に行く前の外国籍の子どもが、幼稚園、保育園でどのような形で受け入れられているのか、可児市の状況を知りたい。

小川：現在可児市では、1つの保育園に通訳が配置されている。その保育園は外国籍の子が一番多く在籍しているので、そういう措置がとられている。

公立の幼稚園は1校だけだが、そちらは外国籍の子がとても少ない地域のため、市のほうで配置はしていない。外国籍の子が多く集まる私立幼稚園はノウハウを持っている。

小学1年生に上がったとき、幼稚園、保育園に通った子とそうでない子とでは、言葉はもちろん、生活習慣に関しても大きな差がある。そのため、本当にわずかな期間でもいいので、準備ができるといいと思っている。

中村：文部科学省の在住外国人の支援というプロジェクトに申請し、4つの教室をやることにしている。

1つめは、学校に入る前の子どもたちを対象にした指導。2つめは、不就学をなくすというプロジェクト。ブラジル人学校をドロップアウトした子どもたちを対象としたバイリンガルを使った指導。3つめは、就学年齢を超えた子どもたち、15歳以上の子どもたちで、学校に行っていない子どもたちを対象にした希望教室。4つめは、母語を保護して勉強していくというもの。ポルトガル語を話せる先生がいるので、その方たちをお願いして、母語で教科教育をする。

●小川さんから、今、ブラジルの子どもたちだけではなく、フィリピンの子どもたちが非常に増えてきているという話があったが、それは可児だけではなく、いろいろな地域で見られることである。可児では、その子どもたちの親の在留資格はどのようなものなのか。

小川：定住者。全国的に見たら、連れ子のケースが多いと思うが、可児市の場合は多くが日系の

家庭。「ばら教室」はできて5年目であるが、連れ子で来た子は今までに3人だけで、ほとんど大多数が日系の子である。そのため、日系ブラジル人の子たちと状況は同じ。保護者の方が働いている場所も似ているし、呼び寄せの状況も同じ。お父さん、お母さんが先に日本に来て仕事をして、生活が安定したところでお子さんを連れてくるというパターンが3年前から多くなっている。国際結婚はわずか。

●豊橋市の状況

黒田：21年度のデータをもとに言うと、ブラジル人の生徒さんが892人。不就学率がかかなり高く、26.3%である。岩田小学校など、集住しているところが3カ所ぐらいある。

ブラジル人協会が支援してポルトガル語教室を開いているが、生徒が少ないため、3つあったうち2つつぶれてしまった。1つ残ったポルトガル語教室も生徒数は10人を割っている。

公教育を受けている子どもたちは、ほとんど日本語ができるが、親はポルトガル語しか話せない。また、子どもたちはバイリンガルでも、会話ができて、書けない。これが大きな問題になっている。

市民の中にも学校の先生にもポルトガル語ができる人が少ない。そうすると、数千人いる子どもたちの就学機会、高等教育へ上げていく機会をどのようにつくっていくかというのは、もう市の単位ではどうにもならないし、市民の単位でもどうにもならないと思われる。また、実態調査ができていないから、対応の仕方がないというのが現状である。実態は個々のケースによって全然違うし、校区によっても違うので、どういう方策がいいのかそれぞれ試行錯誤という感じがする。

最後にポルトガル語を扱う大学があまりにも少ないと思う。もっと南米の大学との交流や研究者間の交流を進めるべきだと思う。

●豊田市の状況

藪崎：豊田市の状況は、学校教育の立場から見ると、可児の状況と非常によく似たものがある。対策としても、学校に行く前の初期の指導をしているし、指導の内容や方法もよく似ている。リーマンショック後の子どもたちの動きについても同じような感じである。

不就学の調査については、豊田市は基本のデータから、公立学校に通っている子、ブラジル人学校に通っている子、すでに帰国した子を抜いたら、400人の対象者がいたことがわかり、8月から2ヶ月ぐらいにわたって調べ、まもなく集計をするところである。

私の回ったところは、ほとんどが帰国というか、留守というか、いない状況だった。明らかに学校に行かずに遊んでいて、「学校へ来なよ」と話せたケースは、40件中1件もなかった。

●コーディネーターの役割は市の学校教育課の職員が片手間でできるような仕事ではない。従って、豊田市でも小川さんのようにコーディネートする方を求めている状況であるが、小川さんはお仕事として今のようなことをやっていらっしゃるのか。身分についても併せて教えていただきたい。

小川：コーディネーターの仕事は大きく3つある。

1つ目は、「ばら教室」での指導。保護者の方にとっても初めての日本の学校であるので、そのオリエンテーションも行っている。

2つ目は、学校に戻った子へのサポート。市内には16の学校があるので、指導に入ることではないが、「ばら教室」から学校へ戻った子が今どうしているかということを見せてもらったり、学校での指導の仕方を勉強させてもらったりする。それを「ばら教室」に持ち帰って、より学校に近い形で指導することで、子どもたちがスムーズに学校生活を送れるように改善している。

3つ目は、外国人登録を調べて就学調査をすること。

もちろん、市役所、学校、市の国際交流協会、地域の方との連携も含まれている。

私の身分は、市役所の臨時任用職員という形になっている。7.5時間勤務で、各種保険はある。

中村：補足すると、可児市には外国人児童・生徒の学習保障事業実施基準というのがあり、その中でコーディネーターの役割として5つ挙げている。①外国人児童・生徒の教育に関する学習支援を行う。②同じく、教育状況に関する調査研究を行う。③生徒に関する小中学校への支援・指導・助言を行う。④教育に関する関係団体との連絡調整を行う。⑤指導助手、巡回指導員、その他協力者への支援・指導・助言を行う。この5つが条文化されている。

小川：コーディネーターが一人で大丈夫とはいえないが、「ばら教室」という施設は、初めて日本の学校に来た子への指導と、可児市にいる子どもたち全体の指導という両方の役割を担っている。外国人児童生徒コーディネーターという肩書は私1人であるが、「ばら教室」の職員4名全員で行っている。ブラジル人の職員が母親の先輩として話をすることもあるし、進路のことでは室長が日本の学校の話をすることもある。それぞれの専門をうまく組み合わせてやっている。

また、コーディネーターという名前ではないが、各学校に在籍している日本語指導員、通訳サポーターの方々は、実質的にその学校のコーディネーター的役割を担っている。

中村：16校が集まって、定期的に国際教室の担当者連絡会議を行っている。コーディネーターを含めて、毎回40人ぐらい参加する。そういう連絡調整をしながら共有している。

この連絡会議を主体的に牽引していくのは運営委員会。教育委員会、各学校の今のコーディネーター、指導員、日本語教師、市のまちづくり推進課、国際交流協会、そういったところの者が一緒になって連絡会議を開いている。連絡会議は1年に6回ある。現場実習や研修会といったものもある。持ち回りで研究授業を国際教室で行い、その授業を基に担当者会議を開くこともある。

東：役をつければいいのではなく、連携し合ったり、継続的に話し合いをしたりして、子どもたちの環境を整えるためのネットワークづくりをしていくことがとても重要だと感じる。可児ではそれを非常に意識的にしていることがよく伝わってきた。

●不就学の子の家庭訪問したときに、転居していないことがあるという話があったが、日本国内での転居、転入している場合があるのか。そういう子どもたちはどれぐらいいるのか。

小川：毎月の外国人登録の調査で、新しく可児市へ転入してきた子を、国内のほかの市町からの転入も含めて調べている。それから、市内の転居、可児市内で家をか変わった子についても調べている。どちらも出てくる。

可児市の外から来た子に関しては、全く新しい子たちなので、案内をする。市内転居に関しても、日本の学校ではなく、ブラジル人学校に通っていて辞めた可能性もあるので、そういった子にも声をかける。

ただ問題なのは、住居を移動した子に関しては毎月のデータに出てくるが、ブラジル人学校を辞めて、そのまま不就学になっている子が毎月のデータではつかめない。このようなケースでは地域の方の目、「あそこの子、学校へ行ってないんじゃないか」という情報が一番の頼りになる。

●教科指導を国際教室で行われるとのことだったが、高校への進学状況はどうか。

小川：昨年度、可児市内にいた外国人の中学3年生 30 名のうち 11 名が進学している。ただ、昨年度に関しては、先ほど見ていただいた 2009 年 1 月の写真の中に中学3年生の子が 4 名いて、彼らは実質的にまだ受験できる態勢が整っていなかったため、就学率が例年に比べて若干低い状況だったとも言える。
(了)

学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育 一岐阜県可児市の取り組みー

平成21年度
国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業
「日系社会青年ボランティア」現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成」
第二回公開研究会

小川 裕美

可児市教育委員会 学校教育課
外国人児童生徒コーディネーター

本日のメニュー

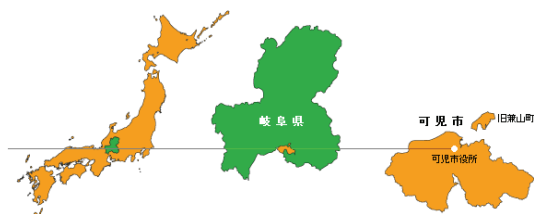
- ・可児市の外国人児童生徒教育
 - ・ばら教室KANI
 - ・在籍校「国際教室」
- ・外国人児童生徒を取り巻く状況
 - ・リーマンショック後の動き
 - ・不就学
- ・外国人児童生徒と日本語教育

1



可児市の概要

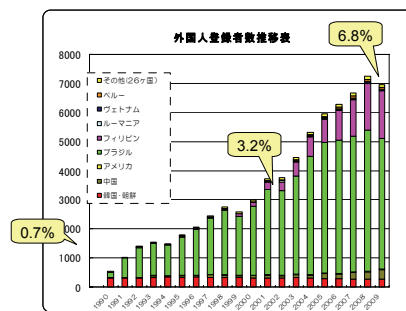
■可児市の位置



昭和30年 可児町発足(人口 26,063人)
昭和57年 可児市市制施行(人口 61,157人)
平成17年 兼山町合併
平成21年9月 人口102,223人 世帯数38,339世帯

2

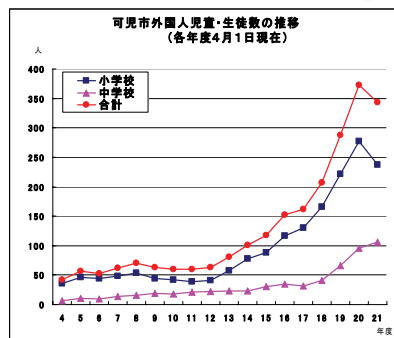
可児市における外国人登録者数



1990年 (H2) 534名 0.7%
2000年 (H12) 3,004名 3.2%
2009年 (H21) 6,961名 6.8%

3

可児市 外国人児童・生徒数



2000年 (H12) 全児童・生徒数8,925名外国人 63名0.7%
2009年 (H21) 全児童・生徒数8,614名外国人343名3.9%

4

外国人児童生徒の急増に伴う課題と対応

学校の指導での課題

- ① 授業が分からない児童生徒
- ② 学校生活への不適応を起こす児童生徒
- ③ 自暴自棄になる児童生徒
- ④ 生徒指導上の問題を起こす児童生徒
- ⑤ 日本の学校を知らない親子

その対応策

- ① 通訳サポーターの配置
- ② 教育相談体制の整備
- ③ 初期指導施設の開設⇒ばら教室KANI
- ④ 教科指導⇒国際教室の充実

5

平成2年度(1990年) 通訳指導員を配置

平成4年度(1992年)～
国人児童生徒交流会開始

平成12年(2000年)
可児市国際化施策大綱

平成15～16年度(2003～2004年)
外国人子どもたちの教育環境に関する
実態調査(行政・民間団体・研究者の
協働研究)を行う

平成17年度(2005年)
・外国人児童・生徒学習保障事業要綱」作成
・学校通訳指導教室「ばら教室KAN」開設
・日本語通訳指導教室の名称を国際教室に変更
・通訳サポーターの配置
・国際教室担当者会実施
・外国人児童生徒コーディネーターを配置

平成3年度(1991年)土田小学校
平成7年度(1995年)今渡北小学校
平成11年度(1999年)蘇南中学校
平成17年度(2005年)広見小学校

19年間の
あゆみ

平成17年
調査結果をふまえ、今までの施策を改善し、総合的にまとめる
とともに、可児市教育委員会事務
組織等に関する規則に定め、「
外国人児童生徒の学習保障
事業」をスタート

平成18・19年度(2006年)
・外国人児童生徒・保護者への
進路説明会実施
・外国人派遣会社との懇談会
実施

約7%
の不就学

6

[illegible]

外国人児童生徒の受け入れ体制

① 市民課(1階)
・外国人登録
・就学案内

② 学校教育課(4階)

③ 入学する小中学校
外国人児童・生徒担当

④ ばら教室 KANI

連携

通訳支援

まちづくり推進課(1階)
・通訳3名常駐
(ポルトガルと英語)

外国人児童生徒
コーディネーター

その日のう
ちに手続き

家族もれぐ
と包み込む

不安から
安心へ

入道時はコーディネーター
と面接(本人と保護者)

外国人児童生徒「デニータ」

**ステップ①
「ばら教室KANI」**

初めて小・中学校へ就学する外国人児童・生徒を対象に、学校教育で必要な生活指導や初めの日本語指導を集中的に行い、「ステップ②」へ進めることを支援する。

**「ばら教室KANI」
(担当: 学長、指導助手)**

**ステップ②
小中学校
「国際教室」**

ステップ①課程を修了した児童・生徒等を対象に、中・上級の日本語指導を行いながら、在籍学年に応じた教科学習を支援する。

**小・中学校内「国際教室」
(担当: 学長、指導助手)**

**小・中学校内「在籍学級等」
(担当: 学級担任、基幹指導員等)**

**ステップ③
小中学校
「在籍学級等」**

ステップ②課程を修了した外国人児童・生徒等を対象に、状況に応じながら補助的に教科学習を支援する。

**小・中学校内「在籍学級等」
(担当: 学級担任、指導助手もしくは基幹指導員、協力等)**

9:30	朝の
9:30~9:45	朝の会
9:50~10:30	1時間目:日本語
10:40~11:20	2時間目:算数
11:30~12:05	3時間目:日本語
12:20~13:05	給食
13:05~13:35	休み
13:50~14:05	掃除
14:10~14:50	4時間目:日本語
15:00	帰りの

「ばら教室KANI」の指導内容

学校生活に適応できる総合的な指導

- ① 日本語指導 ひらがな、カタカナ、あいさつ、日常会話、漢字
- ② 教科指導 算数・数学 国語(文章)
- ③ 学校生活指導 あいさつ、持ち物指導、学校の日課指導、給食指導、清掃指導、朝の会・帰りの会指導、日直・当番活動 等
- ④ 体験的な指導 社会見学、日本の行事体験、清掃ボランティア体験、修了式等

「自信と誇り」をもたせる指導 個に応じた指導

連携を基 に着々準備

- ① 2～4 月間
- ② 在籍校の担当者との連携
- ③ 保護者と連携
学習や生活の様子の交流、教育相談、日本の生活や教育についての理解
- ④ 準備期間
学習用具・制服等を、 裕をもって準備



12

在籍校「国際教室」

日本語初級会話の学習



13

日本語読み・書きの学習



通訳サポーター
が援助します。



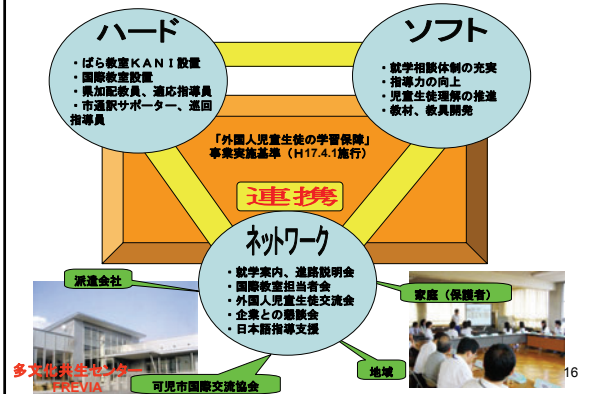
14

英語の学習



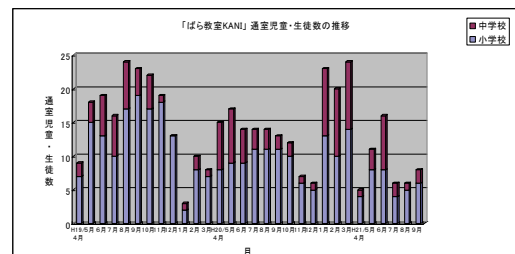
15

可児市外国人児童・生徒教育の構成図



16

ばら教室KANI 通室児童・生徒数の推移



平成21年9月18日までに274名が修了
平成21年9月18日現在 7名が通室

17

リーマンショック後の動き

●編入(ばら教室KANI通室の児童・生徒)

H21(2009)年

- ・1月～3月:ブラジル人学校より19名編入
それ以降、ブラジル人学校からの編入はゼロ
- ・4月～:フィリピン、ブラジル、中国から入国
- ・9月17日現在:フィリピン人7名通室中
- ・日本学校間の移動も毎月あり。

18

リーマンショック後の動き

●転出

H21(2009)年

- ・3月、7月に帰国、市外転入が増加。
- ・ブラジル人学校への編入も若 あり。

19

不就学ゼロを目指して

- ・市外国人登録係と連携し、登録時に就学案内
- ・毎月、外国人登録を調査
- ・学齢期の子どもの保護者に就学案内を送付
- ・反応のない場合は家庭訪問



20

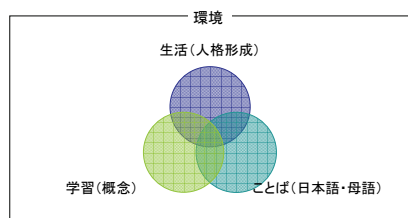
就学していない理由

家庭訪問での聞き取りより

- ・多くの場合は転居
- ・近い将来国へ帰るから
- ・経済的に難しい

21

外国人児童生徒教育と日本語教育



- ・日本語教育は外国人児童生徒教育の中の一部
- ・総合的なアプローチが必要

22

可児市の取り組み 現在、これから

多文化共生は を大切に 就学指導は総合的な指導を

- ① ばら教室KANIの初期指導は→
学校での初期指導の負担軽減=学習指導に力を入れられるようになった
本人・保護者の不安軽減・準備期間(修了式の後から)
- ② 入口で確実にキャッチ→連携・保護者との (人とのつながり)
- ③ 総合的な指導(日本語指導と生活指導を両 面 で)
→可児市の学校の生活(ルール・規範意識・特活)への適応
- ④ 国際教室担当者会を にしたネットワークの構築 (指導力向上)
- ⑤ 地域の理解と支援体制

地域でいちご狩り



さらに

- ① 外国人児童・生徒教育への理解と 広い支援体制
- ② 指導力の向上(学力向上へ向け特にステップ②③の指導力の向上)
及び教材の開発
- ③ 将来へ夢や希望がもてる指導=進学希望者増加への対応
- ④ 保護者や企業、地域との連携 (地域や社会で み込み育てる)

23

2.2.3 第3回 研究会

開催日時：2009年12月23日（祝・水）13:00～17:00

開催場所：愛知県産業労働センター 15階 愛知県立大学サテライトキャンパス
（愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38）

タイトル：ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点

参加者（敬称略）：

【発表者】

倉橋 徒夢 [EAS（エスコラ・アレグリア・デ・サベール）豊田 校長]

奈良橋 晴美 [EAS碧南 正通訳]

パウロ・ガルヴォン [エスコラ・サンパウロ 学校長]

グラウセリー・レイス [エスコラ・サンパウロ 教員]

大島 之弘 [日本語学習支援教室Vizinho 代表]

古川 カチア イツエ [ヒロ学園 教員]

丹羽 ジルセ 久美恵 [知立市教育委員会 学校教育課 日本語指導助手]

【活動協力者】

三澤由佳子，中根秀博，小山幾子，渡邊あづさ，久保真希子，今井さや香，
小川裕美，阿久津エルザ，菊池寛子，川上貴美恵，青木由香

【活動実施者】

小島祥美，松本一子，加藤史朗，松宮朝，高阪香津美（通訳），東弘子（司会）

【特別参加】 伊木・デ・フレイタス・ロドリゴ（愛知県立大学 4年生）

概要：

研究会の趣旨

日系ブラジル人の子どもたちの教育に直接関わっている人たちから話を聞くことによって、子どもたちが置かれている現在の状況を理解するとともに、子どもたちにとってよりよい教育を模索すること、また、日本の学校とブラジル人学校の双方からの視点から、互いに情報を共有し、多角的に問題をとらえることを試みた。

研究会の進行

事前に発表者に配布した質問用紙（本章の末尾にある当日資料参考）を確認しながら、発表者のそれぞれの発言ののち、休憩をはさんで意見交換をおこなった。発表者のうち2名（パウロ・ガルヴォン氏，グラウセリー・レイス氏）はポルトガル語による発言であり、活動実施者の高阪が通訳を担当した。

また、現在青年ボランティアとしてブラジルに派遣されている公立学校の先生に、帰国後教育現場で力を発揮してもらうためにどのようなサポートをしていったらよいのかという視点からも意見交換をした。

研究会での発言に沿って、主に発言者毎に以下にまとめ報告する。ポルトガル語の発言については日本語の翻訳のみ掲載した。

◆ 発表者からの発言 ◆

倉橋 徒夢（ブラジル人学校 EAS 豊田）

エスコラ・アレグリア・デ・サベール（以下 EAS と呼ぶ）は、1995 年に豊田の保見地区で始まり、現在 15 年目に入っている。

最近は、2008 年、2009 年の世界恐慌の影響を受け、これまでの経験や考え方が通用しなくなっているのを感じている。2008 年以前であれば、高等教育へのニーズが徐々に高まり、ブラジルはもとより日本、アメリカ、イギリスなどの大学に進学を希望する生徒も多く見られたが、現在は進路を自由に選ぶことが非常に厳しい状況である。

また、約 50%の生徒が様々な理由でブラジル人学校で勉強することをあきらめた。ブラジルへ帰国した子ども、不就学の子ども、日本の学校へ移った子どもなどがある。日本の学校で勉強している生徒の数が増えているとも聞いている。

さらに、2008 年以前では共働きの家庭が非常に多く、残業も多いため、子どもと親がふれあう時間が取りづらいという話をよく聞いた。一方、2009 年になってからは、経済的な不安から各家庭で金銭的なストレスを非常に強く感じているように思う。

次に、ブラジルの子どもたちの教育にかかわる日本の教師に知っておいてほしいこと、日本の教師がブラジルに派遣されたときに現地で学んでほしいことについて述べる。大切なのは、1) 生徒たちにもっと近づいてほしい、2) 知識と精神的に支えとなるものを得るようにする、3) 新しい文化と言葉に馴染むためには時間が必要、の 3 点である。教室の中で一人だけ浮いて、誰からも注意を払われない存在になってしまうと、将来つらい。同じ 8 歳であっても、ポルトガル語と日本語の両方に堪能な子どももいれば、ローマ字もひらがなも読めない子どももいる。20 歳前後の子どもたちを面接することがあるが、ポルトガル語も日本語もあまりできない子どももいる。

ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対しては、「勉強してください」と言いたい。バイリンガルになることは非常に難しいので、ポルトガル語にふれ続けるのと同時に正しい日本語も覚えてもらいたい。

また、日本の学校に転出した子どもを担当する先生に対しては、「かまってあげてほしい」「見てあげてほしい」「気にかけてあげてほしい」「声をかけてあげてほしい」「触ってあげてほしい」と言いたい。

パウロ・ガルヴァン（ブラジル人学校 エスコラ・サンパウロ）

エスコラ・サンパウロは 2000 年に創立された。学校の使命は次の 3 つだと考えている。

第1に、日本とブラジル両国に貢献し得る児童・生徒を育成すること。両国にふさわしい人間、両国の社会の構成員として認められる人間にするにはどうしたらいいかを考えながら育成している。

第2に、ブラジルへの帰国準備を目的とした教育を行うこと。日本の文化を学ぶことは必要だが、同時にいつか帰国することも踏まえ、帰国準備を目的とした教育も行っている。第3に、多文化共生の機会を提供すること。実際に、安城市新田小学校と交流し、日本文化を学ばせる機会を持っている。

ブラジル人学校に行っていた子が日本の学校に行く場合、あるいは、ブラジル人の子どもが日本の学校に行く場合は、通訳の人が一緒に行く。このように、現在日本の政府は、日本

の学校に通訳や指導員を置いて手助けをしているが、帰国を前提に学んでいるブラジル人の子ども、ブラジル人学校にもできたら政府の支援をあててほしいと思っている。

次に、ブラジルの子どもたちの教育にかかわる日本の教師に知っておいてほしいことであるが、重要なのは現実を把握すること、ブラジル人の子どもたちの環境を知ることである。ブラジルは非常に大きな国であるため、家族のあり方も地域によって違うし、信仰している宗教によっても異なる。そのため、日本人の教師は彼らがどのような日常生活を送っているのか、どのような家族なのか、文化的背景はどのようなものかを知る必要がある。教員と子どもたちの間に、寛大な心、尊重する気持ちといった関係性が生まれて初めて、子どもたちは学ぶようになる。そういう信頼関係をつくるためには、先生と生徒の間のコミュニケーションが必要であり、そのコミュニケーションは先生が生徒の現実を把握することから生まれてくると思われる。

ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対しては、ブラジル人コミュニティのお手本になってほしいことと、途中であきらめずにしっかり学習に取り組んでほしいと考えている。また、日本の学校に転出した子どもたちを担当する先生に対しては、文化の違いを受け入れること、日本社会の構成員の一人として子どもたちを迎え入れること、異文化交流の姿勢を持つことを望みたい。

最後に、ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもたちから以下のような相談を受けたことを報告する。

1. 排除されたり、誰からも注意が払われなかったりすること。
2. 恥ずかしくて質問ができないこと。
3. 学習の内容が理解できないこと。
4. 学習に対するモチベーションがないこと。

グラウセリー・レイス（ブラジル人学校 エスコーラ・サンパウロ）

日本に暮らすブラジル人児童の教育に対して日本政府の援助が少しずつ拡大しており、それは非常にありがたいことである。ブラジル人コミュニティは非常に閉ざされているので、ブラジル人の先生や子どもたちが日本の学校へ行くことやまたその逆があることは、ブラジル人、日本人の双方にとって異なる文化を理解するための貴重な機会となっている。ポルトガル語やブラジル文化を理解することが重要であると同時に、日本語や日本文化を学ぶことも非常に重要であるため、ブラジル人学校と日本の学校の間の交流は非常に重要なのである。

次に、日本の教師にとって重要なことは、日本の学校習慣とは異なる習慣を身につけているブラジル人の子どもたちを理解し、子どもたちの育った国や環境を知ることである。例えば、ブラジル人の子どもたちは「表現の自由」を主張する。つまり、日本人の子どもたちに比べて質問したり、議論をしたり、意見を述べたりするので、積極的に見える。子どもたちをサポートするためには、教師はそのような行動を理解していなければならない。



ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもたちに対しては、母語の学習を続けるよう言いたい。滞在が長期化すると、子どもの日本語能力が両親よりも高くなり、家族間のコミュニケーションが難しくなってしまう。また、経済危機によってブラジルへ帰国する可能性もあるため、母語学習は必要である。

また、日本の学校に通っているブラジル人の子どもを教育していたとき、何のために学校の規則が必要なのか彼らがわからないまま従っているように感じた。これが最大の問題であると思う。

大島 之弘（日本語学習支援教室 Vizinho）

現在、エスコーラ・サンパウロの子どもたちを支援する放課後日本語学習支援教室を行っている。

最近感じていることは、今の低学年の子どもたちは日本語の力が非常に弱くなっているということである。日本の保育園を経てブラジル人学校へ入学する子が減っているからだと推察される。見方を変えれば、日本の保育園にい



た外国籍の子がそのまま日本の公立学校へ行ける支援体制が整ってきているのだとも感じる。

一方、ブラジル人の保護者の中には、小学校からブラジル人学校に行かせるか、日本の学校に行かせるか悩む人もいる。中学2年生の子どもを持つ親からは、ポルトガル語も日本語も中途半端だという相談を受けた。日本の公立学校へは、小学校の低学年からなら行かせられるが、中学2年から日本の中学校へ行かせるのは難しいと考えているようである。相談を受けても、公立学校の現状とその子どもの将来を考えると後押しする自信がなかったので、ブラジル人学校と日本の公立学校をつなぐ相談機関のような場所があればいいと思っている。

また、公立学校からブラジル人学校へ転校してきた子どもたち（高学年）には、精神的に不安定な子どもが多い。その多くがいじめを受けたり、居場所のなさを感じている。中には「日本人が嫌い、学校が嫌い」と荒れた子どももいた。このような場面に遭遇すると、公立学校には学習面のサポートだけでなく、精神的な面の支援もお願いしたい。公立学校からブラジル人学校へ転校してきた子どもたちの中で、再度公立学校へ戻るケースはなく、他のブラジル人学校へ行くか、ブラジルへ帰国するケースが多いように感じる。日本の学校もよかったと徐々に思えるようになっても、戻る自信はなく、保護者にも不安があると思われる。

ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対しては、転出することが早めにわかった場合は、日本の学校と提携し、転出に備えての準備をした。また、公立の学校に行ってもポルトガル語は忘れないようにアドバイスした。将来の道を自分の意志で選択できるように、両方の言語を大切にしてほしいと考えている。

最後に、日本の学校の先生に対しては、保護者の日本滞在期間の確認と定住する意思があるかどうかの確認をしてほしい。子どもたちが安定して学習を行えるように、進学もふまえて保護者と話

し合う必要がある。子どもたちとは言語でのコミュニケーションが難しい分、行動や表情で安心させてあげることが大切であるし、一方日本人の子どもたちに対しても言語、文化、外見等が違う子どもたちへの接し方や違いを認め合うことも指導してほしい。

古川 カチア イツエ（HIRO 学園 教員）

日本の学校は文化が一番難しい。文化がわからなければ、物事をどのようにやればいいのかかわからない。例えば、日本では掃除をしなければならないとか、当番をしなければならないとかあるが、子どもたちにはどのようにやればいいのかを教えないといけないし、どうしてやらないといけないのかも教えないといけない。言葉と文化が違うというだけでなく、どのように違うのか、どのようにやれば正しいのかも教える必要がある。

また、クラスの中で認められるためには、日本語が話せることが大切である。少しでも話せれば一緒に何かができるし、そうすれば楽しくなる。友達と一緒に何かをやったり、遊んだりすることができれば、学校にも行きたくなる。つまり、友達ができれば、生活しやすくなるし、子どもは自分の力で伸びると思われる。

最後に、今の子どもたちにとって一番大切なのは、いじめをやめさせることだと思う。



丹羽 ジルセ 久美恵（知立市教育委員会 学校教育課 日本語指導助手）

知立市は外国人生徒が多い。ブラジルから直接来た子ども、ブラジル人学校から来た子どもには、転入時に2時間ぐらいかけて日本の学校のシステム、ルールについて説明する。例えば、掃除や給食といったものすべてが教育の一環で、みんなと同じようにやらなければならないと伝える。

次に、どうして日本の学校に入りたいのか、ずっと日本にいるのかについて尋ねる。低学年の場合、学校の勉強に追いつくのもそれほど難しくないが、高学年になると日本の勉強についていけない子どもが多い。そのため、「もし日本にいるなら、日本の学校で一生懸命頑張って、大学まで行けるようにしましょう。もし2、3年で帰るつもりなら、やはりブラジル人学校のほうがいいですよ」とアドバイスする。そのうえで、日本の学校で一生懸命がんばれるか、親もサポートできるのかも確認する。そのほかに、子どもたちには日本語のレベルとポルトガル語のレベルを見るテストを行う。

ブラジルから直接来た子ども、ブラジル人学校から来た子どもには、適応教室で日本の学校のこと、給食のことや勉強のこと、日本語の基礎を3カ月ぐらい学んでもらう。適応教室が終わったら、東小学校でまた日本語指導を受け、算数や日本語の足りない部分を補う。算数が学年のレベルまでできているかどうかを見ながらポルトガル語で教え、学年相当までできているときもあればそうでないときもあるが、教室に戻す。国語や社会の授業でも、言葉の意味や教科書の内容を説明するなど支援を行っている。



15 年前と今を比べてみると、15 年前のほうが親の学歴が高く、子どもも熱心に勉強していたように思う。また、今小学校に入ってくる子どもは、最初のころにブラジルから来た子が日本で結婚して産んだ子どもである。日本語もポルトガル語もちゃんと勉強していない親もいて、子どもに「勉強しなさい」と言う熱心さもない。

以上のような状況のなかで、子どもたちは将来日本に住むかブラジルに帰るかわからず、あいまいな状態で夢を持てないでいる。今後ずっと日本に住むことが決まっていれば、子どももがんばっていかなければと思えるが、たぶん帰国するだろうという気持ちのまま学校に来る。

東小学校では半分以上が外国人なので、学校は勉強するところであると厳しく言っている。一方外国人が少ない学校では、問題さえ起こさなければ、学校に来てさえいれば、勉強しなくても勉強がわかっていなくても外国人だから仕方がないと許しているところが少なくない。実際に、1 年生のときから日本にいたのに 6 年生でも漢字が書けない子や板書をノートに書き写さない子どもがいる。しかし、外国人だからと済まさないで、「学校は勉強するところ」だということを親にも子どもにも教えていかなければならないと思っている。

先生たちに伝えたいのは、日本とブラジルの文化は違うということである。例えば、算数なら世界共通だと思われるかもしれないが、ブラジルと日本では、引き算や割り算の筆算の書き方が違う。

子どもたちの将来のために、教育はどこにいても必要であることを親にも子にも伝えていかなければならないし、日本にずっと住むのかブラジルに帰るのかという決意も固めなければならないと考える。子どもたちは未来の人であるから、外国人も日本人も関係なく、育てる必要がある。

◆ 意見交換 ◆

◎ ブラジル人の子どもの進学・進路について ◎

・大島之弘：日本での定住・進学を考えている家族に対して

日本語学習支援教室の子どもの中に、日本に定住したいと考えている 13 歳の子どもがいたが、日本の中学に行っても大学に行くのは難しいのではないかと不安を抱えていた。そこで、ブラジル人学校の 9 年生まで日本で学習して、高校はブラジルの高校に行き、ブラジルで進学することにした。日本のブラジル人学校を卒業して働くという形ではなく、自分自身の言語、生活、アイデンティティをしっかりとしたものにするために一度ブラジルできちんと教育を受け、もう一度日本に戻ってくるという方法もあるのではないかと考えたのである。また、定住意志があるのに家庭言語はポルトガル語で日本語に接する機会のない子どもに対しては、アレグリア・デ・サベール、エスコラ・サンパウロで Ensino Médio まで卒業すると、大学の受験資格をもらえるので、アドミッションオフィス入試で

入れる可能性もあることを伝えている。

・倉橋徒夢：日本での進学について

本校の卒業生に関して、入学できるかどうかは行きたい大学による。面接で入れる大学や留学生扱いをしてくれる大学の場合は、「ちょっと行ってみなさい」とアドバイスをするが、留学生規約に引っかかり、センター試験と2次試験を受けなければならない大学の場合は無理ではないかと伝える。

・倉橋徒夢：ブラジル人学校の FUNDAMENTAL が終わったあとの進路

EAS では、中学を卒業する子には高校進学指導をし、高校を卒業する子にはブラジルの大学への進学を指導する。中学3年から高校への進学率は、学校や年度によって違いはあるものの、大体5割から7割である。高校3年からブラジルの大学へ何のインターバルもなく進学する割合は4割から6割である。1年、2年日本で働いて、お金をためてブラジルに帰る子もいる。

しかしながら、お金を稼ぐために来日した家族の場合、子どもが高校生の年齢に達すると、仕事についてもらう場合もある。また、子どもだけブラジルに帰して大学に行かせ、親はそのまま日本に残って働き続けるケースもある。

問題なのは、ブラジル人に限らず、外国人保護者に様々な情報が届いていないことである。ネットワークを作って、それぞれの保護者が持っている情報や経験を皆で共有し、情報交換ができると助かると思う。



・小山幾子：日本の公立小学校（豊田市立東保見小学校）での指導

豊田市立東保見小学校には外国籍児童が116名（全体の25%）在籍している。小学校では、情報を非常に大切に考えており、年に1回進路指導の会を計画して、外国人の保護者に参加していただいている。この会は、大半の児童が進学する保見中学校から先生を招き、金銭的な面や学習的な面に関して外国人の保護者に直接説明していただく会である。

また、日系ブラジル人で公立の小学校から大学へ進学された方に講演していただく会なども開催している。このような情報提供ができるのは、豊田市の人的な加配によるところが大きいと思われる。東保見小には日本語とポルトガル語の両方ができるブラジル人スタッフが3名いる。その人たちはポルトガル語で相談にのることができて、ほとんどの文章を翻訳でき、情報が与えられる。情報をできるだけ早めにいろいろな機会に提示し、子どもたちと保護者の不安を取り除きたいと常に思っている。

・伊木・デ・フレイタス・ロドリゴ：日本で育った日系ブラジル人当事者として

10歳のときに来日したが、東保見小のようなシステムがなかったため、日本語は弟と二

人だけで勉強したといっても過言ではない。

子どもたちの教育にとって保護者の意志が非常に大切であるし、保護者への教育をしないといけないと考えているが、実際には難しいことである。例えば、サンパウロの大都市から来た人であれば、教育がないと成功できないということは十分にわかっているが、農場で働いていた人たちの場合、教育にあまり関心がなかったりする。

ブラジル人の中には、ちゃんとした情報を得ずに、「日本の学校にはいじめがある」とか「ブラジル人学校は高い」といった噂を信じてしまう人もいるので、少しずつでも情報を



与えていくことが大切であると思われる。また、日本語の勉強を支えるだけでなく、「がんばれば将来がある」ことを示していかなければならないと考える。ブラジルの大学には入るのが難しく、お金がないと行けないところがたくさんあるが、日本の大学ならぼくのように奨学金をもらって通える場合もある。そういった情報を与えていかないといけないと思う。

◎ 日本社会・日本文化とブラジル人学校の関係性 ◎

・古川カチアイツエ：H I R O学園での「文化」の扱いの事例

H I R O学園では、上靴に履き替えるなど、日本の学校と大体同じやり方でやっている。しかし、子どもたちにとってはどれがブラジルの文化でどれが日本の文化かあまりよくわかっていないのではないと思われる。

・グラウセリー・レイス：ブラジル人学校と日本の学校の交流

ブラジル人学校が閉ざされた空間であるかどうかというのは、日本の学校とブラジル人学校の両方から考えなければならない。というのは、以前日本の学校を訪問しようとして断られたことがあった。また学校間交流については、子ども同士だけでなく、先生同士の交流も必要だと考える。ブラジル人学校の教師は日本の教育制度にあまり精通しておらず、日本の学校についてあまりよくわかっていない。学校間交流は、子どもと教師の双方にとって非常に重要である。

・大島之弘：日本社会における文化交流の難しさと重要性

ブラジル人学校に通っている子どもには日本の友達も作ってほしいと考えている。以前、「放課後、エスコーラ・サンパウロの子どもたちが遊んでいるから、公園で自分の子どもを遊ばせられない」という話があるのを聞いたことがある。このことから、地域の子どもたち同士がつながれば、子どもたち同士が知り合っていれば、問題は起きないのではないかと考えるようになった。そこで、地域の小学校との交流を始めたが、1回かぎりで行き止まりでしまい、子どもたちが低学年だったこともあって「ああ、楽しいな」で終わってしまった。

また、そもそもブラジル人学校の子どもたちは豊田、岡崎、安城、知立からバスで来ていて、その地域に住んでいないため、学校同士のつながりは可能だが、学校外で地域の子どもたち、日本人の子どもたちとかかわるのは大変難しいと感じた。以上の反省から、次年度は単発の交流ではなく、しかも楽しいだけではない活動を授業の中に取り入れていた



だいた。この活動は、日本語の話せる子も話せない子も同じぐらいの人数で、同じ学年の子を集めて行った。活動の結果は、1回目は楽しくやれても、2回目、3回目になると、「言葉が通じないから、もう行きたくない」という子もいたし、逆に「日本語が話せて楽しい」という子もいた。問題は、いつもブラジル人学校からお願いしているという点である。小学校の校長先生は非常に理解があり、

毎回快諾してくださるが、いつまで続けられるのか不安である。

また、外国人児童に日本人の友達ができない理由として、引っ越しが多いことが挙げられる。引っ越すことによって、その地域の子どもたちとのつながりが切れてしまう。逆に、ブラジル人学校の子同士は、引っ越ししても、インターネットのソーシャルネットワークなどでつながったりする。公立学校の日本人の子とブラジル人学校の子のつながりの作り方を現在模索しているところである。

・菊池寛子：西尾での子どもたちの交流の現状

西尾市の早期適応教室というのは、公立の小中学校に行く外国人の子どもたちが約3ヶ月間日本語や日本の学校のルールを勉強する教室である。地域の日本人の子どもとの交流は難しいと思うが、公立の学校に行っているブラジル人の子とブラジル人学校に行っているブラジル人の子が、同じ団地の子同士で遊ぶというのは結構あるのではないかなと思う。

西尾市にできた不就学の子たちのケアをする方たちと早期適応教室とでもっと交流をできないかということを最近考えている。



◎ 日本社会ができること・しなければならないこと ◎

・小島祥美：まずは知ることから

美濃加茂市の公立学校の先生たちと教育委員会の方たちに、美濃加茂にあるブラジル人学校の見学に行ってもらった。先生方は同じ地域にあるブラジル人学校について全く知らなかったため、行くことを勧めた。普段、外国人児童生徒がどんな気持ちで教室の中にいるかを体験してほしいと思ったので、当日は学校の中を見せてもらったり、算数の授業をポル

トガル語で受けてもらったりした。たった2時間ぐらいのことであつたが、外国人児童生徒に対する考え方、ブラジル学校の存在意義についての認識、学校の取り組みに対する評価が非常に変わった。例えば、ブラジル学校側が「理科で実験をしたいため部屋を貸してほしい」と言ったら、すぐ近くの小学校が場所を提供するようになったし、ブラジル学校の運動会にテントや大玉、玉入れの道具を貸すことも始まった。

また、公立小学校の音楽会に近くのブラジル学校の子が招待されて、子どもたちが合奏する、合唱するということがあった。このようなことを通して、いったん顔が見えて、場所さえ分かれば、とりわけ教員が分かれば、状況は変わると非常に思った。外国人に自助努力をさせるだけではなく、日本人側、日本の小中学校側も考えいべきだし、そういった取り組みが必要だと思われる。

・小島祥美：目の前にいる子どもたちのためのとりくみを

また、先ほど日系人たちはかつて勉学熱心だったという話があったが、果たして本当にそうだったのだろうかと思う。世界恐慌や第二次世界大戦という時代背景も関係しているであろうし、ブラジルにいる日系人で成功している人たちは皆、三男、四男という事実もある。長男、長女はやはり家業を継ぎ、農業をやらなければいけなかったのであろう。

ブラジルの方たちが日本に来て 20 年がたつが、皆さんよくがんばってきたと思う。今回の不況によって外国人の方たち、特にブラジル人の方たちが厳しい状況に置かれているが、それは日本社会がつくってきたことだと思う。バブルの時代に、通訳もつけて、職業も家も全部準備して「働きに来てくださいよ」という素地をつくり、散々働かせたあげく、経済不況になったら、「10 年、20 年住んでいたのに、日本語ができない。だから、仕事がないんだ」と個人の責任にして切っていくやり方は、非常におかしい。彼らは将来、日本に住みたいか、これからどうしたいかは選べなかったと思うし、できない環境にあった。これからも日本に住むのか戻るのかを、今判断させるのは酷ではないか。



それから、今、目の前にいる子のことを考えたいと思う。目の前にいる子の力をよりのばしてあげたいし、子どもがよりよく育つような環境をもっと力を合わせてつくりたい。それはブラジル学校でも日本の学校でも同様である。ブラジル学校は、いつかインターナショナルスクールのようになり、日本人も行きたいと思うような日が来るのではないかと考えている。

・松本一子：お互い知り合うことが重要

実は、愛知県でも美濃加茂市のような見学活動をやった。小牧市には外国人児童生徒教育連絡協議会というのがあって、年間 8 回から 10 回先生たちが集まって会議を持っているが、その先生たちがブラジル学校に見学に行った。

子どもたちがどういう場所で、どういう教育を受けていたかをつぶさに見るとともに、ブラジル学校で担当していた先生と話し合えた結果、例えば「算数のここですまづいたのは、このせいだったんだ」と分かり、教育の継続性が生まれた。その後、使わなくなった問題集や実験道具をブラジル学校に提供したりということも始まった。

また豊田市でも、先生方を集めた研修会に EAS の先生に来ていただいて、EAS での教育について話を伺うこともしている。



外に行くことでも、呼ぶことでもいいので、いろいろな試みが繰り返されるといいと思う。継続性がないと、子どもたちも先生方も異動するため、引き継がれていかない。ブラジル学校からの働きかけであれ、日本の学校からの働きかけであれ、お互いに向き合わないと、なかなかスタートしないと思う。

・中根秀博：楽しい行事を通じて心の壁を取り払う

豊田市立西保見小学校は外国人児童の占める割合が6割にのぼる。確かに外国人の保護者の方たちとのコミュニケーションが少なくなっていると感じる。外国人の保護者の方たちは、自分が育った小学校時代の経験を基に日本の学校を見ようとするため、随分違いがあり、全部学校にお任せとなってしまうのである。

日本の保護者とのコミュニケーション不足を解消するために、西保見小では今年から日本の保護者と外国の保護者が一緒に料理を作るなど、楽しいことをやりながら関わりをつくっていくことを始めている。長い歴史の中で、特に祖父母の世代には外国人の方に対する壁のようなものがまだ残っていると感じるが、父母世代はそれほどでもないと思われるので、そういう壁を取っていく役割が小学校に求められていると考えている。

・松宮朝：可能性を確保する

将来日本で暮らすのかブラジルに帰るのかわからない子どもたちにとって、どのように母語教育を保障するのかは問題である。日本の学校に通いながらどう保障するかといえば、やはり休みの日にブラジル学校に通うことが有効なのではないかと思う。あるいは、教員の側がブラジル学校で研修を受けたり、ポルトガル語を勉強したりするのもいいのではないだろうか。子どもの時期に進路を1つに決めなくてもいいから、とにかく2方面での可能性を残しつつ、むしろそれを保障してあげることがいいのではないかと思われる。しかしそのためには、相応の努力が必要だと言うことも事実である。自らの子ども時代の海外在住経験を踏まえても、単に日々過ごすだけではバイリンガルにはなれないことは確実である。

・川上貴美恵：「そのとき」がきたら学べる環境に

100 人の子どもたち全員を一同にやる気にさせたり、全員を救ったりすることは非常に

難しい。しかし、人それぞれスイッチが入る瞬間があると思う。その頑張ろうと思ったときに、学べる環境や挑戦できる環境を、周囲の関わっている大人が作っておいてあげたい。いつでも学び直せる、いつでも社会の中でやり直せる環境づくりが大切だと思う。

◆ 総括 ◆

この事業の成果を日本社会の多くの人々、とりわけ、子どもたちの教育・学習・育成に直接的に関わる学校の先生に届ける必要がある。各学校の校長先生や教育委員会の方にも現状や問題点を具体的に伝えたい。研究会で話し合ったことを、どう社会に伝えていくか、社会全体の認識や意識の向上につなげるかが今後の課題であり、アピールの仕方にも工夫が要るであろう。

ブラジルに派遣されている先生方に、帰国後どのようなポジションで活躍していただくのが、外国人の生徒や子どもたちにとっていいのか。保育園、小学校、ブラジル学校などそれぞれのところで皆苦勞していると推察される。集住地区よりもむしろ外国人が少ない小学校や中学校では、さらに大変だろうと思われる。

この事業ではこういった現状を整理するとともに、現職教員特別参加制度で派遣されている先生方が帰ってくる場所として、どのようなステージが一番いいのかを考えていく必要があります、またそのメッセージを発信していくことが重要である。



【当日配付資料】

文部科学省「国際協カイニシアティブ」平成 21 年度教育協カ拠点形成事業
〈日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協カシステムの形成〉

第 3 回研究会「ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点」

発表者回答

- 日時：2009 年（平成 21 年）12 月 23 日（祝・水）13：00～17：00
- 会場：愛知県産業労働センター 15 階 愛知県立大学サテライトキャンパス
（愛知県名古屋市中村区名駅 4 丁目 4－38）

■参加者：

発表者	倉橋 徒夢	EAS 豊田 校長
	奈良橋 晴美	EAS 碧南 正通訳
	パウロ・ガルヴオン	エスコーラ・サンパウロ 学校長
	グラウセリー・レイス	エスコーラ・サンパウロ 教員
	大島 之弘	日本語学習支援教室 Vizinho 代表
	古川 カチア イツエ	ヒロ学園 教員
	丹羽 ジルセ 久美恵	知立市教育委員会 学校教育課 日本語指導助手
活動協力者	井村 美穂	NPO法人子どもの国 理事長、豊田市日本語指導員
	三澤 由佳子	(財) 海外日系人協会 非常勤講師
	中根 秀博	豊田市立西保見小学校 校長
	小山 幾子	豊田市立東保見小学校 国際教室主任
	渡邊 あづさ	愛知県教育委員会 西三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員
	久保 真希子	愛知県教育委員会 東三河教育事務所 外国人児童生徒語学相談員
	今井 さや香	知立市教育委員会 早期適応指導指導員
	小川 裕美	可児市教育委員会 学校教育課 外国人児童生徒コーディネータ
	阿久津 エルザ	可児市教育委員会ばら教室 KANI 指導助手
	菊池 寛子	西尾市教育委員会 早期適応教室指導員
	川上 貴美恵	せんねん村 中野郷保育園 外国人児童コーディネータ
	青木 由香	富山県高岡市外国人児童生徒指導講師
活動実施者	小島 祥美	愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーションセンター 講師
	松本 一子	愛知淑徳大学・愛知教育大学 非常勤講師
	東 弘子	愛知県立大学
	加藤 史朗	愛知県立大学
	松宮 朝	愛知県立大学
	高阪 香津美	愛知県立大学
	内山 久子(事務)	愛知県立大学

■プログラム：13:00-17:00

- 挨拶
- 招待者発表
 - ・倉橋徒夢氏（EAS 豊田 校長）
 - ・奈良橋晴美氏（EAS 碧南 正通訳）
 - ・パウロ・ガルヴオン氏（エスコーラ・サンパウロ 学校長）
 - ・グラウセリー・レイス氏（エスコーラ・サンパウロ 教員）
 - ・大島之弘氏（日本語学習支援教室 Vizinho 代表）
 - ・古川カチア氏（ヒロ学園 教員）
 - ・丹羽ジルセ久美恵氏（知立市教育委員会 学校教育課 日本語指導助手）
- 意見交換
- 閉会

氏名：倉橋 徒夢【A】、EAS各学校校長【B】～【E】

役職：Escola Alegria de Saber (EAS) 豊田 校長

Q 1. あなたのお仕事・活動について簡単に紹介ください

- 【A】校長として教育方針を堅持し、学校運営を理解し、その内部の人間関係を管理して学校を前進させること。
- 【B】イーエーエスは幼稚園から高校学校までの教育が対象です。
- 【C】私は 30 年以上教育の仕事をしています。現在、イーエーエス碧南の校長です。プロフェッショナルであるためには、その仕事が好きではないといけません。この仕事は大変ですがやる価値があります。
- 【D】私は毎日学校全体の計画をしたり準備をしたり、全部の管理をしています。教師と生徒に対し、学問的な指導と調和のとれた管理を献身的に行っています。
- 【E】私の仕事は学校の管理をすること。それはいい学校を全校生徒に確保し、生徒の社会化を促進することと、プロジェクトの指導をして良い結果を得ることと、学校と生徒家族との仲介をすることです。

Q 2. あなたの経験の中で、日系ブラジル人の子ども達の生活や背景などについて、変化してきていると感じることはありますか？

- 【A】 経済のことで不安があります。（子どもたちは）学校をこのまま続けるか転校するか迷っています。そして友達が辞めて行くと活気を失ったり寂しくなったりしています。
- 【B】 はい。多くの子供達は親の失業生活体験と家族の財政上の困難を知って、それが特別に精神的な影響を与えています。
- 【C】 日本では、子供達は親の長い仕事の時間であまり構っていませんのでそれが足りません。
- 【D】 子供たちは家族と一緒にいないことに慣れていましたが、その代わりに何でも欲しいものを貰っていました。ですが今年は経済のことで状況が違います。
ある家族は子供達に学校を続けられるかどうか、不安を見せました。家庭の環境が親の仕事状態で不安定になっていて STRESS が子供達を悲しめていました。
- 【E】 はい、日本の真実とブラジルのもとはとても差があります。日本では生徒達は学校に居る時間がもっと長くて親の仕事の長い時間の関係で親と過ごす時間が短いです。家族が助力することが必要です。

◎このあとの質問は、ブラジル人学校の方におたずねします。

① ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対して、どんなアドバイスをしますか？

【A】 できる限り努力すること。難しさに対峙するときは勇気がある人が勝つ。

【B】 新しい文化、外国語に馴染むためには時間が必要です。

私達の経験はブラジル人が日本の公立学校で数年勉強し私達の学校に転校してくるとまずは、ポルトガル語で読み書きを教えます。その後、用語と文章の解釈を教えますが、徐々に時間をかけて行います。その生徒は別に2～3年の間準備してから同年の学級に入ります。（年齢よりも下の学年に編入する）日本公立学校では準備期間で多くの子供が失敗する。

【C】 ポルトガルを読むこと、話すこと、書くことを続けること。いつもテレビのニュース、新聞、本に触れていることが必要です。

【D】 どの学校にいても保護者には生徒達の成長を常に願って貰いたい、それは家族の義務です。

【E】 勉強をして、努力して、正しい日本語を覚えてもらいたいです。

② ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもを担当する日本の学校の先生に対して、どんなアドバイスをしますか？（または、したいですか？）

【A】 教員は統一があって（教員同士の連携ができていることか？）、魅力的に授業を行い、教えるために新しい方法を考えて永遠に努力すること。

【B】 なし

【C】 子どもたちを安心させるためには、かまって愛情を与えることです。

【D】 私たちの子どもをよく見ていることも、子どもが適応するために様々な努力をしてもらっていることを承知している。

先生が生徒とじっくり向き合うことが、とても大切なことです。生徒それぞれをわかるようになるから。先生の態度が生徒たちの覚え方に影響を与えます。

先生は社会的な常識を身につけなければなりません。先生の社会的知識が生徒に影響します。差別をしてはいけません。生徒を社会適応させるために。

【E】 忍耐強く、生徒にモチベーションを与え続けること。

③ ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもから、相談を受けたことはありますか？また、それはどのような相談でしたか？

【A】 ありません。

【B】 まったく相談を受けていません。その件に関しては、各市の教育委員会に相談に行くようです。

相談は公立学校から転入してきた生徒がどのような方法でここ（E A S）になじむかがほとんどです。ブラジル人学校から日本の学校に行くときには、普通は市・学校から指導があります。

【C】 はい。保護者から子供の態度が変わった、冷たくそして目的と夢を失ったようだと聞いています。

【D】 ブラジルへ帰る時の相談です。日本の公立学校で勉強して、どうやってブラジル人学校の学歴として認められるか？ブラジルへ戻れば、年齢通りの学年に入れるか？多く場合、ポ語の不自由な子供が相談に来る。それでとても混乱します。

【E】 ありません。

氏名：パウロ・ガルヴォン

役職：エスコラ・サンパウロ 学校長

Q 1. あなたのお仕事・活動について簡単に紹介ください（エスコラ・サンパウロに関して）

エスコラ・サンパウロが創立されたのは 2000 年のことです。（2001 年に認可）

本校の使命は、

1. 日本、ブラジル両国に貢献しうる児童・生徒を育成すること
2. ブラジルへの帰国準備を目的とした教育を行うこと
3. 多文化共生の機会を提供すること

学校長である私自身の仕事については、以上 3 つの与えられた使命を果たすために行われる様々な活動をコーディネートすることです。

Q 2. あなたの経験の中で、日系ブラジル人の子ども達の生活や背景などについて、変化してきていると感じることはありますか？（学校や子どもたちの行動の変化について：【学校長の意見】）

子どもたちは学習が非常にはやく、また、適応もスムーズです。ブラジル人学校は、母語による教科学習の機会と日本語学習の場を提供しています。こうして、両言語を自由に操ることができる力を身につけることにより、子どもたちの人生はより豊かで、生産的なものになると思います。日本政府は、ブラジル人学校が地域とともに取り組んでいる活動を支援すべきだと思います。

Q 3. ブラジルの子どもたちの教育に関わる日本の教師に知っておいてほしいこと、また日本の教師がブラジルに派遣されたとき、現地で学んでほしいことは何ですか？（ブラジル人児童・生徒を担当するにあたり、日本人教員が知っておくべきこと）

日本人教員は、ブラジル人の子どもたちが直面している現実を把握することが非常に重要です。どんな日常生活を送っているのか、彼(女)らの家族はどんな人々なのか、彼(女)らの文化的背景はどのようなものか、また、彼(女)らがどんなことを希望しているかなどについてです。教えることは学ぶことです。日本人教員が子どもたちの現実にも目を向けることにより、子どもたちと教員との間に信頼関係をはじめとする関係性が築かれ、ようやくそこで子どもたちは学び始めることになります。

Q 4. その他、この研究会の参加メンバーにたずねたいこと、情報共有したいことがあれ

ば、書いて下さい。(23日の研究会で尋ねてみたいこと)

1. 日本語の授業、ポルトガル語の授業に関わらず、エスコーラ・サンパウロを訪問してみたいかどうか。
2. ブラジルのパラナ州にあるエスコーラ・ポジチーボの本部に訪問してみたいかどうか。
3. この事業の最終目的はどのようなものか。

◎このあとの質問は、ブラジル人学校の方におたずねします。

- ① ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対して、どんなアドバイスをしますか？（日本の学校に編入したブラジル人の子どもたちへのアドバイス）

ブラジル人コミュニティのよいお手本になってもらいたいことと、途中であきらめず、しっかり学習に取り組んで欲しいということです。

- ② ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもを担当する日本の学校の先生に対して、どんなアドバイスをしますか？（または、したいですか？）（エスコーラ・サンパウロから編入した子どもを担当することになった日本の学校の先生へのアドバイス）

文化の違いを受け入れること、日本社会の構成員の一人として子どもたちを迎え入れること、異文化交流の姿勢を持つこと、です。ブラジル人児童・生徒も日本人児童・生徒と同じです。子どもたちから愛情と新しい事柄を受け取って欲しいです。

- ③ ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもから、相談を受けたことはありますか？また、それはどのような相談でしたか？（ブラジル人学校から日本の学校へ編入した子どもたちが直面する困難について）

1. 排除されたり、誰からも注意が払われなかったりすること
2. 恥ずかしくて質問ができないこと
3. 学習の内容が理解できないこと
4. 学習に対するモチベーションがないこと

氏名：グラウセリー・レイス

役職：エスコラ・サンパウロ 教員(Ensino Fundamental I)

Q 1. あなたのお仕事・活動について簡単に紹介ください

現在、私は Ensino Fundamental I（就学年齢の最初の 5 年）の第 2 学年と第 3 学年を担当しており、ポルトガル語、算数、歴史、地理、科学を教えています。

Q 2. あなたの経験の中で、日系ブラジル人の子ども達の生活や背景などについて、変化してきていると感じることはありますか？

私が来日してから感じていることは、日本に暮らすブラジル人児童・生徒の教育制度に対して、日本政府の援助が少しずつ拡大してきていることです。ブラジル人学校と日本の学校間で行われる交流は、両者にとって異なる文化を理解するための貴重な機会となっています。ブラジル人学校の中に日本語教育に携わる教員を配置することで、ブラジル帰国時に必要とされる、ブラジルの学校の学習内容と規律を学ぶ機会を失うことなく、ブラジル人の子どもたちをコミュニティの構成メンバーにならしめ、労働市場に参入するための能力を身につけることを可能にします。

Q 3. ブラジルの子どもたちの教育に関わる日本の教師に知っておいてほしいこと、また日本の教師がブラジルに派遣されたとき、現地で学んでほしいことは何ですか？

ブラジル人の子どもたちは、日本の学校習慣とは大きく異なるブラジルの学校習慣を身につけています。日本の教師はブラジル人の子どもたちの行動をよく理解した上で彼(女)らをサポートするために、ブラジルの学校習慣について少し知っておく必要があります。

ブラジル人の子どもたちは、表現の自由を主張します。そのため、なぜ、その規則が自分に適用されるかわからない場合には、子どもたちはなかなかその規則に従いません。

ブラジル人の子どもたちは、とても小さな頃から、質問をする、議論をする、意見を述べるなどし、何らかの事柄を決定する場面には積極的に参加することを奨励されています。就学期間、それぞれの段階に応じて、教師が介入せざるを得ない規律に関わる問題も生じます。最終的に、様々な状況において決定を下すことができるのは大人なのです。

食事のことなど、文化的背景が異なる学校習慣を理解することは、ブラジル人の子どもたちが日本の学校に適応することをサポートすることになります。

Q 4. その他、この研究会の参加メンバーにたずねたいこと、情報共有したいことがあれば、書いて下さい。

ブラジル人の子どもたちを日本の学校で受け入れる際、教師と学校はどのような困難に直面するのでしょうか。また、どのようにそのような困難に立ち向かうのでしょうか。

◎このあとの質問は、ブラジル人学校の方におたずねします。

① ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対して、どんなアドバイスをしますか？

ブラジル人の子どもたちに対しては、より良い学校生活を送るために、できるだけ学校の習慣や規則を守るようにしてもらいたいです。また、子どもたちの親に対しては、子どもたちが日本の学校に適応していく過程を見守ることができるように、学校と常に連絡を取りあってもらうようお願いしたいです。また、日本での滞在期間が長期化すると、子どもたちの日本語のレベルは、両親のそれを上回り、家族間のコミュニケーションが難しくなってしまいます。そこで、親戚や友人、両親との絆を失わないために、母語学習をやめないでほしいです。経済危機の際、多くのブラジル人の子どもたちが直面したブラジルへの帰国に備えるという意味においても、母語学習は必要です。

② ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもを担当する日本の学校の先生に対して、どんなアドバイスをしますか？（または、したいですか？）

質問3のところでも挙げましたが、ブラジル人の子どもたちをサポートするために、違いを理解するよう努めてもらいたいです。簡単な例を挙げますと、ブラジルでは朝9時半にランシェ(軽食)の時間がありますが、こうしたブラジルの学校文化に慣れ親しんでいる子どもたちは、12時まで何も食べずにいることは難しいです。

③ ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもから、相談を受けたことはありますか？また、それはどのような相談でしたか？

日本の学校で学習し始めた卒業生の話から、彼(女)らは日本語を理解するための助けとして、通訳のサポートとブラジル人学校での外国語(日本語)の授業に期待を寄せていることがわかりました。最大の問題は、子どもたちが理解しないまま、あるいは、慣れないままに規則に適応してしまうことです。この場合、通訳のサポートがさらに有効です。なぜなら、ポルトガル語を話すというだけでは十分ではなく、児童・生徒も子どもの親や教員も同様にサポートでき、すべての状況を把握することも必要となってくるからです。

氏名：大島 之弘

役職：ブラジル人学校日本語教師（２００６年・５月～２００８年１２月）
日本語学習支援教室 代表（２００９年・２月～２００９年１２月）

Ｑ１．あなたのお仕事・活動について簡単に紹介ください

エスコラ・サンパウロ（ブラジル人学校）にて、１年生から９年生（日本における、年長から中学校２年生にあたるブラジル人の子ども）の日本語の授業を担当。ブラジル人学校と公立学校との交流、事務仕事の補助（ブラジル人学校日本語教師）。現在は、エスコラ・サンパウロの空き教室を利用し、日本語学習支援基金の支援の下、日本語学習を希望するエスコラ・サンパウロの子ども達の日本語学習の支援を行っている。文字基礎・会話・日本語能力試験対策のクラスを設ける。また、地域のボランティアに参加が参加することにより、日本語の学習のみではなく、子ども達の日本語を話す機会・日本人と接する機会をつくっている（日本語学習支援教室代表）。

Ｑ２．あなたの経験の中で、日系ブラジル人の子ども達の生活や背景などについて、変化してきていると感じることはありますか？

日系ブラジル人の子ども達の転入・転出に関して、２００６年頃から２００８年まで、低学年の子ども達の公立学校への転出が多くみられ、高学年の子ども達は日本の公立学校からの転出が多くみられた。２００９年１月から２月にかけて公立学校・ブラジルへ帰国する子ども達が著しかった。２００９年２月以降は公立学校への転出が少なく、ブラジルへの帰国がほとんどであった。２００９年８月から現在にかけて３名の転入があったが、共に公立学校からの転校であり、新しくブラジルから来た子ども達が入学してくることはなかった。

日本語の力に関して、保育園までしか日本語環境にいないにも関わらず高学年では、（６・７・８・９年生）日常会話は問題なく、日本語能力試験３級までなんなく突破する子ども達が多いが（１１名）、低学年（１・２・３・４・５）では、日常会話ができる子ども達すら少なくなってきた（約２名）。

保育園→ブラジル人学校の図式が減り、保育園→公立学校が増えてきているのではないかと感じる。また、ブラジル人学校→公立学校よりも、ブラジル人学校→帰国、ブラジル人学校→ブラジル人学校

の方が多いと感じる。現在の高学年（１２歳以上）の頃には公立学校の情報の不足、支援体制などの不足があったのではないかと感じる。

※調査・研究は行っていないので、あくまで私の関わった子ども達、保護者からの聞き取りであり、詳細な統計データはない。

Ｑ３．ブラジルの子どもたちの教育に関わる日本の教師に知っておいてほしいこと、また日本の教師がブラジルに派遣されたとき、現地で学んでほしいことは何ですか？

公立学校からブラジル人学校に転校してきた子ども達と接してきて、高学年（６・７・８・９）の子ども達は精神的に非常に不安的な子どもの達が多い。日本人が嫌い、学校が嫌いなど

とよく言っていた。そのほとんどがいじめや居場所のなさであり、学習面でついていけなかった事は勿論だが、それ以上に精神的な面で子ども達は傷ついていた。

接する期間が長くなるにつれ、日本人が嫌い・学校が嫌いという態度は減ってきていたが、それでもやはり公立学校には戻りたくないという子が多かった。学習面での支援は勿論だが、精神的な面での支援にも重点を置いて欲しいと思う。子ども達の背景を理解してあげること、じっくり話を聞いてあげることが重要であると思う。

Q4. その他、この研究会の参加メンバーにたずねたいこと、情報共有したいことがあれば、書いて下さい。

◎このあとの質問は、ブラジル人学校の方におたずねします。

① ブラジル人学校から日本の学校に転出する子どもに対して、どんなアドバイスをしますか？

日本の学校に転出する子どもは低学年に多く、事前に子どもから直接転出するという事を聞く機会があまりなく直前になって転出を聞くという事が多かったため、アドバイスを与える機会は少なかった。直前にでも転出するという事が分かった子どもには、ブラジル人学校と日本の学校の違い、公立学校のよいところを伝え、不安を軽減するようなアドバイスを送っていた。そして、学習言語の壁にぶつかった時には諦めないで努力すること、ポルトガル語を忘れないようにすることを伝えるようにしていた。高学年に関しては日本語とポルトガル語を学ぶことによって、自分自身の将来の選択肢を広げるように努力するように伝えていた。将来的に日本での進学・定住、ブラジルへの帰国・定住が自分自身の意思で出来るように勉強に励むようにアドバイスをしていた。

② ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもを担当する日本の学校の先生に対して、どんなアドバイスをしますか？（または、したいですか？）

ブラジル人学校でも同様であるが、保護者の日本滞在期間・定住意思の確認が必要である。子ども達が安定した学習を行えるよう、進学も踏まえ保護者と話し合う事が必要であり、公立学校の先生には通訳を介してでも保護者と話し合ってもらいたい。精神的な面に関して、言語でのコミュニケーションが難しい分、行動や表情で子ども達を安心させてあげると同時に、ブラジル人学校から転出した子どもに対しての働きかけとともに、日本の学校に在籍する子ども達に対しても言語・文化・外見等の違いを持つ子供たちに対する接し方、違いを認め合うという事を子ども達自身が身につけていけるように、適切な指導をして欲しい。

③ ブラジル人学校から日本の学校に転出した子どもから、相談を受けたことはありますか？また、それはどのような相談でしたか？

昨年まではブラジル人学校から雇用されていた関係もあり、個人的に転出した子どもとコンタクトは控えていたため相談を受けたことは無い。

氏名：古川 カチア イツエ

役職：H I R O 学園 教員

Q 1. あなたの^{しごと}お仕事・^{かつどう}活動について^{かんたん}簡単にご^{しょうかい}紹介ください

H I R O 学園 教員（体育）

Q 2. あなたの^{けいけん}経験の中で、^{なか}^{につけい}日系ブラジル人の^こ子ども達の^{たち}生活や^{せいかつ}背景などについて、^{へんか}変化してきていると^{かん}感じることはありますか？

日本語を^{おぼ}覚えたい子どもがすこしふえました。

Q 3. ブラジルの^こ子どもたちの^{きょういく}教育に関わる^{かか}日本の^{にほん}教師に^{きょうし}知っておいてほしいこと、また日本の^{にほん}教師がブラジルに^{はけん}派遣されたとき、^{げんち}現地で^{まな}学んできてほしいことは何ですか？

^{ことば}言葉と^{ぶんか}文化だけが^{ちが}違うのではなくて、どこが^{ちが}違うとか、どうやってやれば^{ただ}正しいか^{りょうほう}両方とも^{まな}学んでほしいです。

Q 4. その他、この^{ほか}研究会の^{けんきゅうかい}参加メンバーに^{さんか}たずねたいこと、^{じょうほうきょうゆう}情報共有したいことがあれば、^か書いて下さい。

^{おし}教えているとき、どこが^{むずか}いちばん難しいですか。

◎このあとの^{しつもん}質問は、ブラジル人^{がっこう}学校の方におたずねします。

① ブラジル人^{じんがっこう}学校から^{にほん}日本の^{がっこう}学校に^{てんしゅつ}転出する子どもに対して、どんな^{たい}アドバイスをしますか？

② ブラジル人^{じんがっこう}学校から^{にほん}日本の^{がっこう}学校に^{てんしゅつ}転出した子どもを^{たんとう}担当する^{にほん}日本の^{がっこう}学校の^{せんせい}先生に対して、どんな^{たい}アドバイスをしますか？（または、したいですか？）

^{ともだち}友達ができたら、^{じぶん}自分の^{ちから}力で^の伸びるとおもいます。

③ ブラジル人^{じんがっこう}学校から^{にほん}日本の^{がっこう}学校に^{てんしゅつ}転出した子どもから、^{そうだん}相談を受けたことはありますか？また、それはどのような^{そうだん}相談でしたか？

あります。そのとき^{さんすう}算数の^{べんきょう}勉強と日本語の^{べんきょう}勉強を^いしてくださいと言いました。
（^し知り^あ合いが^{そうだん}相談を受けましたとき）

氏名：丹羽 ジルセ 久美恵

役職：知立市教育委員会 学校教育課 日本語指導助手

Q 1. あなたの^{しごと}お仕事・^{かつどう}活動について^{かんたん}簡単に^{しょうかい}ご紹介ください

おもに翻訳、通訳、生徒指導です。

- 転入生と保護者への面接。(日本の学校や東小学校のルールの説明。日本の学校の厳しさ。勉強の難しさなどの説明)
- 転入生(ブラジル直またはブラジル人学校からの生徒)に各学年までの算数の補い。
- 児童と先生、保護者と先生の通訳。
- 学校からの連絡プリント、保護者から連絡などの翻訳。
- 国語や社会の授業での支援 (言葉の意味や教科書の内容の説明)。

Q 2. あなたの^{けいけん}経験^{なか}の中で、^{につけい}日系^こブラジル人^{たち}の子ども達^{せい}の生活^{せいかつ}や背景^{はいけい}などについて、^{へんか}変化^{かん}してきていると^{かん}感じることはありますか？

はい、感じます。15年前に子供をつれて日本へ働きに来ていた親の学歴や教育意識がもっと高かったと思います。10年前からそれが少しずつ低くなっています。理由として考えられるのは、親の学歴が低い、15年前にしっかりした教育も受けずに日本へ働きに来た若者が今の子供たちの親になっていることだと思います。

Q 3. ブラジルの^こ子どもたちの^{きょういく}教育^{かか}に関わる^{にほん}日本の^{きょうし}教師^しに知っておいてほしいこと、また^{にほん}日本の^{きょうし}教師^はがブラジルに^{はけん}派遣^{げんち}されたとき、^{まな}現地で^{なん}学んで^{なん}きてほしいことは何ですか？

外国人だからと言ってすべて済ませないでほしい。たとえば、日本語が分からないから何もしなくていい。特に、低学年の子供たちに。

一、二年生に学ぶルールや学校生活は重要だと思います。このころに勉強する姿勢を学ぶ必要があとだと思います。

もちろん、文化の違いを学んでほしいですが、日本にいる子供父と現地で勉強をしている子供たちの違いに気づいてほしいです。ブラジルにいる子供たちは将来への夢を持っていること。日本にいる子供たちは将来性がない。

Q 4. その他、この^{ほか}研究会^{けんきゅうかい}の^{さんか}参加メンバー^{じょうほうきょうゆう}にたずねたいこと、^か情報共有^かしたいことがあれば、書いて下さい。

- 子供たちの将来のために保護者の教育意識を高める必要がある。
- 日本でずっと頑張るかブラジルへ帰って頑張るか決意を固めること。
- 未来への子供たちを育てるために学校と保護者と地域の協力が必要。

2.2.4 共催の公開講演会

開催日時： 2009年11月5日（木）17:30 ～ 19:00

主催：愛知県立大学日本語教員課程（平成21年度教育・研究活性化推進費）

開催場所： 愛知県立大学 長久手キャンパス 学術文化交流センター 2階 小ホール（K棟）
（愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3）

タイトル：「豊田市立東保見小学校における外国籍児童への学習支援」

参加者（敬称略）：

【発表者】 小山 幾子〔豊田市立東保見小学校 国際教室主任 教諭〕

【活動協力者】 高木秀近，藪崎昭彦，勅使千鶴，井村美穂，中根正美〔ことばの教室室長〕

【活動実施者】 松本一子，高阪香津美，加藤史朗，東弘子（司会）

【一般】 5名

【愛知県立大学 教員（活動実施者以外）】 1名

【愛知県立大学 学生】 22名

【事務担当】 内山久子

本講演会の概要は、以下のとおりである。

1 小山幾子氏による講演

互いを認め合いともに成長しようとする東保見っ子

—かかわり合いを通して、ともに学び合い伸びていく子をめざして—

- ・ 東保見小学校の概要と外国人児童のデータ
- ・ 研究テーマ「かかわり合いを通して、ともに学び合い伸びていく子の育成」
国際教室の体制、取り出し指導、入り込み指導、学校日本語指導員
環境作りや課題の工夫、保護者との連携、地域との連携 など
- ・ これからの課題進路や教科指導へ向けて

2 質疑応答

- ・ 保護者とのコミュニケーションの多言語対応について
 - ・ 外国人保護者懇談会について
 - ・ 多様化する保護者について（識字率や背景など）
 - ・ 児童の成績・評価について
 - ・ 児童のアイデンティティ教育について
- 以 上

2009年11月5日(木)



— 公開講演会 —
豊田市立東保見小学校
における
外国籍児童への学習支援

講師 小山幾子 教諭
(豊田市立東保見小学校 国際教室主任)

- ・ 東保見小学校で行っている外国籍児童への指導とサポートの状況（国際学級、日本語指導、放課後支援等と地域との連携）
 - ・ 外国籍の子どもの指導で注意すべきこと
 - ・ 入り込みや取り出しの指導の役割 など
- 現場での経験に基づいた視点でお話いただきます。

学内外を問わず
皆様のご参加をお待ちしております。

◆ 日 時 : 2009年11月5日(木) 17:30 ~ 19:00

◆ 会 場 : 愛知県立大学 長久手キャンパス

学術文化交流センター 2階 小ホール (K棟)

*長久手キャンパスへのアクセス 及び キャンパスまっぷは 次ページをご覧ください。

◆ 入 場 料 : 無料

◆ 講 師 : 豊田市立東保見小学校 国際教室主任 小山 幾子 教諭

◆ 定 員 : 80名(事前申込みは不要です)

◆ 主 催 : 愛知県立大学日本語教員課程(平成21年度教育・研究活性化推進費)

◆ 共 催 : 平成21年度文部科学省委託事業 国際協カイニシアティブ教育協力拠点形成事業
(MEXT International Cooperation)「日系社会青年ボランティア」「現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成」実施委員会

◆ 問合せ先 : 愛知県立大学学術情報部 研究支援・地域連携課
国際協カイニシアティブ事業担当 内山 久子
愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3
TEL: 0561-64-1111 (内線 1210) FAX: 0561-64-1104
e-mail : uchiyama@bur.aichi-pu.ac.jp

*新型インフルエンザの発生状況によっては、研究会にご参加いただく方を制限する場合があります。
本学学生は、休学措置がとられていないか web メールで確認してください。
一般の方は、開催となりますので、マスクなど各自ご着用いただくようお願いいたします。

講演会記録

【 司会者挨拶 】

本日は、日本語教員課程と、文科省の委託事業である国際協力イニシアティブ事業との共催で東保見小学校の小山幾子先生に「豊田市立東保見小学校における外国籍児童への学習支援」というテーマでお話しいただきます。お話の後、フロアーからのご質問を受け、できるだけ情報共有していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【 講演 】

皆さん、こんにちは。豊田市立東保見小学校で国際教室の主任をしております小山幾子と申します。本校における外国人児童の教育について、つたない実践ですが、日々取り組んでいることや目指していることなど、1時間ぐらいお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

お手元の資料の後半部分は、こちらのパワーポイントと同じものですので、あわせてご覧ください。

東保見小学校の概要と外国人児童

東保見小学校は、外国人集住地区である保見団地と新興住宅地である乙部が丘を学区にした学校です。この県立大学からも近い、豊田市の北のはずれに位置しています。集住地区には、この東保見小学校と、もう1校、外国人児童がたくさん学んでいることで有名な西保見小学校があります。【→シート1】

創立36年目で、今年度のクラス数は、特別支援教室2学級を入れて、全部で18学級です。

外国人児童在籍の推移です。外国人の受け入れは、ブラジル人の子が編入してきた平成元年から始まっています。黄色が外国人児童の数で、緑色が日本人の児童の数です。一番多かったのは平成15年、16年、17年ぐらいですが、それ以降もそれほど大幅な増減はありません。10月末に1名が瀬戸に転出、1名が帰国予定のため退学しまして、今現在118名です。日本人の児童数は486名ですから、約25%を外国人児童が占めていることになります。【→シート2、3】

外国人児童といいますが、ほとんどが日系ブラジル人です。紫で示したところがブラジル国籍の児童数です。ペルーの国籍を持っている児童が現在8名、フィリピンの国籍を持っている児童が現在2名、ザンビアの国籍を持っている児童が1名、あとは全部ブラジル国籍です。日本とブラジル、2つの国籍を持つ二重国籍の子はブラジル国籍でカウントしていますが、外国につながる子、例えば、父親は日本人で、母親がフィリピンである、母親が韓国であるという児童は入れていません。そういう子も含めると、もう少し数が増えます。【→シート4】

こちらは学年別国籍の割合です。黄色が日本国籍の児童、青が外国籍の児童です。一番右側をご覧ください。現在、特別支援の教室に10名の児童が在籍していますが、そのうち3人が外国人の児童です。【→シート5】

ともに学び合い伸びていく

本校は研究テーマとして「かかわり合いを通して、共に学び合い伸びていく子の育成」を掲げています。

日本人の児童は、クラスに複数の外国人の子がいることが当たり前になっていますので、外国人の子を特別視することはありませんが、ひとたび何かがあると、「あの子は外国人だから分からない」と

か、「外国人だから、忘れ物をする」とか、画一的なイメージや誤解を持つことがないわけではありません。よその学校に比べれば、少ないほうだと思いますが。

一方、外国人の児童は、学習の困難を抱えています。そしてそれは学習の意欲の低さにもつながっています。非常に難しいことを日本の言葉で、自分の母語でない言葉で学ばなければいけないわけですから、どうしても意欲を持てなくなるわけです。また、習慣の違いによるトラブルもあります。母国では当たり前なことでも、日本の学校では通用しないことも多くありますから、「それはおかしいよ」としかられたり、「駄目でしょ」と注意されたりします。また、外国人児童の保護者も戸惑いは少なくありません。日本の学校の経験がない方がほとんどですから。日本の学校生活の1日の流れや1年の流れが分からず、「いついつまでにこういうものが要るな」とか、「これからこういうことをやるんだな」ということが見通せないまま、心の準備がないまま子どもさんを学校に出しています。外国人の児童の子は、こういうたくさんの困難やたくさんの問題を抱えながら一生懸命学習しています。【→シート6】

こういう現状を踏まえ、目指す子ども像として、「ちがいを認め理解しあえる子ども」「自信をもって、表現できる子ども」「主体的にかかわり合い、学び合う子ども」という3つを掲げまして、児童の指導にあたっています。【→シート7】

組織・体制と重点的な取り組み

先ほど申し上げたように、「かかわり合いを通して、共に学び合い伸びていく子の育成」をテーマに共生の学校づくりを進めています。多くの者が指導にあたりますから、その組織、協働体制をしっかりと確立させる必要があります。そこで、とにかく情報を共有するため、そして、各学年の動きが互いによく分かるようにするため、このように**学年部の構成**を組んでいます。

現在1年生から4年生までは3クラスで、5年生と6年生が2クラスですが、1年生担当の国際担当者、2年生担当の国際担当者というふうに、それぞれの学年に国際教室の担当者がついて、学年部として動いています。国際の担当者も1つの学年に入って、その学年の児童をみんなで見ていく、学年を全体で見ていく体制をとっているわけです。日本語の指導を手伝う学校日本語指導員も学年を決めています。低・中・高と書いてありますが、1年と4年を1人の先生、2年と5年を1人の先生、3年と6年を1人の先生というふうに。こうすることで、保護者の方に「その人に聞けば、前後のつながりがよく分かっている」「非常に聞きやすい」「相談しやすい」「自分の子どものことを常に見てくれている」という安心感を持っていただけるようにしています。こういう体制がとれるのも、**豊田市に加配という恵まれた制度があるから**ですが、このことについては後からお話します。【→シート8】

今年度の重点的な取り組み1です。「学習形態の工夫『かかわり合う場』の効果的な設定」ということで、周りの友達と一緒に学び合いながら学習を進めることを特に重視して授業を組んでいます。ペアで学習したり、グループで学習したり、お互いに教え合ったり、お互いに聞き合ったり、考えを出し合ったりする機会をできるだけ多くして、みんなで授業をするという取り組みです。一斉授業の形、受け身の授業ですと、日本語が得意でない子、日本語をうまく扱えない子どもにとっては非常に分かりにくく苦痛な時間になりがちですので、学習形態を常に工夫しながら努力しています。【→シート9】

重点的な取り組み2、「外国人児童へのさらなる支援の充実『取り出し』『入り込み』」です。できるだけ一人一人にあった指導ができるように日々考えて授業に取り組んでいます。「取り出

し、「入り込み」については、後で詳しくお話します。

もう1つ、「全校での交流『縦割り遊び』『異学年交流会』」も行っています。「縦割り遊び」というのは、毎週水曜日、1年生から5年生まで一緒に遊ぼうという会です。6年生の子が毎週計画します。例えば、だるまさんが転んだ、ハンカチ落とし、そんな遊びを通して楽しく触れ合っています。「異学年交流会」というのは、例えば、2年生が1年生の子を招いて、おもちゃ作りを教えて、発表会、お祭りをしたり、6年生が新1年生のためのお祝いの会を開いたりといったことです。学年間の交流も深めるように努力しています。【→シート10】

国際教室

次に、国際教室について説明します。私は国際教室の主任という役目をもらっていますが、これは場所のことではなく、組織のことです。

本校では日本人の児童と外国人の児童と一緒に学んでいますが、外国人の児童といっても、滞在年数や語学の得意、不得意など、ケースはさまざまですので、おおよそ**3つのグループ**に分けて指導しています。

1つは、「**入り込み指導**」です。「入り込み」という支援でカバーしながら、すべての授業を学級で受けます。「入り込み」というのはT2のようなことです。

2つ目は、特に支援が必要な児童に対する「**取り出し指導**」です。まだ語彙が少なく、学級の授業だけでは十分に自分の力を発揮するのが難しい児童に対して行う別教室での少人数指導です。国語と算数の全時間で行います。

3つ目、日本語での指導が著しく困難である児童については、豊田市主催の「**ことばの教室**」という**初期日本語指導の教室**に通ってもらいます。

「ことばの教室」では、学校生活に適応でき、受け答えができ、教員の指示が分かる、平仮名や片仮名が読める、書ける、そういったところまで集中的に日本語の初期指導をしています。現在、豊田市には西保見小学校と野見小学校にあります。「ことばの教室」に通っている期間は、早い子で5カ月ぐらい、もう少しゆっくりな子は半年から8カ月ぐらいです。**本校に戻ったときには、当該学年の算数と初期日本語指導は「ことばの教室」で済んでいますから、教科指導から入ります。日本語指導は教科指導の中で行っていく形です。日本語「を」教えるわけではなくて、日本語「で」教科の学習ができるように、子どもたちを「取り出し」、または、「入り込み」で指導していきます。**「ことばの教室」という初期日本語指導の教室があることで、本校の今の外国人児童教育が成り立っているといえます。【→シート11】

国際教室の体制です。現在12名で国際教室の運営をしています。

まず、教員は5名です。**県費負担の職員**です。特別に外国人児童教育の免許を持っているわけではありません。私のように、おとししまで担任をやっていて、学校の役職というか、仕事の配分で「じゃ、今年は国際教室ね」というふうに命じられる県費の負担職員です。クラスの担任は持たず、国際教室を専門にあたります。ただし、学年は決めていますので、その学年部として一緒に活動します。その学年の副担任のように、外国人の指導全般にあたるわけです。

あと、**研究加配教員**ということで、今年度は**常勤講師の方が1名**います。

それから、**学校日本語指導員が6名**です。**豊田市独自の配置**です。豊田市市費の職員として常勤で本校に派遣されている方です。4名の方はポルトガル語が話せます。4名のうち3名はブラジルの国籍の方でバイリンガルです。1名は日本人ですが、ブラジルで社会経験があると

うか、生活していらっしゃったので、ポルトガル語が分かります。残りの2名の方は、スペイン語の対応をしています。皆さんの先輩にあたる県立大学出身の方もいます。**巡回ではなく、毎日朝8時半から16時半まで勤務**しています。【→シート12】

これは水曜日の私の学年の時間割です。1時間目の総合と2時間目の社会、ピンクのところですが、ここが「入り込み指導」です。私とその学級に行って、特にサポートが必要な児童の支援を行います。1時間目は総合学習で4の1へ行き、2時間目は社会の授業で4の3へ行くということです。黄色になっている国語と算数は「取り出し」授業です。1組から2名、2組から3名、3組から2名、合計7名の子が、3時間目は国語の用意をして、4時間目の算数は算数の用意をして、在籍の学級とは別の教室へ移動し、授業を受けます。5時間目は理科で、私が4の3に「入り込み」に行きます。4の1の2時間目の理科など、「入り込み」がない時間は、学級担任が1人で授業をします。**学校日本語指導員が「入り込み指導」をすることもあります、これだけ加配がいても、全部の時間をカバーできるわけではありません。できる範囲で支援に努めている**ということです。

水曜日の6時間目は、国際教室のスタッフ12名による会議です。授業の研究、児童の様子の情報交換、それぞれが携わっています研究の報告などを行います。授業計画についても相談します。延びて1時間半ぐらいになることもあります。毎週情報交換をしながら、子どもたちのよりよい支援に努めています。【→シート13】

「取り出し指導」

次に、「取り出し指導」についてお話しします。

本校では、教科指導にあわせて日本語指導を行うことを目指していますので、学習で使う日本語の支援が日本語指導のメインになりますが、**日常会話で使われる言葉と教科書で出てくる言葉にはかなり違いがあります**。低学年でもそうですが、高学年になればなるほど、日常会話で出てこない言葉がたくさん出てきます。5年生で出てくる「水産業」という言葉もそうです。担任は「今日は水産業の勉強をするよ」と言って、本校ではルビもちゃんと振りますが、黒板に書きます。「水産業って何かな?」「ああ、なんか海に関係するのかな?」「何だろう?」と考えているうちに、担任は2つ目、3つ目の発問までして、課題が出ていたりするわけです。子どもたちはこのような毎日を送っています。

そこで「取り出し」では、「これはこういう意味だよ」と日本語の言い換えをしたり、「こういうことなんだよ」と日本語の指導を加えたりしながら、教科の指導をしていきます。でも、常に言い換えてくれる人がいるわけではありませんので、「水産業」という言葉を使えるところまで支援することをワンセットとしています。

例えば、理科、生活科では、アサガオやホウセンカの種まきをしますが、「まく」という言葉が分かりません。「これを土の中に入れることだよ」と言うと、子どもたちは「ああ」と分かりますが、「種をまく」という言葉が子どもたちの中に定着することが大切ですので、最初は言い換え、何度も繰り返すことで、最終的に「種をまく」という言葉の意味が分かって自分で言える、自分で使えるようにしていきます。ですので、非常に多くの時間が必要です。

そして、5年生になると、種は「種子」と習います。そうすると、「種子って何かな?」というところに行くわけです。「タネのことだよ」と言うと、「タネか」と理解するんですが、いつまでもタネでは駄目なんです。中学校卒業後の進路、高校進学、就職、大学進学を考えると、

こうした本当に基礎的な学力をつけることが必要ですので、そこまで面倒を見たいと思っています。基礎基本の定着ということでは、四則計算なども含みます。

本校には、途中編入の子もたくさんいます。ブラジル人学校から来る子もいれば、ブラジルから直接来て、「ことばの教室」を経由して本校に来る子もいます。年齢は9歳、11歳でも、それまでにどのような学習体験をしてきたかによって、学力には大きな差があります。ブラジルの学校できちっと勉強してきた子も、行ったり来たりを繰り返してきた子も、学校へ行く機会がなかった子も、その学年の児童として編入してきますので、補充をかけて学力を底上げしなければいけないこともあります。通常の在籍学級だけではとてもカバーできないので、それは「取り出し」の教室で行います。個別のカルテを作って、カリキュラムと照らし合わせながら、抜けているところを補充していきます。

最近、日本のブラジル人学校から編入してきた4年生の子は、本当に優秀な頑張り屋さんですが、3年生で習う「単位」が全部抜けていました。4年生の教科書には既に理解しているものとして出てきますので、「取り出し」で対応しています。その子にあわせて、限られた時間の中でいかに力をつけていくかということを考えながら指導しています。ただ、当該学年の学習も進めなければ、差がどんどん開くばかりですので、できるだけコンパクトに分かりやすく指導していきます。

「取り出し指導」で目指しているのは、日本語「で」学習する力を身につけさせることです。日本語「を」学んでいるのではありません。私が例えば中国語を学ぶために留学することとは全く違います。あくまで日本語で在籍学級で勉強する力をつけるための「取り出し教室」と考えています。【→シート14】

ただ、どの子を「取り出し」して、どの子を教室で学習させるかという判断は、非常に難しいところです。日本語の力を測るためのテストはありませんかという質問がよくありますが、それはないと思います。その子の滞在年数、生育歴、家庭で使っている言語、そういうことが全部関係してきますので、「日本語の力が60点だから、取り出し」というふうに決められるわけではありません。複数の目で、たくさんの教員の目、日本語指導員の目で、「この子は在籍学級で頑張ってもらおう」「この子は『取り出し』で個別に指導して、力をつけさせよう」というふうに見取りをしています。また、取り出す人数は7人といいましたが、それぞれレベルの違う子たちですから、簡単ではありません。日々葛藤の毎日です。見られる人数は決まっていますので、それも判断材料になります。たくさんの子を取り出せばいいというものでもありません。それから、保護者の方の考えもあります。保護者の方は学校での学習に期待も不安も持っていらっしゃいます。4月にオリエンテーションを行って説明したりする中で、その子のために一番いい場所はどこかを探っていきます。「取り出し」にするかどうかは、全学年の担任、いろいろな方と相談し、最終的には、私たちである程度決めます。

この写真は、4月、オリエンテーションをやっているところです。「こういう意味で『取り出し』があるんだよ」と説明しています。「今年はしばらく『取り出し教室』で力をつけるよ」ということで、子どもたちに目当て、目標を立てさせたりもします。また、本校では、保護者の方に『国際教室』というパンフレットも配っています。

保護者の方には、自分の子の日本語の力が分かりにくいものです。「うちの子はすごく日本語が話せるのに、どうして「取り出し」で勉強しなければいけないの？」という質問もありますし、「うちの子は全然話せないのに、どうして在籍学級で勉強しているの？」という質問もあります。日本語の学習には、会話の力だけではなく、「読む」「書く」という非常にレベルの高い

力も必要ですので、ただ話せばいいということではなく、いろいろな学習への適応能力も含めて決めていますし、保護者の方にもそのように説明します。

また、言葉の支援が必要だから「取り出し教室」に行っているだけなのに、日本人の児童の中から「あの子はばかだから、『取り出し』で勉強している」という心ない声が聞こえてくることもあります。オリエンテーションは、そういった誤解を防ぐとともに、「頑張って早く日本語を覚えて勉強しようね」と意欲を高める場でもあります。【→シート 15】

「取り出し」では、少人数指導で、話す力、聞く力、読む力、書く力、語彙を増やすことを毎日毎日やっています。先ほどから何回も申し上げていますように、日本語で教室の学習に参加できる力をつけるためです。ですから、文法的なことではなく、できるだけ教科書の中で学びをしていくようにしています。カリキュラムどおり全部はできませんが、教科書を使って日本語の学習とあわせて教科指導をしています。

「取り出し」をした子の指導要録での評価はオールCです。日本語指導をしながら教科指導をしていますので、どんなに意欲が高くても、どんなに頑張って学習していても、当該学年の全カリキュラムを終えることは不可能だからです。

指導上の工夫

子どもたちは、言葉が不自由であること、分からないことに対して、とても悲しい思い、苦しい思いをしています。日本語で勉強したいと自分で選択したわけではありません。たまたま家族で日本にいて、日本の学校に入っただけですから、不適応を起こす子も多くなります。分からない授業、なかなか取れない点数。意欲を持ちにくい児童が大半です。【→シート 16】

そこで、学習意欲を引き出す工夫の1つとして、動作化ということを行っています。左側は盲導犬の訓練という勉強をしているところの写真ですが、実際に目隠しをして歩いてみえています。また、話をただ聞くより、見るものとセットにしたほうが分かりやすいので、具体的な資料も用意します。一番下を書いてある具体物です。聞いて、見て、そして、動作をして、五感を使って、たくさんの器官を使って言葉を獲得するようにしています。そうすると、理解の助けになりますし、記憶の助けにもなります。

真ん中の写真はカルタをやっているところです。約数、倍数をカルタで作って、勝ち負けを決めるゲームだと思います。右側は4年生の子です。上は、『春のうた』という詩の勉強をしたときの写真です。イヌフグリなど、花の名前がたくさん出てきますので、実際に採ってきて、花の名前を対応させているところです。下は、クリを半分に切って食べようとしている写真です。五感を使って作文を書く学習です。味を確かめているところです。

このように、学習意欲を引き出す工夫をしながら、当該学年の内容にあった指導、しかも理解の支援、記憶の支援ができるような指導をするように日々、研さんに努めています。【→シート 17】

板書・掲示の工夫も大切です。子どもたちはどうしても忘れてしまうからです。平行四辺形、台形、ひし形、昨日ちゃんと覚えたからと思って「じゃ、やってみるよ。これは何かな」と提示すると、昨日はあんなにペラペラ言えたのに、忘れているんです。**やはり第二言語ですので、難しいんだらうと思います。**例えばフランス語で何万とかいう数字を今日言えたとしても、明日言えるかといったら、多分言えないと思うんです。やはり言語が違うから記憶に残りにくいんだらうと思います。ですので、**掲示物も、在籍学級では単元が終わったら次のもの、学習が終わった**

ら次のものというふうにかえていきますが、「あそこを書いてあるよ」「あそこ、やったよね」と分かるように、できるだけ長く残しています。本校にいらっしゃる機会があったら、ご覧ください。【→シート18】

教材・教具の工夫

あと、教材・教具の工夫もしています。理解の支援に具体物をとということで、左下にある『ことば絵じてん』を使っています。結構コンパクトにいろいろな言葉が載っていますので、さっと引いて、見せています。すごく役に立ちます。国際教室で1冊ずつ持っています。例えばボーリングという言葉もいちいち説明するのは大変ですが、この本で探して「これだよ」と見せると、「ああ、やったことがある」と。絵で見せることで、細かい言葉のつまづきをできるだけなくしていこうという支援です。

右上は、愛知教育大学から送っていただいているリライト教材です。算数の文章には、必要でない日本語がたくさん入っています。「このストローを使って三角形を作って」ということが言いたいのに、要らない言葉というか、本質ではない言葉が入っているんです。このリライト教材では、そういうのを除いて端的な指示になっています。しかも、全部振り仮名がついています。教科書と見比べながら授業で使っています。最後は教科書に戻ります。

右下の「かん字ちょ金箱」は、覚えたら貯金ができるというだけのことですが、子どもたちにとって、自分の学習の蓄積が目に見えることは大きな喜びのようです。ほかにも、グラフにしたり、個人のシートにシールを張ったりもしています。ほかの子との競争ではなく、自分の力がついていることが目で見て分かるようにしてあげてを大事にしています。【→シート19】

次、課題の工夫です。宿題をやってくることはとても大変です。放課後支援のところでお話ししますが、県立大学の学生さんにも大変協力していただいています。子どもたちは宿題を持って帰っても、保護者は子どもよりも日本語が分からないことも多いですから、見てくれる人がいません。1人でもできる宿題にするように工夫しています。

上の写真は、三井物産さんからインターネットの教材としていただいているもので、1年生から3年生までの漢字が学習できます。最初にクイズみたいなのがあって、筆順の練習があって、最後にまたクイズで終わるようになっていきます。1課、2課とまとまっています。ポルトガル語でヒントがついていますし、内容もまとまっていて、子どもたちが1人で取り組めるようになっていきます。こうした教材も活用しています。

基礎基本の定着につながるように宿題を出していますが、在籍の学級では、ここまでの支援はできません。放課後に学習を見ていただけたところがあったらいいなと思っています。【→シート20参照】

「入り込み指導」

次に、在籍学級への「入り込み指導」についてお話しします。

日常会話には不自由しなくても、学習が困難な子はいます。先ほどお話ししましたように、学習で使う言葉と日常会話は違いますので、学習で使う言葉が理解できないことがきっかけとなって、意欲がなくなってしまうのです。「あんなにペラペラ会話できるのに、どうしてできないんだろう？ 怠けているんじゃないか」と錯覚しがちですが、実は本当に分からないんです。分からなくても、子どもからはなかなか言い出せません。また、複数の指示が聞き取れないということも

あります。最初の指示は何とか聞きとれても、次の指示が分からなくなることがよくあるんです。また、発表したいと思っても、「日本語があっているかな？ こんなことを言って、笑われないかな？」という不安をいつも持っています。特に高学年に多いです。そのほか、一人調べのやり方が分からなくて、何を書いていいか分からないのに、「何でもいいから、書け」と言われるというシーンでは、子どもたちは本当に困っています。【→シート 21】

こうした困難を抱えた子どもたちが、在籍学級で自信を持って力を発揮できるように、日本語の支援や学習規律の支援、持ち物などへの支援を行っています。例えば、「明日、彫刻刀を持っていच्छい」と先生が言ったとします。「彫刻刀って何かな？」というところから始まり、「どこで買えるのか？」「うちにあるか？」、子どもたちは本当に困ってしまいます。そこで、学習に必要なものは、ポルトガル語訳と写真などを付けたものを用意し、保護者に渡せるように配慮しています。【→シート 22】

「入り込み指導」の工夫として、「押さえる言葉」「教科書への書き込み」「映像資料で」「絵や写真で」というキーワードを挙げています。次に教科書を開いたときに思い出せるように、どんどん書き込みをしていきます。余裕がある学年では、先に「取り出し」で「今度、こういう言葉が出てくるよ」と教えておいて、学級に戻すということもしています。余裕のない学年もありますので、全体ができていくわけではありません。【→シート 23】

日本語指導員の役割

次は、学校日本語指導員さんの役割についてお話しします。

1つは、学校だより、学年だよりの翻訳です。先ほどバイリンガルの指導員が3人いるという話をしましたが、学校だより、学年だよりなど、特に全体にかかわるようなものについては全部ポルトガル語に翻訳していただき、それを家庭に持たせるようにしています。

2つ目は、電話の対応です。8時30分から16時30分まで、どの時間でも電話で対応できるようにしています。特に、保護者の方が休憩に入る昼は必ずいるようにしています。

3つ目、担任と保護者をつなぐパイプの役割です。とてもありがたく思っています。電話だけではなく、連絡帳も活用しています。連絡帳でしたら、記録も残りますし、保護者もゆっくり考えて読めたり、書いたりできます。担任が書いて、それをポルトガル語に訳して、子どもに持たせるというやり方です。家庭からの返事も翻訳しています。【→シート 24】

また、本校では、本館と南館をつなぐところに「国際ストリート」を設け、子どもたちが自国の文化に触れられるコーナーを作っています。「ザンビアクイズ」とか、「ブラジルの歴史100周年」とか、「ペルーについて知ろう」とか、こういった掲示です。これも日本語指導員の方にはお願いしています。【→シート 25】

保護者との連携

外国人の保護者の方が中心になって国際協力委員会という組織をつくってくださっています。大変ありがたいことです。その長になっている方は、外国人の方ですが、日本語もかなりお分かりになります。年に2回、日本人も外国人も保護者も子どもも一緒になって交流できる場を設けてくれています。左側は3月にバーベキューをやったときの写真で、右側は夏休みに入る前、メンコとか、ハンカチ落としとか、そんなので遊んだときの写真です。【→シート 26】

本校では、外国人保護者懇談会を年に5回から6回行っています。外国人の方は、日本の学

校のことが分からなくて、すごく不安に思っているらしいようですので、学校のルール、持ち物、災害対策、行事、進路などのテーマを決めて、私たちから情報を提供するとともに、保護者の方からは不安なこと、質問や意見を聞くようにしています。ブラジルには地震がないそうですので、防災訓練や引き渡し送迎などの説明も行います。授業参観と一緒に持っています。

特に進路は、定住傾向があることもあって、非常に関心が高いテーマです。昨年度からは、本校の児童の大半が進学する保見中学校の進路指導主事の先生に来ていただいて、生の情報を中学校の立場からお話いただく会を設けています。今年度も2月に開催する予定です。【→シート 27】

また、本校では「ワールド図書」という図書室を5年前に立ち上げました。本校では読書を推進していますが、かつて担任をしていた子が「家へ持って帰っても、誰も読んでくれない」と怒ったことがきっかけです。倉庫になっていた教室から荷物を出して、ポルトガル語、スペイン語の本をこつこつとためてきました。市の中央図書館からも年間100冊、今年度140冊も借りることができ、現在では合計450冊にもなっています。全部貸し出し可です。

この『ワールド図書のご案内』は、「ワールド図書にはポルトガル語やスペイン語のこんな本がありますよ」というリストです。外国人の保護者にお渡ししています。「じゃ、今度〇番の本を借りてきて」という形で、親子一緒に読んで楽しんでもらっています。

学校では、母語の指導まではとても手が回りませんので、これが母語の保持に少しでも役立てばと考えています。特に高学年になると、子どもたちは日本語が得意になりますので、親子のコミュニケーションがとりにくくなる家庭も多いんです。この取り組みが親子のコミュニケーションを増やすための一助になればと思っています。【→シート 28】

この写真で読み聞かせをしている方はスペイン語の学校日本語指導者ですが、子どもが家で1人でも本が読めるようにということで、「読み語り DVD」も作成してくださっています。自作です。学校日本語指導者がポルトガル語で本を読んでいるところをビデオに撮ったものです。子どもがDVDをセットすれば、絵本を見ながら、指導員さんの声でポルトガル語が聞けます。もちろん、貸し出しもしています。学校では母語で指導していませんが、こういった形で少しでも母語に触れる機会を持ってほしいと思っています。【→シート 29】

地域との連携

NPO法人「ゆめの木教室」の先生方には本当にすごくお世話になっています。パウロフレイレというブラジル人学校、東保見こども園の「ひこうきぐも」でも、児童の勉強、放課後の支援をしていただいています。この写真はクアドリージャというブラジルのダンスをしているところです。みんなで習って、運動会で披露しています。こうした文化の交流も地域にあるブラジル人学校と行っています。【→シート 30】

本校は今年度から放課後支援「ひまわり教室」を始め、地域の方、学習サポーターの方に宿題の支援をしていただいています。県立大学の皆さんにお手伝いいただいています。場所も、指導できる人も足りないのです、1、2年生の外国人児童に限っています。【→シート 31】

外国人児童のこれから

昨年12月、大変な不況下で冬に突入して非常に心配しましたが、結局、帰国した児童は18名です。

その中に6年生が4名含まれています。キリがいいということもあったんでしょう。100名以上のうち帰国したのは1割弱ということです。やはり日本で暮らす選択をされたと私たちは考えています。永住傾向にあるのなら、小学校のうちから「頑張れば、こういうふうになれる」というふうに夢や希望を持てるように、進路を考えられるようにしてあげたいものです。そのためには、やはり教科指導によって学力をつけていくことが大切です。これが私たち公立小学校の大きな責任であると考えています。

もう1つ、特別支援の必要な子が、外国人の子の中にも日本人の子と同じぐらいの割合でいると思うんですが、「言葉が分からないからだ」というふうに見過ごされているのではないかということです。就学指導ということで知能検査をやっても、「言葉が分からないからできないんだ」と思ってしまいがちです。そうした子どもたちが特別な支援も受けられずに困っていることには、私たちもすごく胸を痛めています。豊田のこども発達センターや「パルクとよた」という医療機関、施設と連携して、できるだけ特別な支援を適切に受けられるようにと考えています。たくさんの方の加配がある恵まれた学校ですが、それでもなかなか人手が足りない現状です。【→シート32】

この写真は、昨年度のもので。外国人児童だけです。これだけの子がいて、本校で楽しく過ごしています。【→シート33】

まとめ

以上、学校の実情と本校が目指していることについて話を聞いていただきましたが、毎日、本当に格闘の日々です。ただ、外国人の子どもたちが少しでも夢や希望を持てるような学校でありたいですし、そうした外国人の児童に対する丁寧な指導は、日本人の児童に対しても有効であると考えています。

補遺：放課後支援学習サポーター

最後に、学習サポーターについて少しお話しします。本校では、放課後支援「ひまわり教室」連絡ノートを作っていて、これを書いています。

子どもたちは支援を必要としています。なんでもかんでも全部学習サポーターべったりということではいけません。少し押ししてくれるというんですか、学習を少し支えてくれる方が身近にすることで、子どもたちはすごく安心できるし、希望を持てるだろうと思います。学習のサポーターに求められるのは、やはりその子の価値観にあわせることだと思います。よく判断留保の原則と呼んでいます。自分の価値を押し付けるのではなく、その子の価値にできるだけ寄り添って、一緒に見つけて、一緒に歩くことです。「ここまで登っておいで」と引っ張り上げるのではなく、「一緒に登っていくよ」という姿勢です。

本校の学習サポーターの方にも、日々悩みを抱えながらも、すごく温かく支援にあたっています。本当に感謝しています。自分の自己実現のためではなく、学習者の価値にあわせ、一緒に寄り添っていただけるとありがたいと思います。

お近くにおみえの際は、本校の指導を見にお立ち寄りいただけたら、そして、ご指導いただけたら幸いです。長時間ありがとうございました。

【司会】

長時間にわたり、熱の入った指導のあり方をお話いただき、本当にありがとうございました。東保見小学校では、特別な子どもたちを支えて、なんとか普通にやっていけるようにするという考え方ではなく、どんな子どもも学校全体で、先生みんなで、社会の中で大きく育てようとしていることがとてもよく伝わってきました。素晴らしい教育だと思います。

< 休憩 >

【 質疑応答 】

本間：愛知県立大学外国語学部スペイン語学科2年生の本間と申します。

今、見せていただいたパンフレットはポルトガル語で書かれていましたが、ほかの言語を母語とする児童のために、ポルトガル語以外でも用意されているのでしょうか。

小山：翻訳の対応はポルトガル語だけです。

スペイン語については、電話など、会話の対応はしていますが、文書翻訳まではなかなか難しい状況です。ポルトガル語版には、必ずルビを振った日本語も付けています。分からないことは質問をいただく形にしています。

フィリピンとザンビアの児童のご家庭の方は日本語ができます。

若林：英米学科の若林と申します。今日はありがとうございました。

「取り出し」の子の評価はすべてCだとおっしゃっていましたが、どういった評価になっているのでしょうか。Cをもらったら、意欲が低下してしまうのではないかと思うんですが、いかがでしょうか。

小山：評価Cをつけているのは、学校で保存する指導要録という、公立学校における子どもたちのカルテみたいなものですが、それに対してということです。

子どもの学習成果は、通知表という形で年2回、保護者会も含めると、年4回、保護者にお知らせします。「取り出し」をしている子の国語と算数の評価は、文章表記にしています。AやBやCはつけません。できたこと、努力したほうがよいことというふうに分かりやすく文章表記をします。国語と算数以外は在籍の学級で学習していますので、ほかの子どもと同じように、同じ基準で評価されます。ですので、A、B、Cがつきます。体育、図工などの技能教科では、言葉に関係なく実力を発揮できますから、Aをもらう子どもたくさんいます。

ただ、学校で保管する指導要録の「取り出し」をした国語と算数の評価は、当該学年のカリキュラムがすべて終わっていない、到達できていないということで、Cをつけるという具合に学校の内規で決めています。

本校では、個人カルテという形で子どもたちの記録を残すようにしていますが、それは数字ではなく、努力の様子、学習の状況などを細かく書いています。次の学年、次の学年に引き継げるようなカルテです。

羽田野：外国語学部スペイン語学科3年の羽田野真帆と申します。貴重なお話をありがとうございました。

5 ページ、保護者との連携についてですが、外国人保護者懇談会は誰が主体となって行

うんでしょうか。

懇談会でルールや持ち物について説明されるとのことですが、学校日本語指導員の方が母語で直接説明しているんでしょうか、あるいは、配布資料を事前に用意して、絵などを使いながら説明するんでしょうか。説明の仕方を教えてください。

小山：外国人保護者懇談会は国際教室主催で行っています。保護者の方々に情報提供したほうがいいなと思うことや、保護者の方から意見を聞いたほうがいいなと思うことなど、国際教室の中で話し合ってテーマを決めます。一番最近の9月の外国人保護者懇談会では、県立大学の伊木さんをお招きして「夢や希望を持つ」「将来とは」といったこととお話いただきました。子どもたちや保護者の方にタイムリーに情報提供すること、夢や希望を持ってもらえるような話題を選ぶことをいつも心がけています。

外国人保護者懇談会では、ポルトガル語の資料も付けて、日本語とポルトガル語の両方で説明しています。日本語のほうが堪能な保護者の方もみえますので。ただ、スペイン語やニャンジャ語には対応していません。

2月ぐらいに、新入生のための入学説明会があります。そのときには、特別に外国人の保護者の方だけ集まっていたいて、「学校では1年間こんな流れで動く」ということが分かるパワーポイントの資料をお見せしながら説明します。「運動会があるん」とか、「夏になると、プールにただで入れる。みんなで水着を着て入るんだよ」とか、「夏休みがあって、ずっと学校は休み」とか。もう1つ、1日の学校生活の流れが分かるものも作ってあります。「給食の時間には、同じメニューをみんなで一緒に食べるんだよ」とか、「掃除をしないといけないんだよ」とか。入学後にびっくりされることがないように、「日本の公立の学校ではこういうふうにやっていくんですよ」と事前にお知らせして、あらかじめ日本の学校のイメージを持っていただくようにしています。

勅使：日本福祉大学の勅使と申します。保育を研究しています。

1994年ごろだったでしょうか、保見団地の伊保保育園にいろいろ教えてもらいに行ったことがあります。そのときの様子とは隔世の感があるなと思ってお聞きしていました。

1点目は、国際教室はいつから始められたかということです。

もう1点は、親御さんの識字率はどれぐらいかということです。以前、保育についてポルトガル語でアンケートを作って行ったら、読める人がほとんどいなかったのので、教育委員会からオガサワラ・マルシアさんに来ていただいて、アンケートを全部読んでいただきながら1人ずつ面接しなければならませんでした。

小山：外国人の児童を受け入れは平成元年からで、国際教室が立ち上がったのは、今、松本先生から教えていただきましたところ、平成4年からとのこと。加配の人数はそころとはだいぶ変わっていると思います。現在は5名いますが、そのころはどうでしたでしょうか。

松本：最高2名。

小山：最高2名でスタートしたそうです。ありがとうございます。

保護者の方の識字率を実際に調査したことはありませんが、1～2年生の保護者の方の中には、日本に中学生ぐらいのときに来た方が何名かいらっしゃって、その方たちは両方の言語が少し不自由です。ポルトガル語で書いたものは読みづらいし、日本語で書いたものも、保護者向け

の文章ですから、少し分かりにくいようです。それほど数は多くありませんが。会話はもちろん両方できますので、困ったことに関しては電話などで指導員に確認していただいています。どの程度の方が読んだり、書いたりすることに不自由かということまでは把握できていません。

小山：今のことに関して何か情報をお持ちの方はいらっしゃいますか。補足とか。

松本：愛知県の加配教員の配置基準は、1つの学校に日本語指導が必要な子どもが10名以上いると1名、20名以上いると2名というものでした。7名以上で1名、14名以上2名というときもありましたが、どんどん子どもの数が増えるので、予算が追いつかなくなって、10名以上1名、20名以上2名になりました。40名になっても、50名になっても2名以上は増えませんでした。平成18年にやっと見直されて、19年からまたさらに見直されて、最高5名まで、91名以上5名となりました。10名以上、31名以上、51名以上、71名以上、91名以上。

中学校の基準は、小学校の基準と違って、最高4名までです。10名単位で加配の基準が決められていて、41名以上4名です。

多分、全国でも愛知県が一番充実しているだろうと思います。お隣の静岡県の浜松は、90名でも加配の先生は2名どまりです。しばらく前の愛知県と同じです。その代わり、母語の分かる方を非常勤で入れたり、常勤で入れたりしています。この取り組みは愛知県が誇ってもいいのではないかと思います。国が3分の1の予算を出して、県が3分の2を補っている形です。

東：識字率については私も気になっています。これからまた5年、10年たって保護者の学習背景がさらにさまざまなものになったときに、どんな工夫をしていったらいいのか、今後ずっと課題としてあり続けるだろうと思います。

前川：愛知県立大学外国語学部スペイン語学科4年の前川夏子と申します。

子どもたちの成績に関してです。東保見小学校では、「日本語を」学ぶのではなく、「日本語で」学ぶ力をつけられるように一生懸命指導していらっしゃることは分かりましたが、当該学級の学習についていけるようになって、オールC以外の成績をとる子はいるのでしょうか。

小山：たくさんいます。在籍の学級で、国語や算数でAをたくさんとる子もいますし、Cをたくさんとる子もいます。その子によります。日本語の語彙が多い子、よく読書をする子、日本のテレビをよく見る子、日本の子とよく遊ぶ子は、言葉に支障なく学習を進めているように感じます。

前川：今のように「取り出し」などでサポートしていけば、日本の中学校や高校に進学し、学んでいけるという見通しというか、確信を持たれているのでしょうか。

小山：すごく難しい質問ですが、子どもたちが進路を前向きに考えて努力できる素地をつくりたいといつも思っています。ただ、確信が持てるかどうか、今、やっていることがどういうふう生きていくかということは分かりません。逆に、今、とても停滞しているお子さんでも、ある目標が見えたときに、すごく伸びることもあると思います。自分で選択できる力を持

てるといいなといつも思っています。

東：やはり子どもを信じるのが大事ですね。

伊木：こんにちは。英米学科4年生の伊木ロドリゴです。

授業を見学させていただいたこともありますが、本当にいい活動だと思います。僕はブラジル生まれで、10歳のときに日本に来ましたが、そのころはこういう活動がなく、今の子どもたちは恵まれていると感じます。

僕たちのころは、週1回の日本語センター方式で学んでいました。自分の学校からセンターの学校に集まって、みんなで学習するという形です。自分の力でやるしかなかった状況で、この大学にもまぐれで入れたと思っていますが、ここまでやってこられたのは、やはり両親のサポートや先生の応援があったからだと思っています。

先生がこの活動をされる中で、やり過ぎているのではないかとと思われること、これだけ整っているけれども、まだこういうところが問題だと感じられるところがありましたら、教えてください。

小山：課題は本当にたくさんあって、まだ子どもたち一人一人に十分対応できているとはいえないと思っています。特に「取り出し」をしている子に関しては、その学年の勉強を全部カバーできていない、それだけの力がつけられていないといつも気にしています。

「取り出し」では、少人数でゆったりと教えてもらえて、すぐに聞ける、すぐに教えてもらえますから、今、ロドリゴさんもおっしゃったように、それが甘えにつながる場合もあります。在籍の学級に戻ると、少しのつまずきでも、「ああ、もう分かんない」とか、「どうせ僕はできない」とか。意欲を持って学習に臨む態度を育てるという面では、手をかけるところと、本人を後押しして、本人に頑張らせるところの兼ね合いが非常に難しいなと思っています。1人でも学習できるように、例えば、漢字の調べ方を教える、漢字辞典を使えるようにする、国語辞典を使えるようにする、質問は自分から聞くようにする、そういったツールを身につけさせたいといつも思っています。

これは保見中学校からの申し送り事項でもあります。私たちは小中連携もとっていますので、「小学校から上がってきて困ることはありませんか」と聞くと、「小学校で甘やかし過ぎているから、自分から聞いてこない。待つ姿勢が見られるのは問題である」と言われることがあります。

「テストの範囲を自分で聞きに来たり、提出物にしても『〇日まで待ってあげるから、はい、頑張って』ではなく、自分から進んで出したり、そういうバイタリティーが欲しい」とよくくぎを刺されています。そういう意味では、加配の手があって、少し整いすぎているのかもしれませんが、いい活動ができている部分もあるし、そういう弊害もあるということです。

勅使：「出稼ぎから定住へ」という動きがある中、子どもたちが日本で生活していくためには、日本の文化を知ること、学力をつけることはとても大切ですし、先生方の取り組みも本当に進んできたなと思います。それをさらに深め、例えばブラジル人のお子さんは、自分のアイデンティティを何語でつくるかということについて、小学校で、あるいは、中学校で、どのようにお考えですか。

小山：自分が何人かということですが、低学年の子の場合、その時々によって変わるというか、日本人と言う子もいれば、ブラジル人と言う子もいます。でも、高学年になってくると、口には出さないけれど、そういう悩みを抱えている子も多いと思います。

やはり保護者の方とのコミュニケーションがすごく大事です。保護者の方と常にコミュニケーションをとって、家庭の中で自分が支えられていると感じられているお子さんは、母国のことをすごく誇りに思っ過ぎて過ごせますが、保護者の方とうまくコミュニケーションがとれなくなってくると、アイデンティティに悩み、どうしても不適応状態を起こしがちです。

本校では、悩みを抱えたお子さんに対して、日本語指導員が母語でも相談にのれるという強みがあります。そこは非常にありがたく思っています。担任、国際の担当者プラス日本語指導員が常に子どもたちの近くにいます。アイデンティティ教育まで十分にできているとは言い難いですが、だからといって、「あなたは何人だから」と差別することは全くありません。区別はしています。ブラジル人の児童には、ポルトガル語のお便りも一緒に渡すとか。

勅使：何人ということもありますが、どういう言葉を自分の思考の言語とするかということです。

私は幼児や乳児について研究しています。日本語ですと、語尾があいまいになったり、顔色を見ながら最後のほうで違うふうに言ってしまうことがあります。ポルトガル語の場合、動詞がはっきりとワツと出てくるので、なんて気が強い子だろうというふうに、知っいても、つい思ってしまいます。

日本で生活をしていくには、日本語がとても効果的ですが、さらにその子が何語で考えているか、ポルトガル語なのか、日本語なのかということについても、私たち教師がもっと考えていかないといけないうことではないかと常々思っされていますので、お聞きしました。ありがとうございました。

小山：教室の中では、全部日本語です。よほどの場合を除いて、母語を使うことはありません。ただ、母語で学習経験の長い子には、慣れるまで置き換えることが多いかなと思います。

東：東保見小学校での取り組みを具体的に聞かせていただけたことは、これから私たちが考えていきたいことのきっかけになったというか、とてもいいチャンスだったと思います。

地域 NPO 法人の方、教育委員会の先生、初期指導の「ことばの教室」の先生もいらしてくださった中で、学生さんからたくさんの質問が出されたことを本当にうれしく思っっています。放課後支援活動に参加させていただいたりする中で、地域に育てられている県立大学のあり方をありがたく感じました。今後いろいろな連携をとりながら、学生も、小学生も、中学生も、我々も、みんな一緒に育っていききたいなと深く感じました。長時間にわたりありがとうございました。小山先生にもう一度拍手をお願いします。

(了)

東保見小学校

国際教室

Aula do Kokusai

H21年度



とよたしりつひがしほみしょうがっこう
豊田市立東保見小学校

〒470-0353

愛知県豊田市保見ヶ丘4丁目5番地

電話：〈0565〉48-1075

FAX：〈0565〉48-0892

E-mail：s-higashihomi@toyota.ed.jp

ホームページ URL：

<http://www.toyota.ed.jp/s-higashihomi/>

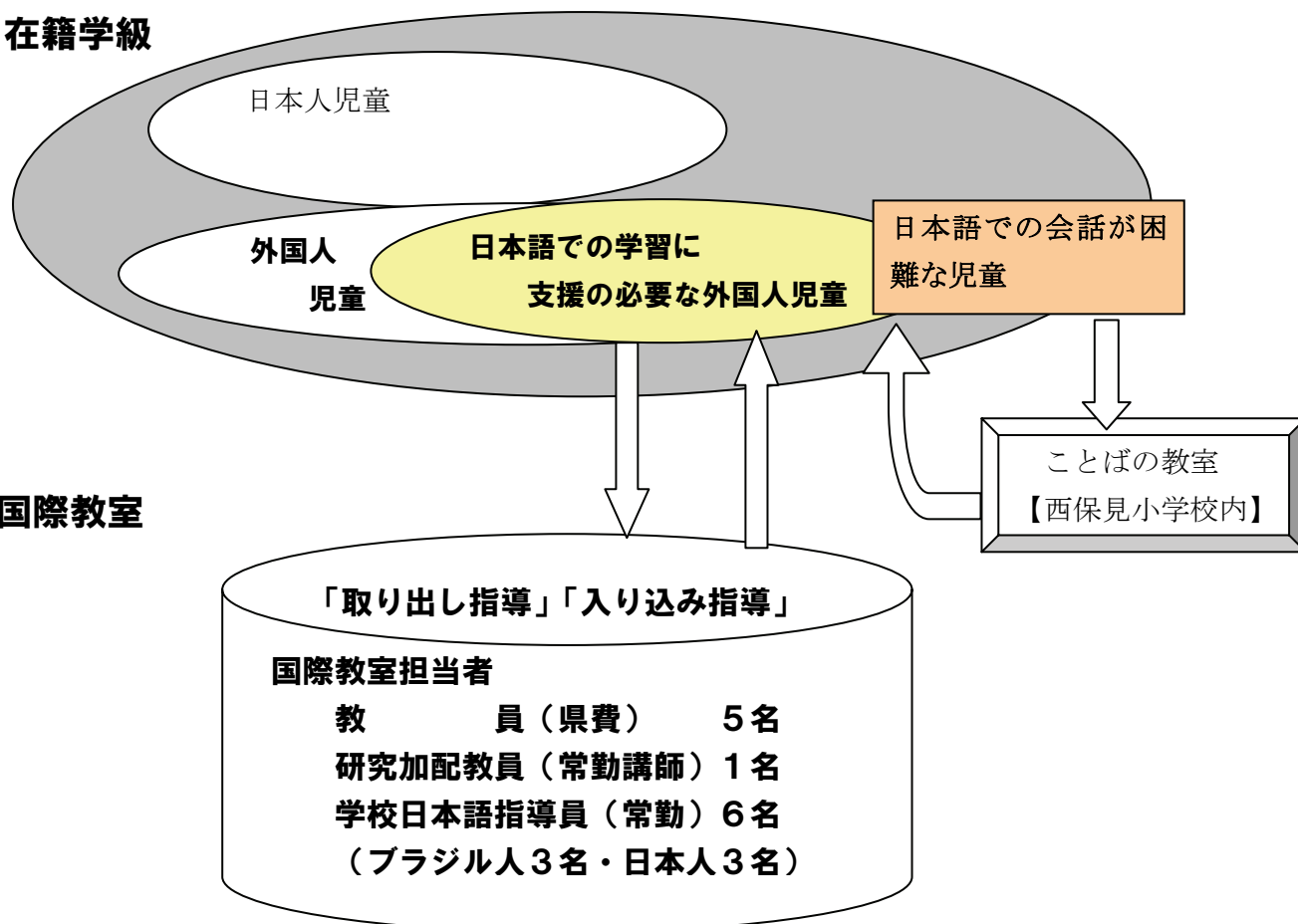
国際教室の運営について

平成21年度 愛知県豊田市立東保見小学校 国際部

国際教室の概要

日常会話はある程度できるが、日本語での学習に支援が必要な児童を対象として、生活適応を中心とした日本語指導・教科内容に準じた日本語指導・教科学習等を行っている。

在籍学級



国際教室での取り組み

【国際教室の目標】

- 当該学年の学習内容を習得するための学力や日本語力をつけるための支援を行う。
- 日本の学校生活に適応できるよう、支援を行う。

〈取り出し指導〉

☆ 対象となる児童

- ・「取り出し指導」を行うことで、より学習効果があがると判断した児童。
（会話・語彙・学習に向かう態度などを複数の教職員が見て決定→保護者の同意）

○ 指導体制

- ・それぞれの学年単位での少人数指導（別室：国際教室担当教員）

- ・人数が多い場合や、「ことばの教室」から戻ったばかりの児童がいる場合には、日本語指導員とペアで指導を行う。
- ・国語、算数の全時間「取り出し指導」を行う。(単元によっては在籍学級で学習を行う場合もある)

○ 指導の内容

- ・当該学年の教科内容に準じ、日常会話の力を土台として日本語で学ぶ力をつける。
聞く力・読む力・書く力・表現する力・理解する力・思考する力・・・

○ 指導の工夫

- ・ゲーム的要素・クイズ的要素を取り入れた活動
- ・興味関心に即したものを多く取り入れた活動
- ・理解を助けるもの（具体物）を使った活動
- ・学習過程の工夫
- ・教科＋日本語の目標が明確な活動
- ・友だちとのかかわりのある活動
- ・教職員の受容的な働きかけ
- ・在籍学級と国際教室の交流学习

☆ 個に応じて

- ①児童の実態把握
- ②個別の課題設定
- ③個別学習の時間の確保
- ④母語での補助説明
- ⑤家庭との連携

〈入り込み指導〉 (国語・算数・社会・理科・総合・生活)

☆ 対象となる児童

- ・日常会話はおおよそできるが、日本語で教室の学習活動に参加する力をつけるために、支援が必要だと判断した児童。
- ・「取り出し指導」から在籍教室へ戻したばかりの児童。
- ・「一時帰国」から戻ったばかりの児童

○ 学級担任による支援

- ・学習形態の工夫。(一斉指導 → ペア・グループ活動を多く取り入れる)
- ・「おさえることば」を意識した指導。
- ・絵、実物、映像資料などの視聴覚教材や、支援の多いワークシートなどの使用。
- ・板書へのルビふりや、必要に応じたことばの説明。

○ 国際教室担当者による「入り込み」支援

- ・写真や絵など、具体物を使つての補足説明。
- ・教科書への書き込み支援。
- ・一人調べや学習カードの作成時など、個別学習への支援。
- ・教科書、テストなどへのルビふり。
- ・家庭学習への支援。
- ・学習相談。

〈充実した支援のために〉

〔日常の取り組み〕

- ・「入り込みファイル」の活用 (担当者による支援状況の把握)
- ・給食、清掃時の「入り込み」(コミュニケーションの機会を増やす)
- ・学年部への所属 (担任との連携)

〔その他の取り組み〕

- ◇日本語力テストの実施（日本語の獲得状況の把握）
- ◇個人カルテ・ファイルの活用（学籍・学習の記録）
- ◇就学予定者の会話力テストの実施
- ◇国際教室担当者運営会議（週1回）
- ◇担任と担当者との打ち合わせ会（年3回）

〈学校日本語指導員の活動〉

◇取り出し指導の補助・入り込み指導

- ・指示の通訳や補足説明、学習への適応指導などを必要に応じて行う。
- ・総合的な学習等では、TTとして母国文化の紹介なども行う。

◇配布物の翻訳

- ・日本語を十分理解できない保護者のため、主なものはポルトガル語に翻訳して配布している。

翻訳例 ○行事学習関係 （年間行事予定・学年だより・各種行事の案内など）
 ○保健文書関係 （治癒証明書・各種検診など）
 ○安全関係 （児童引渡しカード・不審者情報などの緊急メール・災害対応など）
 ○証明書関係 （在学証明書・卒業証明書・成績証明書など）

◇来校者・電話対応

- ・家庭教育や学校教育に対する質問や相談など、外国人保護者への対応を行う。
- ・担任からの連絡を家庭へ伝える。（連絡帳・電話）

◇学校行事・個別懇談・生徒指導上の問題などの通訳、相談

- ・「家庭訪問」や「個別懇談」での通訳を行う。
- ・生徒指導上の問題や教育相談の通訳を行う。
- ・発達センター受診の際、通訳を行う。
- ・児童の相談相手として、児童に寄り添い、学校生活適応全般の支援を行う。

〈保護者との連携〉

◇外国人保護者懇談会

- ・年間6回「学校公開日」に開催し、テーマを決めて保護者との懇談を行う。

〔昨年度の内容〕

- 第1回・・・「国際教室の運営について」「連絡帳や持ち物について」（4月）
- 第2回・・・「大地震が起こったら」「学校で必要な学習用具について」（6月）
- 第3回・・・「進路について」（9月）
- 第4回・・・「ワールド図書室の活用について」（10月）
- 第5回・・・「朝食の大切さ・給食の栄養について」（1月）
- 第6回・・・「1年の学校行事・学校生活、通知表の見方について」（2月）

◇ワールド図書室の運営

- ・ポルトガル語やスペイン語の絵本、教科書、図鑑などを常時貸し出し可能な図書室の運営を行う。（蔵書は約350冊 市中央図書館からの借り受け100冊 計450冊）

- ・母語の保持や保護者と児童のコミュニケーションに役立てる。
- ・週1回の指導員の読み語り、「読み語りDVD（自作）」の貸し出しなど、児童が母語に親しむ活動を行う。

◇国際協力委員会

- 日本人保護者と外国人保護者との交流会の計画・実施。
 - ・運動会での全校ダンス「クアドリーリャ」（ブラジルの伝統的なフォークダンス）
 - ・ひがしほみっこ祭りでの催し物
 - ・国際交流会（年2回） 遊び・食などの交流会

〈他機関との連携〉

◇「ことばの教室」との連携

- ・「ことばの教室」（市教委主催の初期日本語指導教室：西保見小学校内・野見小学校内2箇所）と、定期的に会合をもち、児童のすみやかな学校生活への適応、日本語初期指導の依頼、その他、児童についての情報交換などを行う。

◇「ゆめの木教室」「パウロフレイレ地域学校」「ひこうきぐも」との連携

- ・外国人児童が授業後通っている支援教室や外国人学校と、月1回程度懇談の場をもち、児童の様子や学習状況など情報交換に努めている。
- ・互いの行事に参加しあうなどして交流を深めている。
- ・今年度より、「放課後支援ひまわり教室」を本校内に開設し、地域や大学生のサポーターと共に、学習支援に取り組んでいる。

◇訪問や研修、視察

- ・他校へ訪問し、外国人児童教育について学ぶ機会をもつ。
- ・視察の受け入れを行い、外国人児童教育について関心をもっていただく。
- ・市内学校への資料の貸し出しなど、情報交換に努める。
- ・研修の機会を増やし、外国人児童教育について常に研鑽を深める。



「ひまわり教室」での勉強がんばっています
(放課後支援)



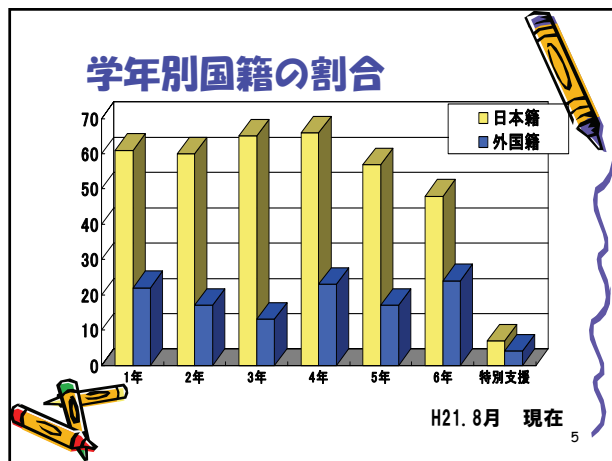
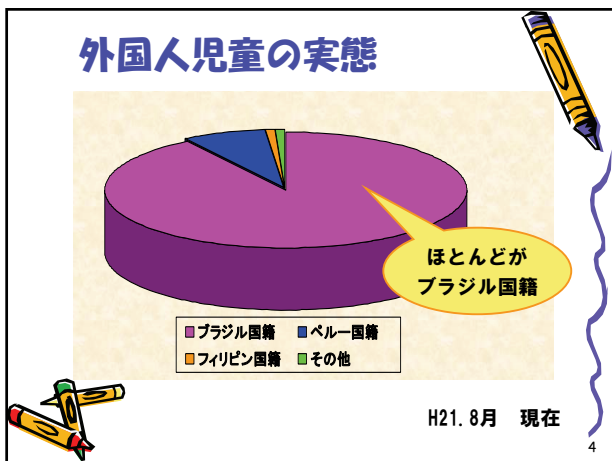
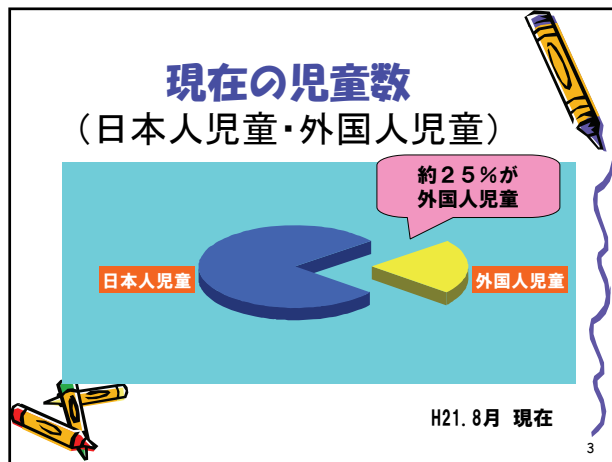
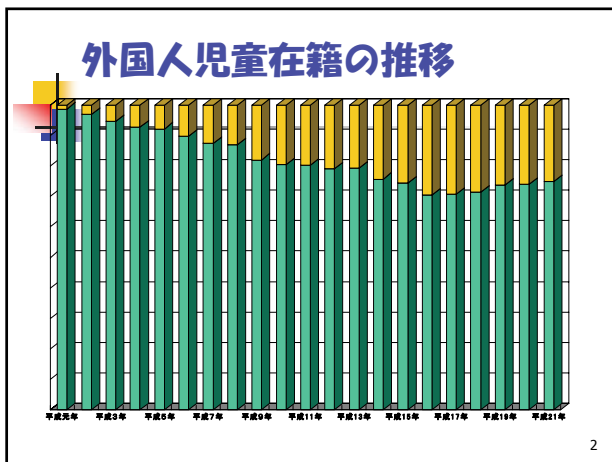
「地震が起きたときの避難について」映像を見ながら説明をしています
(外国人保護者懇談会)



東保見小学校は・・・

- ・ 豊田市の北
「保見団地」（集住地区）
「乙部が丘」（新興住宅地区）
- ・ 創立 36 年目
- ・ クラス数 18

1



研究テーマ

「かかわり合いを通して、
共に学び合い伸びていく子の育成」

本校の現状

・日本人児童

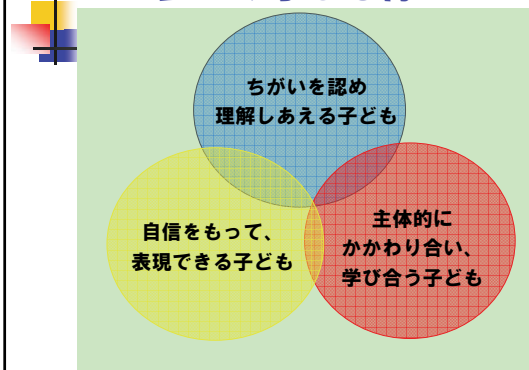
- ・誤解
- ・画一的なイメージ

・外国人児童

- ・学習困難
- ・学習意欲の低さ
- ・習慣の違いによる
トラブル
- ・保護者のとまどい

6

目指す子ども像



7

研究推進に向けて

共生の学校づくり

かかわり合いを通して共に学び合い伸びていく子の育成

組織協働体制の確立

学習状況
生徒指導
情報共有

学年部の構成
各担任・国際教室担当者
(指導員 低・中・高)

連携の
強化
密接化

8

今年度の重点的な取り組み 1



学習形態の
工夫
「かかわり合
う場」の
効果的な設定

9

今年度の重点的な取り組み 2



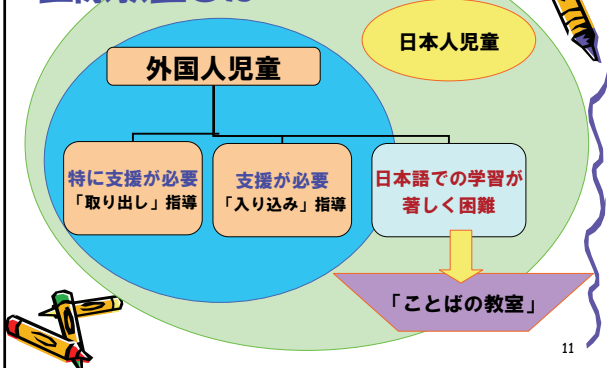
全校での交流
「縦割り遊び」
「異学年交流会」

外国人児童への
さらなる支援の充実
「取り出し」「入り込み」



10

国際教室とは・・・



11

国際教室の体制

国際教室担当者

教員（県費） 5名
研究加配教員（常勤講師） 1名
学校日本語指導員（常勤・市費） 6名

12

時間割編成

	4の1	4の2	4の3	国際担当
1	総合	図工	音楽	入り込み
2	理科	図工	社会	入り込み
3	国語	国語	国語	取り出し
4	算数	算数	算数	取り出し
5	道徳	総合	理科	入り込み

「取り出し」対象児童は、別室での少人数指導

13

「取り出し指導」

教科指導＋日本語指導

- ・語彙（学習で使う日本語）の支援
- ・基礎・基本の定着
- ・補充



在籍学級に戻る学力をつける

14

対象となる児童

- ・見取り（複数の目で）
- ・保護者との連携
- ・オリエンテーション

漢字がたくさん
書けるようにな
りたいな！



15

少人数での指導

話す力

聞く力

読む力

書く力

語彙を増やす

日本語で教室の学習に
参加する力をつける

16

学習意欲を引き出す工夫



- ・動作化
- ・ゲーム
- ・具体物

17

板書・掲示の工夫



18

教材・教具の工夫



19

課題の工夫

- ・ 自分の力で取り組める
※個に応じた量・内容
- ・ 家庭の支援が得られる
- ・ 基礎・基本の定着につながる



一人でも
できるよ!



20

在籍学級への 「入り込み」指導

日常会話に不自由にしないのには？

- ・ 学習に出てくる日本語が理解できない
- ・ 複数の指示が聞き取れない
- ・ 発表に自信がない
- ・ 一人調べなどのやり方がわからない

教科の学習が困難な実態

21

在籍での「入り込み」指導 教科内容の支援

- ・ 学習に出てくる日本語の支援
- ・ 学習規律の支援
- ・ 持ち物などへの支援

在籍学級で自信をもって学ぶ

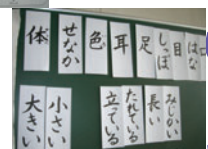
22

「入り込み」指導の工夫

- ・ おさえることば
- ・ 教科書への書き込み
- ・ 映像資料で
- ・ 絵や写真で

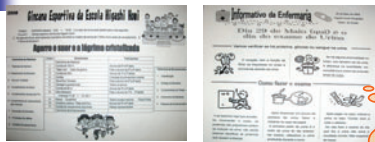


算数に出てくる
ことば！
「あわせて」
「帰ると・・・」



23

学校日本語指導員の活躍



- 学校、学年だよりの翻訳
- 電話の応対（相談・連絡）
- 担任と保護者をつなぐために（教育相談・連絡帳・電話）

ポルトガル語で
わかりやすく！

24

学校日本語指導員の活躍

母国の文化を知る
母国の文化に興味をもつ



25

保護者との連携

- ・ 外国人保護者懇談会
- ・ 国際交流会



遊びや料理で
楽しく交流！

26

外国人保護者懇談会

日本の学校への適応に向けての支援



27

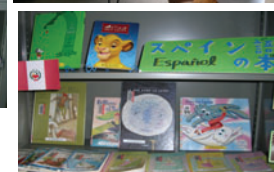
ワールド図書室

- ・ 子どもの願いから
- ・ 蔵書 約450冊
- （市の特別予算
中央図書館との連携）



28

母語保持・コミュニケーション



29

地域との連携

- ・ NPO法人
「ゆめの木教室」
- ・ パウロフレイル
地域学校
- ・ こども園「ひこうきぐも」
- ・ 訪問、受け入れ



運動会での
「クアドリーリャ」
(ブラジルのダンス)

30

放課後支援



「ひまわり教室」「学習相談」
地域・学生ボランティアによる
宿題支援

31

外国人児童教育のこれから

- ・ デカセギから定住へ → 進路
- ・ 初期日本語指導 → 教科指導
- ・ 特別支援



32

終わりに



33

2. 3 個別聞き取り調査

東 弘子

対象：菊池寛子氏（西尾市教育委員会・早期適応教室指導員）

日時：2009年8月11日（火）

場所：愛知県立大学長久手キャンパス F210

（愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3）

参加者：宮谷敦美，高阪香津美，東弘子

目的：1. 今後の本事業の成果物（とくに教材）のイメージ作り。ブラジル人の子どもの教育にかかわる立場から菊池氏からの意見を聴取する。

2. 8月26日に開催される研究会で、事前にたずねるべきポイントを議論する。

◆ブラジルから日本にデカセギに来る人たちへ提供すべき情報

○ 日本とブラジルの教育制度の違いのリーフレット

・愛知県教育委員会指導員による翻訳がある

・ブラジル出国の際に配布されるものがある

※しかしどこでどのように配布されているのか？ → 調査する必要

・言語発達についての知識の情報提供したい

○ 日本での生活に必要なと思われるもの

・親子の会話とそれを取り持つ絵本

・ポルトガル語と日本語の両方が重要

○ 「移民歴史を取り込んだ地図かるた」を作成してはどうか

親だけがデカセギに来てブラジルに残された子どもも多くその教育問題もある。

◆日本の教育現場で先生に知っておいてもらいたいこと

・子どもの言語発達に関する基礎知識

◆日本からブラジルに帰国する際の問題点

・帰国児童生徒へのサポート体制がない（日系人学校の一部がサポート）

◆OB・OGから現職派遣教員への情報（座談会の話のポイント）

・現地での活動支援

・現職派遣教員への取り組むべき課題の提案

◆現職派遣教員から発信される情報（アンケートシステムによる）

・事実調査や意識、隊員の気づきにむすびつけたい

・情報をえるために呼びかけてはどうか

絵本などの読み物のテーマ

地図教材にいれこむ移民や日系社会に関する小ネタ など

対象：篠田カルロス氏（ブラジル人学校「コレージョ・ブラジル・ジャパン」校長）

日時：2010年1月19日（水） 17:30-19:30

場所：コレージョ・ブラジル・ジャパン（愛知県名古屋市港区新船町1-1-2）

参加者：松本一子，東弘子

目的：ブラジル人学校の立場から、デカセギに来るブラジル人や日本とブラジルを行き来する子どもたちに関する問題点について、意見を聴取する。

◆ 篠田カルロス氏の事業：

- ・子どもたちの育成の中で、保護者との話し合いや地域との交流活動に重点
- ・「コレージョ・ブラジル・ジャパン」の経営だけでなく
ブラジルの中卒・高卒の卒業資格を授与するネット通信教育学校の事務局
学校を卒業しないまま日本にやってきたブラジルの青年たちが、卒業資格を得ている。
（主に30代のニーズが高く熱心）

◆ 情報提供

- ・2009年秋にリオ・デジャネイロでおこなわれたブラジルの外務省の調査による在外のブラジル人の数の調査発表資料
- ・ブラジルの進学率データ資料
- ・全国在日ブラジル人ネットワーク
NNBJ（Network Nacional dos Brasileiros no Japao）
<http://nnbj.org/Default.aspx>

◆ 日本におけるブラジル人社会への支援をのぞむこと

「与える」のではなく、ブラジル人自身が継続的に活動できるような支援がなされることをのぞむ。（ブラジルには「釣った魚を与えるのではなく魚の釣り方を教えるべき」ということわざがある）

◆ デカセギに来る日系ブラジル人へのメッセージ

- ・ブラジルの日系移民の歴史を日系人自身がもっと知ることが重要
- ・日本政府やブラジル政府からの支援を待つだけではなく、日系ブラジル人が自分たちの問題の解決のためのネットワーク作りをすることが重要

2. 4 ブラジルの学校教育の概要

高阪 香津美

教育制度の違い

2006 年以降、義務教育期間である初等教育は以前の 8 年間から 9 年間へと広げられている。以下はブラジルの新しい教育制度、おもに、基礎教育に関して記述であり、日本のものと比較してみてもらいたい。

ブラジルの教育は、まず、「基礎教育(educac o b sica)」と「高等教育(ensino superior)」の 2 つに分けられる。年間 200 日の授業日数と 800 時間の授業時間数が最低限保証されている「基礎教育」には 3 つの段階があり、段階ごとに「就学前教育(ensino infantil)」、「初等教育(ensino fundamental)」、「中等教育(ensino m dio)」と名付けられている。

「就学前教育」には保育園と幼稚園があり、それぞれ、0 歳から 3 歳児と 4 歳から 5 歳児を対象としたものである。「初等教育」の 9 年間は義務教育とされている。「初等教育」は 2006 年以降、6 歳から 14 歳の児童・生徒を対象としており、公立学校の場合には授業料は不要である。

ブラジル地理統計院(IBGE: Instituto Brasileiro de Geografia Estat stica)の 2007 年の調査では、7 歳から 14 歳の子どもの 97.7%が初等教育を受けていることを示している。こうした中、日本の教育制度とは異なる点として、ブラジルの場合、5 年生以上の児童・生徒に対し、試験に合格しないと次の学年に進級できない落第制度がある。そのため、留年したり、進級できずに途中で退学をする者も存在し、2007 年の教育省(MEC: Minist rio da Educa o)の統計によれば、ブラジル全体の留年率は 12.1%、退学率は 4.8%であった。

「基礎教育」の最後の段階には「中等教育」があるが、これは 15 歳から 17 歳までの生徒を対象とした教育課程である。ブラジル地理統計院の 2007 年の調査によると、「中等教育」の就学率は 82.3%であった。日本人生徒の高校進学率は 97%を超えているため、それよりは低いものの、10 年前の数字と比べると 1 割近く伸びており、比較的高いといえる。

しかしながら、ニッケイ新聞(2009 年 10 月 15 日付)が示すように、適正年齢で高校に入学した生徒は 50.6%(ブラジル地理統計院 2008)であり、落第制度がなく、ほぼ同じ年齢で高校入学を迎える日本の状況とは大きく異なっている。

「高等教育」は、18 歳以上の学生を対象としたものであり、大学や大学院などがそれにあたる。先のニッケイ新聞(2009 年 10 月 15 日付け)によると、18 歳～24 歳の青年の大学進学率が 1998 年には 6.9%であったのが、2008 年では 13.9%を示し、この 10 年の間で 2 倍になったという。高校進学率、大学進学率ともに、現在、著しく伸びてきている。ただし、こうした教育の発達には、また、地域差があることも指摘されている。

これまで、ブラジルの教育制度についてみてきたが、特に、5 年生以上に課せられる落第制度が日本との大きな違いとして挙げられ、それゆえ、同年齢のグループだけで構成される日本とは学習環境が異なるといえる。

学校生活の中での教育体制の違い

こうした制度上の違いはブラジル人の子どもたちやその親、あるいは、受け入れ先の教員

に対し、直接には影響を及ぼさないかもしれない。しかしながら、毎日の学校生活にかかわる事柄であればどうだろうか。以下に顕著な例を挙げることにしたい。

ブラジルの「初等教育」や「中等教育」においては、二部制、三部制がとられており、登校時間が学年ごとに定められている。そのため、ブラジルでは日本の学校のように朝から夕方まで長時間にわたり子どもたちが学校に滞在するということはない。午前の部に授業がある者であれば午前中のみ学校に行き、午後の部に授業がある者は午後の数時間のみ学校に行くのである。そのため、子どもたちは自宅で食事ができ、ブラジルの学校ではお弁当や給食という習慣がない。そんな中、日本の学校で出会うお弁当や給食に子どもたちもその親も戸惑うこととなる。子どもは給食当番がどんなもので、何をすべきかに、また、親はお弁当とはどんなもので、何を入れるべきかに頭を悩ませる。

ブラジルにも、学校がランシェ(lanche)と呼ばれるものを提供したり、親が子どもにランシェを持たせる場合もある。しかしながら、ランシェとはクッキーやパン、果物、コーヒー、ジュースなど、休憩時間中に食べるおやつのようなものであり、また、何を持って行くかは子どもの自由である点でお弁当や給食とは性格が異なる。

こうしたブラジルと日本の学校文化の差を埋めようとするとき、給食やお弁当の存在をブラジル人側も知る必要があると同時に、日本人側もブラジルの学校文化の中には同様のシステムがないということを把握することが重要になってくる。特に、ブラジル人の子どもを受け入れる学校の教員にとって、両国の学校文化について理解しておくことは、その違いを認め、それを多様性の一つとして日本人児童・生徒に正しく伝えることを可能にするだろう。

このように、ブラジルと日本の二国間の教育には、構造上の違いから習慣の違いまで様々な差異が存在する。こうした文化差を日本人、ブラジル人の両者が理解しようとするとき、日本語とポルトガル語で書かれた一覧表のようなものが必要ではないかと考えた。

成果物へ

そこで、本活動の成果物として、「日本とブラジルの学校の違い」「Diferenças entre as escolas no Brasil e as escolas japonesas」の2枚のシートを作成した【→本報告書 3 成果物No. 1「日本・ブラジル教育文化比較一覧表」】。

ここに挙げてあるトピックは、主に活動実施者の松本が、長年にわたり外国人の児童生徒の教育を支援する活動を通して得た知識もあり、また、違いを知らないことで問題が生まれる可能性があることが多いと感じたものである。また高阪の研究の成果や、東、宮谷のブラジル出張の中で得た知識もある。

日本語版は、日本で外国人の児童生徒の指導にかかわる支援者や、帰国を控えた日本の学校しか知らない子どもたちにも参考になるものとなるであろう。ポルトガル語版は日本の学校文化をよく知らないブラジル人の保護者に向けてだけでなく、ブラジルへと帰国した際、帰国後の学校の先生などにぜひ見ていただきたいものである。なお、ポルトガル語版の翻訳は、ブラジルポルトガル語母語話者である伊木・デ・フレイタス・ロドリゴ氏（愛知県立大学学生）による。

これらのシートを、多くの方が簡単に入手できるよう、電子媒体として提出するのみならず、ラミネーターフィルムで保護したものを作成し、活動協力者・アドバイザーなどを通じて配布することとした。

<参考文献>

ブラジル日本商工会議所(編)『現代ブラジル事典』新評論、2005 年
Editora Abril, *Almanaque Abril*. São Paulo:Editora Abril, 2009.

<参照したホームページ>

外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/> 2010 年 3 月 2 日付

Instituto Brasileiro de Geografia Estatística(IBGE:ブラジル地理統計院)

<http://www.ibge.gov.br/home/> 2010 年 3 月 2 日付

Instituto Nacional de Estudos e Pesquisas educacionais(INEP:国立教育研究所)

<http://www.inep.gov.br/> 2010 年 3 月 2 日付

Ministério da Educação(MEC:教育省)

<http://www.mec.gov.br/> 2010 年 3 月 2 日付

文部科学省 <http://www.mext.go.jp/> 2010 年 3 月 2 日付

ニッケイ新聞 <http://www.nikkeishimbun.com.br> 2010 年 3 月 2 日付

2. 5 地図素材データを用いた教材の提案

—両文化を理解し相互に尊重し合う感情を育成するために—

高阪 香津美

本事業では、日本、ブラジルともに、行政区分ごとに色分けされた全体地図、行政区分で色が塗り分けられたパーツの地図、行政区分で色が塗り分けられていないパーツの地図といった様々なパターンの地図と、日本といえば〇〇、ブラジルといえば〇〇といった、それぞれの国で特に有名な土地や建物、名物のイラストを作成した。また、その地図に付して使用できる日本の県ごとの簡単な特徴の説明文と、ブラジルとの関係について記した表も作成した。県の特徴については、ふゆのいちこ著 2007『日本がわかるちずのえほん』(学習研究社)の記述から抜粋し、簡単な日本語でリライトした。【→ 本報告書3 成果物一覧 No. 2】

この地図・イラストを教材として活用する学習法を以下に提案してみたい。

◆ブラジル人児童・生徒が在籍する日本の学校の場合

多くの日本人児童・生徒にとって、ブラジル人児童・生徒とともに学校生活を送ってはいないものの、物理的距離が遠いことや欧米に比べメディアなどからの情報が限定的であることもあいまって、ブラジルに関する知識が不足しており、その結果、ブラジルを身近な国と捉える日本人児童・生徒はそれほど多くないことが推測される。そこで、総合学習の時間などを活用して、自分の身の回りにいるブラジル人児童・生徒の母国であるブラジルについて知る機会が設けられることが望まれる。

日本人児童・生徒にとって、ブラジルという国は欧米諸国ほど親近感を持っている国でもなければ、予備知識を持っている国でもないことが予測されることから、学習当初から多くの情報量を提供してもそれを吸収することは困難を極める。そこで、イラスト教材を提案したい。イラスト教材とは先に述べたように、行政区分ごとに存在する代表的な土地や建物などを選定しイラスト化したものである。ブラジルの代表的な土地や建物の名称を覚えることを通して、地理や名所だけではなく背景的な文化などについても話題をふくらますことができよう。

また、次の段階としては、地図教材と組み合わせ、その土地や建物がブラジルのどの行政区分に位置するのか、あるいは、どの州に位置するのかを学ぶことができるであろう。行政区分ごとに色分けされた全体地図を広げ、その土地や建物が位置する地域にイラストを置きにいき、次に、もう少し、範囲を狭めて、その土地や建物がどの州に位置するのか、イラストを関係する州と一致させることが可能となるであろう。

子どもたちに習熟度がみられたら、色分けがされていない全体地図やパーツ地図を用い、色分けがされていなくても位置や形で行政区分や州とそれに関連する土地や建物が一致させることが可能かどうかという授業も時間を追うごとにできるようになると考えられる。

このように、ブラジルについて初めて学ぶ子どもたちに、ブラジルについてまずこれだけは知っておいてもらいたいという情報をイラストにすることにより、適度な情報量を視覚的に与えることで、無理なく楽しくブラジルに関する知識を得ることになるといえる。

クラスメイトのブラジル人児童・生徒の出身地などを地図上に示し、話題に挙げるという

ことも初めてブラジルを学ぶ日本の子どもたちにとっては学習の導入にとって有効な手段のひとつといえるだろう。

少しずつ日本人児童・生徒のブラジルに関する知識が増えてきたところで、グループに分かれ、もともとの教材にはない農産物、産業、建物、地名、日本との関係性などを日本人児童・生徒とブラジル人児童・生徒が協力し合いながら調べ、その結果を地図上に足していき、それぞれの特色ごとに白地図に色分けをしていくことで、ブラジルに関する知識をさらに深めるという使い方もできよう。

このように、地図教材とイラスト教材を活用することで、ブラジル人児童・生徒の母国であるブラジルについて学年や知識の量に応じて学習することができる。また、こうした授業は、ブラジル人児童・生徒は通常の「教えられる側」という立場とは異なり、「教える側」として授業に参加し、母国ブラジルに関する知識や情報を日本人児童・生徒に提供することで、異文化理解の側面に役立つほか、ブラジル人児童・生徒のブラジル人としてのアイデンティティの保持に貢献するものと考えられる。

一方、立場を変え、社会や生活科などの時間を活用し、日本の地図教材を用いながら日本に関する知識や情報を日本人児童・生徒が中心となってブラジル人児童・生徒に提供する授業も可能となってくる。

日本側にたった教材においても、地図教材と行政区分ごとに必要最小限のランドマークを選定したイラスト教材があり、ブラジル側にたった教材と同様、学習当初から数多くの情報を日本の地図教材やイラスト教材に盛り込むのではなく、代表的なものだけに意図的に絞ることで、ブラジル人の子どもたちが初めて日本の国について学習する際に、負担なくスムーズに学習が進められるよう工夫ができる。もともとはシンプルな地図ではあるが、情報を加えていくことができ、学ぶ目的により、自在に形を変えていくことができる「素材」となっている。具体的には、ブラジルの地図教材やイラスト教材を用いて授業を行うときと同様、ランドマークの名前を覚えることから始め、そのランドマークがいったいどの行政区分に位置するか、あるいは、もう少し特定する形で、何県に位置するのかについて、行政区分ごとに色分けされた日本の全体地図や行政区分で色が塗り分けられた県のパーツの地図を用いながら学習を進める。

その後、色分けされていない地図を用いて、形や位置からそのランドマークとそれに関連する場所を一致させるような学びへと発展させることができる。最終的には、知識の量や学年に応じて、グループごとに各行政区分を割り振り、もともとの地図教材にはない情報を補足していくような調べ学習へとつなげることができるのではないだろうか。

このように、日本の学校でこの教材を活用することは、両者が互いの国に関する知識や情報を、地図教材を介して共有しあい、ブラジル人児童・生徒と日本人児童・生徒が互いに学びあうための機会を提供するものであり、非常に効果的な学習教材であるといえる。

◆現地ブラジルの日系人学校の場合

ブラジルには日系移民について学ぶ教材が現在不足しており、日系移民について学ぶ環境が十分ではないことが指摘されている。しかしながら、歴史的にみたとき、日系移民の功績は大きく、日系ブラジル人の子どもたちが、日系人がブラジルという国にどれだけ貢献した

かを知る上でも、また、ブラジルと日本の関係性を知る上でも、日系移民の歴史を学ぶことは非常に有意義なことであるといえる。

そこで、地図・イラスト教材の活用法を以下に提案したい。ブラジルと日本の地図教材の中に、日系移民と関連の深い地名や農産物などを書き入れることにより、日系移民が多い都市を調べたり、日系人がブラジルで栽培した農産物や栽培地域を調べることが可能になるであろう。今回の教材には、ブラジルとの関係はごく簡単にあげただけだが、今後はそういった情報を追加して、一覧表にしていく必要もあろう。

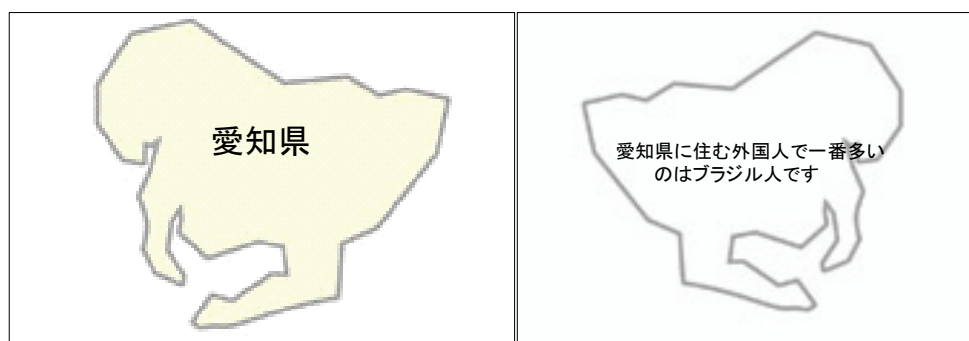
また、地図を用いた授業は、地理の授業だけにとどまらず、それらをさらに掘り下げて日系移民の歴史を学ぶことをも可能にするであろう。たとえば、サントス港はサンパウロ州にある港であるが、1918年に日本からの最初の移民船が到着した港として非常に有名な場所である。単に、サントス港の名称と位置を授業で扱うのではなく、サントス港がどのような港であるのか、から出発し、日系移民とは何か、ブラジルにとって日系移民はどのような存在であるかなど、どんどん学習内容を広げていくことができる。このような学習を通して、日系ブラジル人の子どもたちが自分たちのルーツを学ぶきっかけにもなり、またそのことが自分自身のアイデンティティの保持にもつながると考えられる。

【地図素材 活用例】

愛知県のカード

表

裏



3. 成 果 物 一 覧

- No. 1 日本・ブラジル教育文化比較一覧表
(日本語版・ポルトガル語版)
- No. 2 地図教材のための素材 電子データ
- No. 3 現地活動中の隊員への支援
ー活動中と帰国後に役立つ情報提供ー
- No. 4 研究会小冊子 → 本報告書 2. 2. 1
- No. 5 活動報告書 → 本報告書

No. 1 日本・ブラジル教育文化比較一覧表

(日本語版・ポルトガル語版)

ブラジルと日本の学校の違い

	日本	ブラジル
1 教育制度	小学校6年、中学校3年、高校3年、大学2～6年	基礎教育（日本の小・中学校にあたる）9年、中等教育（日本の高校にあたる）3年、高等教育2～6年
2 義務教育年数	9年（小6年+中3年）	9年（小5年+中4年）
3 学年暦	4月スタートで3月に終了	2月スタートで12月に終了
4 授業時間	全日制	2部制（午前又は午後）、3部制（午前又は午後又は夜） 全日制もある。午後が選択制で全日制に準ずる学校もある。
5 授業開始時間	朝8時半頃開始	朝の部は7時頃開始
6 授業終了時間	学年によるが、通常午後3時ごろ終業	学校によって異なる
7 学校選択	小学区制	親が学校を選択
8 入学年齢	満6歳	満6歳
9 学期	2学期制又は3学期制	4学期制
10 入試制度	高校進学・大学進学に際して、必ず入学試験がある	高校進学・大学進学に際して、入学試験があるが、公立高校については入学試験がない場合もある
11 落第・飛び級制度	ない	私学ではあるが、公立学校では原則としてない（かつては基礎教育の1年から落第があった）
12 通学方法	小学校は通学団登校	親による送迎、スクールバス利用
13 授業料	義務教育は無料	公立の場合、大学まで無料
14 公立と私立のレベル差	公立と私立で教育水準を比較することができない	基礎教育と中等教育は、私立の教育水準が高いが、高等教育は公立の方が教育水準が高い。公立大学合格者はほとんどが私立高校卒業生
15 入学式・卒業式始業式・終業式	入学式・卒業式・始業式・終業式がある	卒業式はあるが、入学式・始業式・終業式はない
16 授業科目	国語・算数（数学）・社会・理科・英語・音楽・美術・技術・家庭・体育（学校にプールがあるため夏は水泳の時間がある）	技術・家庭科（芸術の授業に含まれる場合もある）・音楽がない。プールはない

17	教科書	無料で支給される	貸与されて使用し、返却する
18	行事	遠足・学芸会・作品展・運動会・修学旅行・宿泊を伴う野外学習など	修学旅行など宿泊を伴うものはない。母の日・クリスマス・イースターなどはある
19	クラブ活動	野球・サッカー・テニス・バスケットボール・バレーボール・陸上・水泳などの運動部や美術・ブラスバンド・英会話など多様な部活動がある	ない。個人的にスポーツクラブに通ったりする
20	給食・食文化	小学校とほとんどの中学校は給食がある ブラジルは味付けの基本が塩コショウのため、日本の給食が食べられず、慣れるのに時間がかかる	給食はあっても簡単なもの。校内の売店で買うこともできる。
21	時間割	1日の授業が給食をはさんで5～6限あり、授業と授業の間には5～10分の休憩がある	半日で5限くらいあるが、授業と授業の間の休憩は、2限と3限の間の1回のみで15分くらい
22	掃除	教室もトイレも運動場も児童生徒が掃除をする	清掃系の職員の仕事
23	制服	夏用・冬用の制服があり、お金がかかる	Tシャツのような簡単な制服が多い。
24	保護者会・授業参観	ある	授業参観はない
25	校則・アクセサリー	髪型、持ち物など校則で決められていることが多い。アクセサリーは個人の自由	
26	欠席・遅刻の届け出・連絡帳	欠席や遅刻の場合は、当日の朝、学校に連絡 親からの連絡は電話で直接話すか、連絡帳に書く	出席は75%で進級できるため、届けなくてもいい。2～3日休んだときは、後日医者診断書と共に報告すればよい
27	長期休暇	夏休み(7/20～8/31)、冬休み(12/26～1/7)、春休み(3/23～4/3)	夏休み(12/末～2/初)、冬休み(7月中旬の1週間のみ)
28	算数の引き算や割り算の仕方	13-8の計算は、10-8=2、2+3=5と計算する 12÷3= 3)12のように書いて計算	8にいくつ足すと13になるかを計算 12:3= 12)3のように書いて計算
29	教師の勤務時間	フルタイムで勤務	午前の授業が終了後、午後は別の学校ではたらく教師がいる
30	経費	学年費・給食費・PTA会費・ワークブックやドリル代・遠足費・修学旅行費(6年生のみ)などの集金がある	公立学校は給食費も含めて原則無料

Diferenças entre as escolas no Brasil e as escolas japonesas

		Japão	Brasil
1	Sistema educacional	Primário: 6 anos, ginásio: 3 anos, colégio: 3 anos, faculdade: de 2 a 6 anos	Ensino básico (equivalente ao primário e ginásio do Japão): 9 anos, ensino médio (equivalente ao colégio do Japão): 3 anos, ensino superior: de 2 a 6 anos
2	Anos de educação obrigatória	9 anos (6 anos de primário + 3 anos de ginásio)	9 anos (5 anos de primário + 4 anos de ginásio)
3	Ano letivo	De Abril a Março	De Fevereiro a Dezembro
4	Horário das aulas	Dia inteiro	Dividido em dois turnos (matutino e vespertino) ou em três turnos (matutino, vespertino e noturno) Existem escolas que são de meio período e outras que são o dia todo. Há também escolas que tem aulas opcionais a tarde.
5	Horário de início	Depende da escola, mas por volta das 8 e meia da manhã.	Depende da escola, mas o turno da manhã começa por volta das 7 da manhã.
6	Horário de término das aulas	Depende da série, mas normalmente por volta das 3 da tarde	Depende da escola.
7	Escolha da escola	Divididos previamente por região	Os pais que decidem por conta
8	Idade de entrar no Primário	Ao completar 6 anos de idade	Ao completar 6 anos de idade
9	Semestre	2 semestres ou 3 quadrimestres	4 trimestres
10	Sistema do vestibular	Para ingressar no colégio e na faculdade, o vestibular é fundamental	Para ingressar no colégio e na faculdade, o vestibular é fundamental. Porém, há colégios públicos onde vestibulares não são impostos.
11	Sistema de repetência de ano	Não existem	Em escolas particulares existe, mas nas públicas não (anteriormente existia repetência de ano nas escolas públicas).
12	Ida à escola	No primário, as crianças vão a pé em grupos	Os pais levam ou as crianças utilizam ônibus escolar
13	Mensalidade escolar	Durante o ensino obrigatório a escola é gratuita	No caso de escolas públicas até a faculdade é gratuito
14	Diferença de níveis entre escolas públicas e particulares	Não há como comparar o nível educacional entre escolas públicas e particulares	Escolas de ensino fundamental e médio tem um melhor nível se são particulares. Porém, o ensino superior tem um melhor nível em escolas públicas
15	Cerimônia de ingresso, formatura, cerimônia de abertura e de encerramento	Há cerimônias de ingresso, de formatura, cerimônia de abertura e de encerramento	Há cerimônia de formatura, mas não há cerimônias de ingresso, abertura ou encerramento
16	Disciplinas escolares	Língua japonesa, matemática, estudos sociais, ciências, inglês, música, artes, marcenaria, trabalhos caseiros, educação física (no verão as crianças fazem aula de natação)	Não há aulas de marcenaria, de trabalhos domésticos e de música. Não há aulas de natação

17	Livros de dático	Distribuição gratuita	São emprestados pela escola
18	Eventos	Excursão, apresentações teatrais, exposições artísticas, festival de gincanas, viagem escolar e atividade ecológica (às vezes duram mais de um dia)	Não há atividades como viagens escolares ou atividades ecológicas que duram mais de um dia
19	Atividades esportivas e/ou culturais	Clubes esportivos de beisebol, futebol, tenis, basquete, volei, atletismo, natação, etc. E também clubes variados de artes, orquestra, conversação em inglês, etc.	Não há clubes na escola. Quem faz alguma atividade, a faz fora de escola
20	Merenda escolar e cultura alimentícia	Há merenda na maioria das escolas primárias e ginásiais. Leva algum tempo para as crianças acostumarem com a merenda japonesa, pois o tempero brasileiro tem como base o sal e a pimenta.	Não são todas as escolas que tem. Em algumas escolas, há cantina onde as crianças podem comprar merenda
21	Aulas	O dia escolar é resumido em 5 à 6 aulas tirando o horário de merenda escolar. O intervalo entre uma aula e outra é de 5 à 10 minutos.	O dia escolar é basicamente até o meio dia. Só há um intervalo de 15 minutos entre a 2a e a 3a aula.
22	Limpeza	A limpeza das salas de aula, banheiros, área esportiva, etc. é feita pelos estudantes.	A limpeza é realizada por pessoas contratadas.
23	Uniforme escolar	Uniformes para verão e inverno tem que ser comprados.	Muitas escolas adotam camisetas como uniforme.
24	Reuniões de pais e mestres e	Há ambos.	Não há dias reservados para os pais assistirem as aulas.
25	Normas disciplinares, acessórios	O estilo de cabelo, objetos que podem ser levados à escola são previamente definidos pela escola. Acessórios são proibidos.	É permitido o uso de acessórios.
26	Avisos de faltas e/ou atrasos.	No caso de falta ou atraso, os pais devem telefonar para a escola ou escrever no caderno de recados a entregar à escola.	Como com 75% de frequência as crianças passam de série, não é obrigatório avisar à escola. Quando os dias de falta se esticam para 2 ou 3 dias, o atestado de saúde deve ser entregue à escola.
27	Férias	Férias de verão (20/Julho a 31/Agosto), férias de inverno (26/Dezembro a 7/Janeiro) e férias de primavera (23/Março a 3/Abril)	Férias de verão (final de Dezembro até o início de Fevereiro) e férias de inverno (uma semana em meados de Julho).
28	Modo de calcular subtração e divisão	A conta de 13-8 é calculada $10-8=2$, $2+3=5$. A conta de divisão $12 \div 3$ é escrita $3 \overline{)12}$.	A conta 13-8 é raciocinada visando quanto falta de 8 até 13. A conta de divisão $12 \div 3$ é escrita $12 \overline{)3}$.
29	O horário de expediente dos professores	Trabalham o dia todo.	Após o término das aulas matutinas, alguns professores dão aula em outras escolas.
30	Gastos escolares	Há gastos à parte com a série, merenda, associação de pais e mestres, apostilas (work book e/ou drill), excursões, viagem escolar (6a série), etc.	Basicamente escolas públicas, incluindo a merenda, são de graça

No. 2 地図教材のための素材 電子データ

◆ 地図ファイルリスト ◆

日本、ブラジルともに、行政区分ごとに色分けされた全体地図、行政区分ごとに色分けされていない全体地図、行政区分で色が塗り分けられたパーツの地図、行政区分で色が塗り分けられていないパーツの地図といった様々なパターンの地図のファイルを掲載した。

また、それぞれの国で特に有名な名所、名物のイラストのファイルを掲載した。

使用目的にあわせて、これらの画像ファイルを活用していただきたい。

各ファイルの電子データについては、ファイルサイズを2種類用意した。本報告書のリストのファイル名に加えて、末尾に「S」（小さいサイズ）または「L」（大きいサイズ）を付してある。（例：JCM_01AS は北海道地方単色の小サイズ，JCM_01AL は北海道地方単色の大きいサイズ）

【日本】 全 134 枚

JCM : A4 サイズ 地方図 単色 表&裏 (全 20 枚)

- JCM_01A 北海道地方(表) 【北海道】
- JCM_01B 北海道地方(裏)
- JCM_02A 東北地方(表) 【青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島】
- JCM_02B 東北地方(裏)
- JCM_03A 関東地方(表) 【東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・山梨】
- JCM_03B 関東地方(裏)
- JCM_04A 信越・北陸地方(表) 【新潟・長野・富山・石川・福井】
- JCM_04B 信越・北陸地方(裏)
- JCM_05A 東海地方(表) 【愛知・岐阜・静岡・三重】
- JCM_05B 東海地方(裏)
- JCM_06A 近畿地方(表) 【大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山】
- JCM_06B 近畿地方(裏)
- JCM_07A 中国地方(表) 【鳥取・島根・岡山・広島・山口】
- JCM_07B 中国地方(裏)
- JCM_08A 四国地方(表) 【徳島・香川・愛媛・高知】
- JCM_08B 四国地方(裏)
- JCM_09A 九州地方(表) 【福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島】
- JCM_09B 九州地方(裏)
- JCM_10A 沖縄地方(表) 【沖縄】
- JCM_10B 沖縄地方(裏)

JKM : A4 サイズ 各県図 単色 表&裏 (全 82 枚)

- JKM_01A 北海道(表), JKM_01B 北海道(裏), JKM_02A 青森県(表), JKM_02B 青森県(裏),

JKM_03A 秋田県(表), JKM_03B 秋田県(裏), JKM_04A 岩手県(表), JKM_04B 岩手県(裏),
JKM_05A 宮城県(表), JKM_05B 宮城県(裏), JKM_06A 山形県(表), JKM_06B 山形県(裏),
JKM_07A 福島県(表), JKM_07B 福島県(裏), JKM_08A 新潟県(表), JKM_08B 新潟県(裏),
JKM_09A 栃木県(表), JKM_09B 栃木県(裏), JKM_10A 茨城県(表), JKM_10B 群馬県(裏),
JKM_11A 千葉県(表), JKM_11B 千葉県(裏), JKM_12A 群馬県(表), JKM_12B 岩手県(裏),
JKM_13A 埼玉県(表), JKM_13B 埼玉県(裏), JKM_14A 東京都(表), JKM_14B 東京都(裏),
JKM_15A 神奈川県(表), JKM_15B 神奈川県(裏), JKM_16A 山梨県(表), JKM_16B 山梨県(裏),
JKM_17A 静岡県(表), JKM_17B 静岡県(裏), JKM_18A 長野県(表), JKM_18B 長野県(裏),
JKM_19A 富山県(表), JKM_19B 富山県(裏), JKM_20A 石川県(表), JKM_20B 石川県(裏),
JKM_21A 岐阜県(表), JKM_21B 岐阜県(裏), JKM_22A 福井県(表), JKM_22B 福井県(裏),
JKM_23A 愛知県(表), JKM_23B 愛知県(裏), JKM_24A 三重県(表), JKM_24B 三重県(裏),
JKM_25A 滋賀県(表), JKM_25B 滋賀県(裏), JKM_26A 京都府(表), JKM_26B 京都府(裏),
JKM_27A 奈良県(表), JKM_27B 奈良県(裏), JKM_28A 和歌山県(表), JKM_28B 和歌山県(裏),
JKM_29A 大阪府(表), JKM_29B 大阪府(裏), JKM_30A 兵庫県(表), JKM_30B 兵庫県(裏),
JKM_31A 岡山県(表), JKM_31B 岡山県(裏), JKM_32A 鳥取県(表), JKM_32B 鳥取県(裏),
JKM_33A 島根県(表), JKM_33B 島根県(裏), JKM_34A 広島県(表), JKM_34B 広島県(裏),
JKM_35A 香川県(表), JKM_35B 香川県(裏), JKM_36A 徳島県(表), JKM_36B 徳島県(裏),
JKM_37A 高知県(表), JKM_37B 高知県(裏), JKM_38A 愛媛県(表), JKM_38B 愛媛県(裏),
JKM_39A 山口県(表), JKM_39B 山口県(裏), JKM_40A 大分県(表), JKM_40B 大分県(裏),
JKM_41A 宮崎県(表), JKM_41B 宮崎県(裏), JKM_42A 福岡県(表), JKM_42B 福岡県(裏),
JKM_43A 熊本県(表), JKM_43B 熊本県(裏), JKM_44A 鹿児島県(表), JKM_44B 鹿児島県(裏),
JKM_45A 佐賀県(表), JKM_45B 佐賀県(裏), JKM_46A 長崎県(表), JKM_46B 長崎県(裏),
JKM_47A 沖縄県(表), JKM_47B 沖縄県(裏)

JC : A3 サイズ 全国図 地方毎色分け (4色) 表 (全1枚)

JCC : A4 サイズ 地方図色分け (10区分) 表&裏 (全20枚)

JCC_01A 北海道地方(表) 【北海道】
JCC_01B 北海道地方(裏)
JCC_02A 東北地方(表) 【青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島】
JCC_02B 東北地方(裏)
JCC_03A 関東地方(表) 【東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・山梨】
JCC_03B 関東地方(裏)
JCC_04A 信越・北陸地方(表) 【新潟・長野・富山・石川・福井】
JCC_04B 信越・北陸地方(裏)
JCC_05A 東海地方(表) 【愛知・岐阜・静岡・三重】
JCC_05B 東海地方(裏)

JCC_06A 近畿地方(表)【大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山】
JCC_06B 近畿地方(裏)
JCC_07A 中国地方(表)【鳥取・島根・岡山・広島・山口】
JCC_07B 中国地方(裏)
JCC_08A 四国地方(表)【徳島・香川・愛媛・高知】
JCC_08B 四国地方(裏)
JCC_09A 九州地方(表)【福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島】
JCC_09B 九州地方(裏)
JCC_10A 沖縄地方(表)【沖縄】
JCC_10B 沖縄地方(裏)

JL：各地方のランドマーク（名所・名物）イラスト（全10枚）

JL1 北海道地方「ゆきまつり」,	JL2 東北地方「青函トンネル」,
JL3 関東地方「東京タワー」,	JL4 信越・北陸地方「黒部ダム」,
JL5 東海地方「富士山」,	JL6 近畿地方「大仏」,
JL7 中国地方「原爆ドーム」,	JL8 四国地方「阿波踊り」,
JL9 九州地方「阿蘇山」,	JL10 沖縄地方「首里城」

JV：A3サイズ 全国図 県毎色分け（全1枚）

【ブラジル】全 82 枚

BGM : A4 サイズ 行政区分図 単色 表&裏 (全 10 枚)

- BGM_01A 北部 Norte(表) 【アクレ, アマゾナス, ホンドニア, ホライマ, パラ, アマパ, トカンチンス】
BGM_01B 北部 Norte (裏)
BGM_02A 北東部 Nordeste(表) 【マラニョン, ピアウイ, セアラ, リオ・グランジ・ド・ノルテ,
パライーバ, ペルナンブコ, アラゴアス, セルジッペ, バイーア,】
BGM_02B 北東部 Nordeste (裏)
BGM_03A 中西部 Centro-Oeste +連邦直轄区(表)
【マツト・グロッソ, マツト・グロッソ・ド・スウ, ゴイアス, ブラジリア】
BGM_03B 中西部 Centro-Oeste +連邦直轄区(裏)
BGM_04A 南東部 Sudeste(表)
【ミナス・ジェライス, エスピリート・サント, リオ・デ・ジャネイロ, サン・パウロ】
BGM_04B 南東部 Sudeste (裏)
BGM_05A 南部 Sul(表) 【パラナ, サンタ・カタリーナ, リオ・グランジ・ド・スウ】
BGM_05B 南部 Sul (裏)

BSM : A4 サイズ 州図 単色 表&裏 (全 54 枚)

- BSM_01A アマゾナス州(表), BSM_01B アマゾナス州(裏),
BSM_02A アクレ州(表), BSM_02B アクレ州(裏),
BSM_03A ホンドニア州(表), BSM_03B ホンドニア州(裏),
BSM_04A ホライマ州岩手県(表), BSM_04B ホライマ州(裏),
BSM_05A パラ州(表), BSM_05B パラ州(裏),
BSM_06A アマパ州(表), BSM_06B アマパ州(裏),
BSM_07A マツト州(表), BSM_07B マツト州(裏),
BSM_08A マラニョン州(表), BSM_08B マラニョン州(裏),
BSM_09A トカンチンス州(表), BSM_09B トカンチンス州(裏),
BSM_10A ゴイアス州(表), BSM_10B ゴイアス州(裏),
BSM_11A 連邦直轄区ブラジリア(表), BSM_11B 連邦直轄区ブラジリア(裏),
BSM_12A ピアウイ州(表), BSM_12B ピアウイ州(裏),
BSM_13A セアラ州(表), BSM_13B セアラ州(裏),
BSM_14A マツト・グロッソ・ド・スウ州(表), BSM_14B マツト・グロッソ・ド・スウ州(裏),
BSM_15A リオ・グランジ・ド・ノルテ州(表), BSM_15B リオ・グランジ・ド・ノルテ州(裏),
BSM_16A パライーバ州(表), BSM_16B パライーバ州(裏),
BSM_17A ペルナンブコ州(表), BSM_17B ペルナンブコ州(裏),
BSM_18A アラゴアス州(表), BSM_18B アラゴアス州(裏),
BSM_19A セルジッペ州(表), BSM_19B セルジッペ州(裏),
BSM_20A バイーア州(表), BSM_20B バイーア州(裏),

BSM_21A リオ・グランジ・ド・スウ州(表), BSM_21B リオ・グランジ・ド・スウ州(裏),
BSM_22A サンタ・カタリーナ州(表), BSM_22B サンタ・カタリーナ州(裏),
BSM_23A パラナ州(表), BSM_23B パラナ州(裏),
BSM_24A サン・パウロ州(表), BSM_24B サン・パウロ州(裏),
BSM_25A リオ・デ・ジャネイロ州(表), BSM_25B リオ・デ・ジャネイロ州(裏),
BSM_26A エスピリート・サント州(表), BSM_26B エスピリート・サント州(裏),
BSM_27A ミナス・ジェライス州(表), BSM_27B ミナス・ジェライス州(裏)

BC : A3 サイズ 全国図 地方毎色分け (4色) 表 (全1枚)

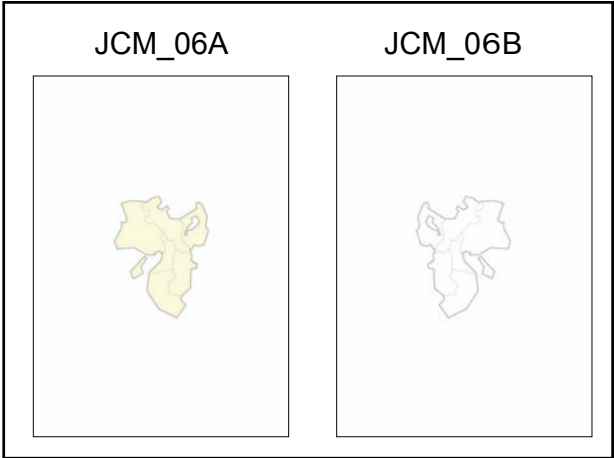
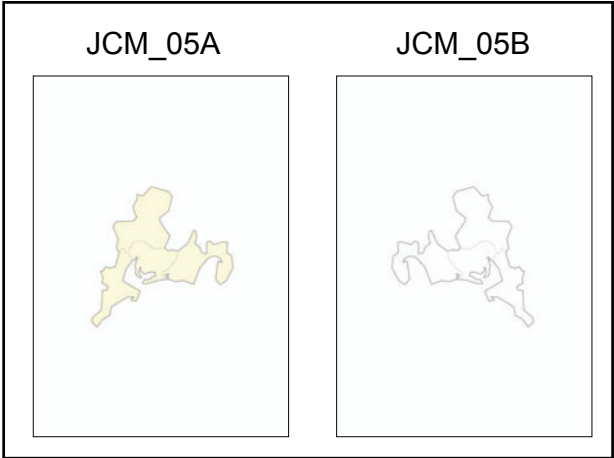
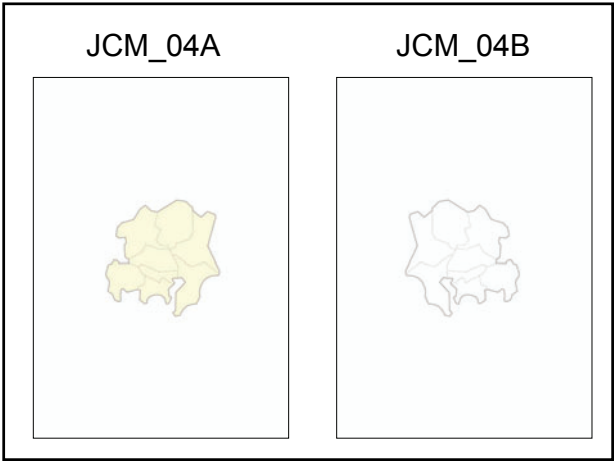
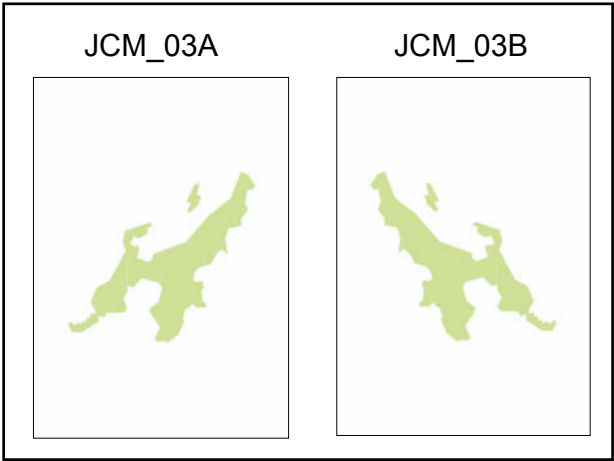
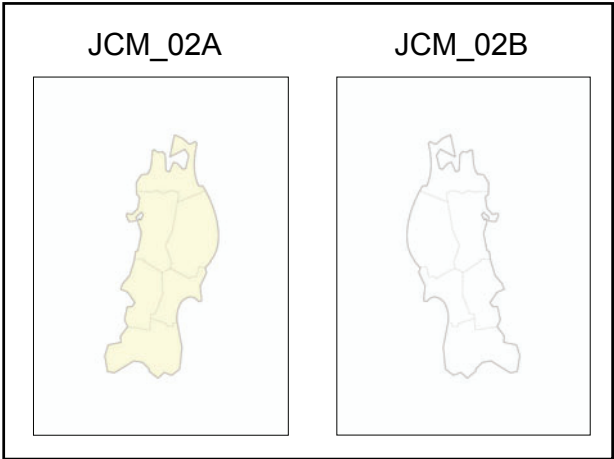
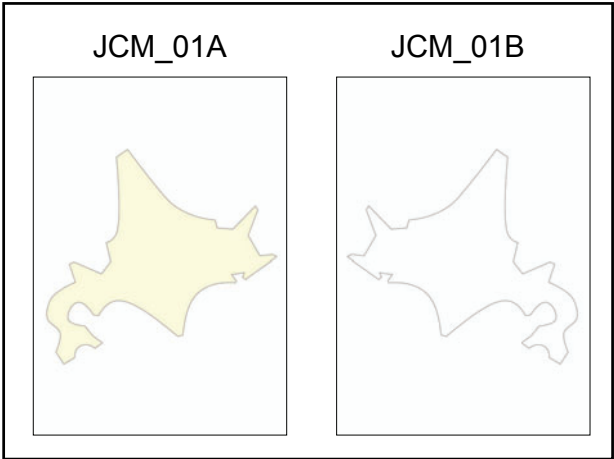
BGC : A4 サイズ 行政区分図毎色分け (4色) 表&裏 (全10枚)

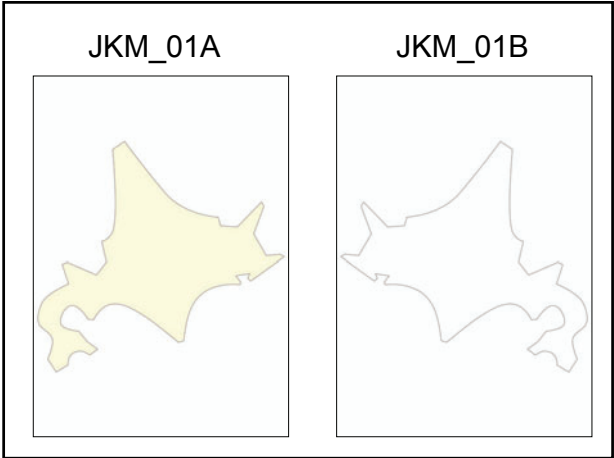
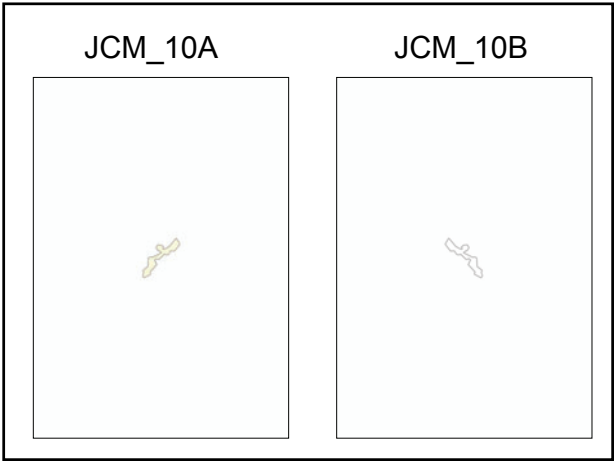
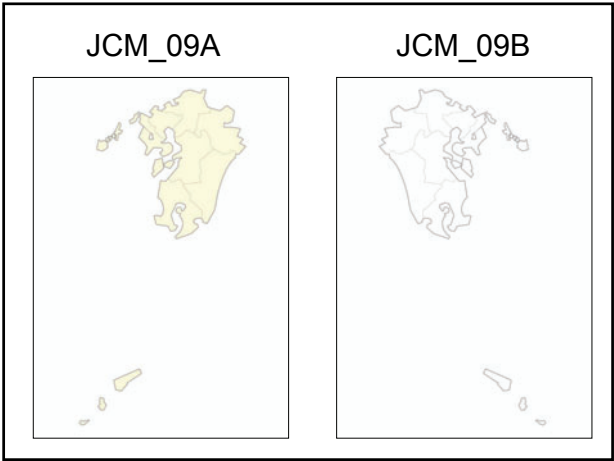
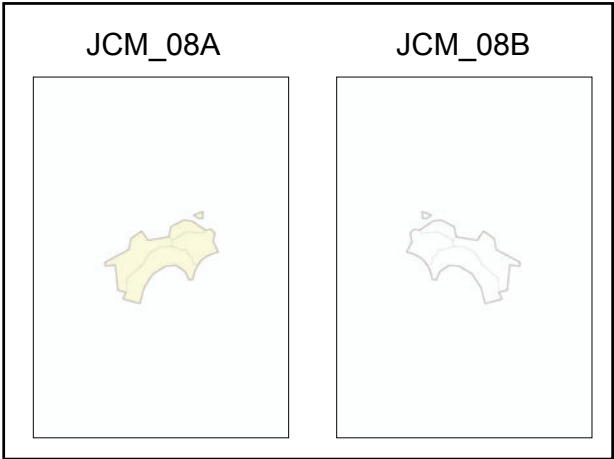
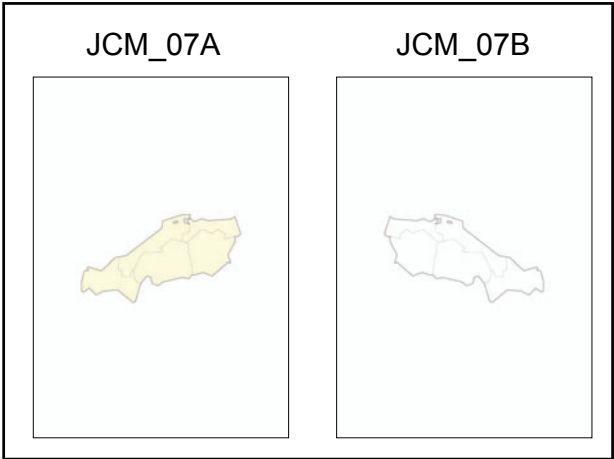
BGC_01A 北部 Norte(表) 【アクレ, アマゾナス, ホンドニア, ホライマ, パラ, アマパ, トカンチンス】
BGC_01B 北部 Norte (裏)
BGC_02A 北東部 Nordeste(表) 【マラニョン, ピアウイ, セアラ, リオ・グランジ・ド・ノルテ,
パライーバ, ペルナンブコ, アラゴアス, セルジッペ, バイーア,】
BGC_02B 北東部 Nordeste (裏)
BGC_03A 中西部 Centro-Oeste +連邦直轄区(表)
【マット・グロッソ, マット・グロッソ・ド・スウ, ゴイアス, ブラジリア】
BGC_03B 中西部 Centro-Oeste +連邦直轄区(裏)
BGC_04A 南東部 Sudeste(表)
【ミナス・ジェライス, エスピリート・サント, リオ・デ・ジャネイロ, サン・パウロ】
BGC_04B 南東部 Sudeste (裏)
BGC_05A 南部 Sul(表) 【パラナ, サンタ・カタリーナ, リオ・グランジ・ド・スウ】
BGC_05B 南部 Sul (裏)

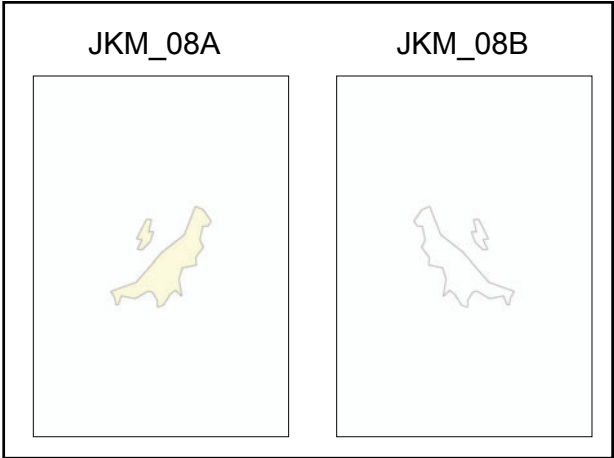
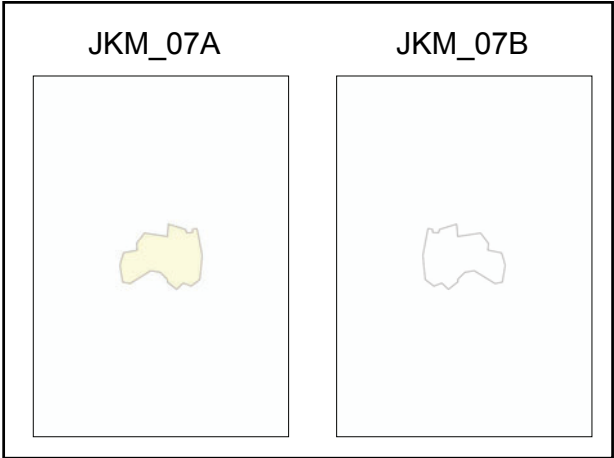
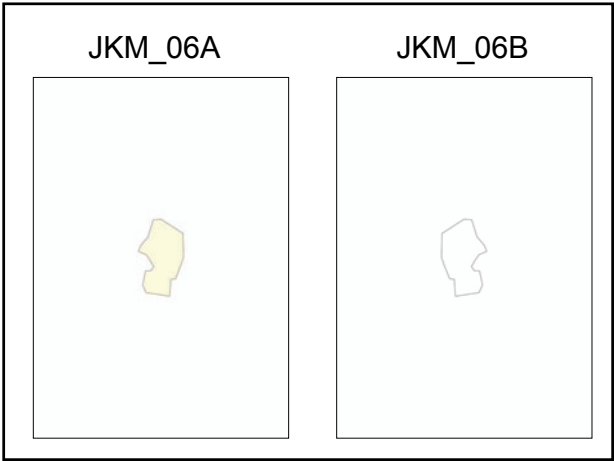
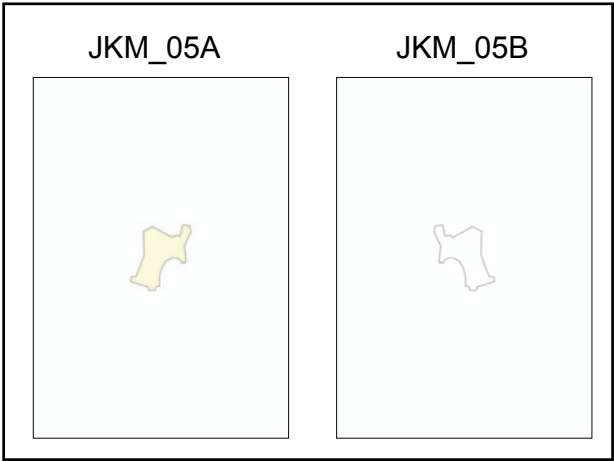
BL : 各地方のランドマーク (名所・名物) イラスト (全6枚)

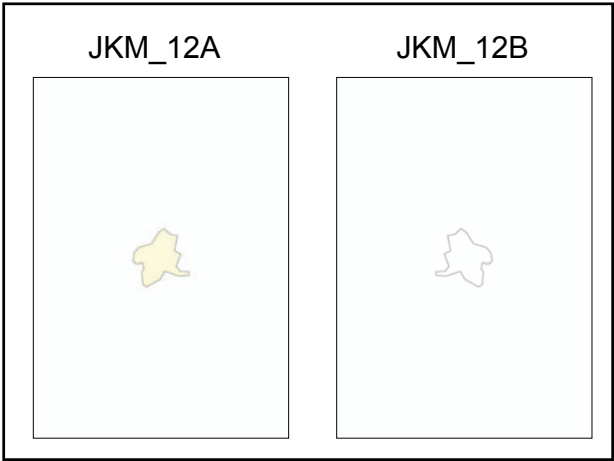
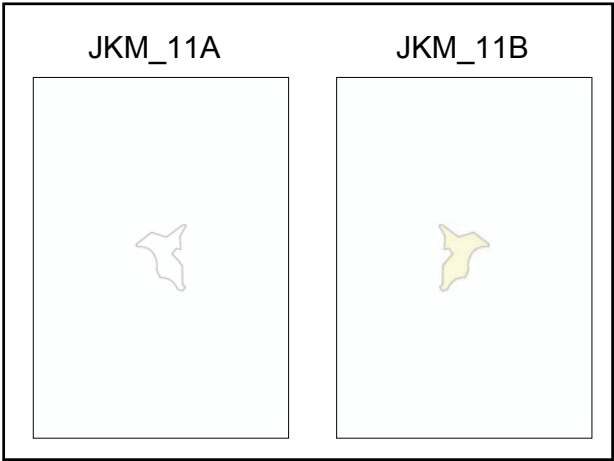
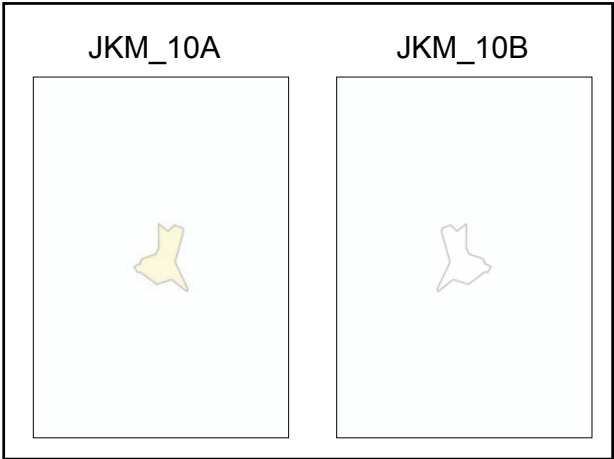
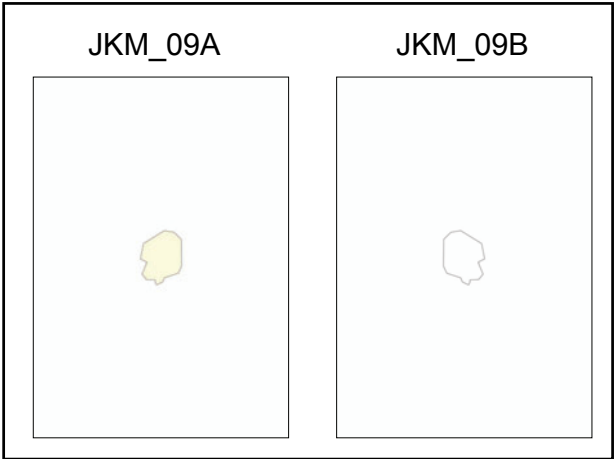
BL1 「アマゾン河」
BL2 「ペロウリーニョ広場」(サルヴァドール・デ・バイア歴史地区)
BL3 「カテドラル・メトロポリターナと労働戦士の像」(ブラジリア)
BL4 「リベルダーヂ」(サンパウロ)
BL5 「カーニバル」(リオデジャネイロ)
BL6 「イグアスの滝」(パラナ州)

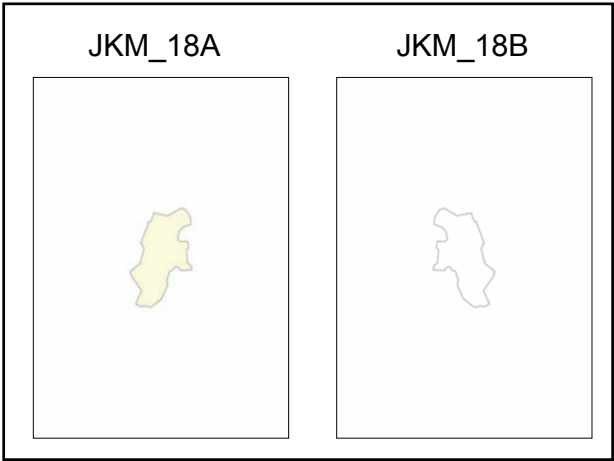
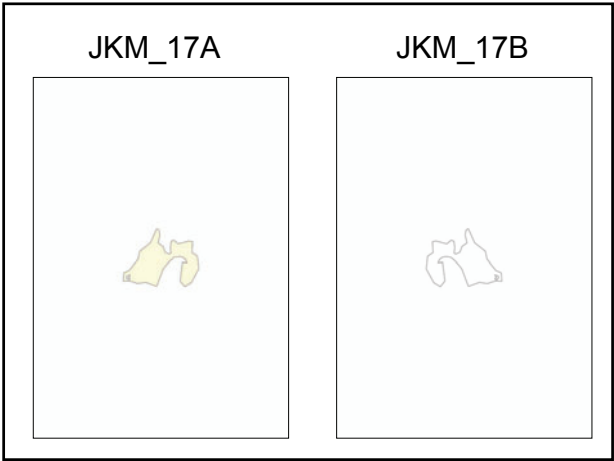
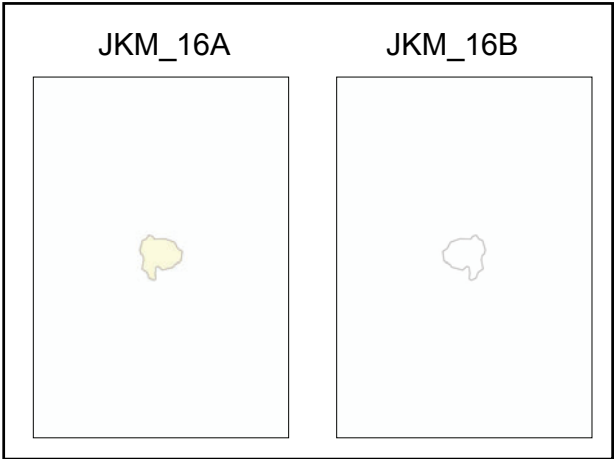
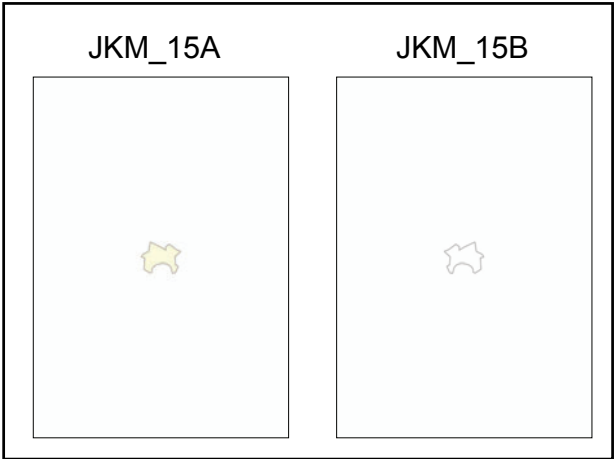
BV : A3 サイズ 全国図 州毎色分け (全1枚)

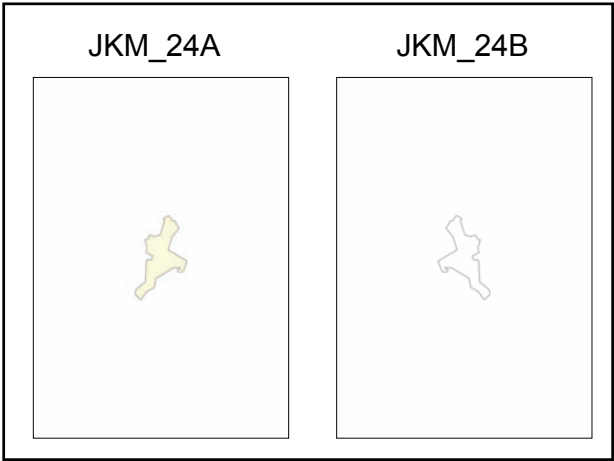
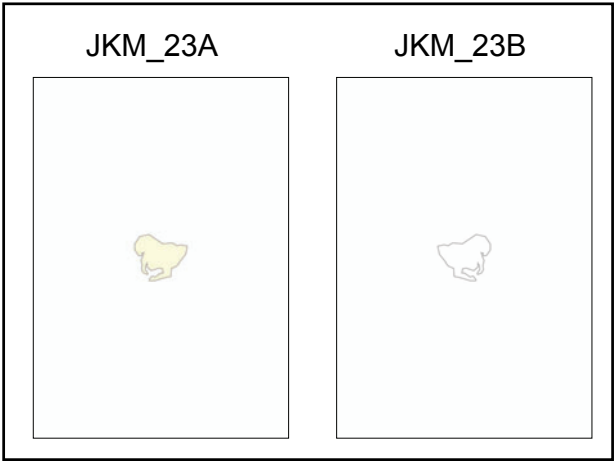
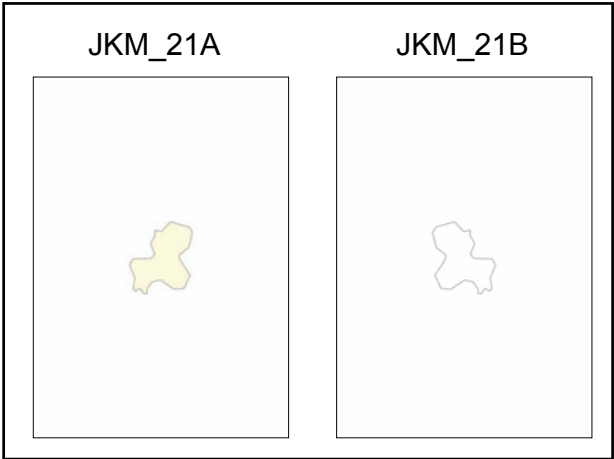


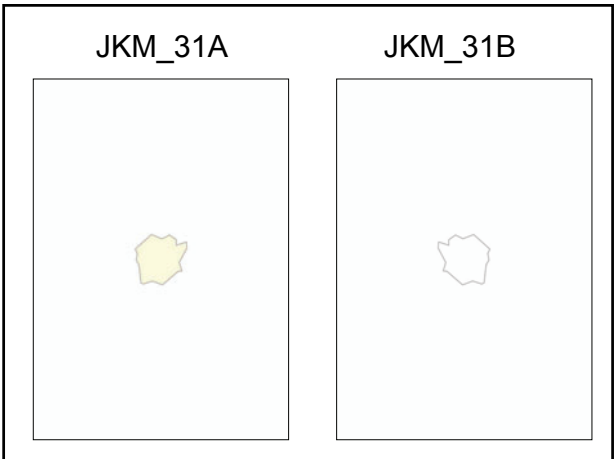
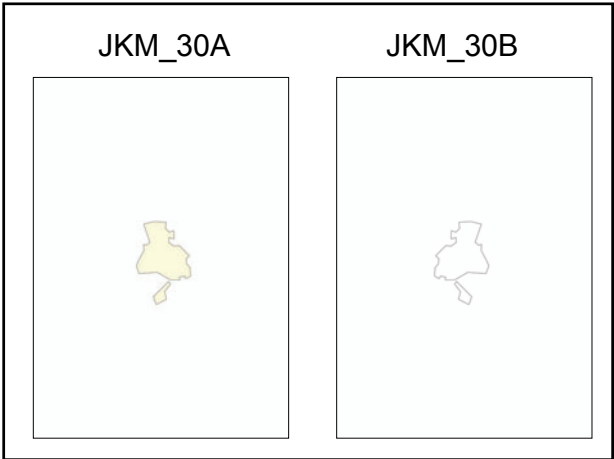
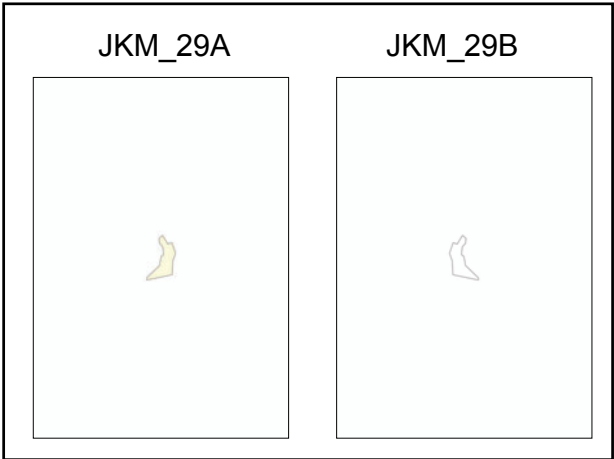
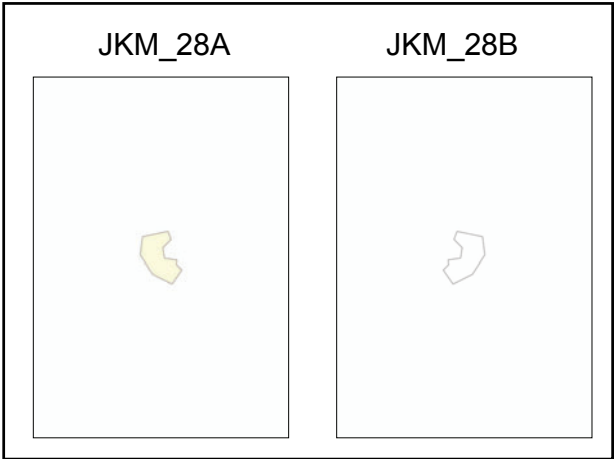
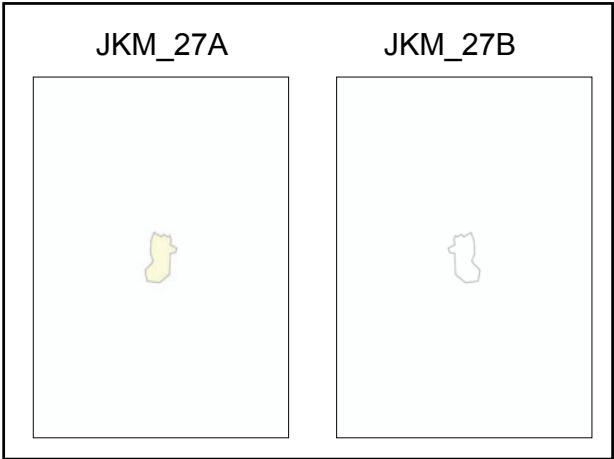


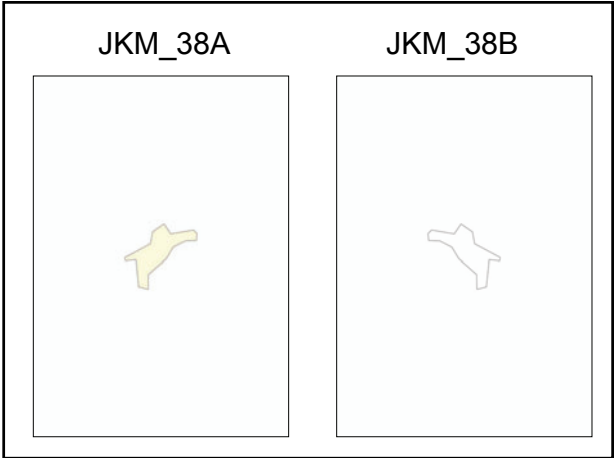
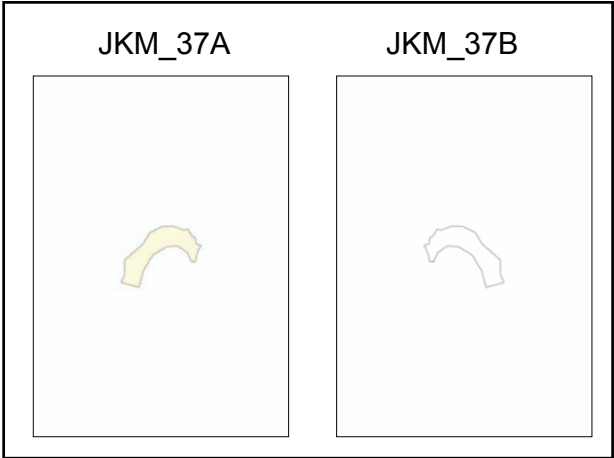
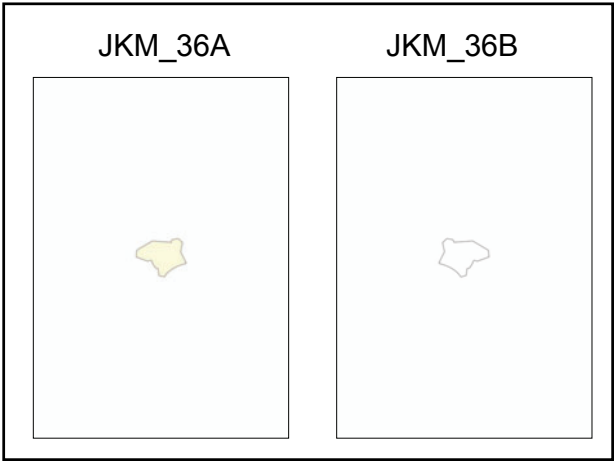
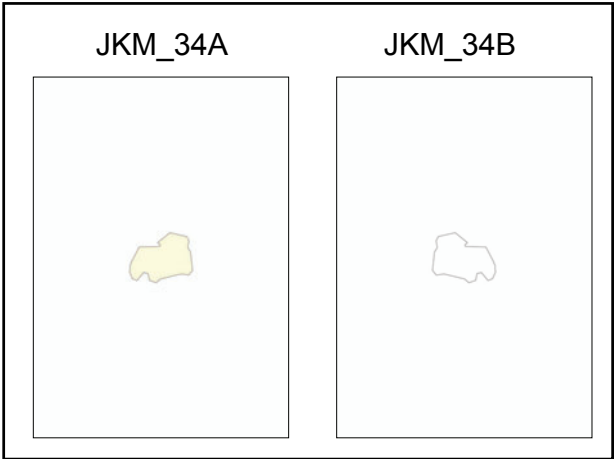
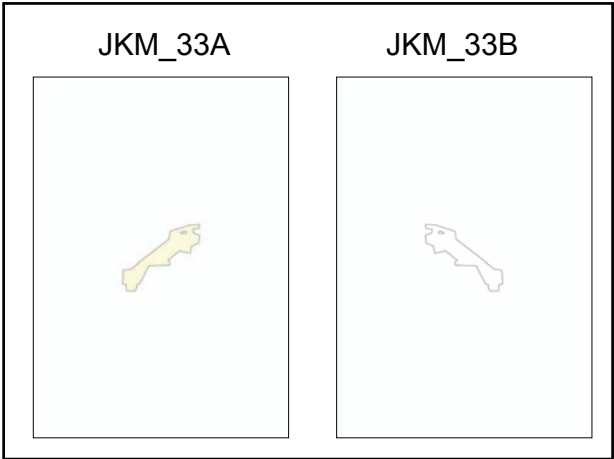


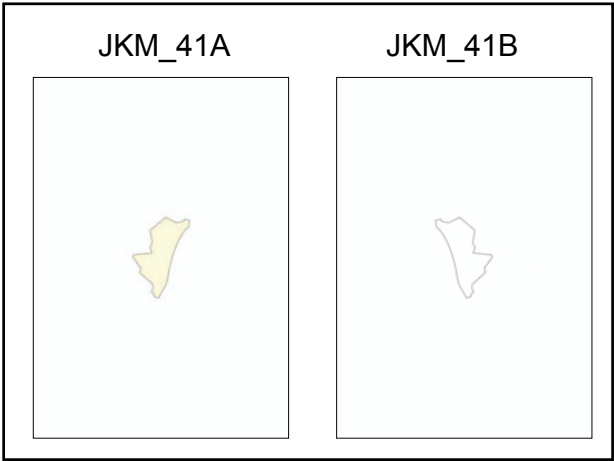
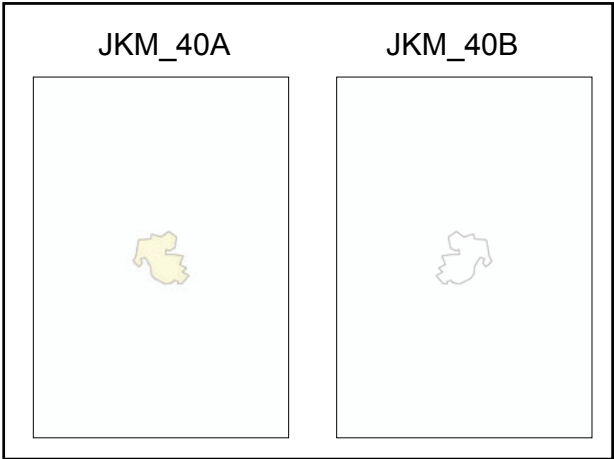
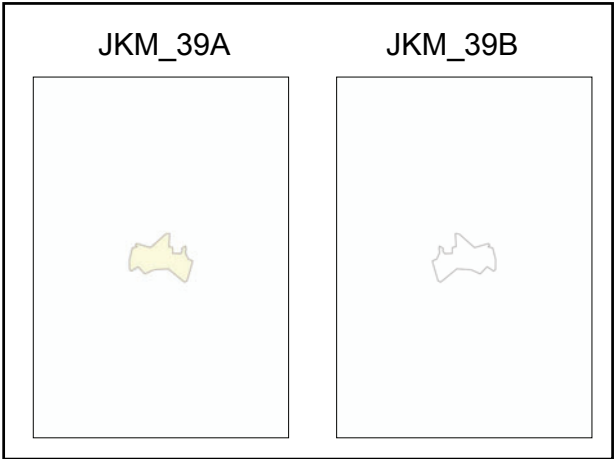


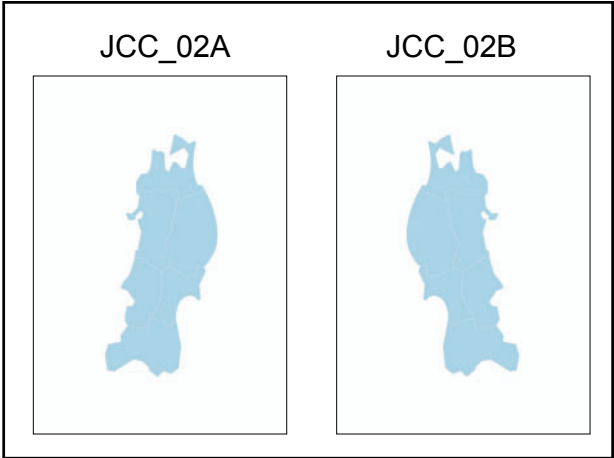
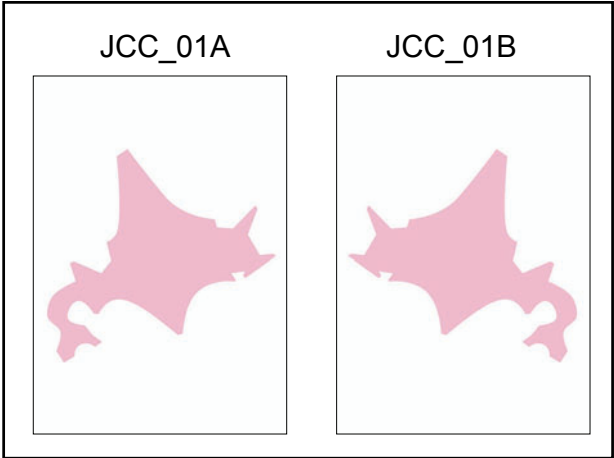
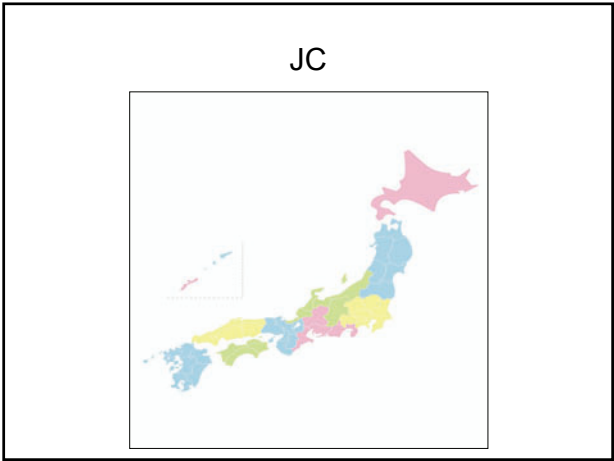
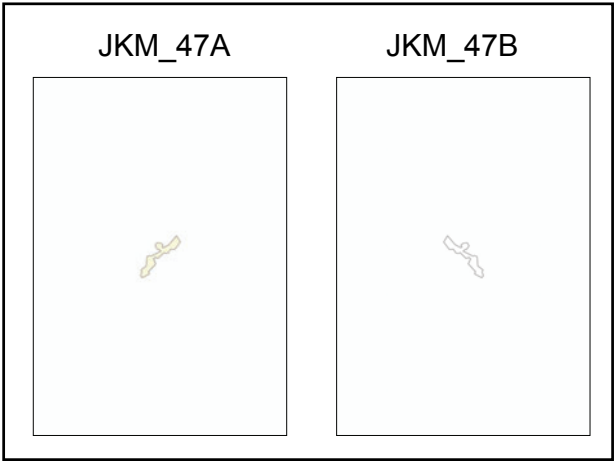


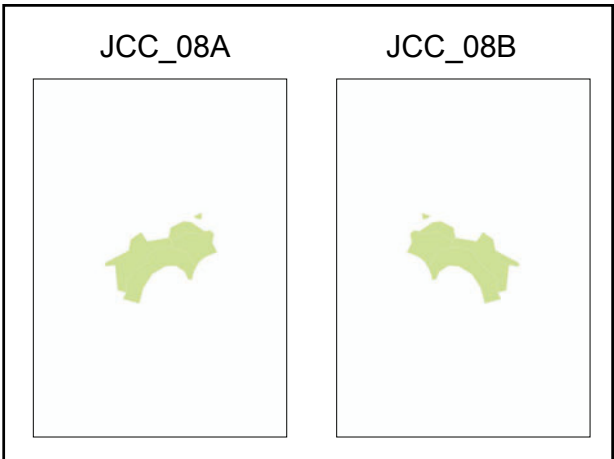
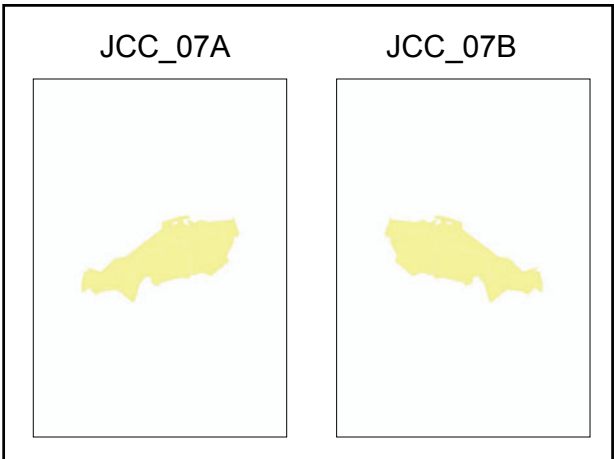
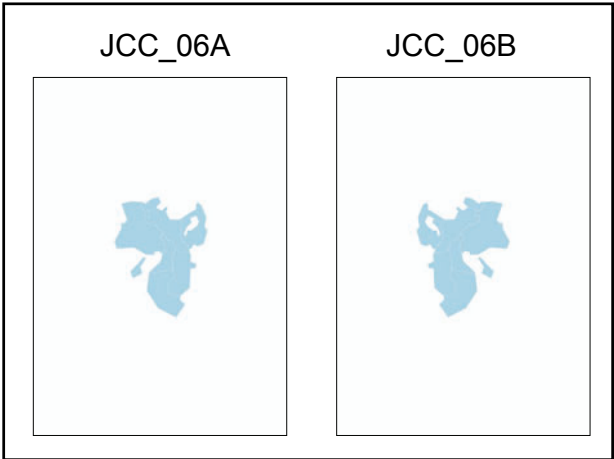
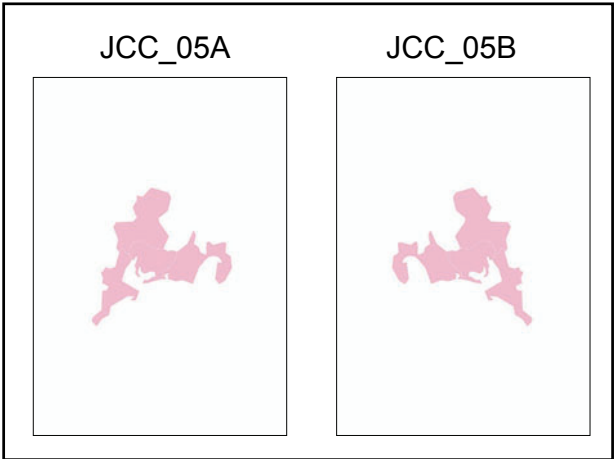
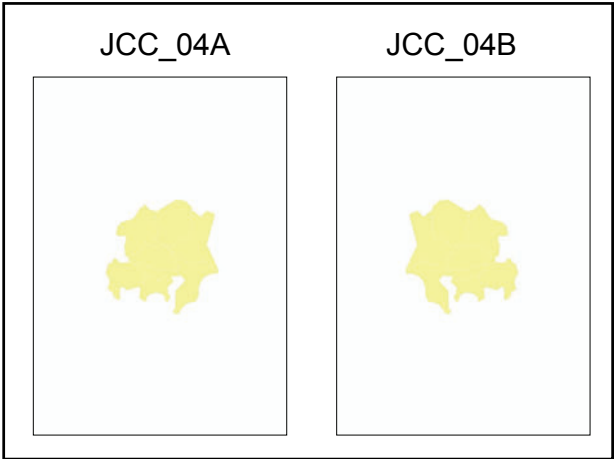
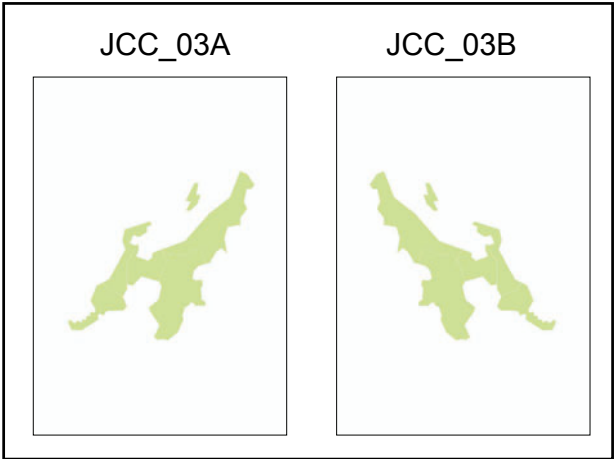


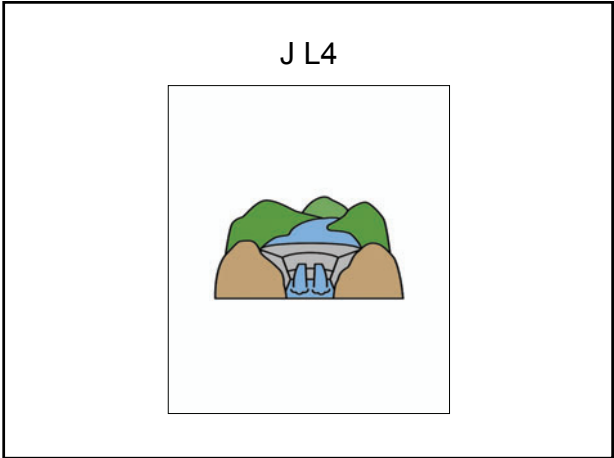
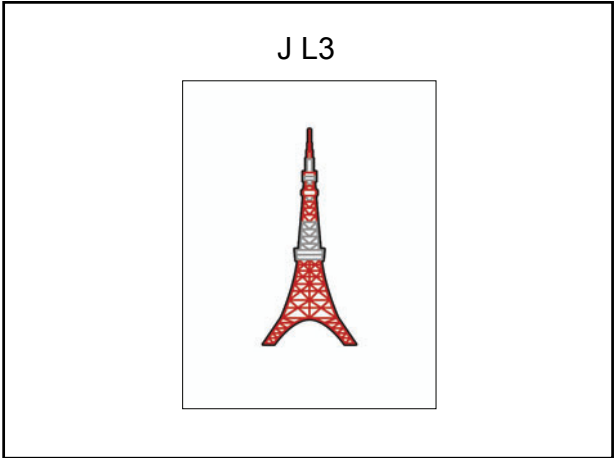
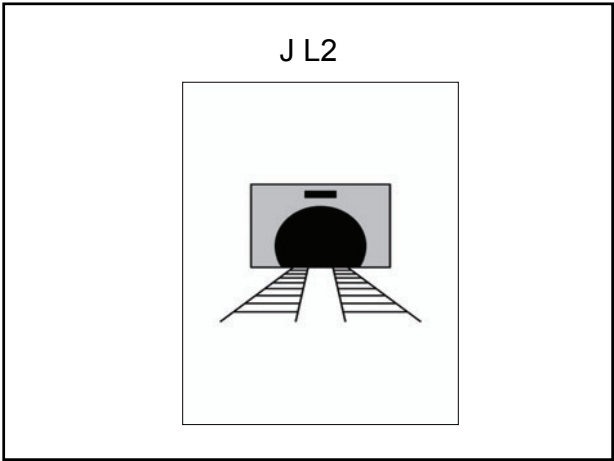
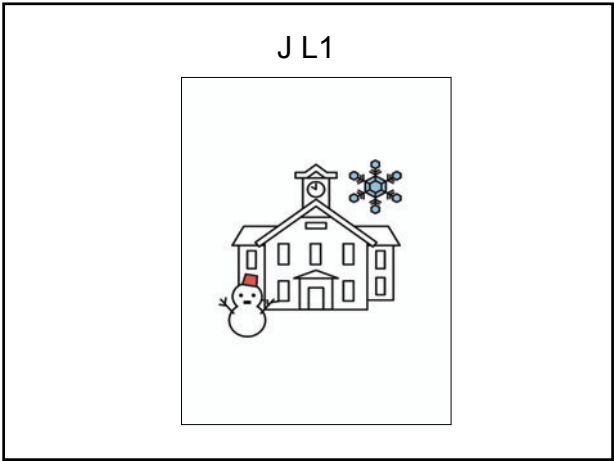
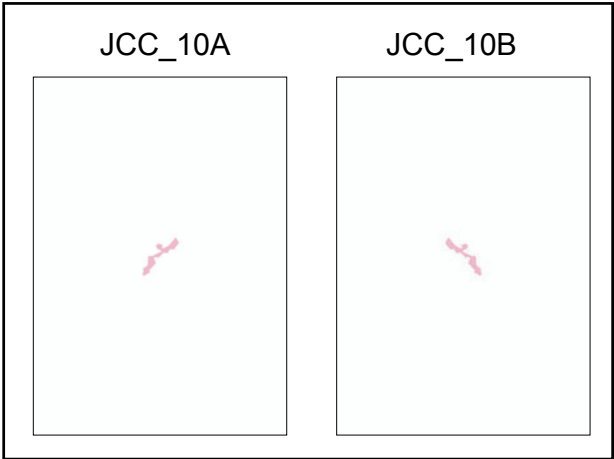
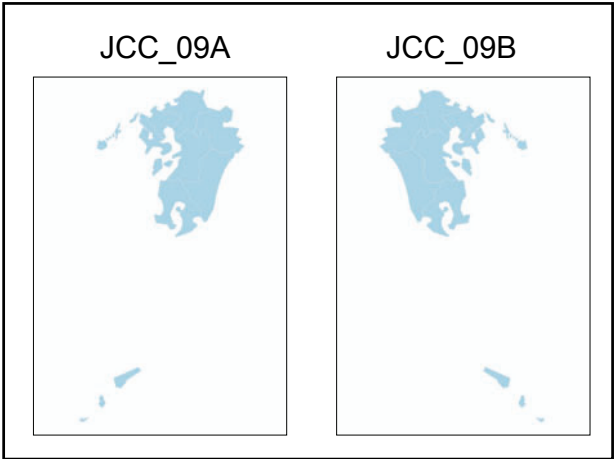




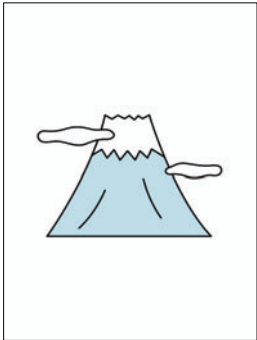




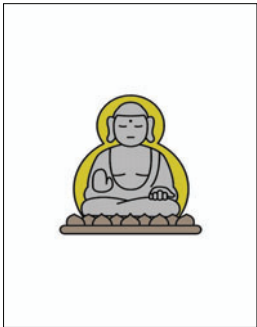




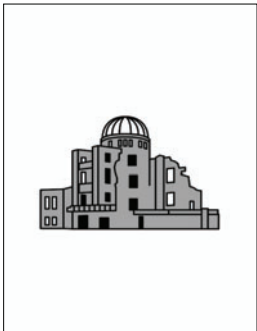
J L5



J L6



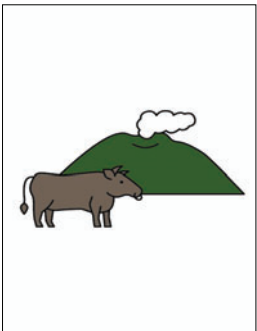
J L7



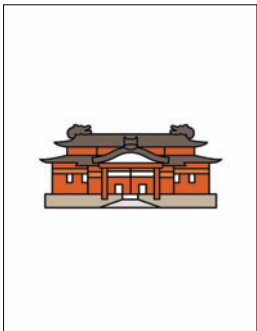
J L8

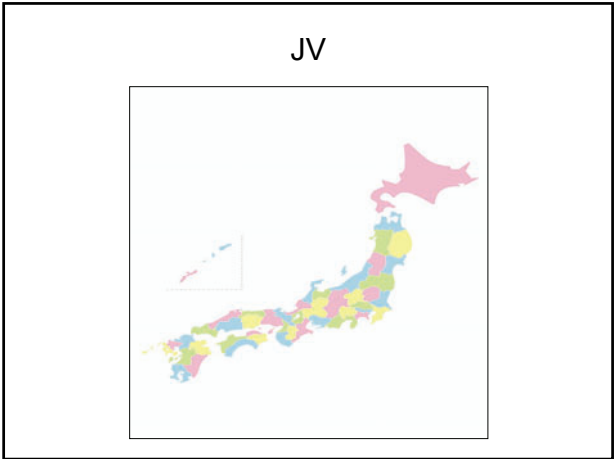


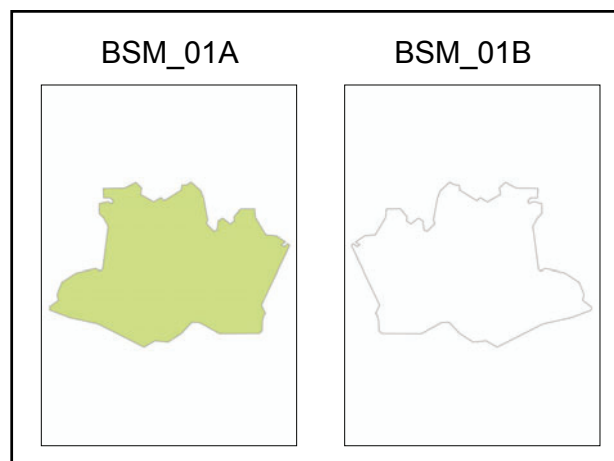
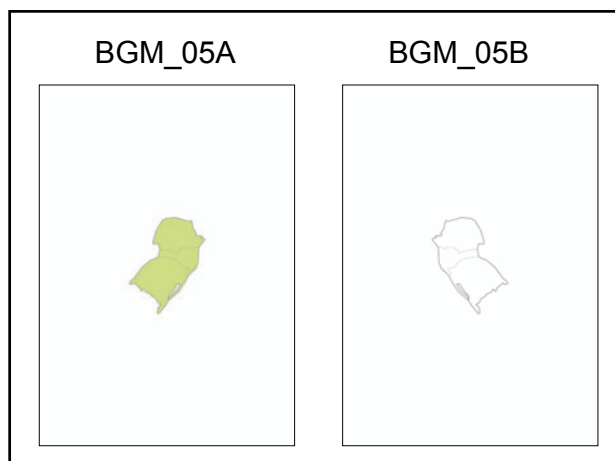
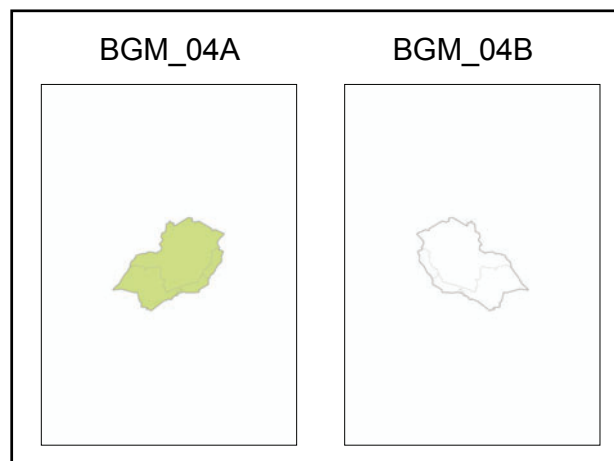
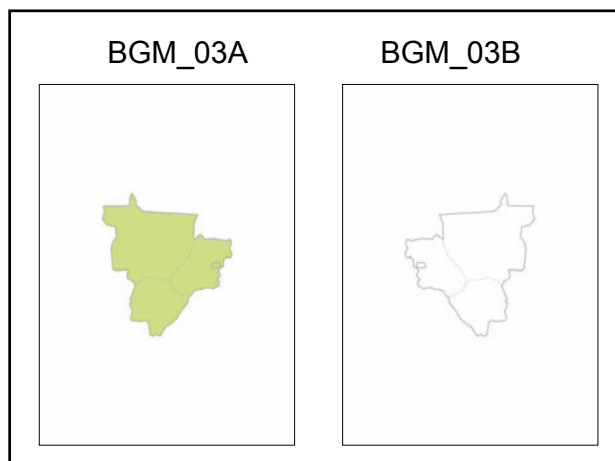
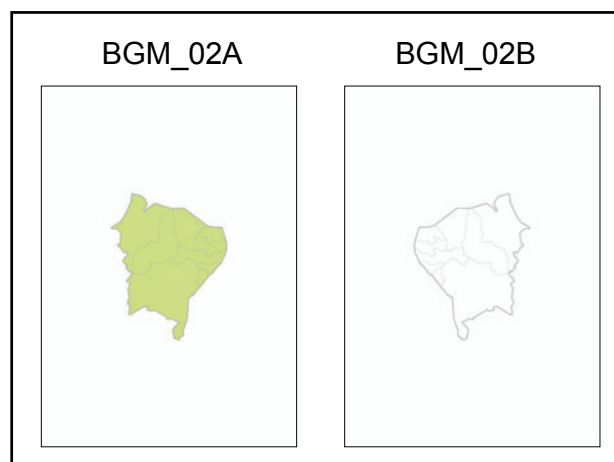
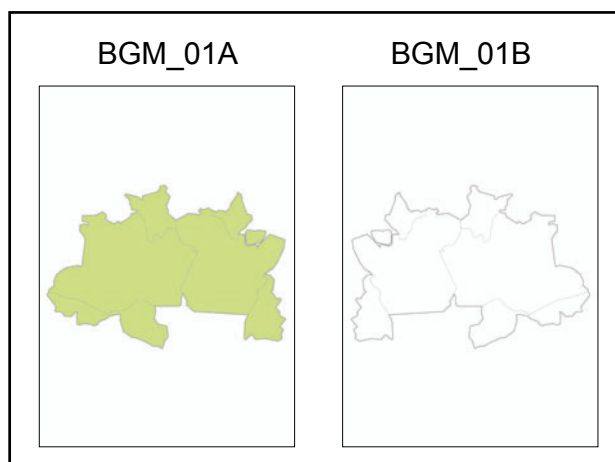
J L9

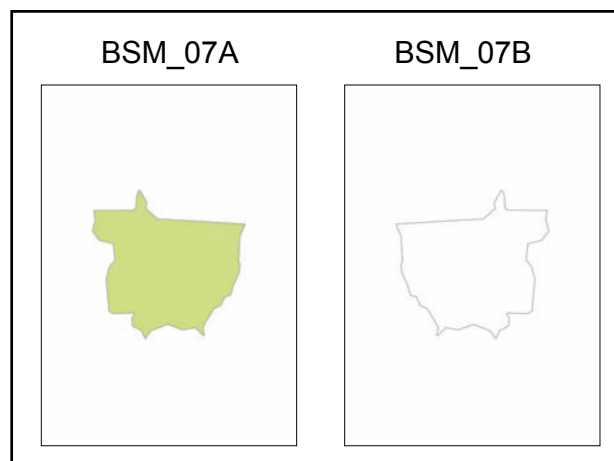
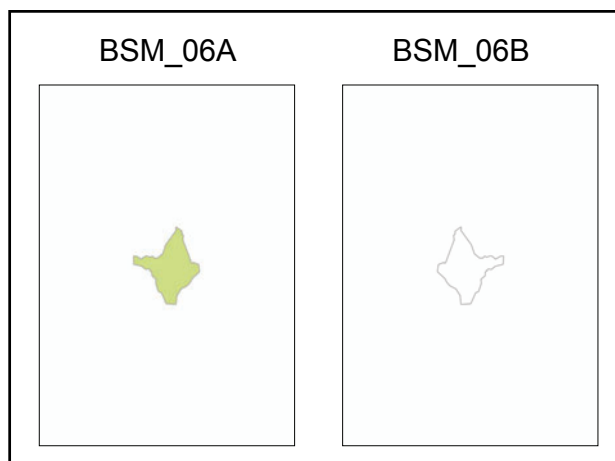
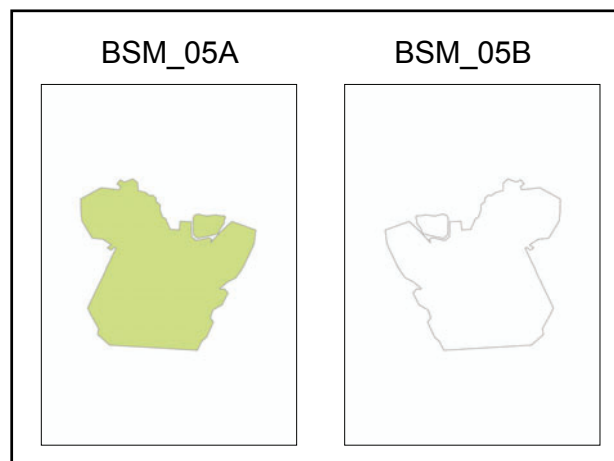
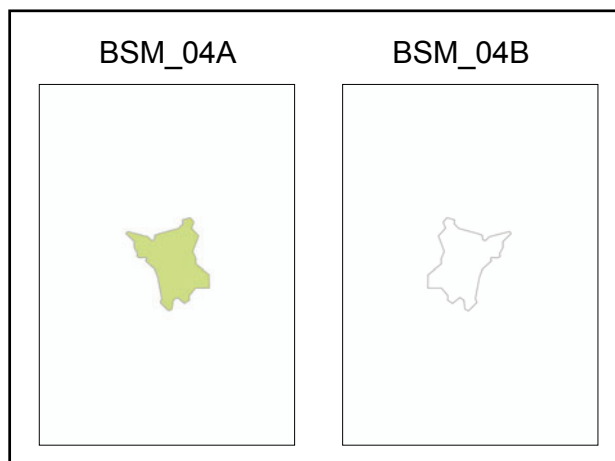
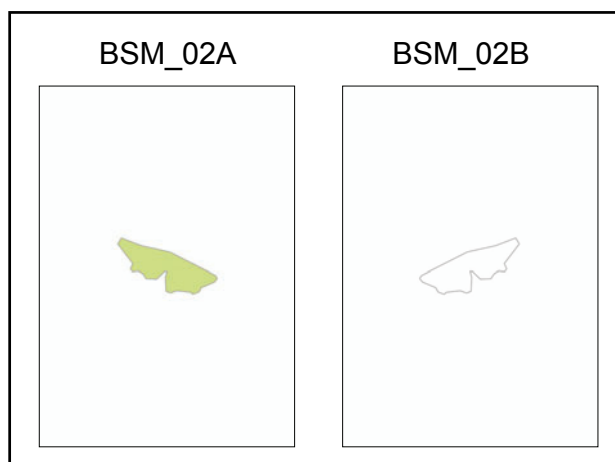


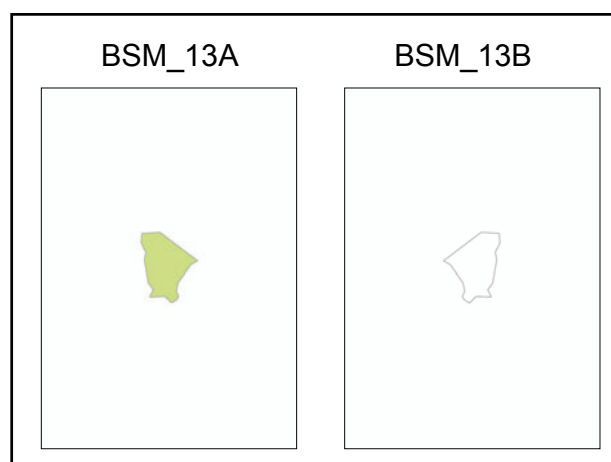
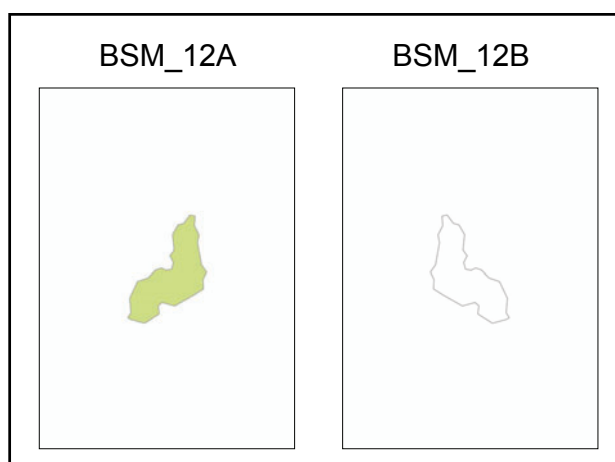
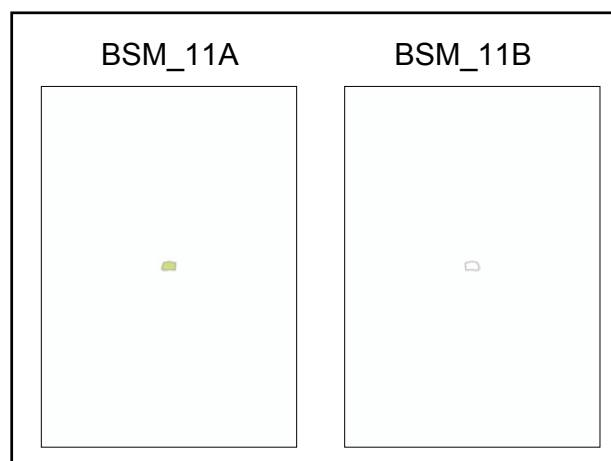
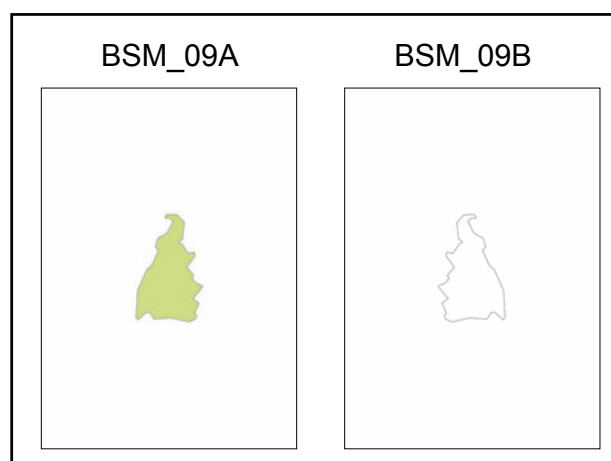
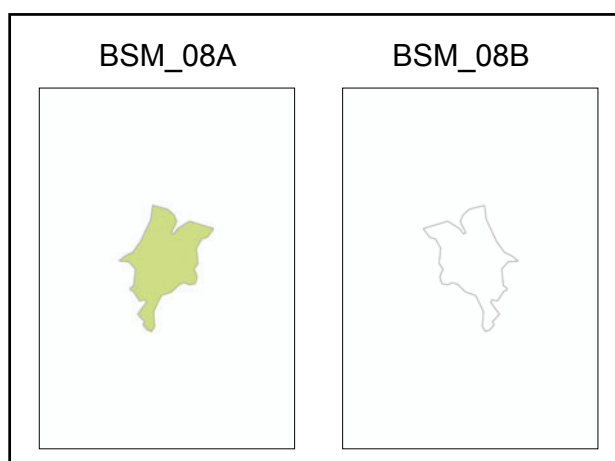
J L10

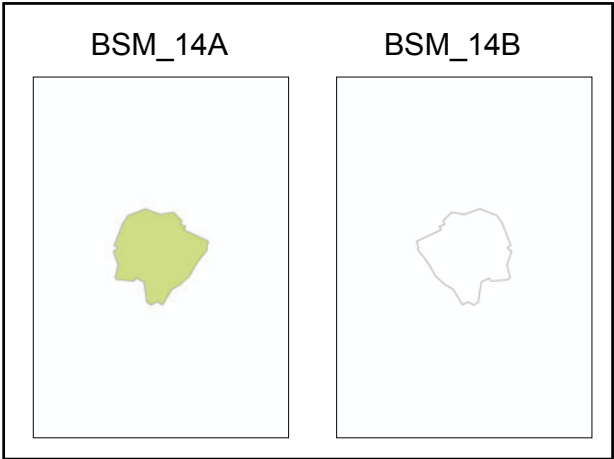




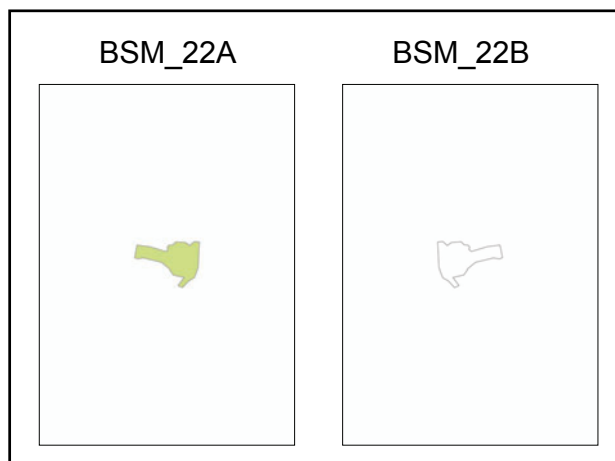
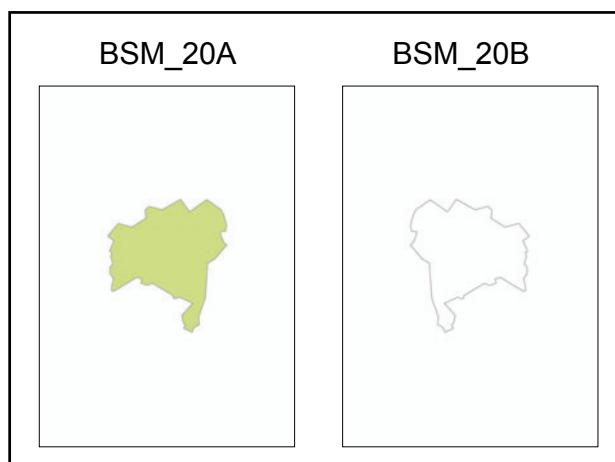


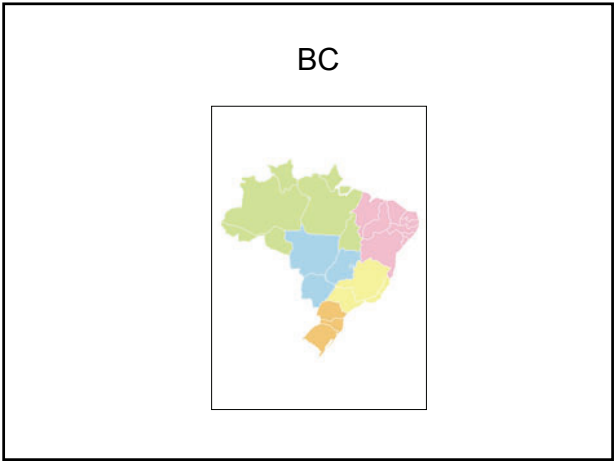
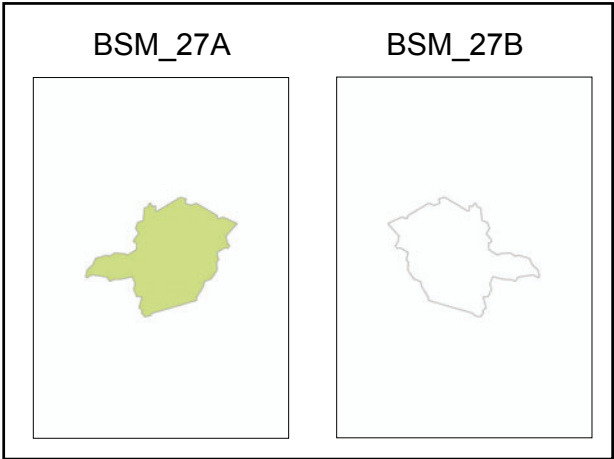




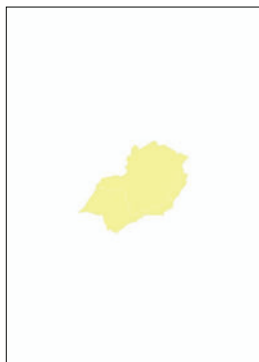


ブラジル

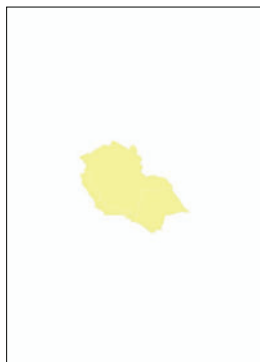




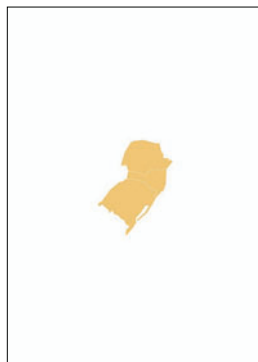
BGC_04A



BGC_04B



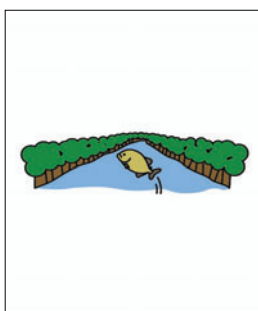
BGC_05A



BGC_05B



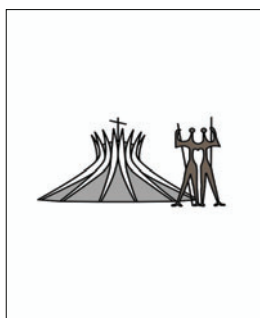
BL1



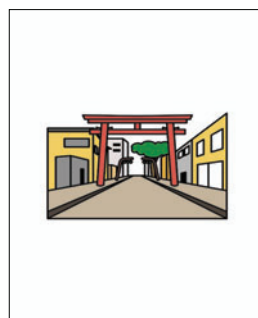
BL2



BL3

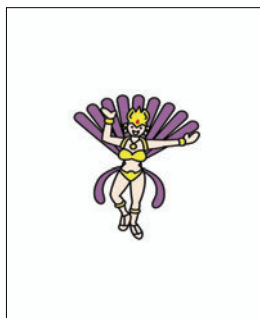


BL4



ブラジル

BL5



BL6



BV



◆ 各県ごとの特徴についての簡単な説明文 ◆

前掲の地図に付して使用できる日本の県ごとの説明文と、ブラジルとの関係についてごく簡単に記した表である。県の特徴については、ふゆのいちこ著『日本がわかるちずのえほん』（学習研究社）の記述を主に参照し、簡単な日本語の説明文とした。また、この表の作成にあたっては、活動協力者の菊池寛子氏に多くの協力を得た。

都道府県	特徴	ブラジルとの関係
北海道	日本の一番北にあります。 土地が広いです。米や野菜がたくさんとれます。 夏はすずしいです。冬は雪がたくさん降ります。 雪祭りがあります。	ブラジルへ移民した人が多いです。
青森県	トンネルで北海道に行けます。 日本で一番りんごがとれます。 ねぶた祭りが有名です。	
岩手県	日本で二番目に広い県です。 サンマやワカメがたくさんとれます。 わんこそばが有名です。	
宮城県	東北で一番人の多い県です。 七夕祭りが有名です。 米や魚がたくさんとれます。	
秋田県	雪の家「かまくら」が有名です。 杉など木を育てる林業[りんぎょう]がさかんです。	
山形県	山の多い県です。 日本で一番さくらんぼがとれます。	
福島県	日本で三番目に広い県です。 日本で二番目に桃がとれます。 喜多方[きたかた]市のラーメンが有名です。	
茨城県	日本で一番メロンがとれます。 水戸市の納豆[なっとう]が有名です。	
栃木県	海がない県です。 日本で一番イチゴがとれます。 日光市の華嚴の滝[けごんのたき]や東照宮[とうしょうぐう]が有名です。	

都道府県	特徴	ブラジルとの関係
群馬県	夏は涼しいです。 野菜作りがさかんです。 キュウリやコンニャクを作っています。	群馬県は日本で五番目にブラジル人が多いです。 (2009 年;15,258 人) 太田市にたくさんのブラジル人がいます。
埼玉県	東京都の北にあります。 東京で働く人や勉強する人がたくさん住んでいます。	
千葉県	山の少ない県です。 九十九里浜[くじゅうくりはま]は日本で一番長い砂浜です。 成田国際空港や東京ディズニーリゾートがあります。	
東京都	日本の首都です。 日本で一番多くの人住んでいます。 日本の政治の中心です。 日本で一番外国人が多いです。	
神奈川県	日本で二番目に多くの人住んでいます。 鎌倉市の大仏や横浜市の中華街、箱根市の温泉が有名です。	
新潟県	日本で一番長い信濃川[しなのがわ]があります。 コシヒカリという米が有名です。	
富山県	冬は雪がたくさん降ります。 春にはチューリップが咲きます。	
石川県	日本海に面した県です。 昔から、きれいな着物が作られています。	
福井県	日本の真ん中にあります。 冬に美味しい越前ガニがとれます。	
山梨県	日本で一番ブドウと桃がとれます。 野菜作りがさかんです。 富士山がきれいに見えます。	
長野県	リンゴ作りがさかんです。 カメラなどを作っています。 冬はスキーやスノーボードができます。	

都道府県	特徴	ブラジルとの関係
岐阜県	七つの県にかこまれています。海がない県です。 鳥を使ってアユをとる鵜飼い[うかい]が有名です。 白川郷[しらかわごう]が有名です。	岐阜県は日本で四番目にブラジル人が多いです。 (2009 年;16,733 人)
静岡県	太平洋に面しています。暖かい県です。 お茶が有名です。 アジやウナギがたくさんとれます。	静岡県は日本で二番目にブラジル人が多いです。 (2009 年;42,513 人) ブラジル人学校がたくさんあります。
愛知県	金のしゃちほこで有名な名古屋城があります。 自動車作りがさかんです。 日本で二番目に外国人が多い県です。	愛知県に住んでいる外国人で一番多いのはブラジル人です。 ブラジル人が日本で一番多いです。(2009 年;67,125 人) ブラジル人学校がたくさんあります。
三重県	伊勢神宮[いせじんぐう]が有名です。 四日市[よっかいち]市はコンビニナートがたくさんあります。 伊勢エビや松阪牛が有名です。	三重県は日本で三番目にブラジル人が多いです。 (2009 年;18,461 人)
滋賀県	県の真ん中に琵琶湖[びわこ]があります。日本で一番大きい湖です。 信楽市の信楽焼[しがらきやき]は有名です。	
京都府	昔、日本の中心でした。 お寺などを見にたくさんの人が来ます。 祇園祭[ぎおんまつり]が有名です。	
大阪府	日本で二番目に小さいです。でも三番目に人口が多いです。 おいしい食べ物がたくさんあります。「くいだおれの町」と言われます。 だんじり祭りが有名です。	
兵庫県	日本海と瀬戸内海に面しています。 大きなつり橋「明石海峡大橋[あかしかいきょうおおはし]」があります。 タコやタイがたくさんとれます。	神戸からブラジルへのはじめての移民船「笠戸丸」が出ました。 笠戸丸には 800 人くらいの移民が乗っていました。

都道府県	特徴	ブラジルとの関係
奈良県	海がない県です。 古くて大きな大仏があります。昔、日本の中心でした。 奈良公園に鹿がいます。	
和歌山県	暖かくて雨が多いです。台風もよくきます。 ミカンや梅が有名です。 高野山[こうやさん]にたくさんの人が行きます。	
鳥取県	東西に長い県です。日本海に面しています。 ラッキョウや二十世紀梨、冬にはカニがたくさんとれます。 日本で一番大きい鳥取砂丘[とっとりさきゅう]があります。	
島根県	日本海に面しています。 宍道湖[しんじこ]があります。シジミがとれます。 出雲大社[いずもたいしゃ]が有名です。	
岡山県	マスカットや桃をたくさん作っています。 「桃太郎」が生まれたところと言われています。	
広島県	原爆[げんばく]が落とされた県です。 自動車や船作りがさかんです。 宮島の厳島神社[いつくしまじんじや]が有名です。	戦前も戦後も、ブラジルに移民した人が多いです。
山口県	日本海と瀬戸内海にはさまれた県です。 関門トンネルを通して福岡県へ行けます。 下関[しもせき]市はフグが有名です。	
徳島県	鳴門海峡[なるとかいきょう]の渦潮[うずしお]が有名です。 阿波踊り[あわおどり]が有名です。	
香川県	日本で一番小さい県です。 一年中あたたかくて、雨の少ないところです。 さぬきうどんが有名です。	
愛媛県	瀬戸内しまなみ街道という道路を通して広島県へ行けます。 ミカンやいよかんが作られています。 海ではハマチやタイ、真珠などを育てています。	

都道府県	特徴	ブラジルとの関係
高知県	太平洋に面しています。 一年中暖かくて、冬もナスやピーマンなどを作っています。 四万十川[しまんとがわ]はきれいな川です。	
福岡県	九州地方で一番北にあります。 太宰府天満宮[だざいふてんまんぐう]は勉強の神様です。 とんこつラーメンや明太子[めんたいこ]が有名です。	
佐賀県	日本海と有明海[ありあけかい]にはさまれた県です。 有明海にはムツゴロウという魚がいます。 のりをたくさん作っています。	
長崎県	原爆[げんばく]が落とされた県です。 中国や韓国と近いです。昔から中国や韓国と交流がありました。 「長崎くんち」という祭りが有名です。龍の人形を持って踊ります。	
熊本県	海と四つの県に囲まれた県です。阿蘇山[あそさん]が有名です。 畳の材料のイグサが作られています。 あまいスイカもたくさんとれます。	
大分県	瀬戸内海[せとないかい]に面しています。 火山が多いです。温泉がたくさんあります。 大分県と愛媛県の間でおいしいサバやアジがとれます。	
宮崎県	太平洋に面しています。 一年中暖かいです。冬でもピーマンなどの野菜が作られています。	
鹿児島県	九州地方で一番大きい県です。 種子島[たねがしま]に宇宙センターがあります。宇宙へロケットを うちあげます。 サツマイモから作る焼酎[しょうちゅう]というお酒が有名です。	
沖縄県	日本の一番南にあります。 夏には台風がたくさんやってきます。 パイナップルやサトウキビがたくさんとれます。 一年中とても暖かいです。海にはきれいな色の魚がたくさんいます。 アメリカ軍の基地があります。	ブラジルへ移民した人が多いです。

No. 3 現地活動中の隊員への支援
－活動中と帰国後に役立つ情報提供－

No. 3 現地活動中の隊員への支援

－活動中と帰国後に役立つ情報提供－

● 多言語・学校プロジェクト

<http://www.tagengo-gakko.jp/index.html>

日本語を母語としない児童の増加にともなって、学校現場では児童に配布する文書の翻訳に時間と労力を割かなければならなくなった。このサイトは、そういった教育現場の負担が減るように作られた多言語文書作成支援サイトである。これまでに様々な地域で翻訳された学校関係文書を、全国で共有して活用できるように提供している。学校関係文書は、進路・成績、お知らせ・お願い、費用・給付、保健、行事など、多くの種類の翻訳文書が公開されている。

● 岩倉市日本語適応指導教室

<http://www.iwakura.ed.jp/nihongo/frame.htm>

学校生活に適応するために必要なことば、学習を理解するために必要なことばなどがステップ別（初期、初級、中級、上級）や学年別に提示されている。日本語力テスト、教科力テストといったテストもステップ別に公開されている。また、日本語指導用教材もステップ別に多数公開されており、利用することができる。

● 在日外国人児童のための教材（東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター）

http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/social_02.html

このサイトでは、在日ブラジル人児童のための教材、在日フィリピン人児童のための教材、南米スペイン語圏出身児童のための教材が公開されており、ダウンロードして自由に利用することができる。教材の内容は「算数」と「漢字」で、それぞれ子どもたちの母語である外国語を必要なところに使っている。

● 外国人児童・生徒用日本語テキスト「たのしいがっこう」（東京都教育委員会）

http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/tanoshi_gakko.htm

「たのしいがっこう」は、日本語指導が必要な外国人児童・生徒用のテキストである。外

国人児童の母語の多様化に対応するために、22 の言語で用意されている。目次は、1. あいさつとへんじ、2. からだのちょうし、3. たのむときたずねるとき、4. がっこうのいきかえり、5. なかよくあそぼう、6. もちもの、7. わたしのがっこう、8. がっこうのいちにち、9. じかんわり、10. がっこうのいちねん、となっている。

● みんなの教材サイト

<http://minnanokyozaai.jp/kyozai/home/ja/render.do>

「みんなの教材サイト」では、教材用の素材として、写真やイラスト、日本語素材（文法、教室活動、読解）を提供している。これらの素材を利用して、いろいろな教材を作ることができる。また、授業準備の参考にすることもできる。イラストは、主に初級レベルを対象として作成された日本語教育用イラストで、写真は日本に関する写真や日本人の生活習慣・文化的行事などに関するものである。このサイトでは、イラストや写真を提供するにとどまらず、文法解説や例文、中上級レベルで使える読解文、教室活動のアイデアも提供している。

● 知育カード・絵カード・知育あそび用

http://www.sakunet.ne.jp/~hayaka1/card_asobi04.html

ひらがなカードやカタカナカード、ことばカード、ゲーム遊び用台紙、工作遊び用台紙など実に多くの絵カードが用意されており、無料で使用することができる。幼児向けに作成されたもので、日本語の学習を念頭においた教材ではない。

● キッズ文字表 (KF STUDIO)

<http://www.kfstudio.net/categories/kidsmoji/>

かわいい絵のついた「あいうえお表」や「カタカナ表」が公開されている。これも日本語学習用に作られたものではない。

● デジタル絵本サイト

<http://www.e-hon.jp/>

世界各国の民話をさまざまな言語に翻訳し、紹介している。民話はそれぞれの地域の文化を反映していることから、子どもたちに世界の文化を理解してもらうことを目的としている。音声も出る。

● Kids Web Japan

<http://web-japan.org/kidsweb/ja/index.html>

子ども向けに日本文化、今流行していること、各地の名産品、ハイテクの数々を紹介している。Kids 外務省 (<http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/world/index.html>) のページからアクセスすることができる。

平成 21 年度文部科学省委託事業 国際協カイニシアティブ教育協力拠点形成事業
(MEXT International Cooperation)

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成

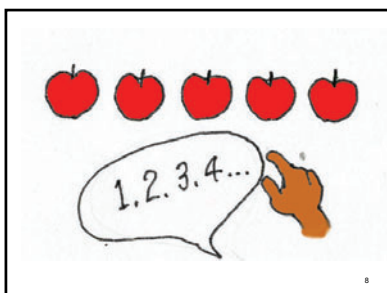
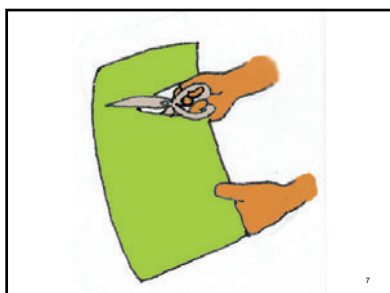
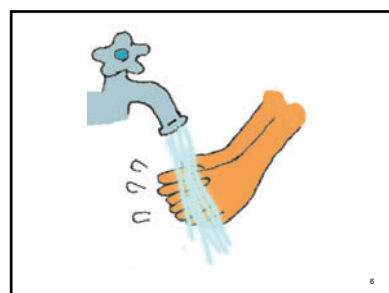
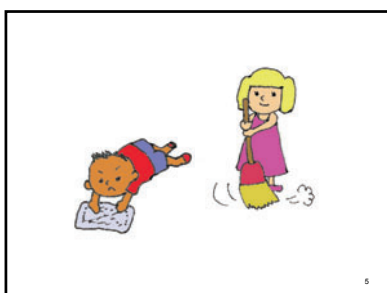
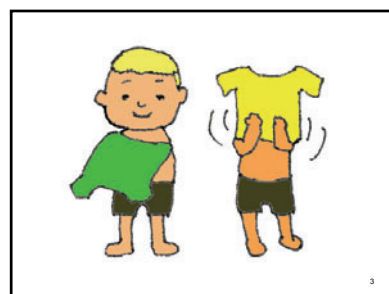
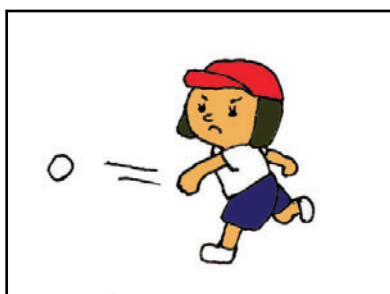
【青年海外協力隊等派遣教員の支援】

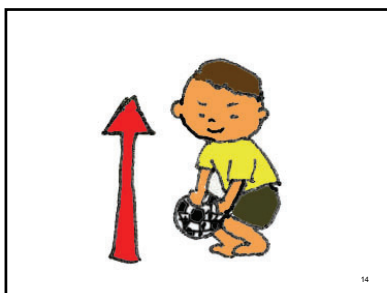
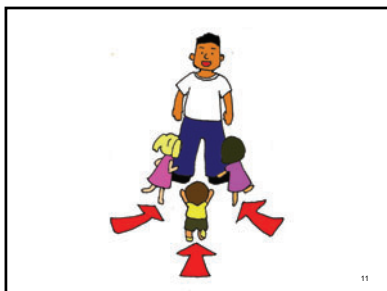
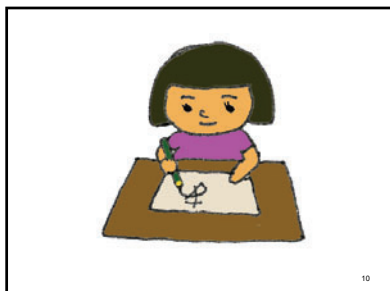
● 絵カードリスト

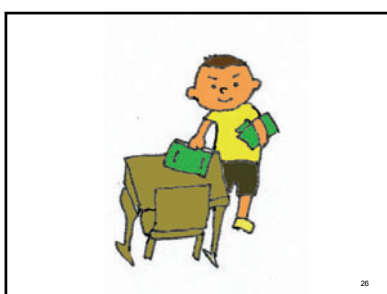
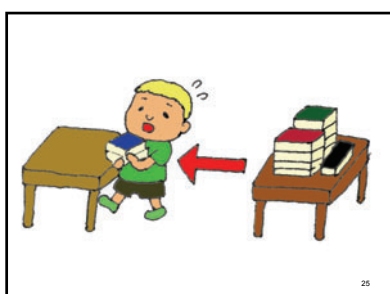
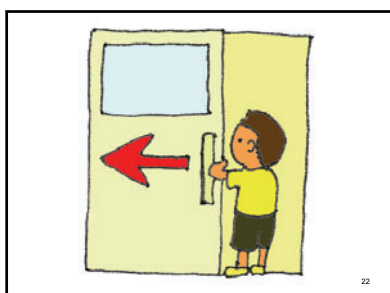
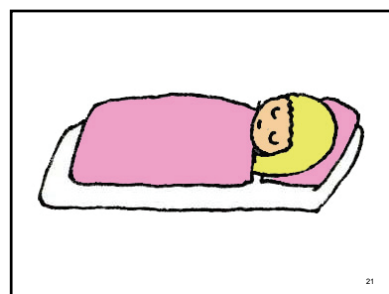
本事業で作成した学校生活にかかわる単語の絵カードのリストである。これを利用した教材シートとともに <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/org/ip/> に掲載した。

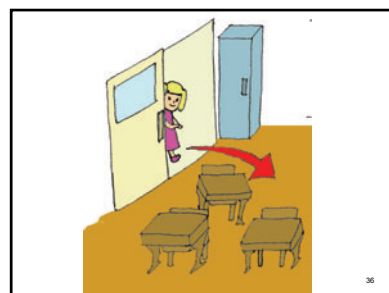
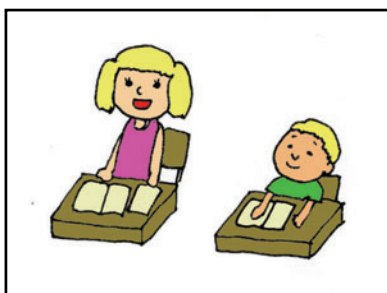
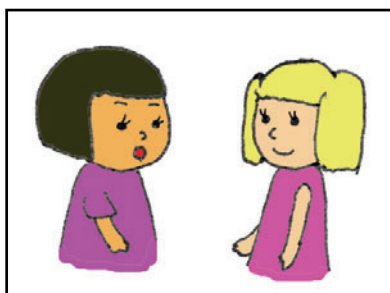
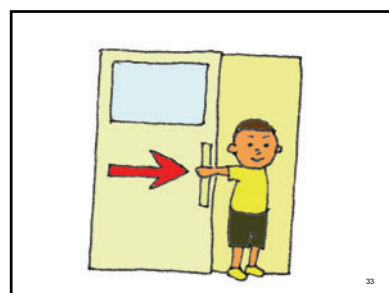
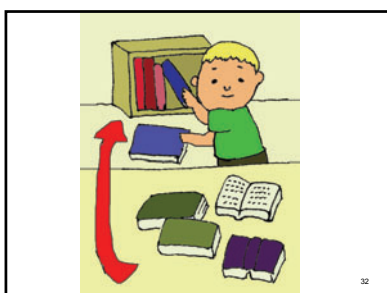
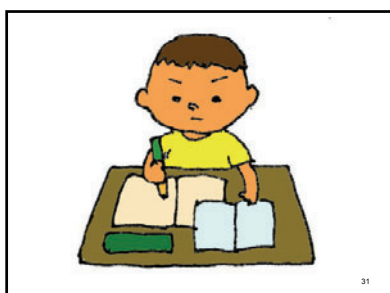
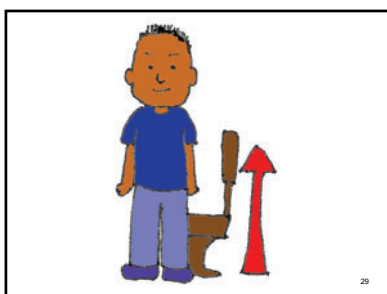
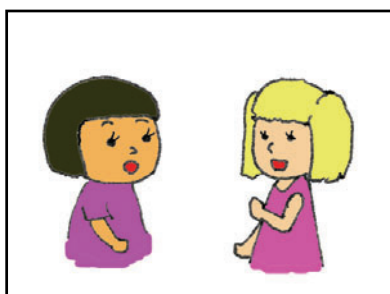
イラストは横田愛美氏（愛知県立大学学生）による。

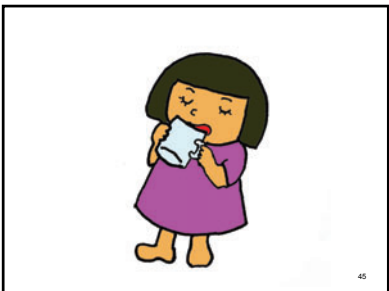
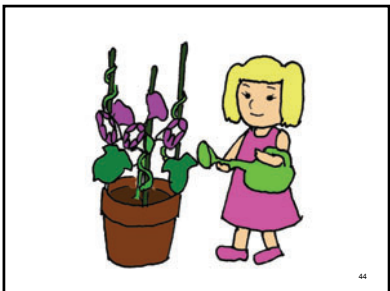
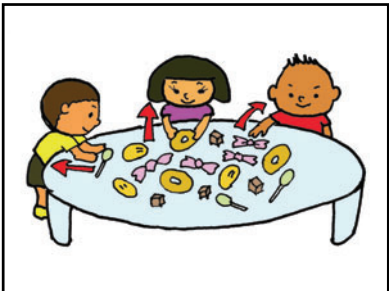
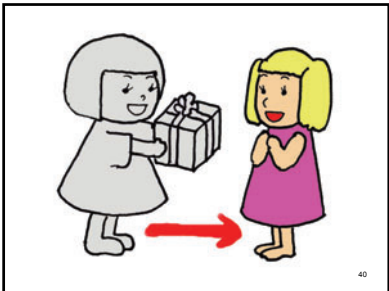
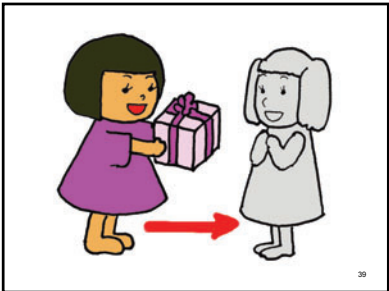
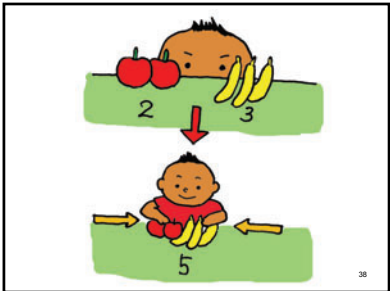
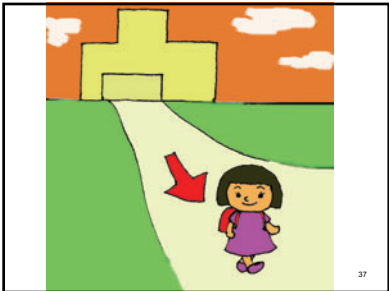
動詞		形容詞	名詞
1 投げる	51 質問する	1 おいしい	1 あひる
2 渡す	52 手伝う	2 まずい	2 ねこ
3 着る／脱ぐ	53 乗る(車に)	3 安い	3 金魚
4 走る	54 引く(線を)	4 高い(値段が)	4 女の子
5 拭く／掃く	55 脱ぐ	5 暗い	5 男の子
6 洗う(手を)	56 着る	6 明るい	6 先生
7 切る(紙を)	57 捕る(虫を)	7 易しい	7 靴下
8 書く(文字を)	58 溺れる	8 難しい	8 スリッパ
8 数える	59 塗る	9 遠い	9 雑巾
9 食べる(給食を)	60 並ぶ	10 近い	10 靴
11 集まる	61 歩く	11 きれいな	11 鉛筆
12 蹴る	62 眠る	12 汚い	12 チョーク
13 終わる(授業が)	63 鳴く(虫が)	13 ひまな	13 のり(1)
14 拾う	64 訳す	14 忙しい	14 のり(2)
15 捨てる	65 遊ぶ	15 寒い	15 ホッチキス
16 始まる(授業が)	66 撮る(写真を)	16 暑い	16 ノート
17 座る	67 宿題をする	17 狭い	17 教科書
18 行く	68 治療する	18 広い	18 プリント
19 見る	69 刺す(蚊が)	19 軽い	19 皿
20 配る(給食を)	70 体操する	20 重い	20 デスクトップ
21 休む	72 刺される(蚊に)	21 古い	21 ノートパソコン
22 開ける(ドアを)	72 登る(山に)	22 厚い(本が)	22 テレビ(液晶)
23 歌う	73 散歩する(犬と)	23 薄い(本が)	23 テレビ(ブラウン管)
24 泳ぐ	74 汗をかく	24 硬い	24 車
25 運ぶ	75 入れる(ポストに)	25 柔らかい	25 給食
26 配る(ノートを)	76 刺す	26 高い(高さが)	26 牛乳瓶
27 読む(音読)	77 キャンプする	27 低い	27 昇降口
28 話す	78 バーベキューする	28 大きい	28 スーパー
29 立つ	79 買い物する	29 小さい	29 ファミレス
30 来る	80 釣りをする	30 新しい	30 病院
31 勉強する		31 少ない	32 駅
32 片付ける		32 多い	32 コンビニエンスストア
33 閉める(ドアを)		33 早い(時間が)	33 海
34 聞く		34 遅い(時間が)	34 学校(廊下)
35 発表する		35 速い(走るのが)	35 学校(校庭)
36 入る		36 遅い(走るのが)	36 カフェ
37 帰る		37 太い	37 湖
38 あわせる		38 細い	38 山
39 あげる		39 退屈な	39 歯医者
40 もらう		40 面白い	40 床屋
41 取る(お菓子を)		41 短い	41 水族館(1)
42 分ける(お菓子を)		42 長い	42 水族館(2)
43 吹く(リコーダーを)		43 熱い	43 川
44 育てる		44 濃い(色が)	44 動物園
45 飲む		45 薄い(色が)	45 本屋
46 運ぶ(机を)		46 冷たい	46 郵便局
47 起きる			47 遊園地
48 計算する			
49 洗う(皿を)			
50 磨く(歯を)			

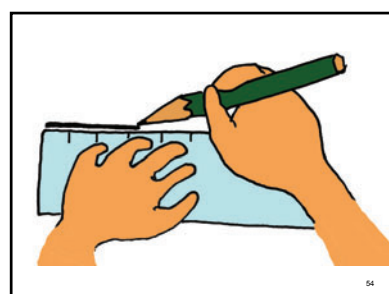
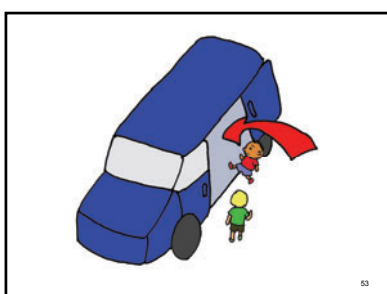
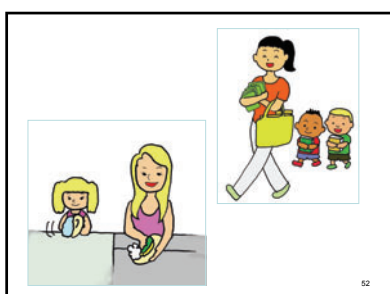
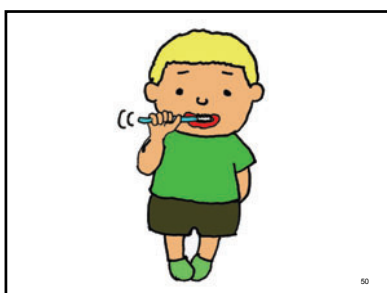
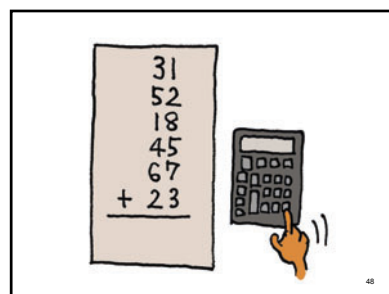
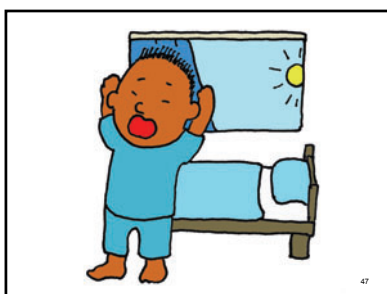
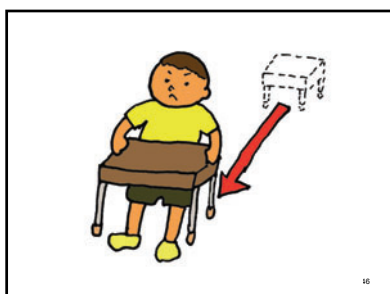


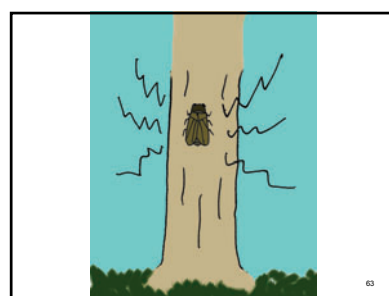
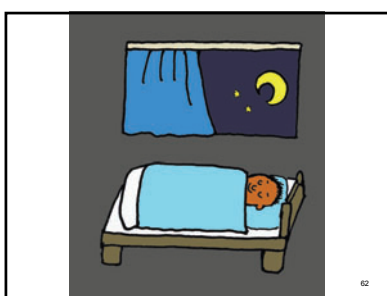
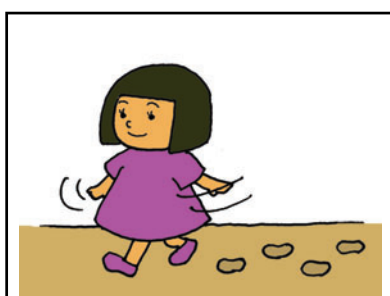
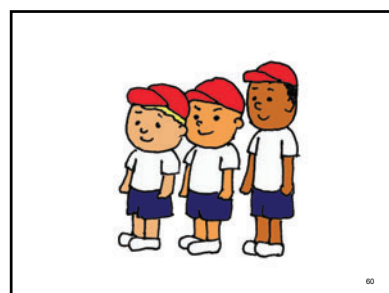
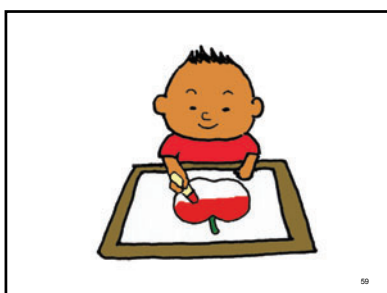
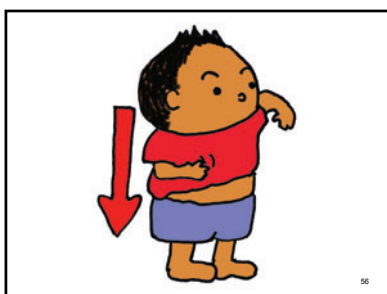
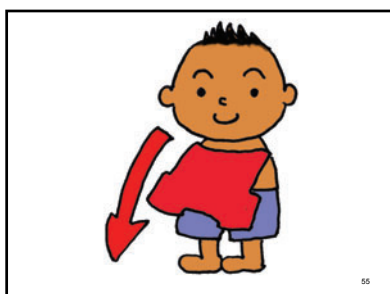


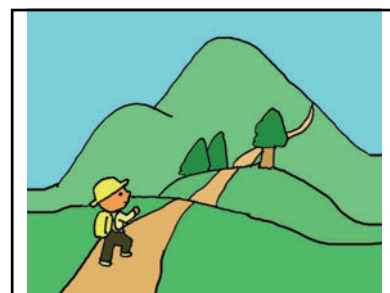
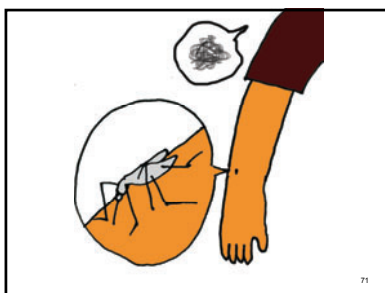
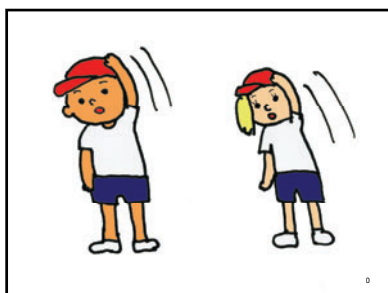
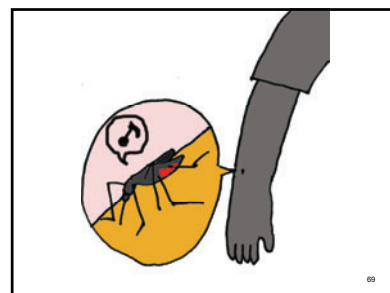
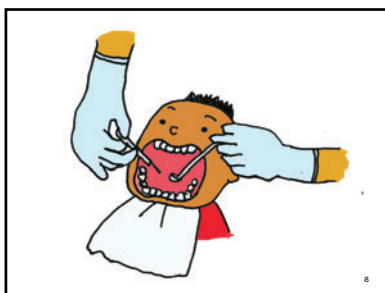
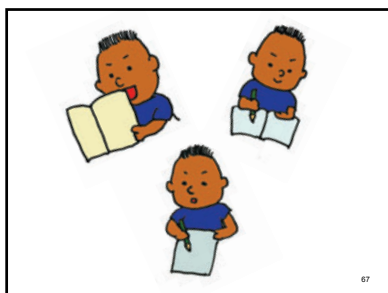
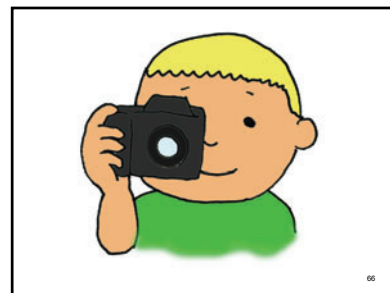


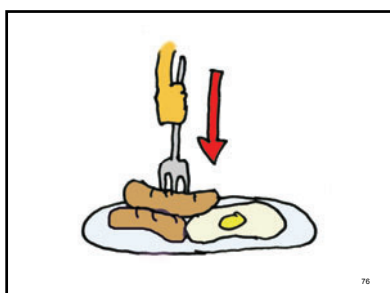
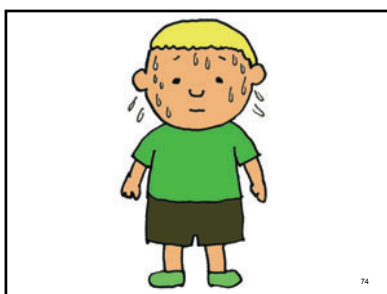
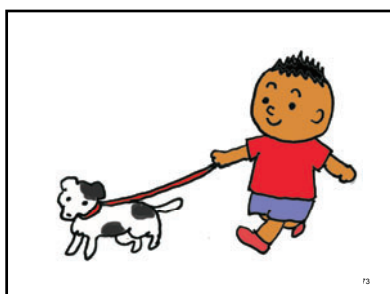


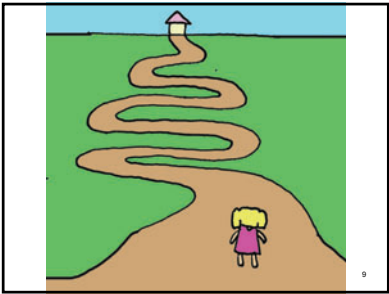
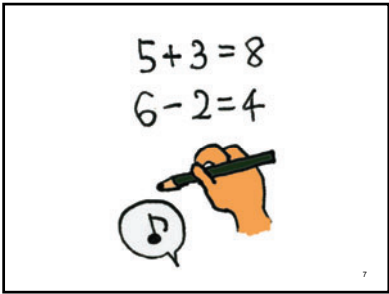
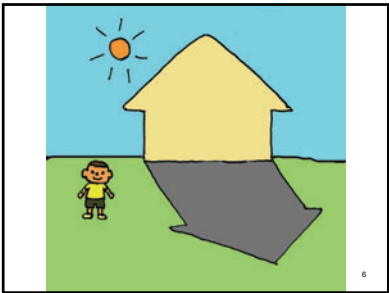
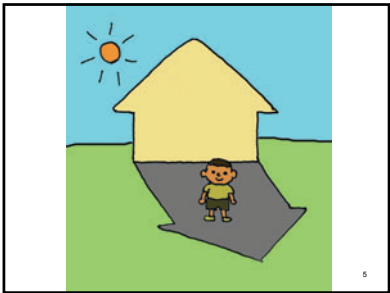
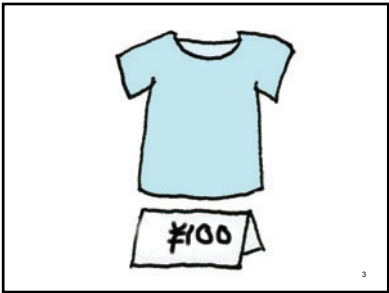
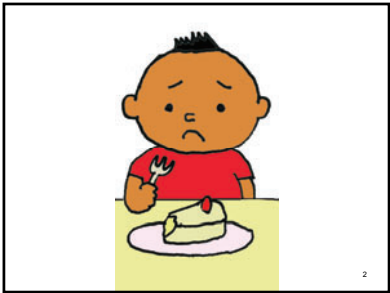
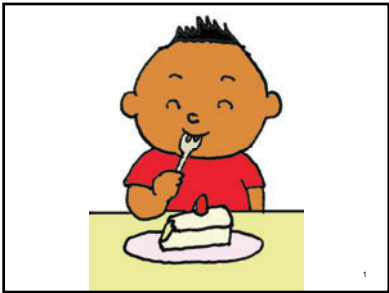


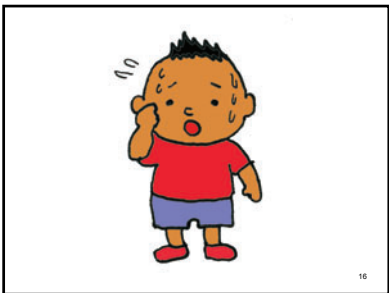
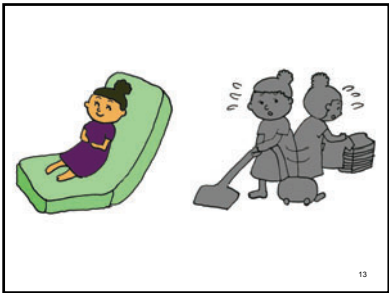
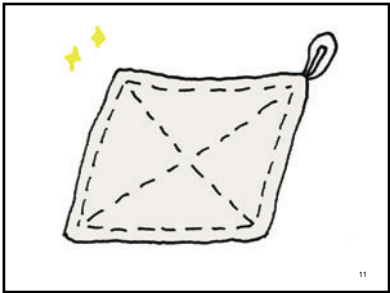
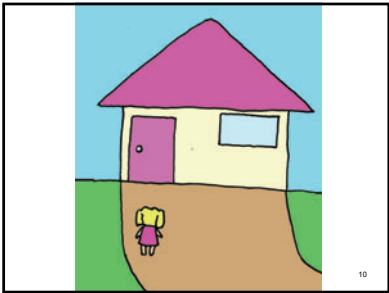


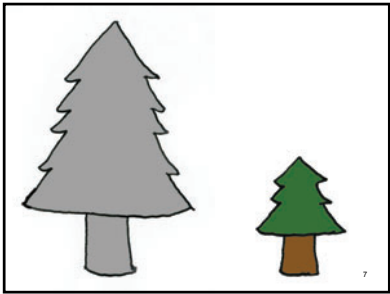
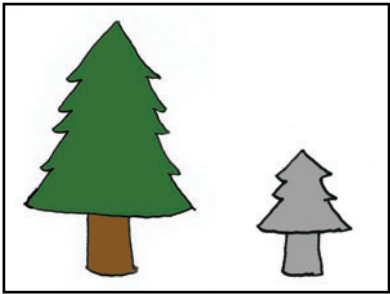
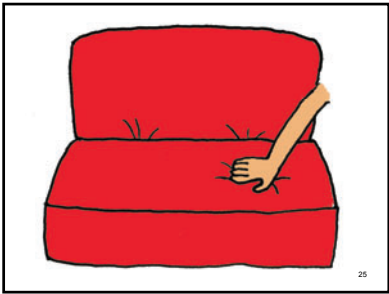
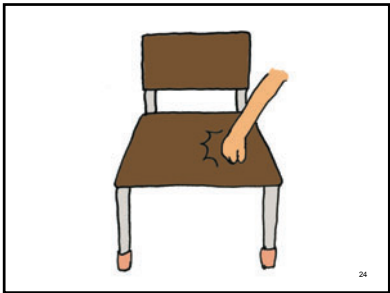
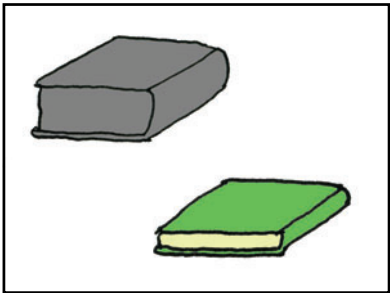
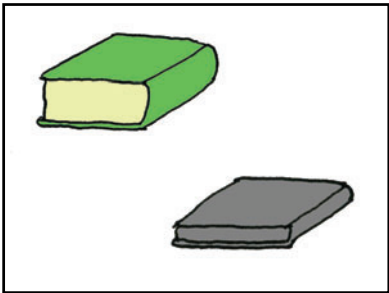
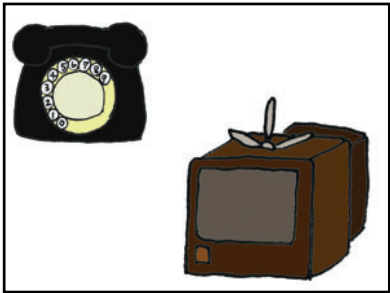
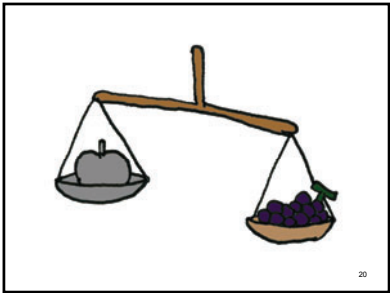
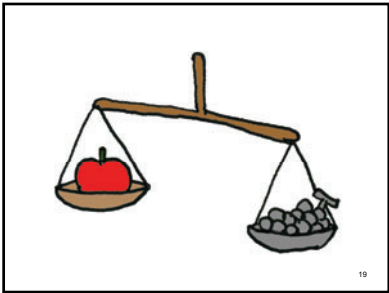


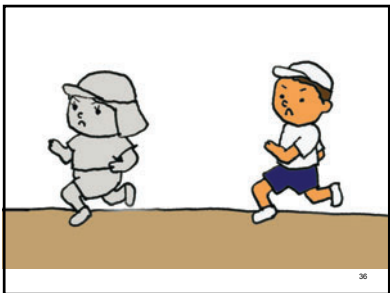
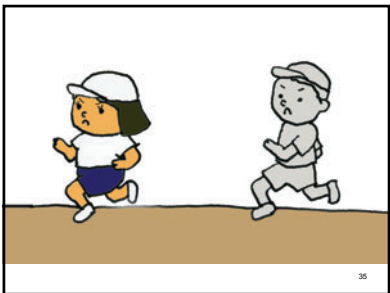
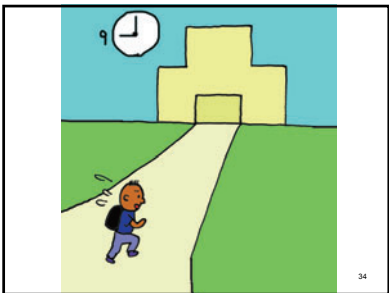
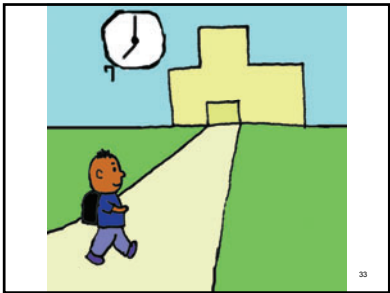
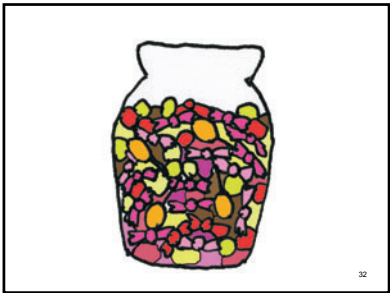
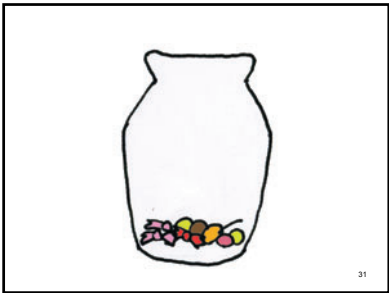
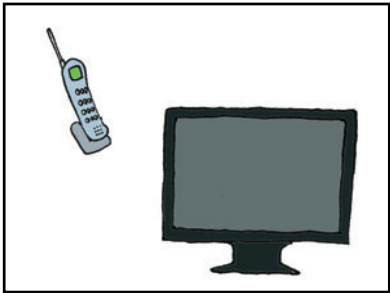
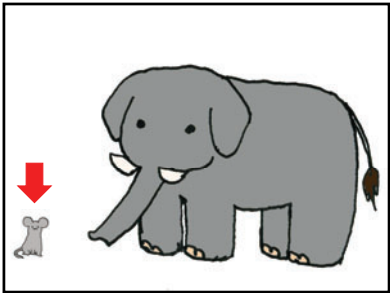
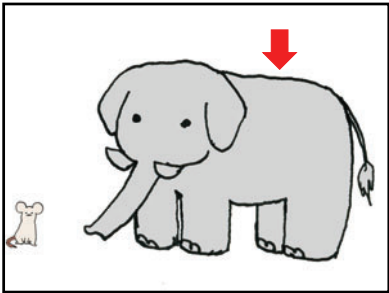


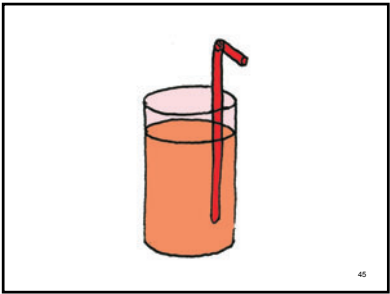
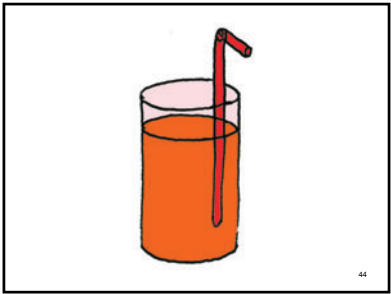
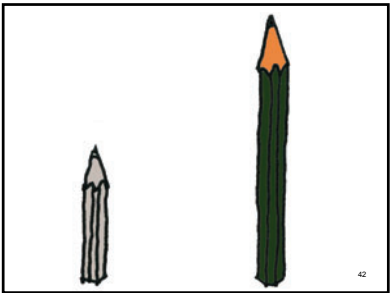
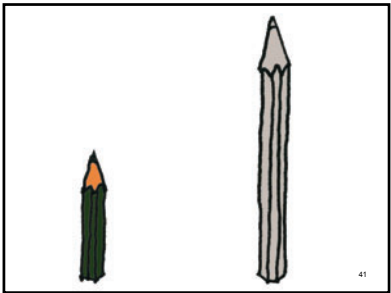
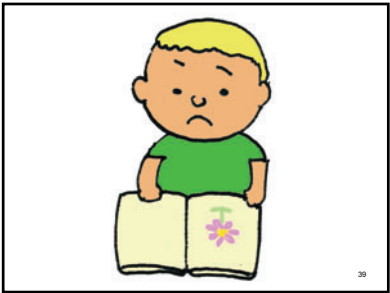
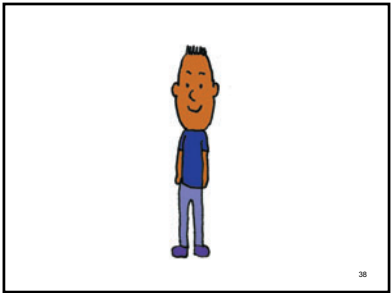
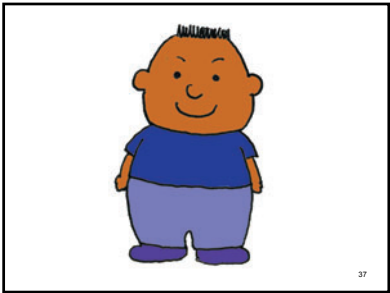




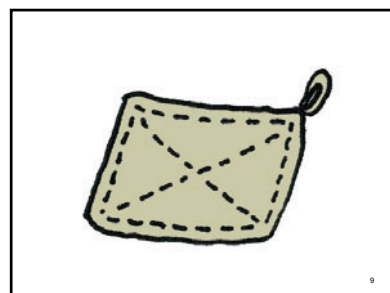
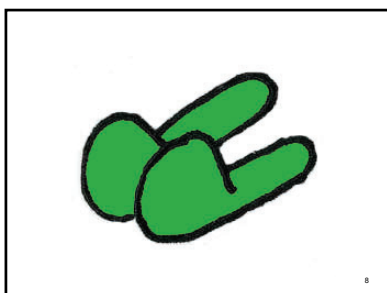
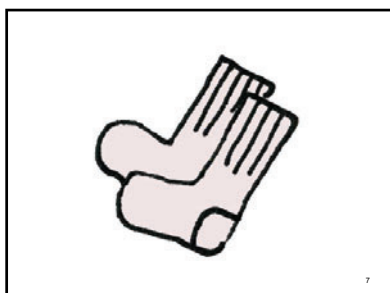
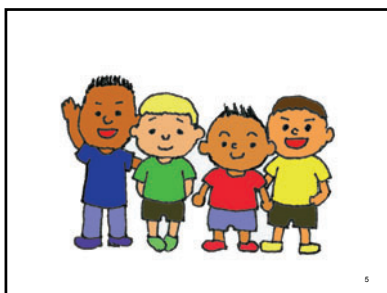
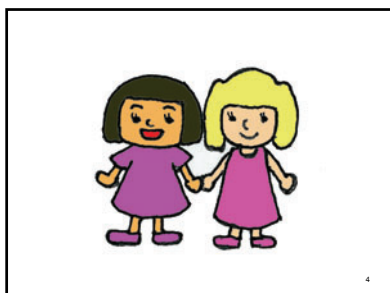
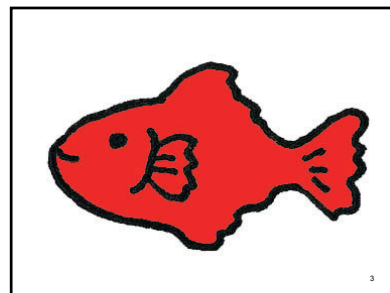
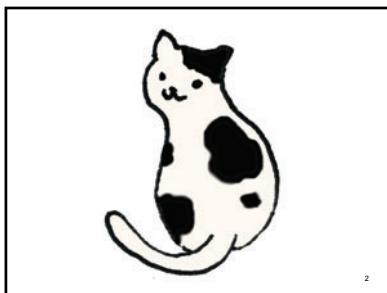
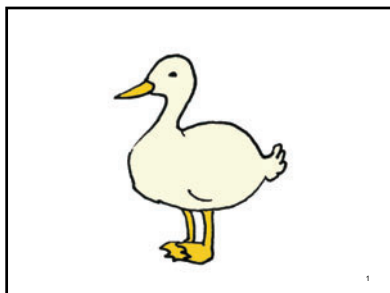


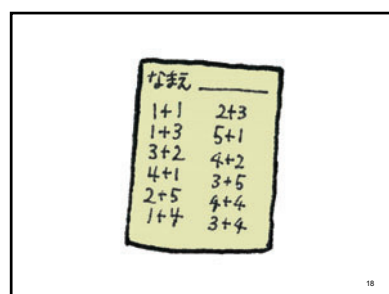
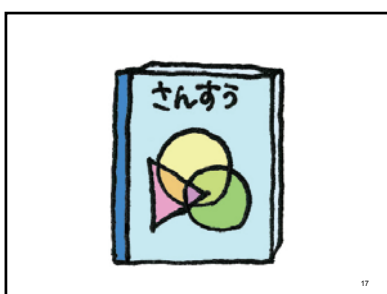
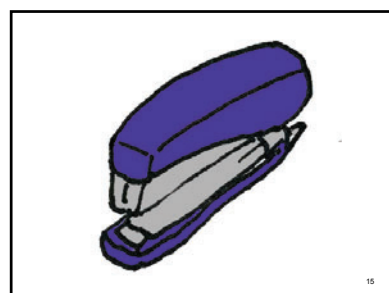
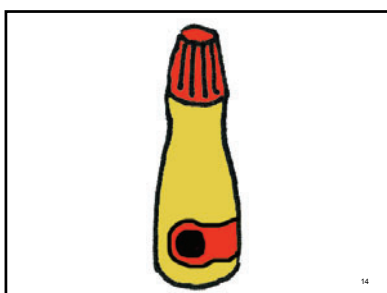
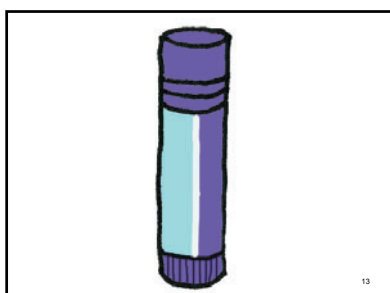
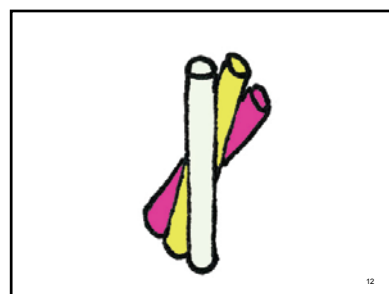


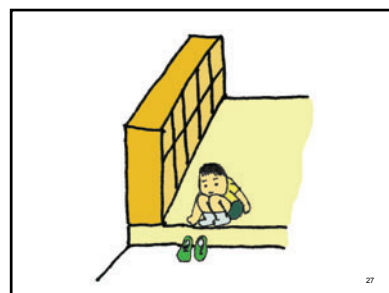
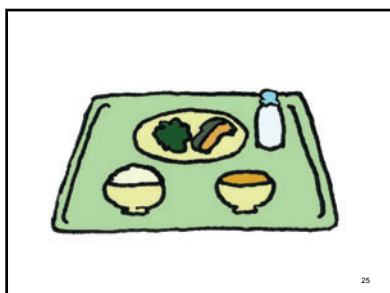
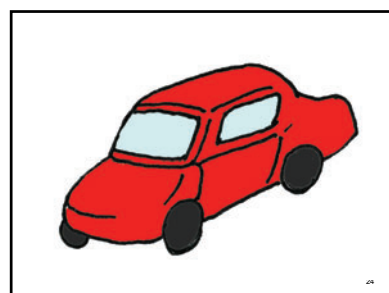
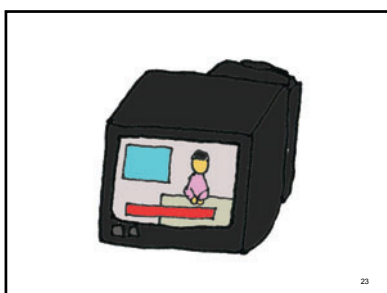
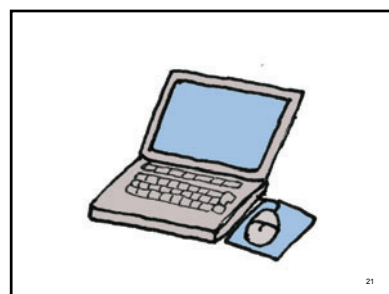
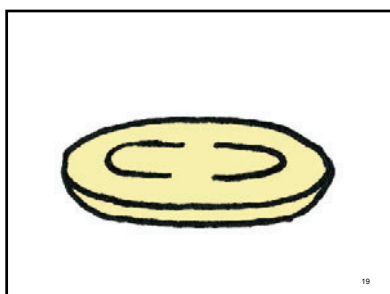


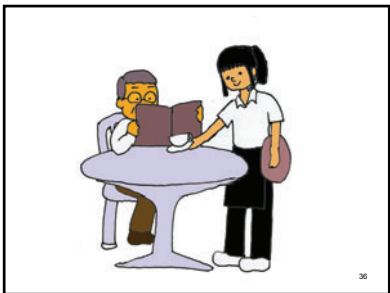
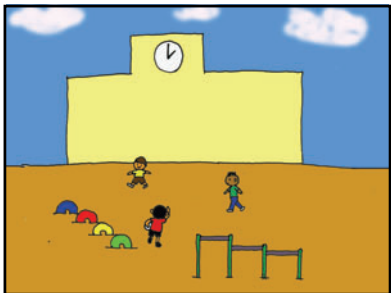
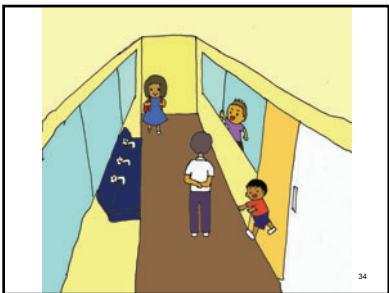
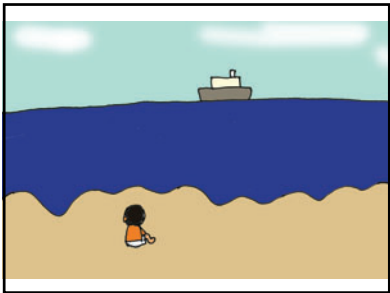
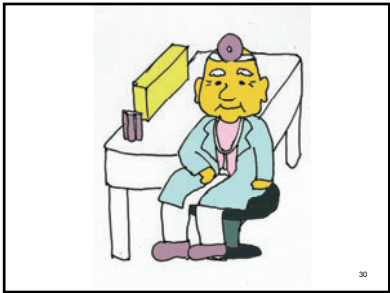
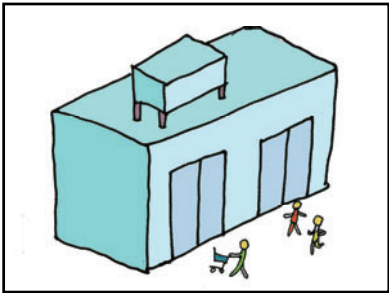


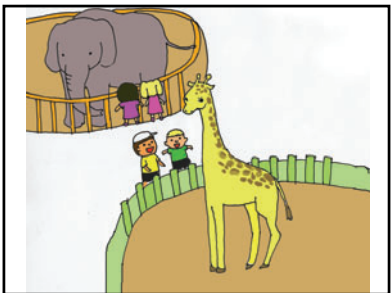
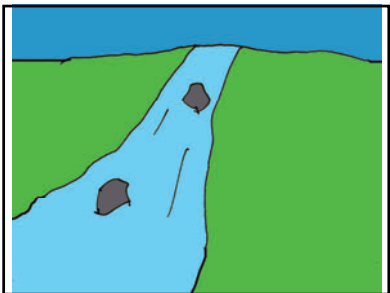
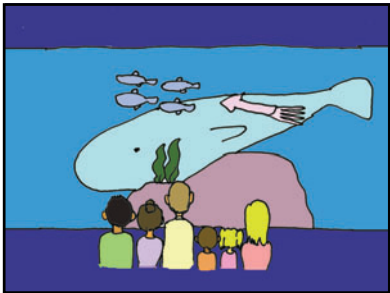
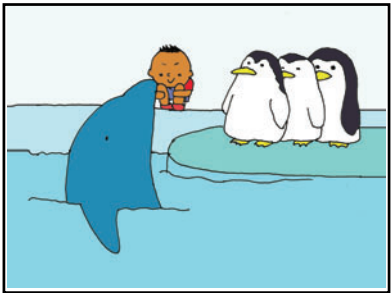
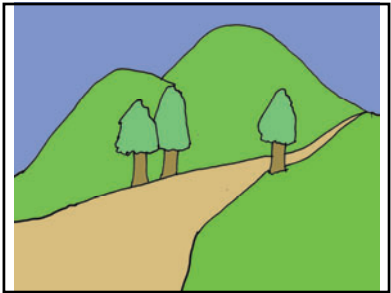
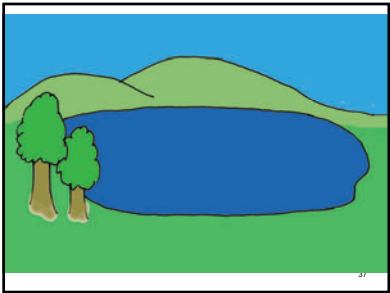


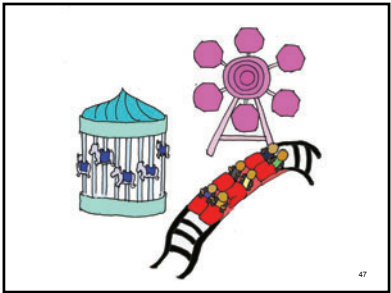
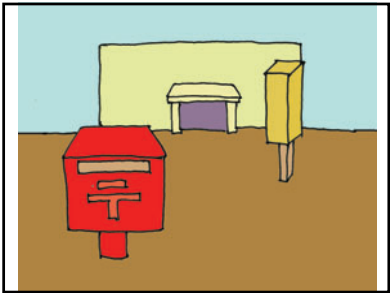












おわりに ―今後の課題―

実質半年あまりではあったが、活動を通して多くの人々と出会う中で、ブラジル人の子どもたちの教育をめぐるさまざまな課題があると同時に、すでに多くのすばらしい支援がなされていることがわかった。問題は、そういった情報や事例についてどのように伝達、共有していくのか、そのシステムがまだ十分でないという点にあると感じた。

いかなる形にせよ、本事業の活動が今後継続されたとしたら「JICA 日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度」をブラジル社会、日本社会に還元できるような道づくりを目指すものでありたいと考えている。

初めて受ける委託事業で、かつ短い活動期間の中で、代表者の不慣れ故に滞った点も多々あったこと、本事業にかかわるすべての方々にお詫びしたい。

今後の課題としてあげるとすれば、第 1 に、隊員とのコミュニケーションである。計画では blog を活用して、継続的に連絡を取り合い、議論したり相談を受けたり情報提供を受けたりする予定であった。しかし、こちらが一方的に活動状況を発信するのに精一杯で、やりとりを成立させることは難しかった。隊員が出国する前から、あらかじめ対面で信頼関係を築いておくことの必要性を深く感じた。blog を有効活用できれば、今後、隊員同士の縦の関係をつなぐ役割も担うことが可能となるであろう。

第 2 に、この制度に対する日本国内でのニーズの発掘である。派遣教員を送り出す教育委員会における本制度の位置づけや、活動終了後の人材活用イメージの形成に寄与できるような情報共有の場を設ける必要があると考える。

第 3 に日本、ブラジル双方の制度理解の促進のために、情報発信が必要であると考ええる。隊員の活動内容の向上にむけて、ブラジル社会にも日本の現状を知っていただき、日本社会にももっとブラジル社会の情報を提供すべきである。

このような課題は残っているものの、今年度の活動はこの報告書の刊行をもって終了する。本書が、「JICA 日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度」に託されている意義について、少しでも考えていただけるきっかけとなればと思う。

末筆ながら、本報告書の編集にあたり、非常に厳しい時間的制約の中で作業に協力してくださった黒野敦子さん、石川美紀子さん、安江美貴さん、そして本事業の運営全般にわたり、いつも冷静かつ的確に、多岐にわたる事務作業をこなしてくださった内山久子さんに、心よりお礼を申し上げます。

東 弘子

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成
活 動 報 告 書

2010 年 3 月 10 日 発行

愛知県立大学
国際協カイニシアティブ事業 日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」
活動支援のための教育協力システムの形成 実施委員会

〒480-1198 愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3
Tel. +81-561-64-1111

印刷 株式会社 シイエム・シイ

本報告書は下記の事業による成果の一つである

平成 21 年度文部科学省委託事業

国際協カイニシアティブ教育協力拠点形成事業 【青年海外協力隊等派遣教員の支援】

MEXT International Cooperation